

神曲

LA DIVINA COMMEDIA

天堂

青空文庫

第一曲

萬物を動かす者の榮光あまね遍く宇宙を貫くといへどもその輝かゞやきの及ぶこ
と一部に多く一部に少し 一—三

我は聖みひかり光を最多く受くる天にありて諸の物を見たりき、され
ど彼處かしこれて降くだる者そを語るすべを知らずまた然しかするをえざるなり

四—六

これわれらの智、己が願ひに近きによりていと深く進み、追思も
これに伴ともなふあたはざるによる 七—九

しかはあれ、かの聖なる王國たついてわが記憶ひめをさに秘藏めしかぎ

りのことゞも、今わが歌の材たらむ 一〇——一二

あゝ善よきアポルロよ、この最いやはて後の業わざのために願はくは我を汝の

徳うつはの器アルローロとし、汝の愛する桂アルローロをうくるにふさはしき者たらしめよ

一三——一五

今まではパルナーゾの一いたゞきの巔たにて足りしかど、今は二つながら求

めて残りの馬場に入らざるべからず 一六——一八

願はくは汝わが胸に入り、かつてマルシアをその身の鞞さやより拔

き出せる時のごとくに氣息いきを嘘ふけ 一九——二一

あゝいと聖なる威力ちからよ、汝我をたすけ、我をしてわが腦裏おに捺おさ

れたる祝福めぐみの國うすの薄うすれし象かたを顯あらはさしめなば 二二——二四

汝はわが汝めづの愛めづる樹もとの下もとにゆきてその葉を冠となすを見む、詩題

と汝、我にかく爲するをえしむればなり 二五—二七

父よ、チエーザレ皇 帝 または詩人の譽ほまれのために摘つまるゝことのいと罕まれな

れば（人の思ひの罪と恥なり） 二八—三〇

ペネオの女むすめの葉人をして己にかはかしむるときは、悦び多きゲル

フオの神に喜びを加へざることあらし 三一—三三

それ小さき火花にも大いなる焰ともなふ、おそらくは我より後、

我にまさる馨ありて祈ねぎ、チルラの應こたへをうるにいたらむ 三四—

三六

世界の燈とも多しくの異ことなる處のほより上りて人間にあらはるれども、四の

圈相合して三の十字を成す處より 三七—三九

出づれば、その道まさり、その伴ふ星またまさる、而しかしてその己

が性さがに従ひて世の蛹とつを整へ象かたを捺おすこといよく著いちじるし 四〇—四

二

かしこを朝あしたこゝを夕ゆふべとなし、日は殆どかゝる處よりいで、いまや

かの半球みな白く、その他ほかは黒かりき 四三—四五

この時我見しに、ベアトリーチェは左に向ひて目を日にとめたり、
驚だにもかくばかりこれを凝視みつめしことあらし 四六—四八

第二の光線常に第一のそれよりいで、再び昇る、そのさま歸るを
願ふ異郷の客に異ならず 四九—五一

かくのごとく、彼の爲なす所——目を傳ひてわが心の内に入りたる
——よりわが爲す所いで、我は世の常を超こえて目を日に注げり

五二—五四

もとより
元來人の住處すまひとして造られたりしところなれば、こゝにてはわれらの力に餘りつゝ、かしこにてはわれらが爲すをうること多し

五五―五七

わが目のこれに堪たふるをえしはたゞ些すこしの間なりしも、そがあたたかも火よりいづる熱鐵の如く火花をあたりに散ちらすを見ざる程ならざりき 五八―六〇

しかして忽ち晝晝に加はり、さながらしかすることをうる者いま一の日輪にて天を飾れるごとく見えたり 六一―六三

ベアトリーチエはその目をひたすら永遠とこしへの輪にそゝぎて立ち、我はわが目を上より移して彼にそゝげり 六四―六六

かれの姿を見るに及び、わが衷うちあたたかまかのグラウコが己を海

神々の侶たらしむるにいたれる草を味へる時の如くになりき 六

七―六九

抑 《そもく》超人の事たるこれを言葉に表はし難し、是故に
恩恵めぐみによりてこれが験ためしをた経べき者この例をもて足れりとすべし

七〇―七二

天を統すべ治をむる愛よ、我は汝が最後に造りし我の一部に過ぎざり
しか、こは聖みひかり火にて我を擧げし汝の知り給ふ所なり 七三―七

五

慕はるゝにより汝が無窮となしゝ運行、汝の整ととのへかつ頌わかつそのう
るはしき調しらべをもてわが心を引けるとき 七六―七八

日輪の焰いとひろく天を燃もやすと見えたり、雨または河といふとも

かくひろがれる湖うみはつくらじ 七九―八一

音おとの奇くすしきと光の大いなるとは、その原因もとにつき、未だ感じ、こ

となき程に強き願ひをわが心に燃もやしたり 八二―八四

是においてか、我を知ることわがごとくなりし淑女、わが亂るゝ

魂を鎮しづめんとて、我の未だ問はざるさきに口を啓ひらき 八五―八七

いひけるは。汝あやま謬れる思ひをもて自ら己を愚おろかしむ。是故にこ

れを棄つれば見ゆるものをも汝は見るをえざるなり 八八―九〇

汝は汝の信ずるごとく今地上にあるにあらず、げに己が處を出でゝ

馳はする電いなづま光疾はやしといへども汝のこれに歸るに及ばじ。 九一―

九三

わが第一の疑ひはこれらの微笑ほゝゑめる短ことばき詞によりて解けしかど、

一の新あらたなる疑ひ起りていよくいたく我を絡からめり 九四—九六

我即ち曰いふ。かの大いなる驚あやし異しみにつきてはわが心既に足りて安

んず、されどいかにしてわれ此等の輕き物體を超こえて上のほるや、今

これを異あやしとす 九七—九九

是においてか彼、一の哀あはれ憐みの大息といきの後、狂へる子を見る母のご

とく、目をわが方にむけて 一〇〇—一〇二

いふ。凡およそありとしあらゆる物、皆その間に秩序を有す、しかし

てこれは、宇宙を神の如くならしむる形式ぞかし 一〇三—一〇

五

諸の尊とこく造られし物、永とこ遠しへの威ち能から（これを目的めあてとしてかゝる

法のりは立てられき）の跡をこの中に見る 一〇六—一〇八

わがいふ秩序の中に自然はすべて傾けども、その分異ぶんしつなりて、己
 が源にいと近きあり然らざるあり 一〇九―一一一
 是故にみな己が受けたる本能に導かれつゝ、存在の大海おほうみをわた
 りて多くの異なる湊みなとにむかふ 一一二―一一四
 火を月の方に送るも是これ、滅ぶる心を動かすも是、地を相寄せて一
 にするもまた是なり 一一五―一一七
 またこの弓は、たゞ了知さとなきものゝみならず、智あり愛あるもの
 をも射放つ 一一八―一二〇

かく萬有の次第を立つる神の攝理は、いと疾とくめぐる天をつゝむ
 一の天をば、常にその光によりてしづかならしむ 一二一―一二

今やかしこに、己が射放つ物をばすべて樂しき^{まと}的にむくる弦^{つる}の力
我等を送る、あたかも定れる場所^{さだま}におくのごとし 一二四—一二
六

されどげに、材^{もた}黙して應^{こた}へざるため形しばく技藝の工夫^{くふう}に配^そ
ざるごとく 一二七—一二九

被^{つくられしもの}造物 またしばくこの路を離る、そはこれは、かく促^{うなが}さる
れども、もし最初の刺戟偽りの快樂^{けらく}の爲に逸^それて 一三〇—

これを地に向はしむれば、その行方^{ゆくへ}を誤る（あたかも雲より火の
墜^{おつ}ることあるごとく）ことをうればなり 一三五

わが量^{はか}るところ正しくば、汝の登るはとある流れの高山より麓^{ふもと}に
下り行くごとし、何ぞ異^{あやし}とするに足らんや 一三六—一三八

汝障礙しやうげを脱しつゝなほ下に止まらば、是かへつて汝における一
の不思議にて、地上に靜なることの燃ゆる火における如くなるべ

し。 一三九―一四一

かくいひて再び顔を天にむけたり 一四二―一四四

第二曲

あゝ聽かんとて小舟をぶねに乗りつゝ、歌ひて進むわが船のあとを追ひ
來れる人等よ 一—三

立歸りて再び汝等の岸を見よ、沖に浮びいづるなかれ、恐らくは
汝等我を見ずしてさまよふにいたるべければなり 四—六

わがわたりゆく水は人いまだ越えしことなし、ミネルヴァ氣いき息を
嘘ふき、アポルロ我を導き、九のムーゼ我に北斗を指示す 七—九
また數少きも、天使の糧かて（世の人これによりて生くれど飽あくに
たらず）にむかひて疾とく項うなじを擧あげし人等よ 一〇—一二

水の面の再び平らかならざるさきにわが船路の跡をたどりつゝ海
なほら

原遠く船を進めよ 一三一—一五

イアソンが耕たがやすひと人となれるをコルコに渡れる勇士等の見し時

にもまさりて汝等驚き異あやしまむ 一六一—一八

神かんながら隨の王國を求むる本然永劫えいごふの渴われらを運び、その速な

ること殆ど天のめぐるに異ならず 一九—二一

ベアトリーチエは上方うへを、我は彼を見き、しかして矢の弦つるを離れ、

飛び、止とどまるばかりの間に 二二—二四

我は奇くすしき物ありてわが目をこれに惹ひけるところに着きゐたり、

是においてかわが心の作用はたらきをすべて知れる淑女 二五—二七

その美しさに劣おとらざる悦びを表あらはしわが方にむかひていふ。われ

らを第一の星と合せたまひし神に感謝の心を獻ぐべし。 二八一

三〇

日に照らさるゝ金剛石のごとくにて、光れる、濃こき、固こき、磨こける雲われらを蔽ふと見えたりき 三一—三三

しかしてこの不朽の眞珠は、あたかも水の分れずして光線を受け入るゝごとく、我等を己の内に入れたり 三四—三六

一の量のいかにして他の量を容いれたりし——體、體の中に入らばこの事なきをえざるなり——やは人知り難し、されば我もし 三七—

肉體なりしならんには、神入相結ぶ次第を顯はすかの至聖者を見んとの願ひ、愈 強くわれらを燃もやさざるをえず — 四二

信仰よに由りて我等が認むる所の物もかしこにては知らるべし、但しあかし證せらるゝにあら非ず、人の信ずる第一の眞理の如くこの物おのづ自から明らかならむ 四三―四五

我答ふらく。わが淑女よ、我は人間世界より我を移したまへる者に、わが眞まご心ころを盡して感謝す 四六―四八

されど告げよ、この物體にありて、かの下界の人々にカインの物を爲なさしむる多くの黒ほしき斑はは何ぞや。 四九―五一

彼少しく微ほ笑くみて後いふ。官能の鑰かぎの開くをえざる處にて人思ひ誤るとも 五二―五四

げに汝今驚きの矢に刺さるべきにはあらず、諸の官能にともなふ理性の翼の短きを汝すでに知ればなり 五五―五七

されど汝自らこれをいかに思ふや、我に告げよ。我。こゝにてわれらにさま／＼に見ゆるものは、思ふに體の粗密に由來す。

五八—六〇

彼。もしよく耳をわが反論に傾けなば、汝は必ず汝の思ひの全く虚偽おちいに陥れるを見む 六一—六三

それ第八の天球の汝等に示す光は多し、しかしてこれらはその質と量とにおいて各 あらはるゝ姿を異にす 六四—六六

もし粗密のみこれが原因もとならば、同じ一の力にてたゞ頒わかたれし量を異にしましてはこれを等しうするもの凡すべての光の中にあらむ 六七—六九

力の異なるは諸 の形式の原理の相異なるによらざるをえず、然

るに汝の説に従へば、これらは一を除くのほか皆亡び失はるに
 たる 七〇—七十二

さてまた粗なること、汝の尋ぬるかの斑點の原因ならば、この
 遊星には、その材の全く乏しき處あるか 七三—七五

さらずば一の肉體が脂と肉とを頒つごとく、この物もまたその書
 の中に重ねる紙を異にせむ 七六—七八

もし第一の場合なりせば、こは日蝕の時、光の射貫く（他の粗な
 る物體に引入れらるゝ時の如く）ことによりて明らかならむ 七
 九—八一

されどこの事なきがゆゑに、残るは第二の場合のみ、我もしこれ
 を打消すをえば、汝の思ひの誤れること知らるべし 八二—八四

もしこの粗、穿うがち貫つらぬくにいたらずば、必ず一の極きはみ限あり、密ひそこゝ

にこれを阻はみてそのさらに進すすむをゆるさじ 八五―八七

しかしてかしこより日の光の反てりかへ映かへすこと、鉛うしろを後方にかくす玻は

璃りより色の歸かへるごとくなるべし 八八―九〇

是においてか汝はいはむ、奥深おくき方より反てりかへ映かへすがゆゑに、かし

こにてはほかの處ところよりも光暗くわんしと 九一―九三

汝等の學術がくじゆつの流れながれの源もととなる習ならはしなる經驗けんげんは――汝なんぢもしこれに徴しるしせ

ば――この異論いろんより汝なんぢを解とくべし 九四―九六

汝三の鏡かがみをとりて、その二をば等ひとししく汝なんぢより離はなし、残のこる一をさら

に離はなしてさきの二の間まに見えしめ 九七―九九

さてこれらに對むかひつゝ、汝なんぢの後うしろに一の光ひかりを置おきてこれに三の鏡かがみを

照らさせ、その三より汝の方に反映てりかへらせよ 一〇〇—一〇二

さらば汝は、遠き方よりかへる光が、量において及ばざれども、

必ず等しくかゞやくを見む 一〇三—一〇五

今や汝の智、あたかも雪の下にある物、暖き光に射られて、はじ

めの色つめたと冷さとを 一〇六—

失ふごとくなりたれば、汝の目にきらめきてみゆるばかりに強き

光を我は汝にさとらしむべし 一一一—

それいと聖なる平安を保つ天の中に一の物體のめぐるあり、これ

に包まるすべ、凡ての物の存在はみなこれが力に歸きす 一一二—一一

四

その次にあたりてあまたの光ある天は、かの存在を頒ちて、これ

を己と分たるれども己の中に含まるゝさま／＼の本質に與へ

一一五——一一七

他の諸の天は、各異なる状さまにより、その目的めあてと種たねとにむかひ

て、己が衷うちなる特性をとゝのふ 一一八——一二〇

かゝればこれらの宇宙の機關は、上より受けて下に及ぼし、次第を逐おひて進むこと、今汝の知るごとし 一二一——一二三

汝よく我を視、汝の求むる眞理にむかひてわがこの處を過ぎ行く
さまに心せよ、さらばこの後獨ひとりにて淺瀬を渡るをうるにいたら
む 一二四——一二六

そもく諸天の運行とその力とは、あたかも鍛工かぢより鐵槌つちの技わざの
いづるごとく、諸のたふとき動うごかすもの者よりいでざるべからず

一二七—一二九

しかしてかのあまたの光に飾らるゝ天は、これをめぐらす奥深き
心より印象かたを受けかつこれを捺おす 一三〇—一三二

また汝等の塵ちりの中なる魂がさま／＼の能力ちからに應じて異なる肢體したい
にゆきわたるごとく 一三三—一三五

かの天を司つかさどるもの、またその徳をあまたにしてこれを諸の星に
及およぼし、しかして自ら一いつなることを保たもちてめぐる 一三六—一三八

さま／＼の力その活いかす貴たふとき物體（力のこれと結びあふこと生い
命のちの汝等におけるが如し）と合して造る混まぜ合物もの一ならじ 一三九

—一四一

悦び多き性さがより流れ出づるがゆゑに、この混まじれる力、物體の中に輝き、あたかも生くる瞳の中に悦びのかゞやくごとし 一四二―

一四四

光と光の間にて異なりと見ゆるものゝ原因もと、げに是にして粗密にあらず、是ぞ即ち形式の原理 一四五―

己が徳に従つてかの明暗を生ずる物なる。 ―一五〇

第三曲

さきに愛をもてわが胸をあたゝめし日輪、是と非との證をなして、
 美しき眞理のたへなる姿を我に示せり 一—三

されば我は、わがはや誤らず疑はざるを自白せんため、物言はん
 とてほどよく頭を擧げしかど 四—六

このとき我に現はれし物あり、いとつよくわが心を惹きてこれを
 見るに専ならしめ、我をしてわが告白を忘れしむ 七—九

透きとほりて曇なき玻瓈または清く靜にてしかして底の見えわか
 ぬまで深きにあらざる水に映れば 一〇—一二

われらの倂おもかげかすかに見えて、さながら白ひたひき額の眞珠のたゞちに瞳
に入らざるに似たり 一三—一五

我また語るを希ねがふ多くのかゝる顔を見しかば、人と泉との間に戀
を燃もやしたるその誤りの裏をかへしき 一六—一八

かの顔を見るや、我はこれらを物に映うつれる姿なりとし、その所有もち
者ぬしの誰なるをみると直ちに目をめぐらせり 一九—二一

されど何をも見ざりしかば、再びこれを前にめぐらし、うるはし
き導者——彼は微笑ほくそみ、その聖なる目輝きみたり——の光に注げ
り 二二—二四

彼我に曰ふ。汝の思ひの稚をさなきをみて我のほゝゑむを異あやしむなかれ、
汝の足はなほいまだ眞理の上にかたく立たず 二五—二七

その常の如く汝を空くうにむかはしむ、そもく汝の見るものは、誓
 ひを果さゞりしたためこゝに逐はれし眞まことの靈なり 二八―三〇
 是故に彼等と語り、聽きて信ぜよ、彼等を安んずる眞まことの光は、己
 を離れて彼等の足の迷ふを許さゞればなり。 三一―三三
 我は即ち最も切せちに語るを求むるさまなりし魂にむかひ、あたかも
 願ひ深きに過ぎて心亂るゝ人の如く、いひけるは 三四―三六
 あゝ生しやうとく得とくの幸さちある靈よ、味はゞずして知るによしなき甘さを
 ば、永とこしへ遠とこの生命いのちの光によりて味あぢはふ者よ 三七―三九
 汝の名と汝等の状態ありさまとを告げてわが心をたらはせよ、さらば我
 悦えきばむ。是においてか彼ためらはず、かつ目に笑えみをたゝへつゝ

我等の愛は、その門を正しき願ひの前に閉ぢず、あたかも己が宮^{みや}
やびと

人達のみな己と等しきをねがふ愛に似たり 四三―四五

我は世にて尼なりき、汝もしよく記憶をたどらば、昔にまさるわ
 が美しさも我を汝にかくさずして 四六―四八

汝は我のピツカルダなることを知らむ、これらの聖徒達とともに

我こゝに置かれ、いとおそき球の中にて福^{さいはひ}を受く 四九―五一

さてまたわれらの情は、たゞ聖靈の意^{こころ}に適^{かな}ふもの^ののみ燃^{もや}さるゝ

が故に、その立つる秩序によりて整^{ととの}へらるゝことを悦ぶ 五二―

五四

しかしてかくいたく劣^{おと}りて見ゆる分のわれらに與^{おと}へられたるは、

われら誓^{なほざり}ひを等閑^{なほざり}にし、かつ缺^{なほざり}く處ありしによるなり。 五五

—五七

是においてか我彼に。汝等の奇くすしき姿の中には、何ならむ、いと

聖なるものありて輝き、昔の容かたち變りたれば 五八—六〇

たゞちに思ひ出るをえざりき、されど汝の我にいへること今我を

たすけ我をして汝を認め易やすからしむ 六一—六三

請こふ告げよ、汝等こゝにて福さいはひなる者よ、汝等はさらに高き處に到

りてさらに多く見またはさらに多くの友を得るを望むや。 六四

—六六

他の魂等とともに彼まづ少しく微笑ほゝゑみて後、初戀の火に燃ゆと見

ゆるほど、いとよろこばしげに答ふらく 六七—六九

兄弟よ、愛の徳われらの意こゝろしづを鎮め、我等をしてわれらの有もつ物を

のみ望みて他の物に渴かわくなからしむ 七〇—七二

我等もしさらに高からんことをねがはゞ、われらの願ひは、われらををこゝと定むる者の意こころに違ふ 七三—七五

もし愛の中にあることゝにて肝要ならば、また汝もしよくこの愛さがの性みを視みば、汝はこれらの天にこの事あるをえざるを知らむ

七六—七八

げに常に神の聖みこころ意の中にとゞまり、これによりて我等の意こころ一となるは、これこの福さいはひなる生の素もとなり 七九—八一

されば我等がこの王國の諸天に分れをる状さまは、王（我等の思ひを己が思ひに配そはしむる）の心に適かなふ如く全王國の心に適ふ 八二

—八四

聖意みこころはすなはちわれらの平和、その生み出だし自然の造る凡ての物の流れそゞぐ海ぞかし。 八五―八七

天のいづこも天堂にて、たゞかしこに至上の善の恩惠めぐみの一様に降ふらざるのみなることは是時我に明らかなりき 八八―九〇

されど人もし一の食物くひものに飽き、なほ他に望む食物あれば、此を求めてしかして彼のために謝す 九一―九三

我も姿、詞ことばによりてまたかくの如くになしぬ、こは彼がいかなる機はたを織るにあたりて杼ひを終りまで引かざりしやを彼より聞かんとてなりき 九四―九六

彼我に曰いふ。完き生涯と勝すぐるゝ徳とはひとりひとりの淑女をさらに高き天に擧ぐ、その法のりに従ひて衣を着き面かほおほひ帕つくを付る者汝等の世にあ

り 九七—九九

彼等はかくしてかの新はなむこ郎、即ち愛より出るによりて己が心に適かなふ誓ひをすべてうけいる、者と死に至るまで起おきふし臥を俱ともにせんと

す 一〇〇—一〇二

かの淑女に従はんため我若うして世を遁のがれ、身に彼の衣を纏まとひ、

またわが誓ひをその派の道に結びたり 一〇三—一〇五

その後、善よりも悪に親しむ人々、かのうるはしき僧院より我を引放しにき、神知り給ふ、わが生涯のこの後いかになりしやを

一〇六—一〇八

またわが右にて汝に現はれ、われらの天のすべての光にもやさるゝ

この一の輝かゞやきは 一〇九—一一一

わが身の上の物語を己が身の上の事と知る、彼も尼なりき、また
 同じさまにてその頭かうべより聖なる首かしらぎぬ 帕かげの陰を奪はる 一一二—

一一四

されど己が願そむひに背よきたまた良よき習ならひに背よきてげに世かへに還かへれる後にも、
 未かつだ嘗かつて心かほおほひの面かほおほひ 帕とを釋とくことなかりき 一一五—一一七

こはソアーヴェの第二の風によりて第三の風即ち最後の威力ちからを生
 みたるかの大いなるコスタツアの光なり。 一一八—一二〇

かく我に語りて後、かれはアーヴェ・マリーアを歌ひいで、さて
 うたひつゝ、深きき水えうに重きき物の沈きえうむ如きえうく消失きえうせき 一二一—一二

三

見ゆるかぎり彼のあとを追ひしわが目は、これを見るをえざるに

及び、さらに大いなる願ひの目的めあてにかへり來りて 一二四—一二

六

全くベアトリーチエにそゝげり、されど淑女いとつよくわが目に
 煌きらめき、視みる力ちからはじめこれに耐たへざりしかば 一二七—一二九
 わが問これがために後おくれぬ。 一三〇—一三二

第四曲

等ひとしく隔へだたり等いざなしく誘いざなふ二の食くひもの物の間にては、自由の人、その一をも齒に觸れざるさきに饑うゑて死すべし 一—三

かくの如く、二匹の猛たけき狼の慾と慾との間にては一匹の羔こひつじひとしくこれを恐れて動かず、二匹の鹿の間にては一匹の犬止まらむ

四—六

是故に、二の疑ひに等ひとしく促うながされて、我もた黙せりとも、こは已やむをえざるにいづれば、我は己を責めもせじ讚ほめもせじ 七—九

我は黙せり、されどわが願ひとともにわが問は言葉に明らかに現

はずよりもはるかに強くわが顔にゑがゝる 一〇—一二

ベアトリーチエはあたかもナブコツドノゾルの怒り（彼を殘忍非道となしたる）をしづめし時に當りてダニエル口の爲しゝ如くに

なしき 一三—一五

即ち曰ふ。我は汝が二の願ひに引かるゝにより、汝の思ひむすぼれて言葉に出でざるを定かに見るなり 一六—一八

汝論あげつらふらく、善き願ひだに殘らんには、何故にわが功德の量、人の暴虐しへたげのために減へるやと 一九—二一

加しかのみならず之、プラトネの教へしごとく、魂、星に歸るとみゆるこ

と、また汝に疑ひを起さしむ 二二—二四

この二こそ汝の思ひをひとしく壓おすところの問とひなれ、されば我ま

づ毒多き方かたよりいはむ 二五—二七

セラフイーンの中にて神にいと近き者も、モイゼもサムエルも
ジョヴァンニ（汝いづれを選ぶとも）も、げにマリアさへ 二八

—三〇

今汝に現はれし諸 《もろく》の靈と天を異ことにして座するにあ
らず、またその存在の年とし數かずこれらと異なるにもあらず 三一—

三三

すべ

凡ての者みな第一の天を——飾る、たゞ永とこしへ遠の聖息みいきを感ずるの

多少に従ひ、そのうるはしき生に差別けぢめあるのみ 三四—三六

これらのこゝに現はれしは、この球がその分と定められたるゆゑ
ならずしてその天界の最いとひく低ひくきを示さんためなり 三七—三九

汝等の才に對^{むか}ひてはかくして語らざるをえず、そは汝等の才は、
 後^{のち}智に照らすにいたる物をもたゞ官能の作^{はたらき}用によりて識^しればな
 り 四〇—四二

是においてか聖書は汝等の能^{ちから}力に準じ、手と足を神に附して他
 の意義に用ゐ 四三—四五

聖なる寺院は、ガブリエール、ミケール、及びかのトビアを癒^{いや}し、
 天使をば人の姿によりて汝等にあらはす 四六—四八

テイメオが魂^{あげつら}について論ふところは、こゝにて見ゆる物に似ず、
 これ彼はそのいふごとく信ずと思はるゝによりてなり 四九—五

一

即ち魂が、自然のこれに肉體を司らしめし時、己の星より分れ出

たるものなるを信じて、彼はこの物再びかしこに歸るといへり

五二―五四

或は彼の説く所、その語の響ことばと異なり、侮あなどるべからざる意義を有
 することあらむ 五五―五七

もしそれこれらの天にその影響の響ほまれそしりも毀も歸る意ならば、その矢

いくばくか眞理あたに中らむ 五八―六〇

この原理誤り解げせられてそのかみ殆ど全世界を枉まげ、これをして
 迷ひのあまりジョーヴェ、メルクリオ、マルテと名づけしむ 六
 一―六三

汝を惱ますいま一の疑ひは毒少し、そはその邪惡も、汝を導きて

我より離すあたはざればなり 六四―六六

われらの正義が人間の目に不正とみゆるは即ち信仰の過程くわていにて
 異端邪説の過程にあらず 六七―六九

されど汝等の知恵よくこの眞理を穿うがつことをうるがゆゑに、我は

汝の望むごとく汝に満足をえさすべし 七〇―七二

もし暴あらびとは、強しひらるゝ人いさゝかも強ふる人に與くみせざる時生ず

るものゝ謂いひならば、これらの魂はこれによりて罪を脱のがるゝことを

えじ 七三―七五

そは意志は自ら願ふにあらざれば滅びず、あたかも火が千度強ちたひひ
 て撓たわめらるともなほその中なる自然の力を現はす如く爲せばなり

七六―七八

是故に意志の屈するは、その多少を問はず、暴あらびにこれの従ふなり、

而しかしてこれらの魂は聖せい所じよに歸るをうるにあたりてかくなしき

七九—八一

鐵架てつきうの上の苦しみに堪たへしロレンツオ、わが手につらかりしム
ツイオのごとく、彼等の意志全まつたかりせば 八二—八四

彼等が自由となるに及び、この意志直ちに彼等をしてその強ひら
れて離れし路に再び還かへらしめしなるべし、されどかく固き意志極
めて稀まれなり 八五—八七

汝よくこれらの言葉を心にとめてさとれるか、さらばこの後汝を
しばし悩ますべかりし疑ひは、はや必ず解けたるならむ 八八

—九〇

されど汝の眼めのまへ前に今なほ横たはる一の路あり、こはいと難かたき路

なれば汝獨りにてはこれを出でざるさきに疲れむ 九一—九三

我あきらかに汝に告げて、福なる魂は常に第一の眞に近くとゞま

るがゆゑに僞るあたはずといへることあり 九四—九六

後汝はコスタンツアがその面帕をば舊の如く慕へる事をピツ

カルダより聞きたるならむ、さればこれとわが今茲にいふ事と相

反すとみゆ 九七—九九

兄弟よ、人難を免れんため、わが意に背き、その爲すべきにあら

ざることをなし、例は世に多し 一〇〇—一〇二

アルメオネが父に請はれて己が生の母を殺し、孝を失はじとて不

孝となりしもその一なり 一〇三—一〇五

かゝる場合については、請ふ思へ、暴意志とまじりて相共にはた

らくがゆゑに、その罪いひのがるゝによしなきことを 一〇六一

一〇八

絶対の意志は惡に與くみせず、そのこれに與するは、拒こぼみてかへつて
尚大いなる苦難なやみにあふを恐るゝことの如何に準ず 一〇九——一

一

さればピツカルダはかく語りて絶対の意志を指さし、我は他の意志
を指す、ふたりのいふところ俱まことに眞なり。 一一二——一一四

一切の眞理の源なる泉よりいでし聖なる流れかくその波を揚あげ、
かくして二の願ひをしづめき 一一五——一一七

我即ち曰ふ。あゝ第一の愛に愛せらるゝ者よ、あゝいと聖なる淑
女よ、汝の言我ことばを潤うるほし我を暖め、かくして次第に我を生かしむ

一一八—一二〇

されどわが愛深からねば汝の恩恵めぐみに謝するに足らず、願はくは全智全能者これに應こたへ給はんことを 一二一—一二三我よく是を知る、我等の智は、かの眞まこと（これより外には眞なる物一だになし）に照らされざれば、飽あくことあらじ 一二四—一二

六

智のこれに達するや、あたかも洞の中に野のけもの獣いこの憩いこふ如く、直

ちにその中にいこふ、またこはこれに達するをう、然らずばいか

なる願ひも空ならむ 一二七—一二九

是故に疑ひは眞理の根より芽の如くに生ず、しかしてこは峰より

峰にわれらを促し巔いたゞきにいたらしむる自然の途なり 一三〇—一三

二

淑女よ、この事我を誘ひ我を勵まし、いま一の明らかならざる眞理についてうやくしく汝に問はしむ 一三三—一三五

請ふ告げよ、人その破れる誓ひの爲、汝等の天秤はかりに懸かくるも輕からぬほど他の善をもて汝等に贖あがなひをなすことをうるや。 一三六—

一三八

ベアトリーチエは愛の光のみちくしいと聖なる目にて我を見き、さればわが視みるちから力これに勝たれで背うしろを見せ 一三九—一四一
 我は目を垂たれつゝ殆ど我を失へり。 一四二—一四四

第五曲

われ世に比類たぐひなきまで愛の焰に輝きつゝ汝にあらはれ、汝の目の
力に勝つとも 一—三

こは全き視力——その認むるに従つて、認めし善に進み入る——
より出づるがゆゑにあやしむなかれ 四—六

われあきらかに知る、見らるゝのみにてたえず愛を燃すとこしへ永遠の
光、はや汝の智の中にかゞやくを 七—九

もし他の物汝等の愛を迷はさば、こはかの光の名残がその中に映さ
し入りて見誤らるゝによるのみ 一〇—一二

汝の知らんと欲するは、果はたされざりし誓ひをば人他の務つとめによりて
つくの償ひ、魂をして論争あらしひを免れしむるをうるや否いなやといふ事是なり。

一三一—一五

ベアトリーチエはかくこの曲カントをうたひいで、言葉を斷たたざる人の
 ごとく、聖なる教へを續けていふ。 一六一—一八

それ神がその裕ゆたかなる恩恵めぐみにより造りて與へ給へる物にて最もその
 徳かなに適あひかつその最も重んじ給ふ至大たまものの賜は 一九—二一

即ち意志の自由なりき、知慧ある被造物は皆、またかれらに限り、
 昔これを受け今これを受く 二二—二四

いざ汝推おして知るべし、人肯うけがひて神また肯うけがひかくして誓ひ成るな
 らんには、そのいと貴とほときものなることを 二五—二七

そは神と人との間に契約を結ぶにあたりては、わがいふ如く貴き
この寶犧いけにへ牲となり、かつかくなるも己が作用はたらきによればなり

二八一—三〇

されば何物をもて償つぐのひとなすことをえむ、捧げし物を善く用ゐんと

思ふは是どうぶつ※物をもて善事を爲さんとねがふなり 三一—三三

汝既に要點ゑんとくを會得す、されど聖なる寺院は誓ひより釋とき、わが汝

にあらはし、眞理そむに背くとみゆるがゆゑに 三四—三六

汝なほ食卓つくゑに向ひてしばらく坐すべし、汝のくらへる硬かたき食物くひもの

はその消化こなるゝ爲になほ助けを要もとむればなり 三七—三九

心を開きて、わが汝に示すものを受け、これをその中に收めよ、

聽たもきて保たざるは知識をうるの道にあらじ 四〇—四二

それ二の物相合してこの犠牲いけにへの要素を成す、一はその作らるゝ
 基もととなるもの一は即ち契約なり 四三―四五

後者は守るにあらざれば消えず、但しこれについては我既にいと
 さだかに述べたり 四六―四八

是故に希伯來人エブレオびとは、捧ぐる物の如何によりこれを易かふるをえたれ
 ども（汝必ず是を知らん）、なほ献物さげものをなさぐるをえざりき

四九―五一

前者即ち汝に材とし知らるゝものは、これを他の材に易かふとも必
 ず咎とがとなるにはあらず 五二―五四

されど黄白二の鑰かぎのめぐるなくば何人もその背に負おへる荷を、心
 のまゝにとりかふべからず 五五―五七

かつ取らるゝ物が置かるゝ物を容るゝことあたかも六の四におけ
 る如くならずば、いかに易ふとも徒なるを信ずべし 五八―六〇
 是故に己が價值ねうちによりていと重くいかなる天秤はかりをも引下ぐる物に
 ありては、他の費つひえをもて償ふつぐなことをえざるなり 六一―六三
 人よ誓ひを戲たはぶれごと事となす勿れ、これに忠なれ、されどイエプテ
 のその最初の供物くもつにおけるごとく軽々しくこれを立るなかれ 六
 四―六六

守りてしかしてまされる悪を爲さんより、彼は宜よろしく我あしかり
 きといふべきなりき、汝はまたギリシア人びとの大將のかく愚おろかなりし
 をみむ 六七―六九

さればイフィジエニアはその妍みめよきがために泣き、かゝる神事じんじを傳

へ聞きたる賢者愚者をしてまた彼の爲に泣かしむ 七〇―七二

基クリステイアーニ督教徒よ、おもくしく身を動かし、いかなる風にも動く

羽のごとくなるなかれ、いかなる水も汝等を洗ふと思ふなかれ

七三―七五

汝等に舊約新約あり、寺院の牧者の導くあり、汝等これにて己が救ひを得るに足る 七六―七八

もし邪慾汝等に他の途みちを勧めすすめなば、汝等人たれ、愚おろかなる羊となり

て汝等の中の猶ジユデア太人アビトに笑はるゝなかれ 七九―八一

己が母の乳を棄て、思慮こゝろなく、浮うかれつゝ、好みて自ら己と戦こひつじふ羔

のごとく爲すなかれ。 八二―八四

わがこゝしるに記しるすごとく、ベアトリーチエかく我に、かくていと

つかしき氣色けしきにて、宇宙の最も生氣に富める處にむかへり 八五

— 八七

その沈黙とかはれるすがた變貌もたとは、わが飽あくなきの智、はや新しき問を

起しゐたりしわが智に黙せと命じき 八八—九〇

しかしてあたかも弦つるのしづかならざる先にまと的あたに中る矢のごとく、

われらは馳はせて第二の王國にいたれり 九一—九三

われ見しに、かの天の光の中に入りしとき、わが淑女いたくよろ

こび、かの星自らそがためいよく輝ほきぬ 九四—九六

星さへ變りてほゝゑみたりせば、己さがが性さがのみによりていかなるさ

まにも變るをうる我げにいかになりしぞや 九七—九九

しづかなる清き池の中にて、魚もしその餌とみゆる物そとの外より入

來るをみれば、これが邊ほとりにはせよるごとく 一〇〇—一〇二

千餘の輝われらの方にはせよりき、おのくいふ。見よわれらの
愛をますべきものを。 一〇三—一〇五

しかして各 われらの許もとに來るに及び、我は魂が、その放つ光の
あざやかなるによりて、あふるゝ悦びをあらはすを見たり 一〇

六—一〇八

讀者よ、この物語續かずばその先を知るあたはざる汝の苦しみい
かばかりなるやを思へ 一〇九—一一一

さらば汝自ら知らむ、これらのものわが目に明らかに見えし時、
彼等よりその状態ありさまを聞かんと思ふわが願ひのいかに深かりしや

を 一一二—一一四

あゝ良日よきひの下もとに生れ、戦ひ未だ終らざるに恩惠めぐみに許されて永遠とこしへ

の凱旋の諸の寶座くらみを見るを得る者よ 一一五—一一七

遍あまねく天に満みつる光にわれらは燃もやさる、是故にわれらの光をうくる

をねがはゞ、汝心のまゝに飽あけ。 一一八—一二〇

信心深きかの靈の一我にかくいへるとき、ベアトリーチエ曰ふ。

いへ、いへ、臆おくする勿なかれ、かれらを神々の如く信ぜよ。 一二一

—一二三

我よく汝が己の光の中に巢すくひて目よりこれを出すをみる、汝笑

へば目煌きらめくによりてなり 一二四—一二六

されど尊き魂よ、我は汝の誰なるやを知らず、また他の光に蔽はれて人間に見えざる天の幸さちをば何故にうくるやを知らず。 一二

七―一二九

さきに我に物言へる光にむかひて我かくいへり、是においてかそのかゞやくこと前よりはるかに強かりき 一三〇―一三二

あたかも日輪が（濃こき水氣の幕その熱に嚙かみつ盡つくさるれば）そのいと強き光に己をかくすごとく 一三三―一三五

かの聖なる姿は、まさる悦びのため己が光の中にかくれ、さてかく全く籠こもりつゝ、我に答へき 一三六―一三八

次の曲カントの歌ふごとく 一三九―一四一

第六曲

コスタンティーンが鷲をして天の運行に逆はしめし（ラヴィーナ
めとを娶れるむかしのひと 昔 人に附きてこの鷲そのかみこれに順したがへり）時より
このかた以來 一—三

二百年餘の間、神の鳥はエウローパの際涯はて、そがさきに出でし山
 々に近き處にとゞまり 四—六

かしこにてその聖なる翼の陰に世を治めつゝ、手より手に移り、
 さてかく變りてわが手に達せり 七—九

我はチエーザレ皇 帝 なりき、我はジュステイニアノなり、今わが感ず

る第一の愛の聖旨みむねによりてわれ律法おきての中より過あまれるもの 剩えきなきものと無益物

とを除きたり 一〇—一二

未だこの業わざに當らざりしき、われはクリストにたゞ一の性さがあるを信じ、かつかゝる信仰をもて足たれりとなしき 一三—一五

されど至高の牧者なるアガピート尊者、その言葉をもて我を正しき信仰に導けり 一六—一八

我は彼を信じたり、しかして今我彼の信ずる所をあきらかに見る
ことあたかも汝が一切の矛盾むじゆんの眞なり偽やなるを見るごとし

一九—二一

われ寺院と歩みを合せて進むに及び、神はその恩恵めぐみにより我を勵ましてこの貴き業わざを爲さしむるをよしとし、我は全く身をこれに

捧げ 二二—二四

武器をばわがべりサルに委ねたりしに、天の右手^{めで}彼に結ばりて、
わが休むべき休^{しるし}徴となりき 二五—二七

さて我既に第一の問に答へ終りぬ、されどこの答の性^{さが}に強^しひられ、
なほ他の事を加ふ 二八—三〇

こは汝をしていかに深^{ことわり}き理によりてかのいと聖なる旗に、これを
我^{わがもの}有となす者も將^{はた}これに敵^{はむか}ふ者も、ともに逆^{さから}ふやを見しめん爲
なり 三一—三三

パルランテがこれに王國を與へんとて死にし時を始めとし、見よ
いかなる徳のこれをあがむべき物とせしやを 三四—三六

汝知る、この物三百年餘の間アルバにとゞまり、その終り即ち^み三

人の三人とさらにこれがため戦ふ時に及べることを 三七―三九
 また知る、この物サビーニの女達の禍ひよりルクレーチアの憂ひ
 に至るまで七王の代に附近あたりの多くの民に勝ちていかなる業わざをなし、
 やを 四〇―四二

知る、この物秀でしローマ人等の手にありてブレンノ、ピルロ、
 その他の君主等及び共和の國々と戦ひ、いかなる業わざをなし、やを

四三―四五

(是等の戦ひにトルクアート、己が蓬おどろのかみ 髪ちなに因みて名を呼ばれ
 たるクインツイオ、及びデーチとファールビとはわが悦びて甚いたたふとく尊
 む譽ほまれを得たり) 四六―四八

アンニバーレに従ひて、ポーよ汝の源なるアルペの岩々を越えし

アラビア人等びとの誇りをくじけるもこの物なりき 四九―五一

この物の下もとに、シピオネとポムペオとは年若うして凱旋したり、

また汝の郷土のぞに臨みて聳そびゆる山にはこの物酷つらしと見えたりき 五

二―五四

後、天が全世界を己の如く晴和のどかならしめんと思ひし時に近き頃、

ローマの意に従ひて、チエーザレこれを取りたりき 五五―五七

ヴァーロよりレーノに亘りてこの物の爲し、ことをばイサーラも

エーラもセンナも見、ローダノを満たすすべての溪たにもまた見たり

五八―六〇

ラヴェンナを出で、ルビコンを越えし後このもの、爲し、事はい

とはやければ、詞ことばも筆ともなも伴あたふ能はじ 六一―六三

士卒を轉めぐるらしてスパ―ニアに向ひ、後ドウラツツオにむかひ、またファルサーリアを撃うちて熱きニ―口にも痛みを覺えしむるにいたれり 六四―六六

そが出立ちし處なるアンタンドロとシモエンタ、またかのエツトレの休やすふところを再び見、後、身を震ふるはして禍わざひをトロメオに與へ 六七―六九

そこよりイウバの許もとに閃ひらき下り、後、汝等の西めぐるに轉りてかしこにポムペオの角らつばを聞けり 七〇―七二

次の旗手と共にこの物の爲し、ことをば、ブルートとカツシオ地獄あかしに證す、このものまたモーデナとペル―ジヤとを憂へしめたり

七三―七五

うれはしきクレオパトラは今もこの物の爲に泣く、彼はその前より逃げつゝ、蛇によりて俄にはかなる惨むじき死を遂とげき 七六一七八

かの旗手とともにこの物遠く紅の海邊うみべに進み、彼とともに世界をば、イアーノの神みや殿の鎖とぎさるゝほどいと安泰やすらかならしめき 七九

一八一

されどわが語種かたりぐさなるこの旗が、これに屬する世の王國の全體すべて

に亘りて、さきに爲したりし事も後に爲すべかりし事も 八二一

八四

小さかにかつ臃おぼろに見ゆるにいたらむ、人この物を、目を明らかにし

思ひを清うして、第三のチエーザレの手に視なば 八五―八七

そはこの物彼の手にありしとき、我を上げます生くる正義は、己

が怒りに報ゆるむくの譽ほまれをこれに與へたればなり 八八—九〇

いざ汝わが反復くりかへしごと語ことを聞きて異あやしめ、この後この物テイトとと

もに、昔の罪を罰せんために進めり 九一—九三

またロンゴバルデイの齒、聖なる寺院を嚼かみしとき、この物の翼の下にて勝ちつゝ、カルロ・マーニオこれを救へり 九四—九六

今や汝は、わがさきに難じし如き人々の何者なるやと凡すべて汝等の禍ひの本なる彼等の罪のいかなるやとを自ら量はかり知るをえむ 九

七—九九

彼黄かれの百合おほやけを公の旗さかに逆さからはしむれば此これ一党派の爲にこれを己ものが
 となす、いづれか最も非なるを知らず 一〇〇—一〇二

ギベルリニをして行はしめよ、他の旗もとの下にその術を行はしめよ、

この旗を正義と離す者何ぞ善くこれに従ふことあらむ 一〇三—

一〇五

またこの新しきカル口をして己がグエルフィと共にこれを倒さず、
かれよりも強き獅子より皮を奪ひしその爪を恐れしめよ 一〇六

—一〇八

子が父の罪の爲に泣くこと古來例多し、彼をして神その紋所を彼
の百合の爲に變へ給ふと信ぜしむる勿れ 一〇九—一一一

さてこの小さき星は、進みて多くの業を爲し、諸の善き靈にて
飾らる、彼等のかく爲し、は譽と美名をえん爲なりき 一一二—

一一四

しかして願ひ斯く路を誤りてかなたに昇れば、上方に昇る眞の愛、

光を減ぜざるをえじ 一一五—一一七

されどわれらの報むくいが功德と量を等しうすることわれらの悦びの一部を成す、われら彼の此より多からず少からざるを見ればなり

一一八—一二〇

生くる正義はこの事によりてわれらの情をうるはしうし、これをして一度たびも歪ゆがみて悪に陥るなからしむ 一二一—一二三

さま／＼の聲下界にて麗うるはしき節ふしとなるごとく、さま／＼の座くらゐわが世にてこの諸の球の間のうるはしき詞しらべとゝを整ふ 一二四—一二六

またこの眞珠の中にはロメオの光の光るあり、彼の美しき大なる業わざは正しく報むくいられざりしかど 一二七—一二九

彼を陥れしプロヴェンツア人等笑ふをえざりき、是故に他人の善
 行をわが禍ひとなす者は即ち邪道を歩む者なり 一三〇—一三二
 ラモンド・ベリングエーリには四人の女ありて皆王妃となれり、
 しかしてこは賤しき旗客ロメオの力によりてなりしに 一三三—
 一三五

後のちかれ讒者の言に動かされ、この正しき人（十にて七と五とをえ
 させし）に清算を求めき 一三六—一三八

是においてか老いて貧しき身をもちて彼去りぬ、世もし一ひとくち口一
 口と食を乞ひ求めし時のその固き心を知らば 一三九—一四一
 （今もいたく讚ほむれども）今よりもいたく彼をほむべし。 一四

第七曲

オザンナ、萬軍の聖なる神、己が光をもてこれらの王國の惠まるゝ
 火を上より照らしたまふ者。 一—三

二重ふたへの光かきを重まとね纏まとひしかの聖者は、その節ふしにあはせてめぐりつゝ、
 かく歌ふと見えたりき 四—六

しかしてこれもその他の者もみなまた舞ひいで、さていとはやき
 火花の如く、忽ちへだゝりてわが目にかくれぬ 七—九

われ疑ひをいだき、心の中にいひけるは。いへ、いへ、わが淑女
 にいへ、彼しづく甘しづくき雫しづくをもてわがかわき渴かわきをとゞむるなれば。 一〇—一二

されどたゞ「ベ」と「イーチェ」のみにて我を統すべをさ治うやまひむる敬我を

して睡りに就く人の如く再びわが頭かうべを垂れしむ 一三―一五

ベアトリ―チェはたゞ少時しばし我をかくあらしめし後、火の中にさへ
人さいはひを福ほゝゑみならしむる微笑をもて我を照らしていひけるは 一六―一

八

わが量はかるところ（こは謬あやまることあらじ）によれば、汝思へらく、

正しき罰いかにして正しく罰せらるゝをうるやと 一九―二一

されど我は速に汝の心を釋ときほな放つべし、いざ耳を傾けよ、そはわ

が詞ことば、大いなる教へを汝にさづくべければなり 二二―二四

それかの生れしにあらざる人は、己が益なる意志の衝くつわに堪たへかね

て、己を罪しつゝ、己がすべての子孫を罪せり 二五―二七

是においてか人類は、大いなる迷ひの中に、幾世の間、病みて下
 界に臥ふししかば、神の語遂ことばに世に降るをよしとし 二八一—三〇〇
 その永遠とこしへの愛の作用はたらきのみにより、かの己が造つくりぬし主より離れ
 し性さがを、かしこに神結かみむすびにて己と合せ給ひたり 三一—三三
 いざ汝わが今語るところに心をとめよ、己が造主と結むすびあ合へるこ
 の性は、その造られし時の如く純にして善なりしかど 三四—三
 六

眞理の道とおのが生命いのちに遠ざかり、自ら求めてかの樂園より逐お
 れたりき 三七—三九

是故に合せられたる性さがより見れば、十字架の齋もたらし、刑罰は、正
 しく行はれしこと他に類たぐひなし 四〇—四二

されどこれを受けし者、かゝる性をあはせし者の爲ひととなり人より見

れば、正しからざることまた他に類なし 四三―四五

されば一の行爲おこなひより様々さま／＼の事出でぬ、そは一の死、神の聖み

こゝろ意にも猶太人ジユデアびとの心にも適ひたればなり、この死の爲に地は

震ひ天は開きぬ 四六―四八

今や汝はさとりがたしと思はぬならむ、正しき罰後にいたりて正

しき法廷しらすに罰せられきといふを聞くとも 四九―五一

されど我は今汝の心が、思ひより思ひに移りて一のふしの中にむす

ぼれ、それより解放ときはなたれんことをばしきりに願ひつゝ待つを見

るなり 五二―五四

汝いふ、我よくわが聞けるところをさとる、されど我は神が何故

にわれらの贖あがなひのためこの方法てだてをのみ選び給へるやを知らずと 五

五―五七

兄弟よ、智もし愛の焰の中に熟せざればいかなる人もこの定さだめを會あ得とくせじ 五八―六〇

しかはあれ、この目標しるしは多く見られて少しくさとらるゝものなれば、我は何故にかゝる方法てだての最もふさはしかりしやを告ぐべし

六一―六三

それ己より一切の嫉ねたみを卻しりぞぐる神の善は、己が中に燃えつゝ、光を放ちてその永とこしへ遠とこしへの美をあらはす 六四―六六

是より直したゝに滴したゝるものはその後滅びじ、これが自ら印を捺おすとき、象かた消ゆることなければなり 六七―六九

是より直に降ふりくだ下るものは全く自由なり、新しき物の力につきした服

従がふことなければなり 七〇—七二一

かゝるものは最も是に類たぐふが故に最も是が心に適かなふ、萬物を照らす聖なる焰は最も己に似る物の中に最も強く輝けばなり 七三一

七五

しかしてこれらの幸さちはみな、人たる者の受くるところ、一つ缺くれば、人必ずその尊たふとさを失ふ 七六一—七八

人の自由を奪ひ、これをして至上の善に似ざらしめ、その光に照らさるること従つて少きにいたらしむるものは罪のみ 七九—八

一

もしそれ正しき刑罰を不義の快樂けらくに對むかはしめつゝ、罪のつくれる

空處を満すにあらざれば、人その尊さに歸ることなし 八二—八

四

汝等の性は、その種子によりて悉く罪を犯すに及び、樂園とともにこれらの尊き物を失ひ 八五—八七

淺瀬の一を渡らずしては、いかなる道によりても再びこれを得るをえざりき（汝よく思ひを凝らさばさとるなるべし） 八八—九

○

淺瀬とは、神がたゞその恩恵によりて赦し給ふか、または人が自らその愚を贖ふか即ち是なり 九一—九三

いざ汝力のかぎり目をわが詞にちかくよせつゝ、永遠の思量の淵深く見よ 九四—九六

そもく人は、その限りあるによりて、あがなひ贖をなす能はざりき、そ

は後神にしたが順ひくひ心を卑ひくうして下くだるとも、さきに逆きて 九七一

上らんとせし高さに應ずる能あたはざればなり、人自らあがな贖ふの力なか

りし理ことわりげに茲こゝに存す — 一〇二

是故に神は己が道——即ちその一かまたは二——をもて、人をそ

の完き生に復かへしたまふのほかなかりき — 一〇三—一〇五

されど行ふ者の行は、これがいづる心の善をあらはすに従ひ、い

よく悦よろこばるゝがゆゑに — 一〇六—一〇八

宇宙に印影かたを捺おす神の善は、再び汝等みづかを上げんため、己がすべて

の道によりて行ふを好めり — 一〇九—一一一

また最終いやはての夜と最始いやさきの晝との間に、これらの道のいづれによ

りても、かく尊たふとくかく偉おほいなる業わざは爲なされしことなし爲なさるゝこと

あらし 一一二——一一四

そは神は人をして再び身あぐを上ふさはるに適あしからしめん爲な己おのれを與あへ給たまひ、

たゞ自ら赦ますに優めぐみる恩めぐみ惠めぐみをば現まし給たまひたればなり 一一五——一一

七

神の子己おのれを卑ひくうして肉體にくたいとなり給たまはざりせば、他ほかのいかなる方法てだて

といふとも正義せいぎに當あたるに足たらざりしなるべし 一一八——一二〇

さて我われは今いま、汝なんぢの願ねがひをすべてよく満みたさんため、溯さかのぼりて一の事

を説とき示しし、汝なんぢをしてわが如ごとくこれを見るをえしめむ 一二一——

一二三

汝なんぢいふ、我われ視みるに、地ち水すい火くわ風ふう及およびそのまじりあへるものみな滅めび、

永く保たじ 一二四—一二六

しかるにこれらは被造物なり——是故にわがいへること眞ならばこれらには滅ぶるの患あるべきならず——と 一二七—一二九

九

兄弟よ、諸の天使と、汝が居る處の純なる國とは、現在のごとき完き状態にて造られきといふをうれども 一三〇—一三二

汝の名指し、諸の元素およびこれより成る物は、造られし力をととのふ 一三三—一三五

造られしはかれらの物質、造られしはかれらをめぐることこの諸の星のうちのととのふる力なり 一三六—一三八

諸の聖なる光の輝と 轉は、すべての獸及び草木の魂をば、

これとなりうべき原質よりひきいだせども 一三九—一四一

至上の慈愛は、たゞちに汝等の生命いのちを嘘ふき入れ、かつこれをして己

を愛せしむるが故に、この物たえずこれを慕ひ求むるにいたる

一四二—一四四

さてまたこの理ことわりよりさらに推し及ぼして汝は汝等の更よみがへり生を知

ることをえむ、もし第一の父ちち母ははともに造られし時 一四五—一

四七

人の肉體のいかに造られしやを思ひみば

第八曲

世は、その危ふかりし頃、美しきチプリーニアが第三のエピチク
口をめぐりつゝ痴情の光を放つと信ずる習なりきならはし 一―三

されば古いにしへの人々その古の迷ひより、牲いけにへを供へ誓願をかけて彼を崇あが
めしのみならず 四―六

またディオネとクーピドをも崇めて彼をその母とし此をその子と
し、かついへり、この子かつてデイドの膝の上に坐しきと 七―
九

かれらはまた、日輪に或ひは後うしろ或ひは前まへより秋波しゅうはをおくる星の名

を、わがかく歌の始めにうたふかの女神めがみより取れり 一〇—一二
 かの星の中に登れることを我は知らざりしかど、その中にありし
 ことをば、わが淑女のいよく美しくなるを見て、かたく信じき

一三一—一五

しかして火花焰のうちに見え、聲々のうちに判わかたるゝ（一動かず
 一往來ゆききするときは）ごとく 一六一—一八

我はかの光の中に、他の多くの光、輪を成めぐして、るを見たり、但
 し早さに優まさり劣おとりあるはその永劫えいごふの視力の如何によりてなるべ
 し 一九—二一

見ゆる風や見えざる風の、冷やかなる雲よりくだる疾はやしとも、こ
 れらのいと聖なる光が 二二—二四

尊きセラフイーニの中にまづ始まりし舞を棄てつゝ我等に來るを
見たらん人には、たゞ靜にて遲しと思はれむ 二五―二七

さて最も先に現はれし者のなかにオザンナ響きぬ、こはいと妙な
りければ、我は爾そののち後再び聞かんと願はざることたえてなかりき

二八―三〇

かくてその一われらにいよく近づき來り、單たゞひとり獨ひとりにていふ。

われらみな汝の好む所に従ひ汝を悦ばしめんとす 三一―三三

われらは天上の君達と圓を一にし、めぐり轉一にし、かわき渴を一にして

まはる、汝嘗て世にて彼等にいひけらく 三四―三六

汝等さとり了知をもて第三の天を動かす者よと、愛我等に滿つるが故に、

汝の心に適かなはせんとして少時しばらくしづまるとも我等の悦び減へることあら

じ。 三七—三九

われ目をうやくしくわが淑女にそゝぎ、その思ひを定さだかに知り
てわが心を安んじ、後 四〇—四二

再びこれをかの光——かく大いなることを約し——にむかはせ、
切せつなる情を言葉にこめつゝ汝等は誰なりや告げよといへり 四三

—四五

われ語れる時、新たなる喜び己が喜びに加はれるため、かの光が、
その量と質とにおいて、優まさりしことげにかばかりぞや 四六—

四八

さてかく變りて我に曰ふ。世はたゞしばし我を宿やどしき、もし時さ
らに長かりせば、來るべき多くの禍ひは避けられしものを 四九

—五一—

わが身のまはりに輝き出づるわが喜びは我を汝の目に見えざらしめ、我を隠してあたかも己が絹に卷かるゝ蟲の如くす 五二—五

四

汝深く我を愛しき、是また宜うべなり、我もし下界ながらに長生へたりせば、わが汝に表あらはす愛は葉のみにとゞまらざりしなるべし 五五—五

七

ローダノがソルガと混まじりし後に洗ふ左の岸は、時に及びてわがその君となるを望み 五八—六〇

バーリ、ガエタ及びカートナ際涯はてを占め、トロント、ヴェルデの流れて海に入る處なるアウソーニアの角つのもまたしか望みき 六一

—六三—

はやわが額ひたひには、ドイツの岸を棄てし後ダヌービオの濕うるほす國の冠

かゞやきみたり 六四—六六

またエウロに最もわづらはさるゝ灣ほとりの邊パキーノとペロロの間に

て、テイフェオの爲ならずそこに生ずる硫黄の爲に烟けむる 六七—

かの美しきトリナクリアは、カルロトリドルフォの裔すゑ我よりいでゝ

その王となるを今も望み待ちしなるべし —七十二—

民の心を常に荒あらだつ立る虐政パレルモを動かして、死せよ死せよと

叫なばしむるにいたらざりせば 七三—七五

またわが兄弟にして豫めこれを見たらんには、カタローニアの慾と貪とをはやくも避けて、その禍わざひを自ら受くるにいたらざりし

なるべし 七六一七八

そはげに彼にてもあれ他ほかの人にててもあれ、はや荷の重き彼の船に
さらに荷を積むなからんため備へを成さざるをえざればなり 七

九一八一

物惜しみせぬ性さがより出で、吝やぶさかなりし彼の性は、貨殖に心專ならざ
る部下を要せむ。 八二一八四

わが君よ、我は汝の言ことばの我に注ぐ深き喜びが、一切の善の始まり
かつ終る處にて汝に見らるゝことわがこれを見る如しと 八五―
信ずるがゆゑに、その喜びいよく深し、我また汝が神を見てし
かしてこれをさとるを愛めづ 一九〇

汝我に悦びをえさせぬ、さればまた教へをえさせよ（汝語りて我

に疑ひを起さしめられたればなり) —— 苦にがき物いかにして甘き種より

出づるや。 九一—九三

我かく彼に、彼即ち我に。我もし汝に一の眞理を示すをえば、汝は汝の尋たづぬる事に顔むくを向ること今背をむくる如くなるべし 九四

—九六

汝の昇る王國あまねを遍くめぐらしかつ悦ばすところの善は、これらの

大いなる物體において、己が攝理を力とならしむ 九七—九九

また諸の自然のみ、自おのづから完こころ意とへのの中に齊とへのらるゝにあらずして、

かれらとともにその安寧もまた然しかせらる 一〇〇—一〇二

是故にこの弓の射放つものは、みな豫あらかじめ定められたる目的めあてにむか

ひて落ち、あたかも己まとが目的まとにむけられし物の如し 一〇三—一〇

五

もしこの事微りなかせば、今汝の過行く天は、その果をみ技藝に結ばず

して破壊にむすぶにいたるべし 一〇六—一〇八

しかしてこはある事ならじ、もし此等の星を動かす諸の智備は
らず、またかく此等を完からしめざりし第一の智にかくるところ 缺處ある

にあらずば 一〇九—一一一

汝この眞理をなほも明かにせんと願ふや。我。否いな然しからず、我は自
然がい必要の事に當りて疲るゝ能はざるを知ればなり。 一一二—

一一四

彼即ちまた。いざいへ、世の人もし一市民たらずば禍ひなりや。

我答ふ。然り、その理はことわり我問はじ。 一一五—一一七

人各 世に住むさまを異にし異なる職務つとめをなすにあらざして市民たることを得るや、汝等の師の記しるす所正しくば然しからず。 一一八

— 一一〇

かく彼論じてこゝに及び、さて結びていふ。かゝれば汝等の業わざの根も、また異ならざるをえず 一二一—一二三

是故ひとりに一人はソロネ、一人はセルゼ、一人はメルキゼデク、また一人は空そらを飛びつゝわが子を失へる者とし生る 一二四—一二六
 人なる蠟ろうに印おを捺す諸このやの天の力は、善く己わがが技わざを爲せども彼家かのや
 此家このやの差別けじめを立てず 一二七—一二九

是においてかエサウはヤコブと種たねを異にし、またクイリーノは人がこれをマルテに歸するにいたれるほど父の賤いやしき者なりき 一

三〇——一三二

もし神の攝理勝たずば、生れし性は生みたるものと常に同じ道に進まむ 一三三——一三五

汝の後にありしもの今前にあり、されど汝と語るわが悦びを汝に知らしめんため、われなほ一の事を加へて汝の表衣となさんとす

一三六——一三八

それ性は、命運これに配はざれば、あたかも處を得ざる種のごとく、その終りを善くすることなし 一三九——一四一

しかして下界もしその心を自然の据うる基にとめてこれに従はゞその民榮えむ 一四二——一四四

しかるに汝等は、劔を腰に帯びんがために生れし者を枉げて僧と

し、法のりを説くべき者を王とす 一四五―一四七

是においてか汝等の歩履あゆみ道を離る。 一四八―一五〇

第九曲

美しきクレメンツアよ、汝のカル口はわが疑ひを解きし後、我に
その子孫のあふべき欺たばかり罔の事を告げたり 一—三

されどまた、黙して年をその移るに任せよといひしかば、我は汝
等の禍ひの後に正しき歎き來らんといふのほか何をもいふをえざ
るなり 四—六

さてかの聖なる光の生命いのちは、萬物を足らはず善の満みたす如く己を
満たす日輪にはや再びむかひるたりき 七—九

あゝ迷へる魂等よ、不信心なる被造物等よ、心をかゝる善にそむ

けて頭かうべを空しき物にむくとは 一〇—一二

時に見よ、いま一の光、わが方に進み出で、我を悦ばせんとの願
ひを外部そとの輝に現はせり 一三—一五

さきのごとく我に注げるベアトリーチェの目は、うれしくもわが
願いひを容いるゝことをば定さだかに我に知らしめき 一六—一八

我い曰いふ。あゝ福さいはひなる靈たまよ、請こふ速すみにわが望のぞみをかなへ、わが思おもふ
所ところ汝きみに映うつりて見みゆとの證あかしを我にえさせよ。 一九—二一

是こゝにおいてか未なだ我に知られざりしかの光、さきに歌うたひみたる處
なる深處ふかみより、あたかも善行ぜんぎやうを悦よろこぶ人の如く、續つづいていふ 二二

—二四

邪よこしまなるイタリアの國の一部、リアルトとブレस्ता、ピアールヴァの

源との間の地に 二五—二七

いと高しといふにあらねど一の山の聳ゆるあり、かつて一の炬たいま火つこゝより下りていたくこの地方を荒しき 二八—三〇

我とこれとは一の根より生れたり、我はクニツツアと呼ばれにき、わがこゝに輝くはこの星の光に勝たれたればなり 三一—三三

されど我今喜びて自らわが命運の原因もとを赦ゆるし、心せこれに惱なやまさじ、こは恐らくは世俗の人にさとりがたしと見ゆるならむ 三四

—三六

われらの天の中のこの光りて貴き珠たま、我にいと近き珠の名は今も高く世に聞ゆ、またその滅びざるさきに 三七—三九

この第百年はなほ五いつたび度も重ならむ、見よ人たる者己すぐを勝るゝ者

となし、第二の生をば第一の生に残さしむべきならざるやを 四

〇—四二

さるにターリアメントとアデーチエに圍まるゝ現在の群集

これを思はず、撃たるれどもなほ悔いじ 四三—四五

されどパードヴァは、その民頑にして義に背くにより、程なく招

の邊にて、かのヴィチエンツアを洗ふ水を變へむ 四六—四八

またシーレとカニアーンの落合ふ處は、或者これを治め、頭を高

うして歩めども、彼を捕へんとて人はや網を造りたり 四九—五

一

フェルトロもまたその非道の牧者の罪の爲に泣かむ、かつその罪

はいと悪くしてマルタに入れられし者にさへ類を見ざる程ならむ

五二—五四

己が黨派に忠なることを示さんとてこのやさしき僧の與ふるフエ

ルラーラ人の血は、げにいと大いなる桶びとならでは — 五五

これを容いるゝをえざるべく、※に分けてこれを量はからばその人疲れ

む、而しかしてかゝる贈物おくりものは本國の慣習ならはしに適かなふなるべし — 六

○

諸の鏡上方うへにあり、汝等これを寶座ツローニといふ、審判さばきの神そこより

我等を照らすがゆゑに我等皆これらの言葉を眞まこととす。 六一—六

三

かくいひて黙もだし、さきのごとく輪に加はりてめぐりつゝ、心をほ

かにむくるに似たりき 六四—六六

名高き者とはやわが知りしかの残りの喜びは、日の光に當る良き^よ

紅^{あかだま}玉の如くわが目に見えたり 六七—六九

上にては悦びによりて、強き光のえらるゝこと、世にて笑のえら
るゝ如し、されど下にては心の悲しきにつれて魂黒く外^{そと}にあらは
る 七〇—七二

我曰ふ。福なる靈よ、神萬物を見給ひ、汝の目神に入る、是故に
いかなる願ひも汝にかくるゝことあらじ 七三—七五

もしそれ然らば、六の翼を緇衣となす信心深き火とともに歌ひて
とこしへに天を樂します汝の聲 七六—七八

何ぞわが諸の願ひを満たさぐる、もしわが汝の衷^{うち}に入ること汝
のわが衷^{あに}に入ることくならば、我豈汝の間を待たんや。 七九—

八一

このとき彼曰ふ。地を巻く海を除きては、水湛たふる溪たにの中にて最いと

大いなるもの 八二―八四

相容あひいれざる二の岸の間にて、日に逆さひて遠く延びゆき、さきに天

涯あひとなれる所を子牛線しごせんとなす 八五―八七

我はこの溪ほとの邊ほとり、エプロとマークラ（短き流れによりてゼーノウ

ア人びととトスカーナ人とを分つ）の間に住める者なりき 八八―九

○

そのかみ己が血をもて湊を熱くせしわが故郷ふるさとはブツジエーアと

殆ど日出日没ひのでひのいりを同うす 九一―九三

わが名を知れる人々我をフォルコと呼べり、我今象かたをこの天に捺お

す、この天我に捺おしゝごとし 九四—九六

そはシケオとクレウザとを虐しひたげしベロの女むすめも、デモフオーンテに欺かれたるロドペーアも、またイオレを心に 九七一

包める頃のアルチーデも、齡としに適ふさはしかりし間の我より強くは、思ひに燃えざりければなり 一一〇二

しかはあれ、こゝにては我等悔くいず、たゞ笑ふ、こは罪の爲ならで（再び心に浮ばざれば）、定め、整ととのふる力のためなり 一〇三

一一〇五

こゝにては我等、かく大いなる御業みわざを飾る技巧を視、天界に下界を治めしむる善を知る 一〇六一—一〇八

されどこの球の中に生じゝ汝の願ことひ悉くく満たされんため、我なほ

ことばつ
語を繼がざるべからず 一〇九—一一一

汝は誰がたこの光（あたかも清き水に映ずる日の光の如くわが傍かたへに

閃ひらめくところの）の中にあるやを知らんと欲す 一一二—一一四

いざ知るべし、ラアブこのうちにやすらふ、彼われらの組に加は

りその印をこれに捺すこと他に類たぐひなし 一一五—一一七

人の世界の投ぐる影、尖とがれる端はしとなる處なるこの天は、クリスト

の凱旋たいせんに加はる魂の中彼をば最も先に受けたり 一一八—一二〇

左右たなごころの掌てのひらにて獲えたる尊たき勝利しりのしるしとして彼を天の一におくは、

げにふさはしき事なりき 一二一—一二三

そは彼ヨスエを聖地——今やこの地殆ど法王の記憶に觸れじ——

にたすけてその最初の榮光をこれにえさせたればなり 一二四—

一二六

はじめて己が造つくりぬし主そむに背き、嫉ねたみによりて深き歎きを殘せる者

の建てたりし汝の邑まちは 一二七—一二九

詛のろひの花を生じて散らす、こは牧者を狼となして、羊こひつじ、羔をさま

よはしゝもの 一三〇—一三二

これがために福音と諸のおきて大いなる師とは棄てられ、人専ら寺院
の法規を學ぶことその紙かみの端はしにあらはるゝ如し 一三三—一三

五

これにこそ法王もカルデイナレもその心をとむるなれ、彼等の思
ひはガブリエルの口が翼を伸べし處なるナツアレツテに到らじ 一

三六—一三八

されどヴァテイカーノ、その他ローマの中の選ばれし地にてピエ
ートロに従へる軍人^{いくさびと}等の墓となりたる所はみな 一三九―一

四一

この姦淫より直ちに釋放たるべし。 一四二―一四四

第十曲

言ひ難き第一の力は、己が子を、彼と此との永遠とこしへの息いきなる愛と
 ともにうちまもりつゝ 一―三

心または處にめぐるすべての物をば、いと妙たへなる次第を立てゝ造
 れるが故に、これを見る者必ずかの力を味ふ 四―六

讀者よされば目を擧げて我とともに天球にむかひ、一の運行の他
 と相觸あひふるゝところを望み 七―九

よろこびて師の技わざを見よ、師はその心の中に深くこれを愛し、目
 をこれより離すことなし 一〇―一二

見よ諸たづさの星を携たづふる一の圈、かれらを呼求むる世を足らはさん
とて、斜ななめにかしこより岐わかれ出づるを 一三一—一五

もしかかれらの道傾斜なぞへならずば、天の力多くは空しく、下界の活はたら
動き殆どみな止まむ 一六一—一八

またもし直線とこれとの距へだ離り今より多きか少きときは、宇宙の
秩序は上にも下にも多く缺くべし 一九—二一

いぎ讀者よ、未だ疲れざるさきに疾く喜ぶをえんと願はゞ、汝の
椅子に残りて、わが少しく味はしめしことを思ひめぐらせ 二二

—二四

我はや汝の前に置きたり、汝今より自ら食はむべし、わが筆の獻さげ
られたる歌題はわが心を悉ことごとくこれに傾けしむればなり 二五—二

七

自然の最大いとなる僕しもべにて、天の力を世界に捺おし、かつ己が光をも
てわれらのために時を量はかるもの 二八—三〇
わがさきにいへる處と合し、かの螺旋らせん即ちそが日毎ひごとに早く己を現
はすその條すぢを傳つたひてめぐれり 三一—三三

我この物とともにありき、されど登れることを覺えず、あたかも
思おもひ始はじむるまでは思おもひの起るを知らざる人の如くなりき 三四—

三六

かく一の善よりこれにまさる善に導き、しかして己が爲す事の、
時を占むるにいたらざるほどいと早きはベアトリーチエなり 三

七—三九

わが入りし日の中にさへ色によらで光によりて現はるゝとは、げにそのものゝ自ら輝くこといかばかりなりけむ 四〇―四二
たとひわれ、才と技巧と練達を呼び求むとも、これを語りて人をして心に描かしむるをえんや、人たゞ信じて自ら視るを願ふべし

四三―四五

またわれらの想像の力低うしてかゝる高さに到らずとも異しむに
足らず、そは未だ日よりも上に目の及べることなければなり 四
六―四八

尊き父の第四の族やかかゝる姿にてかしこにありき、父は氣息いきを嘘ふく
状さまと子を生むさまとを示しつゝ絶えずこれを飽あかしめ給ふ 四九

―五一

ベアトリーチェ曰ふ。感謝せよ、恩惠めぐみによりて汝を擧げつゝこの見ゆべき日にいたらんめし諸の天使の日に感謝せよ。 五二—

五四

人の心いかに畏敬の念に傾き、またいかに喜び進みて己を神に捧げんとすとも 五五—五七

これらの詞ことばを聞ける時のわがさまに及ばじ、わが愛こと／＼く神に注がれ、ベアトリーチェはそがために少時しばし忘られき 五八—

六〇

されど怒らず、いとうつくしく微笑ほゝゑみたれば、そのゑめる目の耀かがやきはわが合ひし心をわかちて多くの物にむかはしむ 六一—六三
われ見しに多くの生くる勝すぐるゝ光、われらを中心となし己を一の

輪となしき、その聲のうるはしきこと姿の輝くにまさりたり 六

四一六六

空氣みごも孕り、帶となるべき糸をたも保つにいたるとき、われらは屢

《しば／＼》ラートナの女むすめの亦かくの如く卷かるゝを見る 六

七一六九

そもく天の王宮（かしこより我は歸りぬ）には、いと貴く美し

くして王土そとの外もたに齎らすをえざる寶多し 七〇—七二

これらの光の歌もその一なりき、かしこに飛登るべき羽を備へざ

る者は、かなたの消おとづれ息おふしを唾つばに求めよ 七三—七五

これらの燃ゆる日輪、かくうたひつゝわれらをみたび三度、動かざる極

に近き星のごとくにめぐれる時 七六—七八

かれらはあたかも踊り終らぬ女等が、新しき節ふしを聞くまで耳傾け

つゝ、黙もだして止まるごとく見えたり 七九—八一

かくてその一の中より聲いでゝ曰ふ。眞まことの愛を燃もやしかつ愛するに

よりに増し加はる恩惠めぐみの光 八二—八四

汝うちの衷うちにつよく輝き、後また昇らざる者の降ることなきかの階きざはしを

傳うへひ汝を上方うへに導くがゆゑに 八五—八七

己とくりが壘子の酒を與へて汝かわきの渴をとゞむることをせざる者は、その

自由ならざること、海そいに注そいがざる水に等し 八八—九〇

汝はこの花園はなわ（汝を強うして天に登らしむる美しき淑女を圍み、

悦びてこれを見る物）がいかなる草木くさきの花に飾らるゝやを知らん

とす 九一—九三

我はドメーニコに導かれ、迷はずばよく肥こゆるところなる道を歩
む聖なる群むれこひつじの羔ひつじの一なりき 九四―九六

右にて我にいと近きはわが兄弟たり師たりし者なり、彼はコロ
ニアのアルベルトといひ、我はアクイーノのトマスといへり 九
七―九九

このほかすべての者の事を汝かく定さだかにせんと思はゞ、わが言葉
に續きつゝこの福なる花はなわ圈わにそひて汝の目めぐをめらすべし 一〇〇
―一〇二

次の焰はグラツイアーンの笑ひより出づ、彼は天堂において嘉よみせ
らるゝほど二の法廷を助けし者なり 一〇三―一〇五

またその傍かたへにてわれらの組を飾る焰はピエートロ即ちかの貧しき

女に倣ならひ己が寶を聖なる寺院に捧げし者なり 一〇六一—一〇八

われらの中の最いとつくしきもの美物なる第五の光は、下界こぞ擧りてその消おとづ

息れうに饑うるほどなる戀より吹出づ 一〇九—一一一

そがなかにはいと深き知慧を受けたる尊き心あり、眞もし眞ならば、智においてこれと並ぶべき者興りしことなし 一一二—一一

四

またその傍かたへなるかの蠟燭の光を見よ、こは肉體の中において、天

使の性さがとその役つとめとをいと深く見し者なりき 一一五—一一七

次の小ちひさき光の中なかには、己が書ふみをアウグスティーンの用もちるに供そなへ

しかの信仰の保護者ほゝゑむ 一一八—一二〇

さてわが讚ほめことば詞ことばを逐おひて汝の心の目を光より光に移さば、汝は

既に第八の光に渴かわきつゝあらむ 一二一—一二三

そがなかには、己ことばが言を善く聽く人に、虚いつはり偽の世を現はす聖な

る魂、一切の善を見るによりて悦ぶ 一二四—一二六

このものゝ追はれて出でし肉體はいまチエルダウロにあり、己は
殉教と流りゆうそ鼠とよりこの平安に來れるなりき 一二七—一二九

その先に、イシドロ、ベーダ及び想ふこと人たる者の上に出でし
リツカルドの息いきの、燃えて焰を放つを見よ 一三〇—一三二

また左さにて我にいと近きは、その深き思ひの中にて、死の來るを
遅しと見し一の靈の光なり 一三三—一三五

これぞ藁わらの街まちにて教へ、嫉ねたまるゝべき眞理あかしを證せしシジエーリの
とこしへの光なる。 一三六—一三八

かくてあたかも神の新婦はなよめが朝の歌をば新郎はなむこの爲にうたひその
 愛を得んとて立つ時われらと呼ぶ時辰儀じしんぎの 一三九―一四一
 一部他の一部を、曳ひきかつ押して音妙おとたへにチンくと鳴り、神に
 心向へる靈を愛にてあふれしむるごとく 一四二―一四四
 我は榮光の輪のめぐりつゝ、喜び限りなき處ならでは知るあは
 ざる和合と美とにその聲々をあはすを見たり。 一四五―一四七

第十一曲

あゝ人間の愚おろかなる心こころづかひ 勞かひよ、汝をして翼うを鼓うちて下らしむるは、

そもくゝいかに誤り多き推理ぞや 一—三

一人ひとりは法ひに一人は醫いに走り、ひとりひとりは僧官そうくわんを追おひ、ひとりひとりは暴力ぼりき

または詭辯ぎべんによりて治めんとし 四—六

一人ひとりは奪うばひ取らんとし、一人は公務こうむに就かんとし、一人は肉にくの快け

樂らくに迷まひてこれに耽たり、ひとりひとりは安佚あんいつを貪むさぼれる 七—九

間まに、我われはすべてこれらの物ものより釋とかれ、ベアトリーチェととも

に、かくはな／＼しく天あまに迎むかへ入いれられき 一〇—一二

さていづれの靈もかの圈の中、さきはそのありし處に歸れるとき、
動かざることあたかも燭臺に立つ蠟燭ろうそくの如くなりき 一三一—

五

しかしてさきに我に物言へる光、いよ／＼あざやかになりてほ／＼
急み、内より聲を出して曰いふ 一六一—一八

われ永遠とこしへの光を視て汝の思ひの出來いできたる本もとを知る、なほかの光

に照らされてわれ自ら輝くごとし 一九—二一

汝はさきにわが「よく肥こゆるところ」といひまた「これと並ぶベ
き者生れしことなし」といへるをあやしみ 二二—

汝の了解さとりに適ふはしきまで明らかなるゆきわたりたる言葉にてその
説示つされんことを願ふ、げにこゝにこそ具つに辨わくべき事はあるな

れ 一—二七

それ つくられしもの 被造物の目の視きはむる能はざるまでいと深き はからひ 思量を

もて宇宙を治むる神の攝理は 二八—三〇

かの新婦 はなよめ ——即ち おほごゑ 大聲によばはりつゝ尊き血をもてこれと縁 えにし

を結べる者の新婦 ——をしてその愛 いづくし む者の許 もと に往くにあたり 三

一—三三

心を安んじかつ彼にいよく まめやか 忠實 まめやか ならしめんとて、これがため

にその左右の導者となるべき二人 ふたり の君を定めたり 三四—三六

その一人 ひとり は熱情全くセラフイーノのごとく、ひとり ひとり は智慧により

てケルビーノの光を地上に放てり 三七—三九

我 ひとり その一人の事をいはむ、かれらの業 わざ の目的 めあて は一なるがゆゑに、

いづれにてもひとりを讚ほむるはふたりをほむることなればなり

四〇—四二

トウピーノと、ウバルド尊者に選ばれし丘よりくだる水との間に、
とある高たか山やまより、肥沃の坂の垂たるゝあり 四三—四五

(この山よりペルージアは、ポルタ・ソレにて暑さ寒さを受く、
また坂の後方うしろにはノチエーラとグアルドと重くきび軛きの爲に泣く)

四六—四八

この坂の中嶮けはしさのいたく破るゝ處より、一の日輪世に出でたり
——あたかもこれがをりふしガンジエより出ることく 四九—五

一

是故にこの處のことをいふ者、もし應ふはさしくいはんと思はゞ、ア

ーシエージといはずして(ことば) (語足らざれば) 東オリエンテ方ほうといふべし

五二―五四

昇りて久しからざるに、彼は早くもその大いなる徳をもて地に若そこぼく

干こぼくの勵みを覚えしむ 五五―五七

そは彼若き時、ひとりだに悦びの戸を開きて迎ふる者なき(死を迎へざるごとく) 女の爲に父と争ひ 五八―六〇

而して己が靈の法廷しらすに、父の前にて、これと縁えにしを結びし後、日毎ひごとに深くこれを愛したればなり 六一―六三

それかの女をんなは、最初はじめの夫を失ひてより、千百年餘の間、蔑視さげすまれ疎うとんぜられて、彼の出るにいたるまで招かるゝことあらざりき

六四―六六

かの女が、アミクラ―テととも俱ともにありて、かの全世界を恐れしめた
る者の聲にも驚かざりきといふ風聞うはきさへこれに益なく 六七―六

九

かの女が、心堅かたく膽きもふと大ければ、マリアを下に残しつゝ、クリス
トとともに十字架のぼに上りし事さへこれが益とならざりき 七〇―

七二

されどわが物語あまりに臆おぼろに進まざるため、汝は今、わがこの長
き言ことばの中なる戀人等の、フランチェスコと貧なるを知れ 七三―

七五

かれらの和合もととそのよろこべる姿とは、愛、驚、及び敬ひを、聖
なる思もひの原因もとたらしめき 七六―七八

かゝれば尊きベルナルドは第一に沓くつをぬぎ、かく大いなる平安を
 逐おひて走り、走れどもなほおそしとおもへり 七九―八一

あゝ未知とみひよくの富肥沃たからの財寶よ、エジデイ才沓ぬを脱ぎ、シルヴェスト
 口沓はなむこをぬぎて共に新はなよめ郎はなよめに従へり、新婦はなよめいたく心に適かなひたるに

よる 八二―八四

かくてかの父たり師たりし者は己が戀人及びはや卑いやしき紐ひもを帶と
 せし家族やからとともに出立いでたてり 八五―八七

またピエートロ・ベルナルドネの子たりし爲にも、奇くすしくさげす
 まるべき姿の爲にも、心の怯額おくれを壓おさず 八八―九〇

王者の如くインノチエンツイオにその嚴いかめしき企くはだてを明あかし、己わかれが分派わかれ
 のために彼より最初の印を受けたり 九一―九三

貧しき民の彼——そのいと妙なる生涯はむしろ天の榮光の中に歌

はるゝかたよかるべし——に従ふ者増しゝ後 九四—九六

永遠とこしへの靈は、オノリオの手を経て、この法ほふしゆ主の聖なる志に第

二の冠を戴かしめき 九七—九九

さて彼殉教に渴き、驕おごるソルダンの目めのまへ前にて、クリストとその

従者等のことを宣べしも 一〇〇—一〇二

民心熟せず、歸依者きえしやなきを見、空しく止まらんよりはイタリアの

草の實をえんとて歸り、その時 一〇三—一〇五

テーヴェロとアルノの間の粗あらき巖の中にて最後の印をクリストよ

り受け、二年ふたとせの間これを己が身に帶おびき 一〇六—一〇八

彼を選びてかゝる幸さいはひに到らしめ給ひし者、彼を召し、身を卑ひくうし

て彼の得たる報むくいをば與ふるをよしとし給へる時 一〇九—一一一

正しき嗣子等よつぎに薦すすむるごとく彼その兄弟達に己が最愛の女を薦め、

まめやかにこれを愛せと命じ 一一二—一一四

かくして尊き魂は、かの女の懷ふところを離れて己が王國に歸るを願へり、

またその肉體の爲に他の柩ひつぎを求めざりき 一一五—一一七

いぎ思へ、大海おほうみに浮ぶピエートロの船の行方ゆくへを誤らしめざるに

あたりて彼の侶りよたるに適ふさはしき人のいかなる者にてありしやを

一一八—一二〇

是ぞわれらの教祖なりける、かゝれば汝は、およそ彼に従ひてそ

の命ずる如く爲す者の者の、良貨よきしろものを積むをさとらむ 一二一

—一二三

されど彼の牧^かふ群^{むれ}は新しき食物^{くひもの}をいたく貪り、そがためかなた
 こなたの山路^{やまち}に分れ散らざるをえざるにいたれり 一二四—一二
 六

しかして彼の羊遠く迷ひていよく彼を離るれば、いよく乳に
 乏しくなりて圈^{をり}に歸る 一二七—一二九

げにその中には害を恐れ牧者に近く身を置くものあり、されど少^す
 許^{こし}の布にてかれらの僧衣^{ころも}を造るに足るほどその數少し 一三〇—
 一三二

さてもしわが言葉^{かすか}微ならずば、またもし汝心をとめて聽きたらん
 には、しかしてわが既にいへることを再び心に想ひ起さば 一三

三—一三五

汝の願ひの一部は満みつべし、そは汝削けづられし木を見、何故に革かはひ

八

紐もを纏まとふ者が「迷はずばよく肥こゆるところ」と 一三六—一三
論あげつらふやを知るべければなり。

第十二曲

かの福なる焰をはり最終の語をいへるとき、聖なる礪ひきうす石たぐちにめぐり
はじめたり 一—三

しかしてその未だひとめぐり 一 周せざるまに、いま一の礪石まろくこれ
を圍かこみつゝ、舞をば舞に歌をば歌にあはせたり 四—六

この歌は、かのうるはしき笛よりいで、さながら元の輝かどが映やれる
光に優まさる如く、われらのムーゼわれらのシレーネにまさる 七—

九

イウノネその侍はしため女に命ずれば、相並び色も等しき二の弓、やは

らかき雲の中に張られ 一〇—一二

(外の弓内の弓より生る、その状かの流離の女、日の爲に消ゆ

る霧かとばかり戀の爲に消たる者の言葉に似たり) 一三—一五

世の人々をして、神がノエと立て給ひし契約にもとづき、世界に

ふたゝび洪水なきをほくトせしむ 一六—一八

かくの如く、これらの不朽の薔薇の二の花はなわ圈はわれらの周圍まはりをめ

ぐり、またかくの如く、その外の圈内の圈と相あひかな適あひかなひたり 一九

—二二

喜びの舞と尊き大いなる祝いはひ——光、光と楽しく快くかつ歌ひかつ

照しあふ——とが 二二—二四

あたかもその好むところに従つて共に閉ぢ共に開かざるをえざる

目の如く、時と意志とを同うしてともに靜になりし後 二五—二七

新しき光の一の中なかよりとある聲出で、我をば星を指す針のごとく

そなたにむかしめき 二八—三〇

いふ。我を美しうする愛我を促して今いまひとり一人の導者の事を語らし

む——彼の爲に、わが師いまかく稱たへられたり 三一—三三

ひとり一のをる處には他もまた請しやうぜられ、さきに二人ふたりが心を合あはせて戦へ

る如く、その榮光をもともに輝かすを宜よろしとす 三四—三六

いと高き價を拂ひて武器を新にしたるクリストの軍隊が、旗うしろの後

より、遅く、怖おぢつゝ、疎まぼらになりて進みゐしころ 三七—三九

永遠とこしへに治め給ふ帝みかどは、かのおぼつかなき軍いくさびと人等の爲に、か

これらの徳によるにあらでたゞ己が恩恵めぐみによりて備そなへをなし 四〇—

四二

さきにいはれしごとく二人の勇士を遣りて己が新婦はなよめを扶たすけ給へ

り、かれらの言ことばと行こなひとにより迷へる人々道に歸りき 四三—四五

若葉をひらきこれをもてエウローパの衣ころもを新ならしめんため爽さわやか

なる西風ゼツヒロの起るところ 四六—四八

浪打際なみうちぎは——日は時として長く疾はやく進みて後、かの浪のかなたに

て萬よろづのひとの目にかくる——よりいと遠くはあらぬあたりに 四

九—五一

幸多さちきカラロガあり、従したがひ従したがふる獅子を表あらはすかの大きいなる楯たてに

まもらる 五二—五四

かしこに、クリストの信仰を慕ふ戀人、味方にやさしく敵につれ
なき聖なる剛つはもの者生れたり 五五―五七

かれの心はその造られし時、生いくる力をもてたゞちに満たされたり

しかば、母に宿やどりゐてこれを豫言者たらしめき 五八―六〇

彼と信仰の間の縁えにし、聖盤サクロフオンテのほとりに結ばれ、かれらかしこ

にて相互かたみの救すくひをその聘おくりもの物となし、後 六一―六三

かれに代りて肯うけがへる女は、かれとその嗣子等よつぎとより出づるにいた

る奇くしき果みを己が眠れる間に見たり 六四―六六

しかして彼の爲人ひとくなりことばを語の形あらに顯はさんため、靈この處よりくだり、

彼は全く主のものなればその意をとりて名となせり 六七―六九

彼即ちドメーニコと呼ばれき、我は彼をば、クリストにえらばれ

その園にてこれをたすけし農夫にたとへむ 七〇―七二

げに彼はクリストの使つかひまたその弟子なることを示せり、かれに現はれし最初の愛はクリストの與へ給ひし第一の訓さとしに向ひたればなり 七三―七五

かれの乳母めのとは、かれが屢 目を醒しつゝ黙して地に伏し、その状我このために生るといふが如きを見たり 七六―七八

あゝ彼の父こそ眞まことにフェリーチエ、かれの母こそ眞にジョヴァンナ（若しこれに世の釋とく如き意義あらば）といふべけれ 七九―八一

人々が今、かのオステイア人びとまたはタツデオの後あとを逐おひつゝ勞して求むる世の爲ならで、まことのマンナの愛の爲に 八二―八四

彼は程なく大いなる師となり、葡萄の園——園にはつくり 丁 あしくばたゞ

ちに白まむ——をめぐりはじめき 八五—八七

彼が法座（正しき貧者ひんじやを今は普の如くいたはらず、されどこは

これに坐する劣れる者おとの罪にして法座その物の罪ならじ）に求め

しは 八八—九〇

六をえて二三を頒つわかことにあらず、最初に空きたる官をうるの幸さち

にもあらず、また神の貧者くさきに屬する什一にもあらず 九一—九三

汝をかこむ二十四本の草木もとの元なる種のために、かの迷へる世と

戦ふの許もとなりしぞかし 九四—九六

かくてかれは教理、意志、及び使徒の任務つとめをもてあたかも激流の、

高き脈より押出さるゝごとくに進み 九七—九九

勢猛く異端邪説の雜木を打ち、さからふ力のいと大いなる處に

ては打つことまたいと強かりき 一〇〇—一〇二

この後さま／＼の流れ彼より出でたり、カトリックの園これに
よりて潤ひ、その叢樹いよく榮ゆ 一〇三—一〇五

聖なる寺院が自ら衛りかつ戰場にその内亂を鎮めしとき乗りし車
の一の輪げにかくの如くならば 一〇六—一〇八

殘の輪——わが來らざるさきにトムマのいたく稱へたる——の秀
づること必ずや汝にあきらかならむ 一〇九—一一一

されどこの輪の周圍のいと高きところの殘し、轍を人かへりみず、
良酒のありしところに黴生ず 一一二—一一四

彼の足跡を踏み傳ひて直く進みしかれの家族は全くその方向を

變へ、指を踵かかとの方に投ぐ 一一五—一一七

しかしてかくあしく耕すことのいかなる收穫かりいれに終るやは、程なく知られむ、その時至らば莠はぐさは穀倉くらを奪はるゝをかこつべければなり 一一八—一二〇

しかはあれ、人もしわれらの書ふみを一枚ひとひらまた一枚としらべなば、

我はありし昔のまゝなりと録しるさるゝ紙しるの今猶なほあるを見む 一二一

—一二三

されどこはカザールまたはアクアスパルタよりならじ、かしこよりに來りてかの文書かきものに係たづさはる者或ひはこれを避け或ひはこれを縮ちぢ

む 一二四—一二六

さて我はボナヴェントウラ・ダ・バーニオレジオの生命いのちなり、大

いなる職務つとめを果さんためわれ常に世の心こころづかひ 勞あとを後にせり 一二

七―一二九

イルルミナートとアウグステインこゝにあり、彼等は紐によりて
神の友となりたる最初の素足すあしの貧者の中にありき 一三〇―一三

二

ウーゴ・ダ・サン・ヴィツトレ彼等ともと俱こゝに茲こゝにあり、またピエー

トロ・マンジアドレ及び世にて十二の卷まきに輝くピエートロ・イス

パーノあり 一三三―一三五

豫言者ナタン、京きやうの僧正きやうクリソストモ、アンセルモ、及び第一の

學術に手を下すをいとはざりしドナートあり 一三六―一三八

ラバーノこゝにあり、また豫言の靈を授けられたるカーラブリア

の僧都ジヨヴァツキーノわが傍かたへにかゞやく 一三九―一四一
 フラア・トムマーズの燃ゆる誠まこととそのふさはしき言ことばとは我を動か
 してかく大いなる武ものゝふ士きそを競きそひ讚ほめしめ 一四二―一四四
 かつ我とともにこれらの侶を動かしたりき。 一四五―一四七

第十三曲

わが今視し物をよくさとらむとねがふ人は、心の中に描きみよ

(しかしてわが語る間、その描ける物を堅き巖かたいはほの如くに保たもて)

一—三

空氣いかに密なりともなほこれに勝つばかりいと燦あざやかなる光にて

こゝかしこに天を活いかす十五の星を 四—六

われらの天の懷ふところをもて夜も晝も足れりとし、轆ながえをめぐらしつゝか

くれぬ北斗を描きみよ 七—九

またかの車軸——第一の輪これがまはりをめぐる——の端はしより起

る角^{つのぶえ}笛の口をゑがきみよ 一〇—一二

即ちこれらのもの己をもてあたかもミノスの女^{むすめ}が死^{つめた}の冷さを覺え
し時に造れるごとき^{しるし}徵號を二つ天につくり 一三—一五

一はその光を他の一の内に保ち、かつ相共にめぐりつゝ一は先^{さき}に

一は後^{あと}より行く状^{さま}を 一六—一八

さらば眞^{まこと}の星^{ほしのやどり}宿と、わが立處^{たちど}をかこみめぐる二重^{ふたへ}の舞とをお

ぼろに認めむ 一九—二一

そはこれがわが世^{ならひ}の習^こを超ゆること、さながら諸天の中の最疾^{いとと}き

ものゝ^{めぐ}る早さがキアーナの水の流^{まさ}れに優^{まさ}る如くなればなり 二

二—二四

かしこにかれらの歌へるはバツコに非^あらずペアーナにあらず、^{みつひ} 三二

とつ
 一 言る神の性、及び一となれる神、人二の性なりき 二五―二七

歌も舞も終りにいたれば、これらの聖なる光は、その心をわれらにとめつゝ、彼より此と思ひを移すを悦べり 二八―三〇

かの神の貧しき人の奇しき一生を我に語れる光、相和する聖徒のなか中にて、このときしづかさ静寂を破りて 三一―三三

曰ふ。一の穂碎かれ、その實すでに蓄へらるゝがゆゑに、うるはしき愛我を招きてさらに残の穂を打たしむ 三四―三六

汝思へらく、己が味のため全世界をして價を拂はしめし女の美しき頬を造らんとて 肋骨を抜きし胸にも 三七―三九

槍に刺され、一切の罪の重さにまさる贖をそのあとさきになしゝ

胸にも 四〇—四二

この二を造れる威能ちからは、凡そ人たる者の受くるをうるかぎりの光
 を悉ことごとくく注つぎ入いれたるなりと 四三—四五

是故に汝は、さきに我汝に告げて、かの第五の光につゝまるさいはひゝ福
 には並ぶ者なしといへるを異あやしむ 四六—四八

いざ目を開きてわが答ふるところを望め、さらば汝は汝の思ひと
 わが言ことばとが眞理において一となること圓の中心の如きを見む 四

九—五一

それ滅びざるものも滅びうるものも、みな愛によりてわれらの主
 の生みたまふ觀念かぎやきの耀かぎやきにほかならず 五二—五四

そはかの活いくるひかり光、即ち己が源の光よりいでゝこれを離れずまた

これらと三一に結ばる愛を離れざるもの 五五—五七

自ら永遠とこしへに一となりて残りつゝ、その恩恵めぐみによりて己が光線を、

あたかも鏡に映す如く、九の物に集むればなり 五八—六〇

さてこの光線こゝより降りて最も劣れる物に及ぶ、而してかく業わざ

より業に移るに従ひ力愈 弱く遂には只はかなき苟かりそめ 且の物をの

み造るにいたる 六一—六三

苟かりそめ 且の物とは 諸天が種によりまたは種によらずして生ずる

所の産物をいふ 六四—六六

またかゝる物の蠟とこの蠟を整ふるものとは一様にあらず、され

ば觀念に印せられてその中に輝く光或ひは多く或ひは少し 六七

—六九

是においてか類において同じ木も善果よきみ惡果あしきみを結び、汝等もまた

才を異にして生るゝにいたる 七〇—七二

蠟もし全く備はり、天の及ぼす力いとつよくば、印の光みなあらはれむ 七三—七五

されど自然は常に乏しき光を與ふ、即ちそのはたらくさまあたかも技わざに精くはしけれど手の震ふ技術家の如し 七六—七八

もしそれ熱愛材をとゝのへ、第一の力の燦あざやかなる視力を印せば、物みな極めて完全ならむ 七九—八一

さればこそ土は往そのかみ昔生物の極めて完全なるに適ふさはしく造られ、また處女をとめは孕みごりしなれ 八二—八四

是故に人たるものゝ性さががこの二者の性の如くになれること先にも

あらず後にもあらずと汝の思ふを我は好とす 八五―八七

さて我もしさらに説進まずば、汝はまづ、さらばかの者いかでその此類たくひを見ずやといはむ 八八―九〇

されど顯あらはれざる事の明らかに顯はれん爲、彼の何人なりしやを思へ、またその求めよといはれし時彼を動かして請こはしめし原因もとを思へ 九一―九三

わがいへるところ臆おぼろなりとも汝なほ定さだかに知らむ、彼の王者なりし事を、またその智慧を求めしは即ち良王よきわうとならん爲にて

天上の動うごかすもの者の數を知らん爲にも、必然と偶然とが必然を造ることありや否いなやを知らん爲にも 九七―九九

第一の動うごきの有無うむを知らん爲にも、はたまた一の直角なき三角形が

半圓の内に造らるゝをうるや否やを知らん爲にもあらざりしを

一〇〇—一〇二

是故に汝もしさきにわがいへることゝ此事とを思ひみなば、わが
謂ふところの比類たぐひなき智とは王者の深慮ふかきおもんばかりを指すをみむ

一〇三—一〇五

またもし明らかなる目を興りしといふ語ことばにむけなば、こは數多く
して良者よきものまれ稀なる王達かにのみ關はるをみむ 一〇六—一〇八

かく別ちてわが言ことばを受けよ、さらばそは第一の父及びわれらの愛
する者についての汝の信仰と並び立つべし 一〇九—一一一

汝この事をもて常に足の鉛とし、汝の見ざる然しかと否いなとにむかひて
は疲れし人の如く徐しづかに進め 一一二—一一四

うべな

肯ふべき時にてもまたいなむべき時にても、彼と此とを別たずしてしかする者はいみじき愚者にほかならず 一一五——一一七
 そは軽々しく事を斷ずれば誤り易く、情また尋いで智を絆すにいたればなり 一一八——一二〇

眞理を漁りて、技を有せざる者は、その歸るや出立つ時と状を異にす、豈空しく岸を離れ去るのみならんや 一二一——一二三
 パルメニーデ、メリツソ、ブリツソ、そのほか行きつゝ、行方を知らざりし多くの人々みな世にむかひて明かにこれが證をなす 一二四——一二六

サベルリオ、アルリオ及びあたかも劔の如く聖書を映してその直き顔を歪めし愚者また然り 一二七——一二九

されば人々餘りに安んじて事を判じ、さながら畑はたにある穂をばそ

の熟せざるさきに評價ねふみする人の如くなるなかれ 一三〇—一三二

そはわれ茨いばらが、冬の間は堅かたく恐ろしく見ゆれども、後その梢こずゑに薔し

やうび

薇の花をいたゞくを見 一三三—一三五

また船が直なほく疾とく海を渡りて航路ふなぢを終へつゝ、遂に港の入口に沈

むを見しことあればなり 一三六—一三八

ドンナ・ベルタもセル・マルティーノも、一人盗ひとりみ一人物を獻さぐ

るを見て、神の審判さばきかれらにあらはると思なふ勿なれ 一三九—一四

一

恐らくは彼起き此倒るゝことあらむ。 一四二—一四四

第十四曲

まるうつは
圓き器の中なる水、外そとまたは内うちより打たるれば、その波動中心より縁ふちにまたは縁より中心に及ぶ 一—三

トムマーズのたふとき生命いのちもた黙しゝとき、この事たちまちわが心に浮べり 四—六

こは彼の言ことばと彼に續いて物言へるベアトリーチエの言とよりこれに似たる事生じゝによる、淑女曰ふ 七—九

いまひとつの眞理をばこの者求めて根に到らざるをえず、されど聲はもとより未だ思ひによりてさへこれを汝等にいはざるなり

一〇—一二

請こふ彼に告げよ、汝等靈體を飾る光は、今のごとくとこしへに汝等とともに残るや否いなやを 一三—一五

またもし残らば、請ふ告げよ、汝等が再び見ゆるにいたる時、その光いかにして汝等の目を害そこなはざるをうべきやを。 一六—一八

たとへば輪に舞ふ人々が、悦び増せば、これに促うながされ引かれつゝ、相共に聲を高うし、姿に樂しみを現はすごとく 一九—二一

かの二の聖なる圓は、急なるうやくしき願ねがひをきゝて、そのるさまと妙たへなる節ふしとに新なる悦びを現はせり 二二—二四

およそ人の天に生きんとて地に死ぬるを悲しむ者は、永劫の雨の爽さわやかなるを未だかしこに見ざる者なり 二五—二七

さてかの一と二と三、即ち永遠とこしへに生き、かつとこしへに三と二と一にて治め、限られずして萬物を限り給ふものをば 二八―三〇

かの諸の靈いづれも三度たびうたひたり、その妙たへなる調しらべはげにいかなる功德むくいの報むくいとなすにも適ふきはしかるべし 三一―三三

我また小かたき方の圓の中なる最いと神々しき光の中に一の柔いかき聲を聞たり、マリアに語れる天使の聲もかくやありけむ 三四―三六

その答ふる所にいふ。天堂の樂しみ續くかぎり、我等の愛光を放ちてかゝる衣をわれらのまはりに現はさむ 三七―三九

その燦あざやかさは愛の強さに伴ひ、愛の強さは視みるちから力ちからに伴ひ、しかして是またその功德を超えて受くるところの恩惠めぐみに準ず 四〇―

四二

尊くせられ聖きよめられし肉再びわれらに着せらるゝ時、われらの身はその悉く備はるによりて、いよくめづべき物となるべし 四

三—四五

是故に至上の善が我等にめぐむすべての光、われらに神を視るをえしむる光は増さむ 四六—四八

是においてか視みる力増し、これに燃もさるゝ愛も増し、愛よりいづる光も増さむ 四九—五一

されど炭が焰を出し、しかして白熱をもてこれに勝ちつゝ己が姿をまもるごとく 五二—五四

この耀——今われらを包む——は、たえず地に被おほはるゝ肉よりも、

そのあらはるゝさま劣るべし 五五―五七

またかく大いなる光と雖、われらを疲れしむる能はじ、そは肉體の諸の機關強くして、我等を悦ばす力あるすべての物に堪たふればなり。 五八―六〇

いと疾とくいちはやくかの歌の組二ながらアーメンといひ、死にたる體からだをうるの願ひをあきらかに示すごとくなりき 六一―六三

またこの願ひは恐らくは彼等自らの爲のみならず、父ち、は、母その他彼等が未だ不朽の焰とならざる先に愛しゝ者の爲なりしならむ

六四―六六

時に見よ、一樣あざやに燦かななる一の光あたりに現はれ、かしこにあり

し光のかなたにてさながら輝く天涯に似たりき 六七―六九

また日の暮初くれそむる頃、新に天に現はれ出づるものありて、その見

ゆるは眞まことか否かわきがたきごとく 七〇―七二

我はかしこに多くの新しき靈ありて、かの二の輪の外そとに一の圓を

造りゐたるを見きとおぼえぬ 七三―七五

あゝ聖靈の眞まことの閃きらめきよ、その不意にしてかつ輝くこといかばかりな

りけむ、わが目くらみて堪ふるをえざりき 七六―七八

されどベアトリーチエは、記憶の及ぶあたはざるまでいと美しく

かつ微笑ほゝゑみて見えしかば 七九―八一

わが目これより力を受けて再び自ら擧ぐるをえ、我はたゞわが淑

女とともにいよいよ尊き救ひに移りゐたるを見たり 八二―八四

わがさらに高く昇れることを定かに知りしは、常よりも紅あかくみえ

し星の、燃ゆる笑ひによりてなりき 八五―八七

我わが心を盡し、よろづのひと萬人のひとしく用ゐる言葉にて、この新な

恩恵めぐみに適ふさはしき燔祭はんさいを神に獻さげ 八八―九〇

しかして供物くもつの火未だわが胸の中に盡きざるさきに、我はこの獻さ

物げものの嘉納かなふせられしことを知りたり 九一―九三

そは多くの輝二の光線の中にて我に現はれ、あゝかくかれらを飾

るエリオスよとわがいへるほど燦あざやかにかつ赤かりければなり 九

四―九六

たとへば銀河が、大小さま／＼の光を列つらねて宇宙の兩極の間に

白み、いと賢き者にさへ疑ひをいだかしむるごとく 九七―九九

かの光線は、星座となりつゝ、火星の深處ふかみに、象しやうげん限相結びて

圓の中に造るその貴き標識しるしをつくれり 一〇〇—一〇二

さて茲こゝに到りてわが記憶才に勝つ、そはかの十字架の上にクリス
トかッヤ煌き給ひしかど我は適ふさわはしき譬たとへを得るをえざればなり 一〇

三—一〇五

されど己が十字架をとりてクリストに従ふ者は、いつかかの光明
の中に閃ひらめくクリストを見てわがかく省はぶくを責めざるならむ 一

〇六一—一〇八

桁けたより桁にまた頂いたゞきあしと脚との間に諸の光動き、相會ふ時にも過ぐ
るときにもかれらは強くきらめけり 一〇九—一一一

己まもを護らんとため智さとと技とりわざとをもて人々の作る陰を分けつゝをりふし
條すぢを引く光の中に、長き短き極微の物體 一一二—

或ひは直くなほ或ひは曲みゆが、或ひは疾く或ひは遅く、たえずその容かたちを

變へて動くさままたかくの如し 一一一七

また譬たとへば多くの絃いとにて調子しらべを合せし琵琶びわや琴が、節ふしを知らざる者ひとにさへ、鼓音妙ひくねたへにきこゆるごとく 一一八—一二〇

かしこあらはに顯れし諸の光より一のうるはしき音おと十字架の上にあつまり、歌を解げしえざりし我もこれに心を奪はれき 一二一—一二

三

されど我よくそが尊き讚美なるを知りたり、そは起たちて勝てといふ詞、解せざれどなは聞く人に聞ゆる如く、我に聞えたればなり

一二四—一二六

わが愛これに燃やされしこといかばかりぞや、げに是時にいたる

まで、かくうるはしき絆きづなをもて我を繋つなげるもの一だになし 一二

七——二九

恐らくはわがこの言ことば、かの美しき目（これを視ればわが願ひ安ん

ず）の與ふる樂をかるんじ、餘りに輕かるはずみ率なりと見えむ 一三

〇——一三二

されど人もし一切の美を捺おす諸の生くる印がその高きに從つて

愈強く働く事と、わが未だ彼處かしこにてかの目に向はざりし事とを

思はゞ 一三三——一三五

わが辯解いひひらかんため自ら責むるその事をもて我を責めず、かつわ

が眞まことを告ぐるを見む、そはかの聖なる樂しみをわれ今除きていへ

るに非ず 一三六——一三八

これまたその登るに従つていよく清くなればなり 一三九―

四一

第十五曲

慾を惡意のあらはずごとくまつたき愛をつねにあらはず善意によ
りて 一—三

かのうるはしき琴は黙し、天の右手の弛べて締むる聖なる絃はし
づまりき 四—六

そもくこれらの靈體は、我をして彼等に請ふの願ひを起さしめ
んとて皆齊しく黙しゝなれば、いかで正しき請に耳を傾けざらん
や 七—九

苟且の物を愛するため自ら永遠にこの愛を失ふ人のはてしな
かりそめ

く歎くにいたるも宜むべなる哉かな 一〇—一二

静なる、清き、晴のどけ和そらき空に、ゆくりなき火しばく流れて、やす

らかなりし目を動かし 一三—一五

位置を變ふる星と見ゆれど、たゞその燃え立ちし處にては失せし
星なくかつその永く保たぬごとくに 一六—一八

かの十字架の右の桁けたより、かしこに輝く星座の中の星一つ馳せ下
りて脚あしにいたれり 一九—二一

またこの珠たまは下るにあたりてその紐を離れず、光の線すぢを傳ひて走
り、さながら雪花アラバストロ石うしろの後の火の如く見えき 二二—二四

アンキーゼの魂エリジオが淨エリジオ土にてわが子を見いとやさしく迎へしさま
も（われらの最大いとなるムーザに信をおくべくば）かくやありけ

む 二五—二七

あゝわが血族うからよ、あゝ上より注がれし神の恩惠めぐみよ、汝の外誰の爲
にか天あめの戸の二度開たびかれしことやある。 二八—三〇

かの光かく、是に於てか我これに心をとめ、後目のちをめぐらしてわ
が淑女を見れば、わが驚きは二重ふたへとなりぬ 三一—三三

そは我をしてわが目にてわが恩惠めぐみわが天堂の底を認むと思はしむ
るほどの微笑ほゝゑみその目のうちに燃えゐたればなり 三四—三六

かくてかの靈、聲姿ともにゆかしく、その初の音ことばに添へて物言へ
り、されど奥深くしてさとるをえざりき 三七—三九

但しこは彼が、好みて我より隠れしにあらざ、已やむをえざるにい
づ、人間の的まとのよりもその思ふところ高ければなり 四〇—四二

しかしてその熱愛の弓冷えゆき、そがためその言人智的ことば的かたの方かたに
 下るにおよび 四三―四五

わがさとれる第一の事にいふ。讚ほむべき哉 二二―一 につひとつ
 汝わが子孫をかくねんごろに眷顧かへりみたまふ。 四六―四八

また續いて曰ふ。白きも黒きも變ることなき大いなる書ふみを讀みて
 より、楽しくも久しく饑うゑを覺えしに 四九―五一

子よ汝はこれをこの光（我この中うちにて汝に物言ふ）のなかにて鎮しづ
 めぬ、こはかく高く飛ばしめんため羽を汝に着せし淑女の恩恵めぐみに
 よれり 五二―五四

汝信いずらく、汝の思ひは第一の思ひより我に移り、その状さまあたか
 も一いちなる數の知らるゝ時五と六とこれより分れ出るに似たりと

五五—五七

さればこそわが誰なるやまた何故にこの樂しき群むれの中にて特ことによ
ろこばしく見ゆるやを汝は我に問はざるなれ 五八—六〇

汝の信ずる所正し、そは大いなるも小ちひさきもすべてこの生を享うくる
者は汝の思ひが未だ成らざるさきに現はるゝかの鏡を見ればなり

六一—六三

されど我をして目を醒さましめて永とこしへ遠に見しめまたうるはしき願ひ
に渴かはかしむる聖なる愛のいよく遂とげられんため 六四—六六

恐れず憚はづからずかつ悦ばしき聲をもて思ひを響かし願ひをひゞかせ
よ、わが答ははや定まりぬ。 六七—六九

我はベアトリーチエにむかへり、この時淑女わが語らざるにはや

くも聞きて、我に一の微しるしを與へ、わが願ひの翼を伸ばしき 七〇

—七二—

我即ち曰ふ。第一の平等びやうとうじや者汝等に現はるゝや、汝等各自の
愛と智とはその重おもき等しくなりき 七三—七五

これ熱と光とをもて汝等を照らしかつ暖めし日輪が、これに比たぐふ
に足る物なきまでその平等を保つによる 七六—七八

されど人間にありては、汝等のよく知る理ことわり由にもとづき、意おもふ
ことと表あらはす力とその翼同じからず 七九—八一

是故に人間の我、自らこの不同を感ずるにより、父の如く汝の歡よろこ
び迎ふるをたゞ心にて謝するのみ 八二—八四

我誠に汝に請こふ、この貴き寶を飾る生くる 黄わうぎ玉よ、汝の名を

告げてわが願ひを満みたせ。 八五—八七

あゝわが葉よ。汝を待つさへわが喜びなりき、我こそ汝の根なり
 けれ。彼まづかく我に答へ 八八—九〇

後また曰いひけるは。汝の家族やからの名の本もとにて、第一うてなの臺たいに山めぐを
 ことはや百年もくとせあまり餘あまりに及べる者は 九一—九三

我には子汝こにには曾祖父そうそふなりき、汝須すべからく彼の爲ためにその長き勞苦らうくを
 ば汝わがの業わざによりて短みうすべし 九四—九六

それフィオレンツアはその昔の城壁——今もかしこより第三時と
 第九時との鐘聞ゆ——の内にて平和を保ち、かつ節ひかへかつ慎つつしめり

九七—九九

かしこに索くさりも冠かんむりもなく、飾くれる沓くつを穿はく女も、締ひむる人よりなほ

目立つべき帶もなかりき 一〇〇—一〇二

まだその頃は女子によし生るとも父の恐れとならざりき、その婚期ときその

聘おくりもの禮のりいづれも度を超こえざりければなり 一〇三—一〇五

かしこに人の住まざる家なく、室しつの内にて爲せらるゝことを教へんとてサルダナパロの來れることもあらざりき 一〇六—一〇八

まだその頃は汝等のウツチエルラトイオもモンテマールにまさらざりき——今その榮さかえのまさるごとく、この後衰おとろへもまたまさらむ

一〇九—一一一

我はベルリンチオーン・ベルテイが革紐かわひもと骨との帶を巻きて出で、またその妻が假粧けさうせずして鏡を離れ來るを見たり 一一二—一一

四

またネルリの家長いへをさとヴェツキオの家長いへをさとが皮のみの衣をもて、
 その妻等が紡錘つむと麻をもて、心に足たれりとするを見たり 一一
 五——一七

あゝ幸さち多き女等よ、彼等は一人だにその墓につきて恐れず、また
 未だフランスの故によりて獨ひとり臥床ふしどに残されず 一一八——一二〇
 ひとり目は醒さめしめて揺籃ゆりかごを守り、またあやしつゝ、父ち母ははの
 心をばまづ樂たのします言ことばを用ゐ 一二一——一二三
 ひとりは絲つむを紡ぎつゝ、わが家やの人々と、トロイア人びと、フイエソ
 レ、ローマの物語などなしき、チアンゲルラや 一二四——
 ラーポ・サルテレル口の如き者その頃ありしならんには、チンチ
 ンナートやコルニリアの今における如く、いと異あやしとせられし

なるべし — 一二九

かく平穩やすらかにかく美しく邑まちの人々の住みゐたる中なかに、かく頼もし

かりし民、かくうるはしかりし客舎に — 一三〇 — 一三二

マリア——唱名の聲高きを開きて——我を加へ給へり、汝等の昔

の授洗所にて我は基督クリステイアーノ教徒となり、カッチアグイーダとなりたり

き — 一三三 — 一三五

わが兄弟なりし者にモロントとエリゼオとあり、わが妻はポーの

溪たによりわが許もとに來れり、汝の姓うぢかの女より出づ — 一三六 — 一三八

後われ皇帝クルラードに事つかへ、その騎士の帶をさづけられしほど

功いさをによりていと大いなる恩寵めぐみをえたり — 一三九 — 一四一

我彼に従ひて出で、牧者達の過のため汝等の領地おかを侵す人々の不

義の律法おきてと戦ひ 一四二—一四四

かしこにてかの穢けがれし民の手に罹かりて虚偽いつはりの世——多くの魂こ

れを愛するがゆゑに穢けがる——より解かれ 一四五—一四七

殉教よりこの平安に移りにき。 一四八—一五〇

第十六曲

あゝ人の血統ちすぢのたゞ小かなる尊貴たふとぎよ、情の衰ふるところなる世に、汝人々をして汝に誇るにいたらしむとも 一—三

我重ねてこれを異あやしとすることあらしむと、そは愛欲の逸それざるところ即ち天にて我自ら汝に誇りたればなり 四—六

げに汝は短くなり易やすき衣のごとし、日に日に補ひ足されずば、時は鋏はさみをもて周圍まはりをめぐるむ 七—九

ローマの第一に許し、語ことばしかしてその族やからの中にて最も廢すたれし語なるヴォイを始めに、我再び語りいづれば 一〇—一二

少しく離れるたりしベアトリーチエは、笑を含み、さながら書に
 残るかのジネーヴラの最初の咎を見て咳きし女の如く見えき 一

三—一五

我曰ひけらく。汝はわが父なり、汝いたく我をはげまして物言は
 しめ、また我を高うして我にまさる者とならしむ 一六—一八

いと多くの流れにより嬉しさわが心に満つれば、心は自らその壊
 れずしてこれに堪ふるをうるを悦ぶ 一九—二一

さればわが愛する遠祖よ、請ふ我に告げよ、汝の先祖達は誰
 なりしや、汝童なりし時、年は幾何の數をか示せる 二二—二

四

請ふ告げよ、聖ジヨヴァンニの羊の圈はその頃いかばかり大いな

りしや、またその内にて高座かみざに就つくに適ふさはしき民は誰なりしや。

二五—二七

たとへば炭風に吹かれ、燃えて焰を放つごとく、我はかの光のわが媚こまぶる言ことばをきゝて輝くを見たり 二八—三〇

しかしてこの物いよく美しくわが目に見ゆるに従ひ、いよく麗うるはしき柔やはらかき聲こゑにて（但し近代ちかきよの言葉を用ゐで） 三一—三三

我に日ひけるは。アーヴェのいはれし日より、今は聖徒なるわが母、子を生み、宿やどしゝ我を世にいだせる時まで 三四—三六

この火は五百八十回己が獅子の處にゆき、その足の下にてあらたに燃えたり 三七—三九

またわが先祖達と我とは、汝等の年毎の競技あづかに與りて走る者がか

の邑まちの最後の區劃わかちを最初に見る處にて生れき 四〇—四二

わが列祖の事につきては汝これを聞きて足れりとすべし、彼等の誰なりしやまた何處いづこよりこゝに來りしやは寧ろ言はざるを宜むべとす

四三—四五

その頃マルテと洗禮者バツテイスタとの間にありて武器を執とるをえし者は、

すべて合せて、今住む者の五分ぶ一なりき 四六—四八

されど今カムピ、チエルタルド、及びフェギーネと混まじれる斯民このたみ、

その頃はいと賤しき工匠たくみにいたるまで純なりき 四九—五一

あゝこれらの人々皆隣となりびと人にして、ガルルツツオとトレスピア

ーノとに汝等の境あらん方かた、かれらを容いれてかのアグリオンの賤し

づのを

男 五二—

またはシーニアの賤男（おおやけのつとめ）公職を賣らんとはや目を鋭うす

る）の惡臭を忍ぶにまさることいかばかりぞや — 五七

もし世の最も劣れる人々、チエーザレと繼しからず、あたかも母
のわが兒におけるごとくこまやかなりせば 五八一—六〇

かの今フイレンツエ人となりて兩替しかつ商賣するひとりの人
は、その祖父が物乞へる處なるシミフォンテに歸りしなるべく

六一—六三

モンテムルロは今も昔の伯等きみたちに屬し、チエルキはアーコネの寺
領に残り、ボンデルモンテイは恐らくはヴァルデイグレーヴェに
残れるなるべし 六四—六六

人々の入亂るゝことは、食に食を重ねることの肉體における如く

にて、常にこの邑まちの禍わざはひの始めなりき 六七―六九

盲めしひの牡牛は盲こひつじの羔とよりも疾とく倒る、一ひとつの劔つるぎ五ごにまさりて切味きれあぢよ

きことしばく是あり 七〇―七二

汝もしルーニとウルビサーリアとがはや滅び、キウーシとシニガ
ーリアとがまたその後あとを追ふを見ば 七三―七五

家族やからの消失するを聞くとあやも異いしみ訝ふかることなからむ、邑まちさへ絶ゆるにいたるをおもひて 七六―七八

そもく汝等に屬する物はみな汝等の如く朽くつ、たゞ永く續く物
にありては、汝等の生命いのちの短きによりて、この事隠るゝのみ 七

九―八一

しかして月天の運行が、たえず渚なぎさをば、蔽おほふてはまた露あらはす如く、

命運ファイオレンツアをあしらふがゆゑに 八二—八四

美名よきなを時の中に失ふ貴きファイレンツエ人びとについてわが語るところ

のことも異あやしと思はれざるならむ 八五—八七

我はウーギ、カテルリニ、フィリツピ、グレーチ、オルマンニ、

及びアルベリキ等なだゝる市民のはや倒れかゝるを見 八八—九

○

またラ・サンネルラ及びラルカの家いへをさ長、ソルダニエーリ、アル

ディング、及びボステイーキ等のその舊ふるきがごとく大いなるを見

たり 九一—九三

今新なるいと重き罪を積み置く——その重さにてたゞちに船を損

ふならむ——かの門ほとりの邊には 九四—九六

ラヴィニアアーニ住み居たり、伯爵コンテグイード、及びその後貴きベル

リンチオーネの名を襲つげる者皆これより出づ 九七—九九

ラ・プレツサの家いへをさ長は既に治むる道を知り、ガリガリーオは黄こ

がねつくりの柄つかと鏢つばとを既にその家にて持てり 一〇〇—一〇二

金装の柄つかと鏢つばとを既にその家にて持てり 一〇〇—一〇二

「ヴァイオ」の柱、サツケツテイ、ジユオキ、ファイファンテイ、

バルツチ、ガルリ、及びかの榭目の爲に赤らむ家族やからいづれも既に

大なりき 一〇三—一〇五

カルフツチの出でし木の根もまた既に大なりき、シツイイとアル

リグツチとは既にたか貴き座に押されたり 一〇六—一〇八

かの己が傲たかぶり慢の爲遂に滅ぶにいたれる家族やからもわが見し頃はいか

なりしぞや、黄金こがねの丸たまはそのすべての偉業をもてフィオレンツア

を飾り 一〇九—一一一

汝等の寺院の空あくごとに相あひつど集ひて身を肥こやす人々の父もまたか

くなしき 一一二—一一四

逃ぐる者をば龍となりて追ひ、齒や財布を見する者には羔こひつじのごと

く柔和おとなしきかの僭越うからの族 一一五—一一七

既に興れり、されど素姓うぢ賤しかりしかば、ウベルティーン・ドナ

ートはその後舅が彼をばかれらの縁者となし、を喜ばざりき 一

一八一—一二〇

カーボンサツコは既にフイエソレを出で、市場いちばにくんだり、ジウダ

とインファンガートとは既に良市民よきとなりゐたり 一二一—一二

三

今我信じ難くして而して眞まことなる事を告げむ、ラ・ペーラの家族やからに
 因ちなみて名づけし門より人かの小さき城壁の内に入りし事即ち是な
 り 一二四—一二六

トムマーズの祭によりて名と徳とをたえず顯あらはすかの大いなる領バ
 主ーロネの美しき紋所を分け用ゐる者は、いづれも 一二七—一二九
 騎士の位と殊遇とを彼より受けき、たゞ縁へりにてこれを卷くもの今
 日庶民と相結ぶのみ 一三〇—一三二

グアルテロツテイもイムポルトウーニも既に榮えき、もし彼等に
 新なる隣となりびと人等なか微りせば、ボルゴは今愈よ靜なりしならむ

一三三—一三五

義ただしいかり 憤ただしいかり の爲に汝等を殺し汝等の樂しき生活を斷たち、かくして

汝等の嘆を生み出せる家は 一三六一—一三八

その所縁ゆかりの家族やからと俱ともに崇あがめられき、あゝブオンデルモンテよ、汝
が人の勸すすめを容いれ、これと縁えにしを結ぶを避けしはげにいかなる禍わざはひ
ぞや 一三九—一四一

汝はじめてこの邑まちに來るにあたり神汝をエーマに與へ給ひたりせ
ば、多くの人々今悲しまで喜べるものを 一四二—一四四

フィオレンツアはその平和終る時、犠いけにへ牲をば、橋を護まもるかの缺か
けいし

石いしに獻げざるをえざりしなりき 一四五—一四七

我はフィオレンツアにこれらの家族やからと他の諸の家族とありて、
歎なげくべき謂れなきまでそのいと安らかなるを見たり 一四八—一

五〇

またこれらの家族やからありて、その民榮えかつ正しかりければ、百合
は未だ倒さかさに竿さかに着けられしことなく 一五一—一五三
分離の爲紅べにに變かることもなかりき

第十七曲

今猶父なほをして子に對むかひて吝やぶさかならしむる者、人の己おのれを誹そしるを聞き、
事の眞まことを定さだかにせんためクリマーネの許もとに行きしことあり 一

三

我また彼の如くなりき、而してベアトリーチエも、また先にわが
ために處を變へしかの聖ともしびなる燈も、わが彼の如くなりしを知りき

四一六

是故に我淑女我に曰ふ。汝の願ひの焰を放て、そが汝の心の象かたを
あざやかにうけていづるばかりに 七一九

されどこは汝の言ことばによりてわれらの知識の増さん爲ならず、汝が
 渴かわきを告ぐるに慣なれ、人をして汝に飲ますをえしめん爲なり。一

〇——二二

あゝ愛するわが根よ（汝いと高くせられ、あたかも人智が一の三
 角の内に二の鈍角の容いれられざるを知るごとく 一三一—一五

苟かりそめ且の事をその未だ在らざるさきに知るにいたる、これ時の現い
 在まならぬはなき一の點を視るがゆるゑなり） 一六一—一八

われヴェルジリオと俱ともにありて、諸の魂を癒いやす山に登り、また
 死の世界にくだれる間に 一九—二一

わが將ゆくすゑ來の事につきて諸のいたましき言ことばを聞きたり、但し命
 運我を撃うつとも我よく自らとれに堪たふるをうるを覺ゆ 二二—二

四

是故にいかなる災わざはひのわが身に迫せまるやを聞かばわが願ひ満みつべし、

これ豫あらかじめ見ゆる矢はその中る力弱ければなり。 二五—二七

さきに我に物言へる光にむかひて我かくいひ、ベアトリーチェの

望むごとくわが願ひを明あかしたり 二八—三〇

諸の罪を取去る神こひつじの羔未だ殺されざりし昔、愚おろかなる民を惑まとはし、

その語ことばの如く臆おぼろならず 三一—三三

明らかにいひ定かに語りてかの父の愛、己ほくゑみが微笑の中に隠れかつ

顯あらはれつゝ、答ふらく 三四—三六

それ苟かりそめ且の事即ち汝等の物質ふみの書より外に延びざる事はみな永と

遠こしへの目に映ず 三七—三九

されど映ずるが爲にこの事必ず起るにあらず、船流れを下りゆけどもそのうつる目の然らしむるにあらざるに似たり 四〇—四二
 この永遠の目より汝の行末のわが目に入り來ることあたかも樂器よりうるはしき和合の音の耳に入り來る如し 四三—四五
 イツポリートが無情邪險の繼まゝは母の爲にアテーネを去れるごとく、
 汝フィオレンツアを去らざるべからず 四六—四八
 日毎ひごとにクリストの賣うり買かひせらるゝ處にてこれを思ひめぐらす者これを願ひかつはや企圖たくみぬ、さればまた直ちにこれを行はむ 四九

—五一

虐しひげられし人々に世はその常の如く罪を歸すべし、されど刑罰はこれを頒わかち與ふるものなる眞まことの爲あかしの證とならむ 五二—五四

いと深く愛する物をば汝ことごとく悉く棄て去らむ、是即ち流罪るぎといの弓の第一に射放つ矢なり 五五—五七

他人ひとの麵麩パンのいかばかり苦にがく他人ひとの階子はしごの昇のぼり降くだりのいかばかりつらきやを汝自ら験ためしみむ 五八—六〇

しかして最も重く汝の肩を壓おすものは、汝とともにこの溪たにに落つる邪惡庸愚の侶なるべし 六一—六三

かれら全く恩を忘れ狂たげひ猛りて汝に背そむかむ、されどかれら（汝にあらざ）はこれが爲に程なく顔を赤うせむ 六四—六六

かれらの行爲おこなひは獸の如きその性さがの證あかしとならむ、されば汝唯ただ一人ひとを一の黨派たらしむるかた汝にとりて善よかるべし 六七—六九

汝の第一の避^{さげどころ}所第一の旅舎^{やどり}は、聖なる鳥を梯子^{はしご}の上におくか

の大きいなるロムバルディア^{びと}人の情^{なさけ}ならむ 七〇―七二

彼汝^{むか}に對ひて深き好意^{よしみ}を有^もつが故に、爲す事と求むる事との中他^{うち}

の人々の間にてはいと遅きものも汝等^{ふたり}二人の間にては先となるべ

し 七三―七五

己^いが功^{さを}の世に顯^{あら}はるゝにいたるばかりこの強き星の力を生るゝ時

に受けたる者をば汝彼の許^{もと}に見む 七六―七八

人々未だこの者を知らじ、そはその年若く諸天のこれをめぐれる

ことたゞ九^{このとせ}年のみなればなり 七九―八一

されどかのグアスコニア^{びと}人が未だ貴きアルリーゴ^{あざむ}を欺かざるさき

にその徳の光は、銀^{かね}をも疲^{つかれ}をも心にとめざる事において現はれむ

八二—八四

その諸はえの榮わぎある業あまねはこの後あまね遍く世に知られ、その敵さへこれに

ついて口を噤つぐむをえざるにいたらむ 八五—八七

汝彼と彼の恩惠めぐみとを望み待て、彼あるによりて多くの民改まり、

貧富かたみ互に地を更かへむ 八八—九〇

汝また彼の事を心に記して携たづへ行くべし、されど人に言ふ莫なかれ。

かくて彼まのあたりは面見る者もなほ信まじきことどもを告げ 九一—九

三

後加ふらく。子よ、汝が聞きたる事の解ときあかし 説はは即ち是なり、是

ぞ多からぬ年の後方うしろにかくるゝ係わな蹄なる 九四—九六

されど汝の隣となりびと 人等ねたを妬ねたむなかれ、汝の生命いのちはかれらの邪惡の

罰よりも遙に遠き未來に亘るべければなり。 九七一—九九

かの聖なる魂もだ黙し、たていと經を張りてわが渡したる織物に緯よこいとを入れ終り

しことをあらはせる時 一〇〇—一〇二

あたかも疑ひをいだく者が、智あり徳あり愛ある人の教へを希ねがふ

ごとく、我いひ曰けるは 一〇三—一〇五

わが父よ、我よく時の我に打撃を與へんとてわが方かたに急ぎ進むを

見る、しかしてこは思慮なき人にいと重く加へらるべき打撃なり

一〇六—一〇八

是故にわれ先見をもて身を固かたむるを宜よしとす、さらばたとひ最愛

の地を奪はるともその他の地をばわが歌の爲に失ふことなからむ

一〇九—一一一

はてし

果なき苦しみの世にくだり、またわが淑女の目に擧げられて美し
き巔をばわが離れしその山をめぐり 一一二—一一四

後また光より光に移りつゝ天を經てわが知るをえたる事を我もし
語らば、そは多くの人にとりて味甚だ辛かるべし 一一五—一一

七

されど我もし眞理に對ひて卑怯の友たらんには、今を昔と呼ぶ人
々の間に生命を失ふの恐れあり。 一一八—一二〇

かのわが寶のほゝゑむ姿を包みし光は、まづ日の光にあたる黄金
の鏡のごとく煌き 一二一—一二三

かくて答ふらく。己が罪または他人の罪の爲に曇れる心は、げに

汝の言を烈しと感ぜむ 一二四—一二六

しかはあれ、一切の虚偽いつはりを棄てつゝ、汝の見し事をこと／＼くあらはし、瘡かさある處は人のこれを搔かくに任せよ 一二七—一二九

九

汝の聲はその味あぢはじめ厭いとはしとも、後消化こなるゝに及び極めて肝要なる滋養やしなひを残すによりてなり 一三〇—一三二

汝の叫びの爲す所あたかも最高いとき巔をいと強くうつ風の如し、是豈あほまれ譽のたゞ小ささやかなる證あかしならんや 一三三—一三五

是故にこれらの天にても、かの山にても、またかの苦患なやみの溪にても、汝に示されしは、名の世に知らるゝ魂のみ 一三六—一三八
 そは例を引きてその根知られずあらはれず、證あかしして明らかならざれば、人聞くとも心安まらず、信をこれに置かざればなり。一

第十八曲

さいはひ
福なるかの鏡は今たゞ己が思ひを樂しみ、我はわが思ひを味ひつ

ゝ、甘さをもて苦しさを和げゐたりしに 一—三

我を神のみもとに導きゐたる淑女いひけるは。思ひを變へよ、一
切の虐しひたげを輕なぐさめむるものにわが近きを思ふべし。 四—六

我はわが慰藉なぐさめの慕はしき聲を聞きて身を轉めぐらせり、されどこの時
かの聖なる目の中にかなる愛をわが見しや、こゝしるに記さじ 七

—九

これ我自らわが言ことばを頼たのまざるのみならず、導く者なくばかく遠く

記憶さかのぼに溯あたる能たはざるによりてなり 一〇—一二

かの刹那せつなのことについてわが語るを得るは是のみ、曰く、彼を視

るに及びわが情は他の一切の願ひより解かると 一三—一五

ベアトリーチエを直ちに照らせる永遠とこしへの喜びその第二の姿をば

美しき目に現はしてわが心を足たらはしむたりしとき 一六—一八

一の微笑ほくそみの光をもて我したを服たがへつゝ淑女曰ふ。身を轉めぐしてしかして

聽け、わが目の中にのみ天堂あるにあらざればなり。 一九—二

一

情もし魂を悉く占むるばかりに強ければ、目に現はるゝことまゝ

世ためしに例たあり 二二—二四

かくの如く、我はわがふりかへりて見し聖なる光の輝の中に、な

ほしばし我と語るの意あるを認めき 二五―二七

このものいふ。頂によりて生き、常に實を結び、たえて葉を失はぬ木のこの第五座に 二八―三〇

福なる諸の靈あり、かれらは天に來らざりしきき、いかなるムーザをも富とますばかり世に名聲きこえ高かりき 三一―三三

是故にかの十字架けたの桁を見よ、我今名をいはん、さらばその者あたかも雲の中にてその疾とき火の爲なす如わき技ぎをかしこに爲すべし。

三四―三六

ヨスエの名いはるゝや、我は忽ち一の光の十字架を傳ひて動くを見たり、げに言いふと爲なすといづれの先なりしやを知らず 三七―三九
尊たきマツカベオの名とともに、我はいま一の光めぐりつゝ進み出

づるを見たり、しかして喜よろこび悦びはかの獨こ樂まの糸なりき 四〇—四

二

またカルロ・マーニヨとオルランドとの呼ばれし時にも、我は心
をとめて他の二の光を見、宛さながら然己が飛立つ鷹に目の伴ふ如くな
りき 四三—四五

後またグリエルモ、レノアルド、公ドウーカ爵ゴツテイフレーデイ、
及びルベルト・グイスカールドわが目を引きてかの十字架を傳は
しむ 四六—四八

かくて我に物言へる魂、他の光の間に移り混まじりつゝ、天の歌人
の中にも技わざのいたく勝すぐるゝことを我に示せり 四九—五一
われ身をめぐらして右に向ひ、ベアトリーチエによりて、その言ことば

または動ふるまひ作あらに表はるゝわが務を知らんとせしに 五二―五四
 姿平常つねにまさり最終をはりの時にもまさるばかり、その目清くたのしげ
 なりき 五五―五七

また善を行ふにあたり心に感ずる喜びのいよく大いなるにより
 て、人己が徳の進むを日毎に自ら知ることく 五八―六〇

我はかの奇くしき聖業みわざのいよく美しくなるを見て、天とともにわ
 がめぐる輪アルコのその弧を増しゝを知れり 六一―六三

しかして色白き女が、その顔より羞恥はぢらひの荷をおろせば、たゞ束つか
 の間まに變まるごとく 六四―六六

われ回ふりかへ顧りしときわが見るもの變りゐたり、こは己の内に我を
 容いれし温和なる第六の星の白さの爲なりき 六七―六九

我見しに、かのジヨーヴエの燈火ともしびの中には愛きらめきの煌のあるありて、

われらの言語ことばをわが目に現はせり 七〇—七二

しかしてたとへば岸より立ちさながら己が食物くひものを見しを祝ふに

似たる群鳥むらどりの、相連あひつらなりて忽ち圓を作りまた忽ち他ほかの形を作

る如く 七三—七五

諸の聖者はかの諸の光の中にて飛びつゝ歌ひ、相寄りて忽ち

Dデ忽ちIイ忽ちLエルの形を作れり 七六—七八

かれらはまづ歌ひつゝ己ふしが節に合せて動き、さてこれらの文字の

一となるや、しばらく止まりて黙もだしゝなりき 七九—八一

あゝ女神めがみペガーゼアよ（汝才に榮光を與へてその生命いのちを長うす、

才が汝の助けによりて諸邑諸國に及ぼす所またかくの如し） 八

二一八四

願はくは汝の光をもて我を照らし我をして彼等の象かたちをそのわが心にある如く示すをえしめよ、願はくは汝の力をこれらの短き句に現はせ 八五―八七

さてかれらは七の五倍の母字子字となりて顯はれ、我はまた一部を、その言顯はしゝ次第に従ひて、心に記とめたり 八八―九〇

Diligite 《デイーリギテ》 iustitiam 《イウスステイティウム》 是全畫面の始めの語ことばなる動詞と名詞にてその終りの語は Quia iudicatis 《クイーイウディカーチス》 terram 《テルラム》 なりき 九一

かくて第五の語ことばの中のMエムメにいたり、彼等かく並べるまゝ止まりたれば、かしこにては木星宛さながら然金にて飾れる銀と見えたり 九四

—九六—

我またMの頂の處に他の諸の光降り、歌ひつゝ——己の許もとに彼等を導く善の事ならむ——そこに靜まるを見たり 九七—九九

かくてあたかも燃えたる薪を打てば數しれぬ火花出づる（愚者これによりて占うらなひをなす習ひあり）ごとく 一〇〇—一〇二

かしこより千餘の光出で、かれらを燃す日輪の定むるところに従ひて、或者高く或者少しく昇ると見えたり 一〇三—一〇五

しかして各その處にしづまりしとき、我はかの飾れる火が一羽の鷺かしらぐびの首と頸とを表はすを見たり 一〇六—一〇八

そもくかしこに畫く者はこれを導く者あるにあらず、彼自ら導
 く、かれよりぞ巢を作るの本もとなる力いづるなる 一〇九—一一一
 きて他の聖者の群むれ即ち先にエムメにて百合となりて悦ぶ如く見え
 し者は、少しく動きつゝかの印象かたを捺おし終りたり 一一二—一一
 四

あゝ麗しき星よ、世の正義が汝の飾る天の力にもとづくことを我
 に明らかならしめしはいかなる珠いかばかり數多き珠ぞや 一一
 五—一一七

是故に我は汝の動うご汝の力の汝なる聖みこ意ころに祈る、汝の光を害ふ烟
 の出る處をみそなはし 一一八—一二〇
 血と殉教とをもて築きあげし神みや殿の内に賣うり買かひの行はるゝためい

ま一たびみいかり聖怒を起し給へと 一二一—一二三

あゝわが視る天の軍いくさびと人等よ、あしきためし惡例に倣ひて迷はざるなき

地上の人々のために祈れ 一二四—一二六

昔はつるぎ劔をもていくさ戰鬪をする習ひなりしに、今はかの慈悲深き父が誰

にもいなみ給はぬパン麵麩をばこゝかしこより奪ひて戦ふ 一二七—

一二九

されど汝、たゞ消さんとて録しるす者よ、汝が荒すぶだうばたけ葡萄園の爲に死

にたるピエートロとパオロとは今も生くることを思へ 一三〇—

一三二

うべ汝は日はむ、たゞ獨りにて住むを好み、かつひとをどり一踊のため

教へに殉ずるにいたれる者に我専らわが願ひを据ゑたれば 一三

三―一三五

我は漁夫をもポロをも知らずと 一三六―一三八

第十九曲

うるはしき樂しみのために悦ぶ魂等が相結びて造りなしゝかの美
しき象かたちは、翼を開きてわが前に現はる 一—三

かれらはいづれも小さき紅あかだま玉が日輪の燃えて輝く光を受けつゝ
わが目にこれを反映てりかへらしむる如く見えたり 四—六

しかしてわが今述べんとするところは、聲これを傳へ、墨これを
録しるしゝことなく、想像もこれを懐いだきしことなし 七—九

そは我見かつ聞きしに、嘴物くちばし言ひ、その聲の中にはわれらとわれ
らのとの意こころなるわれとわがと響きたればなり 一〇—一二

いふ。正しく慈悲深かりしたため、こゝにはわれ今高くせられて、

願ひに負けざる榮光をうけ 一三—一五

また地には、かしこの悪しき人々さへ美ほむるばかりの——かれら

美ほむれど鑑かゞみに倣ならはず——わが記念かたみを遺しぬ。 一六—一八

たとへば數多おきき熾火かたよりたゞ一の熱のいづるを感ずる如く、數多

き愛の造れるかの象かたちよりたゞ一の響かたきいでたり 一九—二一

是においてか我直に。あゝ永遠とこしへの喜びの不斷の花よ、汝等は己

がすべての薰かをりをたゞ一と我に思はしむ 二二—二四

請ふ語りてわが大いなる斷だんじき食を破れ、地上くひものに食物をえざりし

ため我久しく饑うゑるたればなり 二五—二七

我よく是を知る、神の正義天上の他の王國をその鏡となさば、汝

等の王國も亦幔まくを隔へだてゝこれを視じ 二八―三〇

汝等はわが聽かんと思ふ心のいかばかり深きやを知る、また何の

疑ひのかく長く我を饑ゑしめしやを知る。 三一―三三

鷹その被かぶりもの物を脱とらるれば、頭を動かし翼を搏うち、願いきほひひと勢と

を示すごとく 三四―三六

神の恩惠めぐみの讚美にて編めるこの旗はたじるし章は、天に樂しむ者のみ知

れる歌をうたひてその悦びを表あらはせり 三七―三九

かくていふ。宇宙の極はてに圓コムパス規をめぐらし、隠るゝ物と顯るゝ物

とを遍あまねくその内に頒わかちし者は 四〇―四二

己が言ことばの限りなく優まさらざるにいたるほど、その力をば全宇宙に印

する能はざりき 四三―四五

しかして萬の被造物よろづ つくられしものの長をさなりしかの第一の不遜者ふそんじやが光を待
 たざるによりて熟うまざる先に墜おとし事よくこれを證あかしす 四六―四八
 されば彼に劣る一切の性さがが、己をもて己を量る無窮の善を受入れ
 んには器うつはあまりに小さき事もまたこれによりて明らかならむ 四
 九―五一

是故に、萬物の中に満つる聖意みこころの光のたゞ一線ひとすぢならざるをえ

ざる我等の視力は 五二―五四

その性さがとして、己が源を己に見ゆるものよりも遙かかなたに認め
 ざるほど強きにいたらじ 五五―五七

かゝれば汝等の世の享くる視力が無窮の正義に入りゆく状さまは、目
 の海におけるごとし 五八―六〇

目は汀みぎはより底を見れども沖にてはこれを見じ、されどかしこに底

なきにあらず、深きが爲に隠るゝのみ 六一―六三

曇くもりしらぬ蒼空あをぞらより來るものゝ外光なし、否いな闇あり、即ち肉の陰

またはその毒なり 六四―六六

生くる正義を汝かに匿かくしこれについてかくしげく汝に問を發おこさしめ

たる隱かくれどころ所は、今よく汝の前に開かる 六七―六九

汝いひ曰けらく、人インドの岸に生れ（かしこにはクリストの事を説

く者なく、讀む者も書く者もなし） 七〇―七二

人間の理性の導くかぎり、その思ふ所爲なすところみな善く言ことば

行こなひに罪なけれど 七三―七五

たゞ洗バツテスモ禮を受けず信仰に入らずして死しぬるあらんに、かゝる

人を罰する正義いづこにありや、彼信ぜざるもその咎將とがはたいづこに

ありやと 七六一七八

抑 《そもく》汝は何者なれば一布スパンナ指の先をも見る能はずし

て席に着き、千哩ミリアのかなたを審さばかんと欲するや 七九一八一

聖書汝等の上にあらずば、げに我とともに事を究めんとつとむる

者にいたく疑ふの事由いはれはあらむ 八二一八四

あゝ地上の動物よ、愚おろかなる心よ、それおのづから善なる第一の意

志は、己即ち至上の善より未だ離れしことあらじ 八五一一八七

凡て物の正しきはこれと和するの如何による、造られし善の中こ

れを己が許に引く物一だになし、この善光を放つがゆゑにかの善

生ず。 八八一九〇

餌を雛に與へ終りてこふづる鶴巢の上をめぐり、雛は餌をえてその母を視るごとく 九一—九三

いと多き議はからひうながに促されてかの福なる象翼かたちを動かし、また我はわが目を擧げたり 九四—九六

さてめぐりつゝ歌ひ、かつ曰ふ。汝のわが歌を解げせざる如く、汝等人間は永遠とこしへの審判さばきをげせじ。 九七—九九

ローマ人びとに世界の崇あがめをうけしめししるし徴號しるしをばなほ保ちつゝ、聖靈の光る火しづまりて後 一〇〇—一〇二

かの者またいふ。クリストが木に懸かけられ給ひし時より前にも後にも彼を信ぜざりし人の、この國に登り來れることなし 一〇三

—一〇五

されど見よ、クリスト、クリストとよばる人にて、審判さばきのとき
には、クリストを知らざる人よりも遠く彼を離るべき者多し 一

○六一—〇八

かゝるクリステイアーニ基督教徒をばエチオピア人罪びとに定めむ、こは人二の群むれ
にわかたれ、彼永遠とこしへに富み此貧しからん時なり 一〇九—一一

一

汝等の王達の汚辱をすべて録しるし、書ふみの開かるゝを見る時、ペルシ

ア人びと彼等に何をかいふをえざらむ 一一二—一一四

そこにはアルベルトの行爲おこなひの中、ほどなく筆を運ばしむる事見
ゆべし、その行爲によりてプラーガの王國の荒らさるゝこと即ち

是なり 一一五—一一七

そこには猪いのしに衝つかれて死すべき者が、貨幣かねの模擬まがを造りつゝ、セ
 ナの邊ほとりに齎もたらすところの患うれ見ゆべし 一一八—一二〇

そこにはかのスコツトランド人びととイギリス人とを狂はし、そのい
 づれをも己が境の内に止まる能はざらしむる傲慢たかぶり（渴かわを起す）

見ゆべし 一二一—一二三

スパニアの王とボエムメの王（この人嘗かつて徳を知らずまた求めし
 こともなし）との淫樂いんらくと懦弱だじやくの生活と見ゆべし 一二四—

二六

イエルサレムメの跛者あしなへの善は一のIイにて記しされ、一のMエムはその
 惡しるの記號しるしとなりて見ゆべし 一二七—一二九

アンキーゼながきいのちが長生を畢なへし處なる火の島を治むる者の強慾けふだと怯懦

と見ゆべし 一三〇—一三二

またかれのいみじき小人なるをさとらせんため、その記録には略字を用ゐて、すこし些の場所に多くの事を言現はさむ 一三三—一三五

またいと秀ひいづる家系いへがらと二の冠とを辱めたるその叔父と兄弟との

悪おこなひしき行は何人にも明らかなるべし 一三六—一三八

またポルトガル口の王とノルヴェジアの王とはかの書ふみによりて知らるべし、ヴェネージアの貨幣かねを見て禍わざひを招けるロシアの王ま

た然り 一三九—一四一

あゝ重ねて虐政を忍ばずばウングリアは福なる哉、取巻く山かためを固となさばナヴァルラは福なる哉 一四二—一四四

またこの事の契約として、ニコシアとファマゴスタとが今既にそ

の獸——他の獸の傍かたへを去らざる——の爲に 一四五—一四七
嘆き叫ぶを人皆信ぜよ。

第二十曲

全世界を照らすもの、わが半球より、遠くくだりて、晝いたるところに盡くれば 一—三

さきにはこれにのみ燃^もさるゝ天、忽ち多くの光——一の光をうけて輝く——によりて再び己を現はすにいたる 四—六

かゝる天の現象^{すがた}なりき、世界とその導者達との徴號^{しるし}の尊き喑黙^{もだ}しゝ時、わが心に浮べるものは 七—九

そはかの諸^{やす}の生くる光は、みないよく強く光りつゝ、わが記憶より逃げ易く消え易き歌をうたひいでたればなり 一〇—一二

あゝ微笑の衣を纏まとふうるはしき愛よ、聖なる思ひの息いきのみ通へる

かの諸の笛の中に汝はいかに熱あつく見えしよ 一三—一五

第六の光を飾る諸の貴きかゞやける珠、その妙たへなる天使の歌を
絶たちしとき 一六—一八

我は清らかに石より石と傳ひ下りて己が源の豊ゆたかなるを示す流れの

とある低さゝやき語を聞くとおぼえき 一九—二一

しかしてたとへば琵琶びわの頸にて、音おとその調しらべを得、筆ひちりき策の孔にて、

入來る風またこれを得るごとく 二二—二四

かの驚の低さゝやき語は、待つ間もあらず頸を傳ひて——そが空うつろなりし

ごとく——上のぼり來れり 二五—二七

さてかしこに聲となり、かしこよりその嘴を過ぎ言葉の體かたちを成し

て出づ、この言葉こそわがこれを録しるし、心の待ちゐたるものなれ

二八—三〇

我に曰ふ。わが身の一部、即ち物を見、かつ地上の驚にありては

よく日輪に堪ふるところを今汝心して視るべし 三一—三三

そはわが用ゐて形をとくなふ諸の火の中うち、目となりてわが首かうべが

輝く者、かれらの凡ての位のうちの第一を占むればなり 三四—

三六

眞中まなかに光りて瞳となるは、聖靈の歌うた人びと、邑まちより邑にかの匱はこを移

し、者なり 三七—三九

今彼は、己が歌の徳——己が思ひよりこの歌のいでたるかぎり—

—をば、これにふさはしき報むくいによりて知る 四〇—四二

輪を造りて我眉となる五の火の中、わが嘴くちばしにいと近きは、寡婦やもめを

ばその子の事にて慰めし者なり 四三―四五

今彼は、クリストに従はざることのいかに貴き價を拂ふにいたるやを知る、そは彼の麗うるはしき世とその反うらとを親しく味ひたればな

り 四六―四八

またわがいへる圓の弓形ゆみがたのぼ上る處にて彼に續くは、眞まことの悔くひ

によりて死を延べし者なり 四九―五一

今彼は、適ふさはしき祈り下界にて、今日けふの事を明日あすになすとも、永と

遠こしへの審判さばきに變りなきを知る 五二―五四

次なる者は、牧者に譲らんとて（その志善かりしかど結べる果惡みあしかりき）律法おきて及び我とともに己をギリシアのものとなせり 五

五―五七

今彼は、その善行より出でたる惡の、たとひ世を亡ぼすとも、己
 を害そこなはざるを知る 五八―六〇

弓形下くだる處に見ゆるはグリエルモといへる者なり、カルロとフエ
 デリーゴと在るが爲に嘆く國彼なきが爲に泣く 六一―六三

今彼は、天のいかばかり正しき王を慕ふやを知り、今もこれをそ
 の輝く姿に表はす 六四―六六

トロイア人びとリフエオがこの輪の聖なる光の中の第五なるを、誤り
 多き下界にては誰か信ぜむ 六七―六九

今彼は、神の恩惠めぐみについて世のさとりえざる多くの事を知る、そ
 の目も底を認めざれども。 七〇―七二

まづ歌ひつゝ空に漂ふ可憐いとほしの雲雀ひばりが、やがて自ら最後をばりの節ふしのう
るはしさに愛めで、心足りて黙もたすごとく 七三―七五

永遠とこしへの悦へび（これが願ふところに従ひ萬物皆そのあるごとくな
るにいたる）の印かたちせる像かたちも心足らへる如く見えき 七六―七八
しかしてかしこにては我のわが疑うたがひにおけるあたかも玻はり瓔りのその
被おほふ色いろにおけるに似たりしかど、この疑うたがひは黙もたして時を待つに堪
へず 七九―八一

己おもが重おもさの力ちからをもて、これらの事は何ぞやといふ言ことばをばわが口よ
り押出したり、またこれと共に我は大いなる喜よろこびひらめの閃ひらめくを見みき

八二―八四

かくてかの尊たふときしるし徴しるし號ごう、いよ／＼つよく目を燃やしつゝ、我をなが

く驚異あやしみのうちにとめおかじとて、答ふらく 八五―八七

我見るに、汝がこれらの事を信ずるは、わがこれを言ふが爲にて
その所以を知れるに非ず、されば事信ぜられて猶隠る 八八―九

○

汝はあたかも物を名によりてよく會得あつとくすれども、その本質にいた

りては人これを現はさゞれば知る能はざる者の如し 九一―九三

それ天の王國は、熱き愛及び生くる望みに侵さる、これらのもの

聖意みこころに勝つによりてなり 九四―九六

されどその状人々さまを従ふる如きに非ず、そがこれに勝つはこれ自

ら勝たれんと思へばなり、しかして勝れつゝ己が仁いづくしみ慈により

て勝つ 九七―九九

さて眉の中なる第一と第五の生命いのちが天使の國に描かるゝを見て汝
これを異あやしめども 一〇〇—一〇二

かれらはその肉體を出るに當り汝の思ふ如く異教徒なりしに非ず、
クリステイアーニ 基督教徒にて、彼は痛むべき足此は痛める足を固く信じき

一〇三—一〇五

即ちその一者ひとりは、善よきおもひ意もどに戻る者なき處なる地獄より骨に歸れ
り、是抑そもく 生くる望みの報むくいにて 一〇六—一〇八

この生くる望みこそ、彼の甦りその思ひの移るをうるにいたらん
ため神に捧げまつれる祈りに力をえしめたりしなれ 一〇九—一

一一

件くだんの尊たき魂は肉に歸りて（たゞ少時しばしこれに宿りき）、己を助くる

をうるものを信じ 一一二—一一四

信じつゝ眞まことの愛の火に燃えしかば、第二の死に臨みては、この樂

しみを享うくるに適ふさはしくなりゐたり 一一五—一一七

また一者ひとりは、被造物つくられしもの未だ嘗かつて目を第一の波に及ぼしゝことな

きまでいと深き泉より流れ出る恩惠めぐみにより 一一八—一二〇

その愛を世にてこと／＼く正義に向けたり、是故に恩惠めぐみ恩惠に

加はり、神彼の目を開きて我等の未來あがなひの贖を見しめぬ 一二一—

一二三

是においてか彼これを信じ、其後異教の惡臭をしうを忍ばず、かつその

事にて多くの悖もとれる人々を責めたり 一二四—一二六

汝がかの右の輪ほとりの邊に見しみたりの淑女は、洗バツ禮テスモの事ありし

時より一千年餘の先に當りて彼の洗禮となりたりき 一二七—一

二九

あゝ永遠とこしへの定さだめよ、第一もとの原因もとを見きはむるをえざる目に汝の根の遠とほざかることいかばかりぞや 一三〇—一三二

また汝等人間よ慎みて事を斷ぜよ、われら神を見る者といへども

猶なほ凡ての選えらばれし者を知らじ 一三三—一三五

而して我等かくるかくところ缺か處ところあるを悦よろこぶ、我等さいはひの幸さいはひは神おほしめの思おほしめ召よす事ことをわれらもまた思ふといふその幸によりて全うせらるればなり。

一三六—一三八

かくかの神かたちの象かたち、わが近ちかめ眼めをいやさんとて、われにこゝちよき藥

を與へき 一三九—一四一

しかしてたとへば巧みに琵琶を奏かなづる者が、絃いとの震動ゆるぎを、巧みに歌ふ者と合あせて、歌に興を添そふるごとく 一四二—一四四

(憶おぼひ出づれば) 我は驚の語る間、二のたふとき光が言葉につれ

て焰ひを動かし、そのさま雙さうの目の 一四五—一四七

時ひと齊またしく瞬またくに似たるを見たり

第二十一曲

はやわが目は再びわが淑女の顔に注そがれ、目とともに意こころもこれに注がれて他の一切の思ひを離れき 一—三

この時淑女ほゝゑまずして我に曰ふ。我もしほゝゑまば、汝はあたかも灰となりしときとこしへのセーメレの如くなるべし 四—六

これ永とこしへ遠の宮殿みやぎざはしの階を傳ひていよく高く登るに従ひいよく燃ゆるやはら（汝の見し如く）わが美しさは 七—九

和やはらげらるゝに非あらしればいと強くかゞや赫くが故に、人たる汝の力その光に當りてさながら雷に碎かるゝ小枝の如くなるによるなり 一〇—

一一

われらは擧げられて第七の輝の中にあり、こは燃ゆる獅子の胸の下にてその力とまじりつゝ、今下方を照らすもの 一三—一五

汝意こころを雙の目の行方ゆくへにとめてかれらを鏡とし、いまこの鏡に見ゆる像かたちをこれに映せうつ。 一六—一八

我わが思ひを變へしそのとき、かのたふとき姿のうちにわが目いかなる喜びをえしや、そを知る者は 一九—二一

彼方かなたと此方こなたとを權はかり比くらべてしかして知らむ、わが天上の案内者しるべの命に従ふことのいかばかり我に樂しかりしやを 二二—二四

世界のまはりをめぐりつゝ、その名立なだる導者の——一切の邪惡かれの治下みよに滅びにき——名を負おふ水晶の中に 二五—二七

我は一の樹梯はしだてを見たり、こは日の光に照らさるゝ黄金こがねの色にて、

わが目の及ぶあたはざるほど高く聳そびえき 二八―三〇

我また段きだを傳ひて諸の光の降るを見たり、その數かずは最多いとく、我をして天に現はるゝ一切の光かしこより注がると思はしむ 三一

―三三

自然ならひの習とて、晝の始め、冷やかなる羽をあたゝめんため、鴉からすむ

らがりて飛び 三四―三六

後ゆ或者は往かへきて還らず、或者はさきにいでたちし處にむかひ、或

者は残りゐてめぐる 三七―三九

むらがり降れるかの煌きらめきも、とある段きだに着くに及びて、またかくの

如く爲すと見えたり 四〇―四二

しかして我等にいと近く止まれる光殊ことあざやかに燦きらになりければ、われ心
 の中にいふ、我よく汝の我に示す愛を見ると 四三―四五

されど何時いつい如何いかに言ひまたは黙もだすべきやを我に教ふる淑女身を動
 かすことをせざりき、是においてかわが願ひねがひに背そむき我は問はざる
 を可よしとせり 四六―四八

是時淑女、萬物を見る者に照らして、わが黙もだす所以ゆゑんを見、汝の熱
 き願ひを解くべしと我にいふ 四九―五一

我即ち曰ひけるは。わが功德は我をして汝の答を得しむるに足ら
 ず、されど問ふことを我に許す淑女の故によりて請ふ 五二―五

四

己が悦びの中にかくるゝ尊たつき生命いのちよ、汝いかなればかくわが身に

近づけるやを我に知らせよ 五五―五七

また天堂の妙なる調が、下なる諸の天にてはいとうやくしく響くなるに、この天にてはいかなれば黙すやを告げよ。 五八―

六〇

答へて我に曰ふ。汝の耳は目の如く人間のものなるがゆゑに、ベアトリーチエの微笑まざると同じ理によりてこゝに歌なし 六一

―六三

聖なる梯子の段を傳ひてわがかく下れるは、たゞ言とわが纏ふ光とをもて汝を喜ばしめんためなり 六四―六六

またわが特に早かりしも愛の優る爲ならじ、汝に焰の現はす如く、優るかさなくも等しき愛かしこに高く燃ゆればなり 六七―六九

たゞ我等をば宇宙を治め給ふ聖旨みむねの疾とき僕しもべとなす尊とき愛べぞ、汝の

視みるごとく、こゝにて鬮くじを頒わかつなる。 七〇—七二

我い曰いふ。聖ともしびなる燈とも火しびよ、我よく知る、この王宮にては、永とこしへ遠へ

の攝理しやくりに従したがふためには自由じゆうの愛あいにて足たることを 七三—七五

されど何故なにゆゑに汝なんぢの侶ともを措おき汝なんぢひとり豫あらかじめ選えらばれてこの職つとめを爲なすに

いたれるや、これわが悟がたり難がたしとする所ところなり。 七六—七八

わが未まだ最後をばりの語ことばをいまはざるさきに、かの光あかりは己まなかが眞中まなかを中心ちゆうしんと

して疾とき碾ひきうす石いしの如ごとくめぐりき 七九—八一

かくして後のちそのうちの愛あい答こたふらく。我われを包かむ光あかりを貫ついて神かみの光あかりわ

が上うへにとゞまり 八二—八四

その力ちからわが視み力ちからと結むす合あひつゝ我われをはるかに我われより高たかうし、

我をしてその出る處なるいとたかきもの至高者をを見るをえしむ 八五―八七

この見ることこそ我を輝かす悦びの本もとなれ、そはわが目のあざや燦かな

るに従ひ、焰も燦かなればなり 八八―九〇

されどいと強く天にかゞやく魂も、目をいとかたく神にとむるセ

ラファイノも、汝の願ひを満すをえじ 九一―九三

これ汝の尋ぬる事は永遠とこしへの定さだめの淵深きところにおいて、凡ての

造られし目を離るゝによる 九四―九六

汝歸らばこれを人の世に傳へ、かゝる目的めあてにむかひて敢あへてまた足

を運ぶことなからしむべし 九七―九九

こゝにては光る心も地にては烟けふる、是故に思へ、天に容いれられて

さへその爲すをえざる事をいかで下界に爲しえんや。 一〇〇―

一〇二

これらの言葉我を控へしめたれば、我はこの問を棄て、自ら抑へ
つゝたゞ謙りてその誰なりしやを問へり 一〇三—一〇五

イタリアの二の岸の間、汝の郷土よりいと遠くはあらざる處に
雷の音遙に下に聞ゆるばかり高く聳ゆる岩ありて 一〇六—一〇

八

一の峰を成す、この峰カートリアと呼ばれ、これが下にはたゞ禮
拜の爲に用ゐる習なりし一の庵聖めらる。 一〇九—一一一

かの者三度我に語りてまづかくいひ、後また續いていひけるは。

かしこにて我ひたすら神に事へ 一一二—一一四

黙想に心を足はしつゝ、橄欖の液の食物のみにて、軽く暑さ

寒さを過せり 一一五——一七

昔はかの僧院、これらの天のため、實みをさはに結びしに、今はいと空しくなりぬ、かゝればその状さま必ず直あに顯あらはれん 一一八——

二〇

我はかしこにてピエートロ・ダミアーノといひ、アドリアティコの岸なるわれらの淑女の家にてはピエートロ・ペツカトルといへ

り 一二二——一二三

餘命いくばく幾何もなかりしころ、強しひて請こはれて我かの帽を受く、こ

は傳へらるゝごとに優すぐれる惡に移る物 一二四——一二六

チエファスの來るや、聖靈の大いなる器うつはの來るや、身瘦やせ足くつに沓くつなく、いかなる宿やどの糧かてをもくらへり 一二七——一二九

しかるに近代ちかきよの牧者等は、己を左右より支ふる者と導く者と

(身いと重ければなり) 裳裾もすそをかゝぐる者とを求む 一三〇—

三二

かれらまたその表衣うはぎにて乗馬じようめを蔽おほふ、これ一枚の皮の下にて二匹の獸の出るなり、あゝ何の忍耐ぞ、怵こらへてこゝにいたるとは。

一三三—一三五

かくいへる時、我は多くの焰きだが段より段にくだりてめぐり、かつめぐるごとにいよく美しくなるを見き 一三六—一三八

かくてかれらはこの焰のほとりに來り止まりて叫び、世たぐひに此なき

まで強き響きを起せり 一三九—一四一

されど我はその雷いかづちに堪へずして、聲の何たるを解げせざりき 一四

第二十二曲

おどろき
驚異のあまり、我は身をわが導者に向はしむ、その状事さまある毎ごとに

己が第一の侍たのみどころ處に馳せ歸る稚兒をさなごの如くなりき 一—三

この時淑女、あたかも蒼あをさめて息いきはずむ子を、その心をば常はげに勵はげま

す聲をもて、たゞちに宿なだむる母のごとく 四—六

我に曰ふ。汝は汝が天あるに在を知らざるや、天は凡て聖にして、こゝ
に爲さるゝ事、皆熱き愛より出るを知らざるや 七—九

かの叫びさへかくまで汝を動かせるに、歌とわが笑とは、汝をい
かに變らしめけむ、今汝これを量はかり知りうべし 一〇—一二

もしかの叫びの祈る所をさとりたりせば、汝はこれにより、汝の死なざるさきに見るべき刑罰を、既に知りたりしものを 一三一

一五

そもく天上の劔たるや、斬るに當りて急がず遅れじ、たゞ望みつゝ、または恐れつゝ、それを待つ者にかゝる事ありと見ゆるのみ 一

六一—一八

されど汝今身を他の者の方にむくべし、わがいふごとく目を轉らさば、多くの名高き靈を見るべければなり。 一九—二一

彼の好むごとく我は目を向け、百の小さき球の群めてその光を交しつゝ、いよく美しくなれるを見たり 二二—二四

我はさながら過ぐるを恐れて願ひの刺戟を衷に抑へ敢て問はざる

人のごとく立ちゐたるに 二五―二七

かの眞珠のうちの最大いとにして最強いとく光るもの、己が事につきわが願みたひを満みたさんとて進み出でたり 二八―三〇

かくて聲なかその中なかにて曰ふ。汝もしわれらのうちに燃ゆる愛をわがごとく見ば、汝の思ひを言現はさむ 三一―三三

されど汝が、待つことにより、たふとき目的めあてに後おくれざるため、我は汝のかく慎しみて敢ていはざるその思ひに答ふべし 三四―三

六

坂にカツシーノある山にては、往そのかみ昔巔かみに登りゆく迷ゆがへる曲ゆがめる

人多かりき 三七―三九

しかして我等をいと高うする眞理をば地に齎ひとし、者の名を、はじ

めてかの山に傳へしものは即ち我なり 四〇—四二

またいと深き恩恵めぐみわが上に輝きたれば、我そのまはりの村むら里さとを

して、世界を惑はし、不淨の禮らいはい拜のを脱のがれしむ 四三—四五

さてこれらの火は皆默想に心を寄せ、聖なる花と實とを生ずる熱によりて燃もやされし人々なりき 四六—四八

こゝにマツカリ才あり、こゝに口モアルドあり、またこゝに足を僧院の内に止めて道心堅固けんこなりしわが兄弟達あり。 四九—五一

我彼に。我と語りて汝が示す所の愛と汝等のすべての焰にわが見て心をとむる好きよ姿とは 五二—五四

わが信賴の念を伸べ、そのさま日の光が薔薇を伸のべてその力のかぎり開くにいたらしむるごとし 五五—五七

是故に父よ汝に請ふ、われ大いなる恩恵めぐみを受けて汝の貌かたちを顯あらはに見るをうべきやいな否や、定さだかに我に知らしめよ。 五八—六〇

是においてか彼。兄弟よ、汝の尊き願ひは最後の球にて満みたさるべし、こはわが願ひも他の凡ての願ひも皆満みたさるゝところなり 六一—六三

かしこにては誰たが願ひも備はり、熟まどかし、圓なり、かの球においてのみこれが各部はその常にありしところにとゞまる 六四—六六

そはこれ場所を占むるにあらず、軸を有もつに非あらざればなり、われらの梯子はしこれに達し、かく汝の目より消ゆ 六七—六九

族長ヤコブその頂の高くかしこに到るを見たり、こはこれがいと多くの天使を載せつゝ彼に現はれし時なりき 七〇—七二

然るに今はこれに登らんとて地より足を離す者なし、わが制は紙おきてを損そこなはんがために残るのみ 七三―七五

僧坊たりしむかしの壁は巢窟となりぬ、法衣ころもはあしき粉こなの満ちたる袋なり 七六―七八

げに不当の高利といふとも、神の聖旨みむねに逆さふこと、僧侶の心をか
く狂はしむる果みには及およばじ 七九―八一

そは寺院の貯たくはは皆神によりて求むる民の物にて、親戚おきまたはさら
に賤いやしき人々の物ならざればなり 八二―八四

そもく、人間の肉はいと弱し、されば世にては、善く始められし
事も、櫛かしの生おひいづ出るより實を結ぶにいたるまでだに續かじ 八五

―八七

ピエルは金銀なきに、我は祈りと斷食だんじきとをもて、業わざを始め、フ
 ランチエスコは身を卑ひくうしてその集つどひを起せり 八八—九〇
 汝これらのもの、濫觴おこりをたづね後またその迷ひ入りたる處をさぐ
 らば、白の黒くなれるを見む 九一—九三
 しかはあれ、神の聖旨みむねによりてヨルダンの退り海しぎの逃ぐるは、救
 ひをこゝに見るよりもなほ異あやしと見えしなるべし。 九四—九六
 かく我に曰ひて後、かれその侶に加はれり、侶は互に寄り近づけ
 り、しかして全衆あたかも旋風の如く上に昇れり 九七—九九
 うるはしき淑女はたゞ一の表示しるしをもて我を促うながし彼等につゞいて
 かの梯子はしごを上らしむ、その力かくわが自然に勝ちたりき 一〇〇

また人の昇のほりくだり降するに當りて自然に従ふ處なるこの下界にては、
 動くこといかに速かなりともわが翼に此たぐふに足たらじ 一〇三—一

〇五

讀者よ（願はくはかの聖なる凱旋にわが歸るをえんことを、我こ
 れを求めて屢 わが罪に泣き、わが胸を打つ） 一〇六—一〇八
 わがかの金牛に續く天宮を見てその内に入りしごとく早くは汝あに豈
 指を火に入れて引かんや 一〇九—一一一

あゝ榮光の星よ、大いなる力滿つる光よ、我は汝等よりわがすべ
 ての才（そはいかなるものなりとも）の出づるを認む 一一二—

一一四

我はじめてトスカーナの空氣を吸ひし時、一切の滅ぶる生命いのちの父

なる者、汝等と共に出で汝等とともに隠れにき 一一五——一七

後ゆたかなる恩恵めぐみをうけ、汝等をめぐらす貴き天に入りし時、我

は圖はからずも汝等の處に着けり 一一八——一二〇

汝等にこそわが魂は、これを己が許もとに引くその難所をば超こゆるに

適ふさはしき力をえんとて、今うやくくしく嘆願なげなれ 一二一——

二三

ベアトリーチエ曰ふ。汝は汝の目を瞭あきらかにし鋭くせざるをえざるほ

ど、終極いやはての救ひに近づけり 一二四——一二六

されば汝が未だこれに入らざるさきに、俯うつき望みて、いかばかり

の世界をばわがすでに汝の足の下におきしやを見よ 一二七——

二九

ぐんじゆう

まろ

これ凱旋の群衆喜ばしくこの圓き天をわけ來るとき、樂しみ
 極まる汝の心のこれに現はれんためぞかし。 一三〇—一三二

われ目を戻して七の天球をこと／＼く望み、さてわが球のさま
 を見てその劣れる姿のために微笑めり 一三三—一三五

しかしてこれをばいと賤しと判ずる心を我はいと善しと認む、思

ひを他の物にむくる人はげに直しといふをえむ 一三六—一三八

我はラートナの女がかの影（さきに我をして彼に粗あり密ありと

思はしめたる原因なりし）なくて燃ゆるを見たり 一三九—一四

一

イペリオネよ、こゝにてわが目は汝の子の姿に堪へき、我またマ

シアとデイオネとが彼の周邊にかつ彼に近く動くを見たり 一四

二——一四四

次に父と子との間にてジオーヴェエの和ぐるやはらるを望み、かれらがその處をば變ふる次第を明らかにしき 一四五——一四七

しかして凡て七すべなの星は、その大いさとそのはやさとその住處すまひの隔たるさまとを我に示せり 一四八——一五〇

われ不朽の雙兒とともにめぐれる間に、人をしていと猛あくならしむる小うちばさき麥場、山より河かはぐち口にいたるまで悉ことごとく我に現はれき

一五一——一五三

かくて後我は目をかの美しき目にむかはしむ 一五四——一五六

第二十三曲

物見えわかぬ夜の^{よるあひだ}間、なつかしき木の葉のうちにて、己がいつく

しむ雛とともに巢に休みゐたる鳥が 一—三

かれらの慕はしき姿を見、かつかれらに食^{くら}はしむる物をえん—

これがためには大いなる勞苦も樂し—とて 四—六

時ならざるに梢にいたり、曉の生るゝをのみうちまもりつゝ、燃

ゆる思ひをもて日を待つごとく 七—九

わが淑女は、頭^{かうべ}を擧げ心をとめて立ち、日脚^{ひあし}の最も遅しとみゆる

ところにむかへり 一〇—一二

されば彼の待ち憧るゝを見、我はあたかも願ひに物を求めつゝ希^の
望^{ぞみ}に心を足^{たら}はす人の如くになれり 一三一—一五

されど彼と此との二の時、即ちわが待つことゝ天のいよく赫^{かゞや}く
を見ることゝの間はたゞしばしのみなりき 一六一—一八

ベアトリーチエ^い曰ふ。見よ、クリストの凱旋の軍を、またこれら
の球^{めくり}の 轉^{めぐり}よりて刈取られし一切の實^みを。 一九—二一

淑女の顔はすべて燃ゆるごとく見え、その目にはわが語らずして
已^やむのほかなき程に大いなる喜^{よろこび}悦満てり 二二—二四

澄^{すみ}わたれる望^{もちづき}月の空に、トリヴィアが、天^{ふとこ}の懷^{ころ}をすべて彩色^{いろど}る
永^{とこしへ}遠^へのニンフェにまじりてほゝゑむごとく 二五—二七

我は千^{ちぢ}の燈^{とも}火^{しび}の上に一の日輪ありてかれらをこと／＼く燃^{もや}し、

その状さまわが日輪の、星におけるに似たるを見たり 二八―三〇

しかしてかの光る者その生くる光を貫いていと燦あざやかにわが顔を照

らしたれば、わが目これに堪たふるをえざりき 三一―三三

あゝベアトリーチェわがうるはしき慕はしき導者よ、彼我に曰ふ。

汝の視力に勝つものは、防ぐに術すべなき力なり 三四―三六

こゝにこそ、天地あめつちの間の路を開きてそのかみ人のいと久しく願

ひし事をかなへたるその知慧と力とあるなれ。 三七―三九

たとへば火が雲の容いるゝ能あたはざるまで延びゆきて遂にこれを破り、

その性さがに背そむきて地にくだるごとく 四〇―四二

わが心はかの諸もてなしの饗もてなしのためにひろがりて己を離れ、そのいかに

なりしやを自ら思ひ出で難し 四三―四五

いざ目を啓ひらきてわが姿を見よ、汝諸の物を見てはやわが微笑ほゝゑみに

堪ふるにいたりたればなり。 四六―四八

過こしかた去しるを録ふみす書の中より消失することなきほどの感謝をば受くる

にふさはしきこの勸すゝめを聞きし時 四九―

我はあたかも忘れし夢をその名残によりて心に浮べんといたづら
に力つとむる人のごとくなりき ― 五四

たとひポリンニアとその姉妹達とがかれらのいと甘き乳をもてい
とよく養ひし諸の舌今こぞ擧りて鳴りて 五五―五七

我を助くとも、聖なる微笑ほゝゑみとそがいかばかり聖なる姿を燦あざやかにせ

しやを歌ふにあたり、眞まことの千分ぶ一にも到らじ 五八―六〇

是故に天堂を描く時、この聖なる詩は、行手ゆくての道の斷きれたるを見

る人のごとく、をどり跳越えざるをえざるなり 六一—六三

されど題テーマの重きことゝ人間の肩のこれを負おふことゝを思はゞ、た

とひこれが下にてゆるぐとも、誰しも肩を責めざるならむ 六四

—六六

この勇ましき舳へさきのわけゆく路は、小舟またはほねをしみする舟ふなび

人の進みうべきところにあらじ 六七—六九

汝何ぞわが顔をのみいたく慕ひて、クリストの光の下もとに花咲く美

しき園をかへりみざるや 七〇—七二

かしこに薔薇あり、こはその中なかにて神の言肉ことばとなり給へるもの、

かしこに諸の百合あり、こはその薰かをりにて人に善道よきみちをとらしめ

しもの。 七三—七五

ベアトリーチエかく、また我は、その勸すゝめに心すべて傾きゐたれば、

再び身を弱まなこき眼の戦いくさに委ゆだねき 七六―七八

日の光雲間くもまをわけてあざやかに映さす花の野を、わが目嘗かつて陰に蔽

はれて見しことあり 七九―八一

かくの如く、燃ゆる光に上より照らされて輝く者のあまたの群むれを

我は見き、その輝の本を見ずして 八二―八四

あゝかくかれらに印影かたを捺おす慈愛の力よ、汝は力足らざる目にそ

の見るをりをえしめんとて自ら高く昇れるなりき 八五―八七

あさなゆふなわが常に呼びまつる美しき花の名を聞き、我わが魂

をこと／＼くあつめて、いと大いなる火をみつむ 八八―九〇

しかして下界にて秀でしごとく天上にてもまた秀づるかの生くる

星の質と量とがわが二の目に描かれしとき 九一—九三

天の奥より冠の如き輪形わがたを成せる一の燈とも火降りてこの星を巻き、

またこれが周圍まはりをめぐれり 九四—九六

世にいと妙たへにひゞきて魂をいと強く惹ひく調しらべといふとも、かの琴—

—いとあぎやかなる天を飾る 九七—

かの美しき碧あをだま玉の冠となりし——の音にくらぶれば、雲の裂け

てとゞろくごとく思はるべし —一〇二

われはこれ天使の愛なり、われらの願ひの宿やどなりし胎たいよりいづる

そのたふとき悦びを我今めぐる 一〇三—一〇五

我はめぐらむ、天の淑女よ、汝みこ爾子のあとを逐ひゆき、至いとたかきき高

球うをして、汝のこれに入るにより、いよく聖ならしむるまで。

一〇六一—一〇八

めぐりつゝかくうたひをはれば、他の光はすべてマリアの聖名を

唱へりとな 一〇九—一一一

宇宙の諸天をこと／＼く蔽ひ、神の聖息みいきと法のりとをうけて熱いと

強く生氣さかんいと旺おうなる王衣おうのころもは 一一二—一一四

その内面うちがはわれらを遠く上方うへに離れるたるため、わがをりし處に

ては、その状未さまだ我に見えねば 一一五—一一七

冠を戴きつゝ己が子のあとより昇れる焰に、わが目ともなふあた

はざりき 一一八—一二〇

しかしてたとへば、乳を吸ひし後、愛燃えて外そとにあらはれ、腕かひなを

母かたの方に伸のぶる稚兒をさなごのごとく 一二一—一二三

これらの光る火、いづれもその焰を上方に伸べ、それがマリアにむかひていだく尊き愛を我に示しき 一二四—一二六

かくてかれらはレーギーナ・コイリーをうたひつゝわが眼前に残りゐたり、その歌いと妙にしてこれが喜び一度も我を離れしことなし 一二七—一二九

あゝこれらの最も富める櫃に——こは下界にて種を蒔くに適はしき地なりき——收めし物の豊かなることいかばかりぞや 一三〇

—一三二

こゝにはかれらそのバビローニアの流刑に泣きつゝ黄金をかしこに棄てゝえたる財寶にて生き、かつこれを樂しむ 一三三—一三

五

こゝにはいと大いなる榮光の鑰を保つ者、神の、またマリアの尊

き子の下もとにて、舊新二つの集會つどひとともに 一三六一

その戰勝かちいくさを祝ふ 一四一

第二十四曲

あゝ尊こひつじき羔（彼汝等に食を與へて常に汝等の願ひを満たす）の大
 いなる晩餐ゆふげに選ばれて列る侶等よ 一—三

神の恩惠めぐみにより、此人汝等の食卓つくゑより落つる物をば、死が未だ彼
 の期ときを定めざるさきに豫あらかじめ味ふなれば 四—六

心をかれのいと深き願ひにとめ、少しくかれを露うるにて潤ほせ、汝
 等は彼の思ふ事の出づる本もとなる泉の水をたえず飲むなり。 七—

九

ベアトリーチェかく、またかの喜べる魂等は、動かざる軸つらぬの貫く

球となりて、そのはげしく燃ゆることあたかも 彗^{はうきぼし} 星に似たり

き 一〇——二

しかして時辰儀^{じしんぎ}にては、その装置^{しかけ}の輪^{めぐ}るにあたり、これに心を

とむる人に、初めの輪しづまりて終りの輪飛ぶと見ゆるごとく

一三——一五

これらの球は、或は速く或は遅くさま／＼に舞ひ、我をしてか
れらの富を量^{はか}るをえしめき 一六——一八

さていと美しと我に見えし球の中より一の火出づ、こはいと福な
る火にて、かしこに残れる者一としてこれより燦^{あざやか}なるはなかりき

一九——二一

この火歌ひつゝベアトリーチエの周^{まはり}邊をめぐること三度^{たび}、その歌

いと聖なりければ我今心に浮べんとすれども効なし 二二—二四
 是故にわが筆跳をどりこ越えてこれを録しるさじ、われらの想像は、況まして言
 葉は、かゝる襞ひだにとりて色明あかるきに過ればなり 二五—二七

あゝかくうやくしくわれらに請ふわが聖なる姉妹よ、汝の燃ゆる
 愛によりて汝は我をか的美しき球より解けり。 二八—三〇
 かの福なる火は、止まりて後、息いきをわが淑女に向けつゝ、わがい
 へるごとく語れるなりき 三一—三三

この時淑女。あゝわれらの主がこの奇くしき悦びの鑰かぎ（下界に主の
 齎もたらし給ひし）を委ゆたね給へる丈夫ますらをの永遠とこしへの光よ 三四—三六
 嘗かつて汝に海の上を歩ましめし信仰に就き、輕き重き種さま々々の事
 をもて、汝の好むごとく彼を試みよ 三七—三九

彼善く愛し善く望みかつ信ずるや否や、汝これを知る、そは汝目をよろづのもの萬物の描かれて視ゆるところにとむればなり 四〇—四二
されどこの王國が民を得たるは眞まことの信仰によるがゆゑに、これに榮光あらしめんため、これの事を語る機をりの彼に來るを宜むべとす。

四三—四五

あたかも學士が、師の問を發おこすを待ちつゝ、これを論あげはんため——これを決きむるためならず——默もだして備を成すごとく 四六—四八

我はかゝる問者に答へかつかゝる告白をなすをえんため、淑女の語りゐたる間に、一切ことほりの理をもて備を成せり 四九—五一

いへ、良クリステイアーノき基督教徒よ、汝の思ふ所を明あかせ、そもく信仰といふは何ぞや。我即ち頭かうべを擧げてこの言ことばの出でし處なる光を見 五二

—五四

後ベアトリーチエにむかへば、かれ直に我に示してわが心の泉より水を注ぎいださしむ 五五—五七

我曰ふ。大いなる長の前をきにてわがいひあらはすを許す恩恵めぐみ、願はくは我をしてよくわが思ひを述ぶるをえしめよ。 五八—六〇

かくて續いて曰ふ。父よ、汝とともに、ローマを正しき路に就かせし汝の愛する兄弟の、眞まことの筆の録しるすごとく 六一—六三

信仰とは望まるゝ物の基見えざる物の證あかしなり、しかして是その本質と見ゆ。 六四—六六

是時聲曰ふ。汝の思ふ所正し、されど彼が何故にこれをまづ基の中に置き、後證あかしの中に置きしやを汝よくさとるや否いなや。 六七—

六九

我即ち。こゝにて我にあらはるゝもろくの奥深き事物も、全く下界の目にかくれ 七〇—七二

かしこにてはその在りとせらるゝことたゞ信によるのみ、人この信の上に高き望みを築くがゆゑに、この物即ち基に當る 七三—

七五

また人他ほかの物を見ず、たゞこの信によりて理ことわらざるをえざるがゆゑに、この物即ち證あかしにあたる。 七六—七八

是時聲曰ふ。凡そ教へによりて世に知らるゝものみなかくの如く解げせられんには、詭辯者の才かしこに容れられざるにいたらむ。

七九—八一

かくかの燃ゆる愛言ことばに出いだし、後加ふらく。この貨幣まぜものの混合物とそ
の重さとは汝既にいとよく檢しらべぬ 八二―八四

されどいへ、汝はこれを己が財布の中に有もつや。我即ち。然り、
それを鑄いし様さまに何の疑はしき事もなきまで光りて圓まるし。 八五―八

七

この時、かしこに輝きゐたるかの光の奥より聲出で、いふ。一切
の徳いしずゑの礎いしなるこの貴き珠は 八八―九〇

そもく、いづこより汝の許もとに來れるや。我。舊新二種の皮の上に
ゆたかに注ぐ聖靈の雨は 九一―九三

これが眞まことを我に示し、論法にて、その鋭くきに此くらぶれば、いかなる
證明も鈍にぶしとみゆ。 九四―九六

聲次ついでで曰ふ。かく汝に論決せしむる舊新二つの命題を、汝が神の
 言ことばとなすは何故ぞや。 九七—九九

我。この眞理を我に現はす所の證あかしが、ともなへる諸の業わざ（即ち
 自然がその爲鐵くろがねを燒きまたは鐵床かなしきを打しことなき）なり 一〇
 〇—一〇二

聲我に答ふらく。いへ、これらの業の行はれしを汝に定かならし
 むるものは誰ぞや、他なし、自ら證あかしを求むる者ぞ汝にこれを誓ふ
 なる。 一〇三—一〇五

我曰ふ。奇蹟なきに世キリストの教へに歸依きえせば、是かへつて一
 の大いなる奇蹟にて、他の凡ての奇蹟はその百分一ぶにも當らじ
 一〇六—一〇八

そは汝、貧しく、饑^うゑつゝ、畠^{はた}に入り、良木^{よきき}の種を蒔^まきたればな
 り（この木昔^{ふどう}葡萄なりしも今^{いばら}荆棘となりぬ）。一〇九―一一一
 かくいひ終れる時、尊き聖なる宮^{みやびと}人等、天上の歌の調妙^{しらたへ}に、
 「われら神を讚美す」と歌ひ、諸の球に響きわたらしむ 一一

二―一一四

しかして問^{とひたゞ}質^{たゞ}しつゝかく枝より枝に我をみちびき、はや我とと
 もに梢に近づき^{をさ}る長^{をさ} 一一五―一一七

重ねて曰ふ。汝の心と契^{ちぎ}る恩惠^{めぐみ}、今までふさはしく汝の口を啓^{ひら}け
 るがゆゑに 一一八―一二〇

我は出でしものを可^{よし}とす、されど汝何を信ずるや、また何により
 てかく信ずるにいたれるや、今これを我に述べべし。 一二一―

一二三

我日ふ。あゝ聖なる父よ、墓の邊ほとりにて若わかき足に勝ちしほどかたく
 信じみたりしものを今見る靈よ 一二四—一二六

汝は我にわがとくいだける信の本體をこゝにあらはさんことを望
 み、かつまたこれがゆるゑよしを問ふ 一二七—一二九

わが答は是なり、我はひとりのかみ一 神、たゞひとり唯 一 にて永とこしへ遠にいまし、

愛と願ひとをもてすべての天を動かしつゝ自ら動かざる神を信ず

一三〇—一三二

しかして、かゝる信仰に對しては、我に物理哲理あかしの證あるのみな
 らじ、モイゼ、諸の豫言者、詩篇、聖傳 一三三—

及び汝等即ち燃ゆる靈に淨められし後書かきしる録せる人々によりこゝ

より降ふりくだ下る眞理もまた我にこの信を與ふ——一三八

我また永とこしへ遠の三位を信ず、しかしてこれらの本もとは一、一にして

三なれば、おしなべてソノといひエステといふをうるを信ず——

三九—一四一

わがいふところの奥深き神のさまをば、福音の教へいくたびもわが心に印す——一四二—一四四

是ぞ源、是ぞ火花、後延びて強き炎となり、あたかも天そらの星のごとくわが心に煌めくものなる。——一四五—一四七

己を悦ばす事を聞く主しゆが、僕しもべやがて黙もだすとき、その報知しらせにめで、直ちにこれを抱くごとく——一四八—一五〇

かの使徒の光——我に命じて語らしめし——は、わが黙しゝ時、

直ちに歌ひて我を祝しつゝ、三度わが周圍をめぐれり 一五一—
わが言ことばかくその意こゝろに適かなへるなりき。 — 一五六

第二十五曲

年久しく我を窶^{やつ}れしむるほど天地^{あめつち}ともに手を下し、聖なる詩、

もしかの麗はしき圈^{をり}—— ——

かしこに軍^{いくさ}を起す狼どもの敵^{あだこひつじ}、羔としてわが眠りゐし處——より

我を閉^しめ出す^{いだ}その残忍に勝つこともあらば —— 一六

その時我は變れる聲と變れる毛とをもて詩人として歸りゆき、わ
が洗^{バツテスモ}禮の盤のほとりに冠を戴かむ 七——九

そは我かしこにて、魂を神に知らすものなる信仰に入り、後ピエ
ートロこれが爲にかくわが額^{ひたひ}の周圍^{まはり}をめぐりたればなり 一〇——

一二

クリストがその代理者の初果はつなりとして残し、者の出でし球より、

このとき一の光こなたに進めり 一三一—一五

わが淑女いたく悦びて我にいふ。見よ、見よ、かの長をさを見よ、か

れの爲にこそ下界にて人ガーリツイアに詣まうづるなれ。 一六一—一八

鳩その侶ともの傍かたへに飛びくだるとき、かれもこれめぐもりつゝさゝやき

つゝ、互かたみに愛をあらはすごとく 一九—二一

我はひとりの大いなる貴き君が他のかゝる君に迎へられ、かれら

を飽あかしむる天上の糧かてをばともに讃ほめ稱たふるを見き 二二—二四

されど會えしやく繹終れる時、かれらはいづれも、我に顔を垂たれしむる

ほど強く燃えつゝ、黙もたしてわが前にとゞまれり 二五—二七

是時ベアトリーチエほゝゑ微笑みて曰ふ。われらの王宮の恵みのゆたかなるを録しるし、なだゝる生命いのちよ 二八―三〇

望みをばこの高き處に響き渡らすべし、汝知る、イエスが、己をいとよく三人みたりに顯はし給ひし毎に、汝のこれを象かたどれるを。 三一

―三三三

頭かうべを擧げよ、しかして心を強くせよ、人の世界よりこゝに登り來るものは、みなわれらの光によりて熟せざるをえざればなり。

三四―三六

この勵ことばます言第二の火よりわが許もとに來れり、是においてか我は目を擧げ、かの先に重きに過ぎてこれを垂たれしめし山を見ぬ

恩惠めぐみによりてわれらの帝みかどは、汝が、未だ死なざるさきに、その諸

の伯達きみたちと内殿に會ふことを許し 四〇—四二

汝をしてこの王宮の眞まことのさま状を見、これにより望み即ち下界に於て正しき愛を促うながすものをば、汝と他ほかの人々の心に、強むるをえしめ給ふなれば 四三—四五

その望みの何なりや、いかに汝の心に咲くや、またいづこより汝の許に來れるやをいへ。第二の光續いてさらにかく日へり 四六—四八

わが翼の羽を導いてかく高く飛ばしめしかの慈悲深き淑女、是時我より先に答へていふ 四九—五一

わが軍を遍あまねく照らすかの日輪しるに録しるさるゝごとく、戦鬪たゝかひあづかに參る寺院にては彼より多くの望みをいだく子一人ひとりだになし 五二—五四

是故にかれは、その軍役いくさのつとめを終へざるさきにエジプトを出で、

イエルサレムメに來りて見ることを許さる 五五―五七

さて他の二の事、即ち汝が、知らんとてならず、たゞ彼をしてこの徳のいかばかり汝の心に適ふやを傳へしめんとて問ひし事は

五八―六〇

我是を彼に委ぬゆだ、そは是彼に難からず虚榮の本もととならざればなり、

彼これに答ふべし、また願はくは神恩かみのめぐみ彼にかく爲すなをえしめ

給へ。六一―六三

あたかも弟子が、その精くわしく知れる事においては、わが才能ちからを現はさんため、疾とくかつ喜びて師に答ふるごとく 六四―六六

我曰ひけるは。望みとは未來の榮光かたの確たき期待にて、かゝる期待

は神の恩恵めぐみと先立つ功德より生ず 六七―六九

この光多くの星より我許わがもとに來れど、はじめてこれをわが心に注
げるは、最いとおほ大いなる導者を歌へる最大いなる歌人うたびとたりし者な

りき 七〇―七二

かれその聖歌の中にいふ、爾名みなを知る者は望みを汝におくべしと、
また誰か我の如く信じてしかしてこれを知らざらんや 七三―七

五

かれの雫しづくとともに汝その後書のちづみのうちにて我にこれを滴したらし、我を
して満たされて汝等の雨を他ほかの人々にも降らさしむ。 七六―七

八

わが語りゐたる間、かの火の生くる懐ふところのうちにとある閃ひらめき、俄にか

つ屢 顛ふるひ、そのさま電いなづま光まの如くなりき 七九—八一

かくていふ。棕櫚しゆろをうるまで、戦いくさ場のにはを出づる時まで、我にと

もなへる徳にむかひ今も我を燃もやす愛 八二—八四

我すに勧めて再び汝——この徳を慕ふ者なる——と語らしむ、され

ば請ふ、望みの汝に何を約するやを告げよ。 八五—八七

我。新舊二つの聖みふみしるし經標を建たつ、この標こそ我さししめにこれを指さししめ示めす

なれ、神が友となしたまへる魂につき 八八—九〇

イザヤは、かれらいつれも己が郷ふるさと土にて二重ふたへの衣を着るべしと

いへり、己が郷土とは即ちこのうるはしき生の事なり 九一—九

三

また汝の兄弟は、白しろきころも衣ののことを述べしところにて、さらに詳つまび

らかにこの黙示をわれらにあらはす。 九四―九六

かくいひ終れる時、スペーレント・イン・テーまづわれらの上に
聞え、舞ふ者こと／＼くこれに和したり 九七―九九

次いでかれらの中にて一の光いと強く輝けり、げにもし巨蟹宮に
一のかゝる水晶あらば、冬のひとつき月はたゞ一の晝とならむ 一〇

〇―一〇二

またたとへば喜ぶをとめ處女が、その短處おちどの爲ならず、たゞ新婦はなよめの祝
ひのために、起たち、行き、踊りに加はるごとく 一〇三―一〇五
かの輝く光は、己が燃ゆる愛に應じて圓くめぐれる二の光の許もとに
來れり 一〇六―一〇八

かくてかしこにて歌と節とを合はせ、またわが淑女は、黙もだして動

かざる新婦はなよめのごとく、目をかれらにとむ 一〇六一—一〇八

こは昔われらの伽藍鳥ペルリカーノの胸よに倚りし者、また選ばれて十字架の

上より大いなる務ゆだを委ねられし者なり。 一一二—一一四

わが淑女かく、されどその言ことばのためにその目を移さず、これをか

たとむることいはざる先の如くなりき 一一五—一一七

瞳を定めて、日の少しく虧かくるを見んと力つとむる人は、見んとてか

へつて見る能はざるにいたる 一一八—一二〇

わがかの最後の火におけるもまたかくの如くなりき、是時聲曰ふ。

汝何ぞこゝに在らざる物を視んとて汝の目を眩まばゆうするや 一二一—

一二三

わが肉體は土にして地にあり、またわれらの數かずが永遠とこしへの聖旨みむねに

配^そふにいたるまでは他の肉體と共にかしこにあらむ 一二四—一

二六

二襲^{かさね}の衣を着つゝ尊き僧院にあるものは、昇りし二の光のみ、汝

これを汝等の世に傳ふべし。 一二七—一二九

かくいへるとき、焰の舞は、三の氣吹^{いぶき}の音^{おと}のまじれるうるはしき

歌とともにしづまり 一三〇—一三二

さながら水を掻き^{かひ}るたる權^{つかれ}が、疲勞^{つかれ}または危き事を避けんため、

一の笛の音^ねとともにみな止まる如くなりき 一三三—一三五

あゝわが心の亂れいかなりしぞや、そは我是時身を轉^{めぐ}らしてべア

トリ—チエを見んとせしかど（我彼に近くかつ福の世にありなが

ら） 一三六—

見るをえざりければなり
— 一四一

第二十六曲

わが視力の盡きしことにて我危ぶみゐたりしとき、これを盡きし
めしかの輝く焰より一の聲出で、わが心を惹けり 一—三

曰ふ。我を見て失ひし目の作用はたらきをば汝の再び得るまでは、語り
てこれを償つぐふをよしとす 四—六

さればまづ、いへ、汝の魂何處いづこをめざすや、かつまた信ぜよ、汝
の視力は亂れしのみにて、滅び失せしにあらざるを 七—九

そは汝を導いてこの聖地を過ぐる淑女は、アナーニアの手の有も
る力を目にもてばなり 一〇—一二

我曰ふ。おそきはやく遅速を問はずたゞ彼の心のまゝにわが目癒ゆべし、

こは彼が、絶えず我を燃もやす火をもて入來りし時の門なりき 一三

一一五

さてこの王宮を幸さきはふ善こそ、或は低く或は高く愛のわが爲に讀む
かぎりの文字もじのアルファにしてオメガなれ。 一六一—一八

目の俄にくらめるための恐れを我より取去れるその聲、我をして
重ねて語るの意を起さしむ 一九—二一

その言ことばに曰ふ。げに汝はさらに細かき篩にて漉さゞるべからず、
誰たが汝の弓をかゝるまと的まとに向けしめしやをいはざるべからず。 二

二—二四

我。哲理の論ずる所によりまたこゝより降る權威によりて、かゝ

る愛は、我に象かたを捺おさざるべからず 二五—二七

これ善は、その善なるかぎり、知らるゝとともに愛を燃もし、かつ

その含む善の多きに從ひて愛また大いなるによる 二八—三〇

されば己の外に存する善がいづれもたゞ己の光の一線すぢに過ぎざる

ほど勝すぐるゝ者に向ひては 三一—三三

この證あかしもとるの基なる眞理をわきまふる人の心、他の者にむかふ時にま

さりて愛しつゝ進まざるをえじ 三四—三六

我に凡ての永とこしへ遠の物の第一の愛を示すもの、かゝる眞理をわが

智あかに明し 三七—三九

眞まことの作者、即ち己が事を語りて我汝に一切の徳を見すべしとモイ

ぜにいへる者の聲これを明し 四〇—四二

汝も亦、かの尊き公布ふれにより、他のすべての告示しらせにまさりて、この秘密を下界とに徇となへつゝ、我にこれを明すなり。 四三―四五

是時聲曰ふ。人智及びこれと相和する權威によりて、汝の愛のうちの最大いとなるもの神にむかふ 四六―四八

されど汝は、神の方に汝を引寄する綱かたのこの外ほかにもあるを覺ゆるや、請ふ更にこれを告げこの愛が幾個いくつの齒にて汝を噛むやを言いひあ

現らはすべし。 四九―五一

クリストの驚の聖なる思ひ隠れざりき、否いな我はよく彼のわが告白をばいづこに導かんとせしやを知りて 五二―五四

即ちまたいひけるは。齒をもて心を神に向はしむるをうるもの、みなわが愛と結び合へり 五五―五七

そは宇宙の存在、我の存在、我を活かしめんとて彼の受けし死、及び凡そ信ずる人の我と等しく望むものは 五八―六〇

先に述べし生くる認識とともに、我を悖もとれる愛の海より引きて、

正しき愛の岸に置きたればなり 六一―六三

永遠とこしへの園にはつくり 丁の園にあまねく茂る葉を、我は神がかれらに授

け給さいはひふ幸の度に従ひて愛す。 六四―六六

我もた黙しゝとき、忽ち一のいとうるはしき歌天に響き、わが淑女全

衆に和して、聖なり聖なり聖なりといへり 六七―六九

鋭き光にあへば、物視る靈が、膜より膜に進み入るその輝に馳せ

向ふため、眠り覺まされ 七〇―七二

覺めたる人は、判ずる力己を助くるにいたるまで、己が俄にさめ

し次第を知らで、その視る物におびゆるごとく 七三―七五

ベアトリーチエは、千哩ミリアの先をも照らす己が目の光をもて、一切の埃ほこりをわが目より拂ひ 七六―七八

我は是時前よりもよく見るをえて、第四の光のわれらとともにあるを知り、いたく驚きてこれが事を問へり 七九―八一

わが淑女。この光の中には、第一の力のはじめて造れる第一の魂その造つくりぬし主を慕ふ。 八二―八四

たとへば風過ぐるとき、枝はその尖さきを垂たるれど、己が力に擡もたげられて、後また己を高むるごとく 八五―八七

我は彼の語れる間、いたく異あやしみて頭かうべを低たれしも、語るの願ひに燃されて、後再び心を強うし 八八―九〇

日ひけるは。あゝ熟して結べる唯一たゞひとつこのみの果實よ、あゝ新婦はなよめといふ

新婦むすめを女子婦むすめに有つ昔の父よ 九一—九三

我いとうやくしく汝に祈ねぐ、請ふ語れ、わが願ひは汝の知ると

ころなれば、汝の言ことばを疾く聞かとんため、我いはじ。 九四—九六

獸包まれて身を揺ゆりうご動し、包む物またこれとともに動くがゆゑ

に、願ひを現はさざるををえざることあり 九七—九九

かくの如く、第一の魂は、いかに悦びつゝわが望みに添はんとせ

しやを、その蔽物おほひによりて我に示しき 一〇〇—一〇二

かくていふ。汝我に言現はさずとも、わが汝の願ひを知ること、

およそ汝にいと明らかなることを汝の知るにもまさる 一〇三—

こは我これを眞まことの鏡——この鏡萬物を己うつつに映せど、一物としてこれを己うつつに映すはなし——に照して見るによりてなり 一〇六—一

〇八

汝の聞かんと欲するは、この淑女がかく長きぎき階はしをば汝きぎはしに昇るをえしめし處なる高き園の中に神の我を置給ひしは幾いくとせ年前さきなりしや

といふ事 一〇九—一一一

これがいつまでわが目の樂なりしやといふ事、大いなる憤いきどほの眞まことの原因もと、またわが用ゐるわが作れる言葉の事即ち是なり 一一二—一

一四

さて我子よ、かの大いなる流刑るけいの原因もとは、木實このみを味あぢへるその事ならで、たゞ分を超こえたることなり 一一五—一一七

我は汝の淑女がヴィルジリオを出立いでたしめし處にありて、四千三

百二年の間この集會つどひを慕ひたり 一一八—一二〇

また地に住みし間に、我は日が九百三十回、その道にあたるすべ

ての光に歸るを見たり 一二一—一二三

わが用ゐし言葉は、ネムプロットの族やからつがかの成し終へ難き業わざを試

みしその時よりも久しき以前さきに悉く絶えにき 一二四—一二六

そは人の好む所天にともなひて改まるがゆゑに、理性より生じて

しかして永遠とこしへに續くべきもの未だ一つだにありしことなければ

なり 一二七—一二九

抑 《そもく》人の物言ふは自然の業わざなり、されどかく言ひか

くいふことは自然これを汝等に委ねゆだ汝等の好むまゝに爲さしむ

一三〇—一三二

わが未だ地獄に降りて苦しみをうけざりしさきには、我を裏む喜つよ
ろこび

悦もとの本なる至上の善、世にてIイと呼ばれ 一三三—一三五

その後EエLルと呼ばれにき、是亦うべ宜なり、そは人の習ならはし慣は、さな
 がら枝の上なる葉の、彼散りて此生ずるに似たればなり 一三六

—一三八

かの波の上いと高く聳そびゆる山に、罪なくしてまた罪ありてわが住
 みしは、第一時より、日の象しやうげん限を變ふるとともに 一三九—
 第六時に次ぐ時までの間なりき。 —一四四

第二十七曲

父に子に聖靈に榮光あれ。天堂てんぞう舉りてかく唱となへ、そのうるはしき
 歌をもて我を酔はしむ 一—三

わが見し物は宇宙の一微笑ひとゑみのごとくなりき、是故にわが酔耳ゑひより
 も目よりも入りたり 四—六

あゝ樂しみよ、あゝいひがたき歡びよ、あゝ愛と平和とより成る
まつた完き生よ、あゝ慾なき恐れなき富よ 七—九

わが目の前には四の燈よつ火燃えゐたり、しかして第一に來れるも
 のいよくあぎやかになり 一〇—一二

かつその姿を改めぬ、ジョーヴェ木星もしマルテ火星とともに鳥にして羽を交と

りかは換しなば、またかくの如くなるべし 一三一—一五

ついで次序と任務とをこゝにてわか頒ち與ふる攝理、よも四方の聖徒達をしてし

づかならしめしとき 一六一—一八

わが聞ける言ことばにいふ。われ色を變ふと雖もあや異しむなか莫れ、そはわが

語るを聞きて是等の者みな色を變ふるを汝見るべければなり 一

九—二一

わが地位、わが地位、わが地位（神の子のみまへ聖前にては今もむな空し）

を世にて奪ふ者 二二—二四

わがはかどころ墓所をば血とけがれ穢との溝となせり、是においてか天上より

墮おちしもと悖れる者も下界に己が心を和らぐ。 二五—二七

是時我は、日と相對ふによりて朝夕に雲を染めなす色の、遍く

天に漲るを見たり 二八—三〇

しかしてたとへばしとやかなる淑女が、心に怖るゝことなけれど、

他人の過失をたゞ聞くのみにてはぢらふごとく 三一—三三

ベアトリーチエは容貌を變へき、思ふに比類なき威能の患み給ひ

し時にも、天かく暗くなりしなるべし 三四—三六

かくてピエートロ、容貌の變るに劣らざるまでかはれる聲にて、

續いて曰ふ 三七—三九

抑 クリストの新婦を、わが血及びリーン、クレートの血にて

はぐゝめるは、これをして黄金をうるの手段たらしめん爲ならず

否いなこの樂しき生を得ん爲にこそ、シストもピオもカーリストもウ
 ルバーノも、多くの苦患なやみの後血を注げるなれ 四三―四五
 クリステイアーニ
 基督教徒なる民の一部我等の繼承者けいしやうじやの右に坐し、その一
 部左に坐するは、われらの志しゝところにあらじ 四六―四八
 我に委ゆだねられし鑰かぎが、受洗者じゆせんじやと戦ふための旗のしるしとなるこ
 ともまた然しかり 四九―五一
 我を印かたの象となして、赢利虚妄えいりきよまうの特典に捺おし、われをして屢
 かつ恥ぢかつ憤おこらしむることも亦然り 五二―五四
 こゝ天上より眺むれば、牧者の衣を着たる暴あき狼いた隨處いたるところの牧場まきば
 に見ゆ、あゝ神の擁護みまもりよ、何ぞ今も起たたざるや 五五―五七
 カオルサ人等びととグアスコニア人等、はや我等の血を飲まんとす、

ああ善き始めよ、汝の落行先おちゆくさきはいかなる悪しき終りぞや 五八

—六〇—

されど思ふに、シピオによりローマに世界の榮光を保たしめたる
尊き攝理、直ちに助け給ふべし 六一—六三

また子よ、汝は肉體の重さのため再び下界に歸るべければ、口を
啓ひらけ、わが隠ひらさぐる事を隠なかす莫なれ。 六四—六六

日輪天の磨羯まかつの角つのに觸るゝとき、凍こほれる水氣片ひらを成してわが世の
空そらより降るごとく 六七—六九

我はかの飾れる精氣より、さきにわれらとともにかしこに止まれ
る凱旋がいせんの水氣片ひらをなして昇るを見たり 七〇—七二

わが目はかれらの姿にともなひ、間あはひの大いなるによりさらに先を

見るをえぎるにいたりてやみぬ 七三―七五

是においてか淑女、わが仰ぎ見ざるを視、我にいふ。目を垂れて

汝のめぐれるさまを見るべし。 七六―七八

我見しに、はじめわが見し時より以このかた來、我は第一帶の半よりそ

の端はしに亘る弧線アルコを悉くめぐり終へるたり 七九―八一

さればガードのあなたにはウリツセの狂くるほしき船路見え、近くこな

たには、エウローパがゆかしき荷となりし處なる岸見えぬ 八二

―八四

日輪もし一天宮餘を隔へだてゝわが足の下にめぐりをらずば、この小さ

き麥場うちばなほ廣く我に現はれたりしなるべし 八五―八七

たえずわが淑女と契る戀こひごころ心、常よりもはげしく燃えつゝ、わ

が目を再び彼にむかしむ 八八―九〇

げに自然や技わざが、心を獲んためまづ目を捉とらへんとて、人の肉體や

その繪姿ゑすがたに造れる餌ゑば 九一―九三

すべて合はさるとも、わが彼のほゝゑむ顔に向へるとき我を照らし、聖なる樂しみに此ぶれば物の數ならじと見ゆべし 九四―九

六

しかしてかく見しことよりわが受けたる力は、我をレーダの美しき巢より引離して、いと疾はやき天に押し入れき 九七―九九

これが各部皆いと強く輝きて高くかつみな同じ状さまなれば、我はベアトリーチエがその孰いづれを選びてわが居る處となし、やを知らじ

されど淑女は、わが願ひを見、その顔に神の悦び現はると思ふばかりいとうれしくほゝゑみていふ 一〇三—一〇五

中心を鎮め、その周圍なる一切の物を動かす宇宙の性は、己が源より出づるごとく、こゝよりいづ 一〇六—一〇八

またこの天には神意の外處なし、しかしてこれを轉らす愛とこれが降す力とはこの神意の中に燃ゆ 一〇九—一一一

一の圏の光と愛これを容るゝことあたかもこれが他の諸の圏を容るゝに似たり、しかしてこの圏を司る者はたゞこれを包む者のみ 一一二—一一四

またこれが運行は他の運行によりて測られじ、されど他の運行は皆これによりて量らる、猶十のその半と五分一とによりて測らるゝ

如し 一一五—一一七

されば時なるものが、その根をかゝる鉢に保ち、葉を他の諸の鉢にたもつ次第は、今汝に明らかならむ 一一八—一二〇

あゝ慾よ、汝は人間を深く汝の下に沈め、ひとりだに汝の波より目を擡ぐるをえざるにいたらしむ 一二一—一二三

意志は人々のうちに良花と咲けども、雨の止まざるにより、眞の李悪しき實に變る 一二四—一二六

信と純とはたゞ童兒の中にあるのみ、頬に鬚の生ひざるさきにいづれも逃ぐ 一二七—一二九

片言をいふ間斷食を守る者も、舌ゆるむ時至れば、いかなる月の頃にてもすべての食物を貪りくらひ 一三〇—一三二

片言をいふ間母を愛しこれに従ふ者も、言語調ふ時いたれば、こ
 れが葬らるゝを見んとねがふ 一三三―一三五
 かくの如く、朝を齎し夕を殘しゆくものゝ美しき女の肌は、はじ
 め白くして後黒し 一三六―一三八

汝これを異しとするなからんため、思ひみよ、地には治むる者な
 きことを、人の族道を誤るもこの故ぞかし 一三九―一四一
 されど第一月が、世にかの百分一の等閑にせらるゝため、全く
 冬を離るゝにいたらざるまに、諸の天は鳴轟き 一四二―一四

四

待ちに待ちし嵐起りて、艦を舳の方にめぐらし、千船を直く走ら
 しむべし 一四五―一四七

かくてぞ花の後に眞まことの實あらむ。

一四八―一五〇

第二十八曲

我をして心を天堂に置かしむる淑女、さち幸なき人間の現世げんぜを難じつゝ
 その眞まこと状のさまをあらはしゝ時 一—三

我はあたかも、見ず思はざるさきに己うしろが後方にともされし燈火ともしび
 の焰を鏡に見 四—六

玻瓈の果して眞まことを告ぐるや否やを見んとて身を轉らし、此と彼と
 相合ふこと歌のその譜ふにおけるに似たるを見る 七—

人の如く（記憶によりて思ひ出づれば）、かの美しき目即ち愛が
 これをもて紐ひもを造りて我を捉とらへし目を見たり 一—二

かくてふりかへり、人がつらく／＼かの天のめぐるを視るとき常に
 かしこに現はるゝものわが目に觸るゝに及び 一三一—一五

我は鋭き光を放つ一點を見たり、げにかゝる光に照らされんには、
 いかなる目も、そのいと鋭きが爲に閉ぢざるをえじ 一六一—一八

また世より最いとちひ小さく見ゆる星さへ、星の星と並ぶごとくかの點
 とならびなば、さながら月と見ゆるならむ 一九—二一

月日の暈つきひ かさが、これを支ささふる水氣のいと濃こき時にあたり、これを彩いろど
ほとりる光を卷きつゝその邊に見ゆるばかりの 二二—二四

間あはひ へだを隔てゝ、一の火輪ひのわかの點のまはりをめぐり、その早きこと、
 いと速に世界を卷く運行にさへまさると思はるゝ程なりき 二五

また是は第二の輪に、第二は第三、第三は第四、第四は第五、第五は第六の輪に卷かる 二八一—三〇〇

第七の輪これに續いて上方うへにあり、今やいたくひろがりたれば、ユーノの使者つかひまつた完全しともこれを容いるゝに足らざるなるべし 三一

—三三三

第八第九の輪また然り、しかしていづれもその數かずが一いちを距へだること遠めづきに從したがひ、ることいよく遅おそく 三四—三六

また清き火花にいと近きものは、これが眞まことに與あづかること他にまさる爲ならむ、その焰あざやいと燦あざやかなりき 三七—三九

わがいたく思まじひ惑まどふを見て淑女曰いふ。天もすべての自然も、かの一點にこそ懸かるなれ 四〇—四二

見よこれにいと近き輪を、しかして知るべし、そのめぐることかく

早きは、燃ゆる愛の刺戟を受くるによるなるを。 四三—四五

我彼に。宇宙もしわがこれらの輪に見るごとき次第をたも保たば、わ

が前に置かるゝもの我を飽かしめしならむ 四六—四八

されど官能界にありては、諸の回轉その中心を遠ざかるに従つ

ていよく、聖なるを見るをう 四九—五一

是故にこの妙なるたへ、天使の神殿みや、即ちたゞ愛と光とをその境界さかひと

する處にて、わが顔ひ全く成るをうべくば 五二—五四

請こふさらに何故に模寫うつしと様式かたとが一樣ならざるやを我に告げよ、

我自らこれを想ふはいたづらなればなり。 五五—五七

汝の指かゝるむすび縲むすびを解くをえずとも異あやしむに足らず、こはその試み

られざるによりていと固くなりたればなり。 五八—六〇

わが淑女かく、而して又曰ふ。もし飽くことを願はゞ、わが汝に

告ぐる事を聴き、才を鋭うしてこれにむかへ 六一—六三

それ諸の球體は、あまね遍くその各部に亘りてひろがる力の多少に従

ひ、或は廣く或は狭し 六四—六六

徳大なればその生ずる福祉さいはひもまた必ず大に、體大なれば（而し

てその各部等しく完全なれば）その容るい、福祉ふくしもまた従つて大な

り 六七—六九

是においてか己と共に残の宇宙を悉く轉めくらす球は、愛と智とのと

もにいと多き輪かなに適あふ 七〇—七二

是故に汝の量はかりを、まる圓く汝に現はるゝものゝ外見みえに据すゑずして力に

据ゑなば 七三—七五

汝はいづれの天も、その天使と——即ち大いなるは優れると、小
 さきは劣れると——奇くすしく相應ずるを見む。 七六—七八

ポーレアがそのいと温おだやか和なる方かたの頬より吹くとき、半球の空あ
 ざやかに澄みわたり 七九—八一

さきにこれを曇らせし霧拂はれ消えて、天その隨處の美を示しつゝ
 ほゝゑむにいたる 八二—八四

わが淑女がその明らかなる答を我に與へしとき、我またかくの如
 くになり、眞まことを見ること天の星を見るに似たりき 八五—八七

しかしてその言ことば終るや、諸の輪火花を放ち、そのさま熱鐵の火
 花を散らすに異なるなかりき 八八—九〇

火花は各　その火にともなへり、またその數かずはいと多くして、將し
ようぎ

碁を倍するに優ること幾千といふ程なりき　九一—九三

我は彼等がかれらをその常にありし處に保ちかつ永遠とこしへに保つべ
 きかの動かざる點に向ひ、組くみ々々にオザンナを歌ふを聞けり

九四—九六

淑女わが心の中の疑ひを見て曰ふ。最初はじめの二つの輪はセラフィニ

とケルビとを汝に示せり　九七—九九

かれらのかく速に己が絆に《きづな》従ふは、及ぶ限りかの點に
 己を似せんとすればなり、而してその視る位置の高きに準じてか
 く爲すをう　一〇〇—一〇二

かれらの周圍まはりを轉めぐる諸　の愛は、神の聖前みまへの寶座フロニーと呼ばれる、第一

の三みつの組かれらに終りたればなり 一〇三—一〇五

汝知るべし、一切の智の休らふ處なる眞まことをばかれらが見るの深き

に應じてその悦び大いなるを 一〇六—一〇八

かゝれば福さいはひ祉ひが見る事に原もとづき愛すること（即ち後に來る事）

にもとづかざる次第もこれによりて明らかならむ 一〇九—一一

一

また、見る事はかりの量はかりとなるは功德にて、恩恵めぐみと善よきこゝろ心こゝろとより生る、

次序ついでをたて、物の進むことかくの如し 一一二—一一四

同じくこの永劫えいじふの春——夜の白羊宮もこれを掠かすめじ——に萌もえい

出づる第二みつの三みつの組は 一二五—一二七

永遠とこしへにオザンナを歌ひつゝ、その三みつを造り成す三の喜悅よろこびの位

の中に三の妙なる音^{たへ}をひゞかしむ 一一八—一二〇

この組の中には三種^{みくさ}の神あり、第一は統治^{ドミナーツイオニ}、次は 懿^{ヴァイルトウーデー}、徳、

第三の位は威能^{ホデスターデー}なり 一二一—一二三

次で最後^{をはり}に最近^{いとちか}く踊り^{めぐ}る二の群^{むれ}は 主^{プリンチパーテイ} 權^{アルカンゼリ} と首天使^{アルカンゼリ}にて、

最後^{をはり}にをどるは、すべて樂しき天使^{アルカンゼリ}なり 一二四—一二六

これらの位^{うへ}みな上方^{うへ}を視る、かれらまたその力を強^{した}く下方^{した}に及^{した}ば

すがゆゑに、みな神^{かた}の方に引^{かた}かれしかしてみな引^{かた}く 一二七—一

二九

さてディオニージオは、心をこめてこれらの位の事を思^しひめぐらし、わがごとくこれが名^なをいひこれを別^{わか}つにいたりたり 一三〇

—一三二

されどその後グレゴリー才彼を離れき、是においてか目をこの天にて開くに及び、自ら顧みて微笑ほゝゑめり 一三三—一三五

またたとひ人たる者がかくかくれたる眞まことをば世に述べたりとて異あやしむ勿なかれ、こゝ天上にてこれを見し者、これらの輪かに關かはる 一

三六一

他の多くの眞まこととともにこれを彼に現はせるなれば。 — 一四一

第二十九曲

ラートナの子、白羊てんびんと天秤てんびんとに蔽かはれて、齊ひとしく天涯てんやを
 帶とする頃 一—三

天心が權けんこう衡こうを保つ刹那せつなより、彼も此も半球を換かへかの帶を離れ
 つゝ權衡を破るにいたる程の間 四—六

ベアトリーチェは、わが目に勝ちたるかの一點をつらく視つゝ、
 笑ゑみを顔にうかべて黙もだし 七—九

かくて曰ふ。汝の聞かんと願ふことを我問はで告ぐ、そは我これ
 を一切の處と時との集まる點にて見たればなり 一〇—一二

抑 《そもく》 永遠とこしへの愛は、己さいが幸いはひを増さん爲ならず（こは

あるをえざる事なり）、たゞその光が照りわたりつゝ、我在りと

いふをえんため 一三一

時を超えこ他の一切かぎりの限を超え、己が無窮の中かぎりにありて、その心の

まゝに己をば諸の新しき愛のうちに現はせり 一一八

またその先にも、爲すなきが如くにて休らひるぎりき、そはこれ

らの水の上に神の動き給ひしは、先あと後さきに起れる事あつにあらざれば

なり 一九―二一

形式と物質と、或は合ひ或は離れて、あたかも三みつの弦つるある弓より

三の矢の出る如く出で、缺くるところなき物となりたり 二二―

二四

しかして光が、はりこはく 玻璃琥珀または水晶を照らす時、その入來るより

入終るまでの間にすこしひま 些の隙もなきごとく 二五—二七

かの三の形みつの業わざは、みな直に成り備そなはりてその主より輝き出で、

いづれを始めと別ちがたし 二八—三〇

また時を同じうしてこの三の物の間に秩序は造られ立てられき、

而して純なる作用を授けられしもの宇宙の頂となり 三一—三三

純なる势能 最いとひくきところ 低 處をを保ち、中央には一の繫つなぎ、繫離るゝこと

なきほどにいと固かたく、势能を作用と結び合せき 三四—三六

イエロニモは、天使達がその餘の宇宙の造られし時より幾百年の

久しきさきに造られしことを録しるせるも 三七—三九

わがいふ眞まことは聖靈を受けたる作者達のしばく書ふみにしるしゝとこ

ろ、汝よく心をとめなば自らこれをさとるをえむ 四〇—四二
 また理性もいくばくかこの眞まことを知らしむ、そは諸の動うごかすもの者が
 かく久しく全からざりしとはその認めざることなればなり 四三

—四五

今や汝これらの愛の、いづこに、いつ、いかに造られたりしやを
 知る、されば汝の願ひの中三みつの焰ほははや消えたり 四六—四八
 數かずを二十までかぞふるばかりの時をもおかず、天使の一部は、汝

等の原素のうちのいと低きものを亂し 四九—五一

その餘の天使は、残りゐて、汝の見るごとわざき技わざを始む（かくする
 喜びいと大いなりければ、かれらめぐり止やむことあらじ） 五二—

五四

墮落の原因は、汝の見しごとく宇宙一切の重さに壓おされをる者の、
 詛のろふべき傲慢たかぶりなりき 五五―五七

またこゝに見ゆる天使達は、謙へりくだりて、かの善即ちかれらをしてか
 く深く悟るにいたらしめたる者よりかれらの出しを認められたれば

五八―六〇

恩惠めぐみの光と己が功德とによりてその視る力増したりき、是故にそ
 の意志備りて固し 六一―六三

汝疑ふなかれ、信ぜよ、恩惠めぐみを受くるは功德にて、この功德は恩
 惠を迎ふる情の多少に應ずることを 六四―六六

汝もしわが言ことばをさとりたらんには、たとひ他ほかの助けなしとも、今
 やこの集會つどひにつきて多くの事を想ふをえむ 六七―六九

されど地上汝等の諸の學寮にては、天使に了知、記憶、及び意志ありと教へらるゝがゆゑに 七〇—七二

我さらに語り、汝をして、かゝる教へにおける言葉の明らかならざるため下界にて紛まがふ眞理の純なる姿を見しむべし 七三—七五
 そもくこれらの者は、神の聖顔みかほを見て悦びし時よりこの方、目をこれ（一物としてこれにかくるゝはなし）に背そむけしことなし
 七六—七八

是故にその見ること新しき物に阻はばまれじ、是故にまたその想おもひの分れたる爲、記憶に訴ふることを要せじ 七九—八一

されば世にては人眠らざるに夢を見つゝ、或は眞まことをいふと信じ或はしかすと信ぜざるなり、後者は罪も恥はぢもまさる 八二—八四

汝等世の人、理を究むるにあたりて 同 一 の路を歩まず、これ

外見を飾るの慾と思ひとに迷はさるゝによりてなり 八五―八七

されどこれとても、神の書の疎んぜられまたは曲げらるゝに此ぶ

れば、そが天上にうくる憎悪なほ輕し 八八―九〇

かの書を世に播かんためいくばくの血流されしや、謙りてこれに

親しむ者いかばかり 聖意に適ふやを人思はず 九一―九三

各 外見のために力め、さま／＼の異説を立つれば、これらは

また教を説く者の論ふところとなりて福音ものいはじ 九四―九

六

ひとりいふ、クリストの受難の時は、月退りて中間を隔てしたため、

日の光地に達せざりきと 九七―九九

またひとりいふ、こは光の自ら隠れしたためなり、されば猶太ジュデーアび

人とのみならずスパニア人びともインド人も等しくその缺くるを見た

りと 一〇〇——一〇二

ラーポとビンドいかにフィオレンツアに多しとも、年毎としごとにこゝ

かしこにて教壇より叫ばるゝかゝる浮説の多きには若しかず 一〇

三——一〇五

是故に何をも知らぬ羊は、風を食ひて牧場より歸る、また己が禍

ひを見ざることも彼等を罪なしとするに足らじ 一〇六一—一〇八

クリストはその最初の弟子達に向ひ、往きて徒言あだことを世に宣傳のべつた

へといひ給はず、眞まことの礎いしづをかれらに授け給ひたり 一〇九——一一

一

この礎のみぞかれらの唱へしところなる、されば信仰を燃さん爲
に戦ふにあたり、かれらは福音を楯とも槍ともなしたりき 一一

二——一四

今や人々戯言と戯語とをもて教へを説き、たゞよく笑はしむれ
ば僧帽脹る、かれらの求むるものこの外になし 一一五——一七
されど帽の端には一羽の鳥の巣くふあり、俗衆これを見ばその頼
む罪の赦の何物なるやを知るをえむ 一一八——一二〇

是においてかいと愚なること地にはびこり、定かにすべき證なき
に、人すべての約束の邊に集ひ 一二一——一二三

聖アントニオは（贗造の貨幣を拂ひつゝ）これによりて、その豚
と、豚より穢れし者とを肥す 一二四——一二六

されど我等主題を遠く離れたれば、今日を轉めぐらして正路を見るべし、さらば時とともに途みちを短うするをえむ 一二七—一二九

それ天使は數かずきはめて多きに達し、人間の言葉も思ひもともなふ

あたはじ 一三〇—一三二

汝よくダニエールの現はし、事を思はゞ、その幾千なる語ことばのうち
に定かなる數かくるゝを知らむ 一三三—一三五

彼等はおれらをすべて照らす第一の光を受く、但し受くる状ありさま態

に至りては、この光と結び合ふ諸の輝の如くに多し 一三六—

一三八

是においてか、情愛は會得あはつくの作用にともなふがゆるゑに、かれらの
うちのうるはしき愛その熱あつさ微温ぬるさを異にす 一三九—一四一

見よ今永遠とこしへの力の高さとと廣さとを、そはこのもの己が爲にかく
多くの鏡を造りてそれらの中に碎くれども 一四二―一四四
一たるを失はざること始めの如くなればなり。 一四五―一四七

第三十曲

第六時はおよそ六千哩ミリアのあなたに燃え、この世界の陰傾きてはや
殆んど水平をなすに 一—三

いたれば、いや高き天の中たごなか央白みはじめて、まづとある星、こ

の世に見ゆる力を失ひ 四—六

かくて日のいと燦かなる侍あざや女はしためのさらに進み來るにつれ、天は光

より光と閉ぢゆき、そのいと美しきものにまで及ぶ 七—九

己が包むものに包まると見えつゝわが目に勝ちし一點のまはりに
永遠とこしへに舞ふかの凱旋も、またかくの如く 一〇—一二

次第に消えて見えなくなりき、是故に何をも見ざることゝ愛とは、

我を促して目をベアトリーチエに向けしむ 一三一—一五

たとひ今にいたるまで彼につきていひたる事をみな一の讚美の中に含ましむとも、わが務を果すに足らじ 一六一—一八

わが見し美は、豈たゞ人の理解を超ゆるのみならんや、我誠に信ずらく、これを悉く楽しむ者その造主の外になしと 一九—

二一

げに茲にいたり我は自らわが及ばざりしを認む、喜曲または悲曲の作者もその題の難きに處してかく挫けしことはあらし 二二—

二四

そは日輪の、いと弱き視力におけるごとく、かのうるはしき微笑

の記憶は、わが心より心その物を掠むればなり 二五—二七

この世にはじめて彼の顔を見し日より、かく視るにいたるまで、

我たえず歌をもてこれにともなひたりしかど 二八—三〇

今は歌ひつゝその美を追ひてさらに進むことかなはずなりぬ、い

かなる藝術の士も力盡くればまたかくの如し 三一—三三

さてかれは、かく我をしてわが喇叭らつぱ（こはその難き歌をはや終へ

んとす）よりなほ大いなる音にかれを委ねゆだしむるほどになりつゝ

三四—三六

敏とき導者に似たる動作みぶりと聲とをもて重ねていふ。われらは最大いとい

なる體を出でゝ、純なる光の天に來れり 三七—三九

この光は智の光にて愛これに満みち、この愛は眞まことの幸さいの愛にて悦び

これに満ち、この悦び一切の樂しみにまさる 四〇—四二

汝はこゝにて天堂の二隊ふたていくさの軍をともしに見るべし、而してその一隊ひとつて

をば最後の審判さばきの時汝に現はるゝその姿にて見む。 四三—四五

俄ひらめに閃く電光いなづまが、物見る諸の靈を亂し、いと強き物の與ふる

作用はたらきをも目より奪ふにいたるごとく 四六—四八

生くる光わが身のまはりを照らし、その輝かがやきの面かほおほひ帕はをもて我を

巻きたれば、何物も我に見えざりき 四九—五一

この天をしづむる愛は、常にかゝる會釋あしやくをもて己もとが許よろこに歡び迎

ふ、これ蠟燭をその焰ふきに適あてはしからしめん爲なり。 五二—五四

これらのつゞまやかなる言葉わが耳に入るや否や、我はわが力の

常よりも増しゐたるをさとりき 五五—五七

しかして新しき視力わが表うちに燃え、いかなる光にてもわが目の防
ぎえざるほど燦あざやかなるはなきにいたれり 五八―六〇

さて我見しに、河のごとき形の光、妙たへなる春をゑがきたる二つの
岸の間にありていとつよく輝き 六一―六三

この流れよりは、諸の生くる火出で、左右の花の中なかに止まり、
さながら紅あかだま玉を黄金こがねに嵌はさむるに異ならず 六四―六六

かくて香に酔へるごとく再び奇くしき淵くに沈みき、しかして入る火
と出づる火と相あひつ亞つげり 六七―六九

汝が見る物のことを知らんとて今汝を燃しかつ促うながす深き願ねがひは、
そのいよく切きなるに従したがひいよくわが心に適かなふ 七〇―七二
されどかゝる渴かわきをとゞむるにあたり、汝まづこの水を飲まざるべ

からず。わが目の日輪かく我にいひ 七三一七五

さらに加ふらく。河、入り出る諸の珠たま、及び草の微笑ほゝゑみは、その

まことのさまあらかじ

かたち

眞状を豫め示す象なり 七六一七八

こはこれらの物その物の難かたきゆゑならず、汝に缺くるところあり

て視力未ださまで強からざるによる。 七九一八一

常よりもいと遅く目を覺し、嬰兒をさなごが、顔を乳かたの方にむけつゝ身

を投ぐる疾はやささへ 八二一八四

目をば優まさる鏡とせんとてわがかの水（人をしてその中なかにて優れる

者とならしめん爲流れ出いづる）の方かたに身を屈かゞめしその早さには如しか

じ 八五―八七

しかしてわが瞼まぶたの縁ふちこの水を飲める刹那せつなに、その長き形は、變り

て圓まるく成ると見えたり 八八—九〇

かくてあたかも假面めんを被かうむれる人々が、己を隠し、假かりの姿を棄つるとき、前と異なりて見ゆる如く 九一—九三

花も火もさらに大いなる悦びに變り、我はあきらかに二組の天の宮みやびと人達を見たり 九四—九六

あゝ眞まことの王國の尊き凱旋を我に示せる神の輝よ、願はくは我に力を與へて、わがこれを見し次第を言はしめよ 九七—九九

かしこに光あり、こは造つくりぬし主をばかの被造物つくられしもの即ち彼を見るによりてのみその平安を得る物に見えしむる光にて 一〇〇—一〇二

その周邊まはりを日輪の帶となすとも緩ゆるきに過ぐと思はるゝほど廣く圓ま

るがた
形に延びをり 一〇三—一〇五

そが見ゆるかぎりはみな、プリーモ・モービレの頂より反映す
てりかへ

ひとすぢ

一線の光（かの天この光より生命と力とを受く）より成る 一

〇六—一〇八

しかして邱が、をか緑草や花に富める頃、わが飾れるさまを見ん爲
あをくさ

かとはかり、己が姿をその麓の水に映すごとく 一〇九—一一一
ふもと

すべてわれらの中天に歸りたりし者、かの光の上においてこれを
うち

圍み繞りつゝ、千餘の列より己を映せり 一一二—一一四
かこめぐ

そのいと低き階さへかく大いなる光を己が中に集むるに、花片
きだ

果るところにてはこの薔薇の廣さいかばかりぞや 一一五—一一
はなびら

七

わが視みるちから力は廣さ高さのために亂れず、かの悦びの量と質とを

すべてとらへき 一一八—一二〇

近きも遠きもかしこにては加へじ減ひかじ、神の親しくしろしめし

給ふ處にては自然のりの法さらに行はれざればなり 一二一—一二三

段きだまた段と延びをり、とこしへに春ならしむる日輪にむかひて讚

美の香かを放つ無窮の薔薇の黄なるところに 一二四—一二六

ベアトリーチエは、あたかも物言はんと思ひつゝ言はざる人の如

くなりし我を惹ひき行ゆき、さて曰いけるは。見よ白衣びやくえの群むれのいかばかり

大いなるやを 一二七—一二九

見よわれらの都のその周圍まはりいかばかり廣きやを、見よわれらの席

の塞ふさりて、この後こゝに待たるゝ民いかばかり數少きやを 一三

〇——三三二

かの大いなる座、即ちその上にはや置かるゝ冠の爲汝が目をとむ
る座には、汝の未だこの婚筵こんえんに連りて食せざるさきに 一三三

——一三五

尊きアルリーゴの魂（下界に帝となるべき）坐すべし、彼はイタ
リアを直くせんとしてその備へのかしこに成らざる先に行かむ 一

三六——一三八

汝等は無明の慾に迷ひ、あたかも死ぬるばかりに饑うゑつゝ乳母めのとを

逐ひやる嬰をさなご鬼おにの如くなりたり 一三九——一四一

しかして顯あらはにもひそかにも彼と異なる道を行く者、その時神つかさの廳

の長をさたらむ 一四二——一四四

されど神がこの者に聖なる職つとめを許し給ふはその後たゞ少時しばしのみ、

彼はシモン・マーゴの己が報いをうくる處に投げ入れられ 一四

五——四七

かのアラ―エア人びとをして愈 深く沈ましむべければなり。 一四

八——五〇

第三十一曲

クリストの己が血をもて新婦はなよめとなしたまへる聖軍は、かく純白の薔薇の形となりて我に現はれき 一—三

されど残の一軍ひとて（これが愛を燃すものゝ榮光と、これをかく秀でしめし威徳とを、飛びつゝ見かつ歌ふところの）は 四—六

蜂の一群むれが、或時は花の中に入り、或時はその勞苦の味あぢの生ずるところに歸るごとく 七—九

かのいと多くの花片はなびらにて飾らるゝ大いなる花の中にくだり、さて再びかしこより、その愛の常に止まる處にのぼれり 一〇—一

二

かれらの顔はみな生くる焰、翼は黄金こがねにて、その他ほかはいかなる雪も及ばざるまで白かりき 一三一—一五

席より席と花の中にくだる時、かれらは脇あふを扇あふぎて得たりし平和と熱とを傳へたり 一六一—一八

またかく大いなる群飛むれとびはかほ交しつゝ上なる物と花の間を隔へだつれども、目も輝もこれに妨げられざりき 一九—二一

そは神の光宇宙をばその功德に準じて貫つらぬき、何物もこれが障しょう礙いとなることあたはざればなり 二二—二四

この安らげき樂しき國、舊ふるき民新しき民の群居むれるる國は、目をも愛めをも全く一の目標めあてにむけたり 二五—二七

あゝ唯一たゞひとつの星によりてかれらの目に閃きつゝかくこれを飽かしむ
る三重みへの光よ、願はくはわが世の嵐を望み見よ 二八―三〇

未開の人々、エリーチエがその愛いとしづこ兒とともにめぐりつゝ日毎ひごとに
蔽おほふ方かたより來り 三一―三三

ローマとそのいかめしき業わざ——ラテラーノが人間の爲すところの
ものに優れる頃の——とを見ていたく驚きたらんには 三四―三

六

人の世より神の世に、時より永劫に、フィオレンツアより、正し
き健すこやかなる民の許もとに來れる我 三七―三九

豈あにいかばかりの驚きにてか満されざらんや、げに驚きと悦びの間
にありて、我は聞かず言はざるを願へり 四〇―四二

しかして巡禮が、その誓願をかけし神殿の中にて邊を見つゝ心を
 慰め、はやその状を人に傳へんと望む如く

我は目をかの生くる光に馳せつゝ、諸の段に沿ひ、或ひは上或

ひは下或ひは周圍まはりにこれに移し 四六―四八

神の光や己が微笑ほゝゑみに装よそはれ、愛の勸すすむる諸の顔と、すべてつゝしの慎

にて飾らるゝ諸の舉動ふるまひとを見たり 四九―五一

おしなべての天堂の形をわれ既に悉く認めたれど、未だそのいづ

れのところにも目を据すゑざりき 五二―五四

かくて新しき願ひに燃され、我はわが心に疑ひをいだかしめし物

につきてわが淑女に問はんため身をめぐらせるに 五五―五七

わが志こゝろざしゝ事我に臨のぞみし事と違へり、わが見んと思ひしはベアト

リ―チエにてわが見しは一人の翁ひとりおきななりき、その衣は榮光の民の如く 五八―六〇

目にも頬にも仁愛の悦びあふれ、その姿は、やさしき父たるにふさはしきまで慈悲深かりき 六一―六三

彼何處いづこにありや。我は直にかく曰いへり、是においてか彼。汝の願ひを満さんためアトリーチエ我をしてわが座を離れしむ 六四

―六六

汝仰ぎてかの最いとたか高きだき段くだより第三に當る圓を見よ、さらば彼をその功德によりてえたる寶座くらゐの上にて再び見む。 六七―六九

我答へず、目を擧げて淑女を見しに、永遠とこしへの光彼より反映てりかへしつゝその冠となりゐたり 七〇―七二

人の目いかなる海の深處ふかみに沈むとも、雷いかづちの鳴るいと高きところよ

りその遠く隔へだたること 七三―七五

わが目の彼處かしこにてベアトリーチエを離れしに及ばじ、されど是我
かゝはりに係なかりき、そはその姿間あひだまじに混る物なくしてわが許もとに下りたれ

ばなり 七六―七八

あゝわが望みを強うする者、わが救ひのために忍びて己あしあとが足跡

を地獄に残すにいたれる淑女よ 七九―八一

わが見しすべての物につき、我は恩惠めぐみと強さとを汝の力汝の徳よ

りいづと認む 八二―八四

汝は適ふさわはしき道と方法てだてとを盡し、我を奴僕ぬぼくの役つとめより引きてしかし

て自由に就かしめぬ 八五―八七

汝の癒し、わが魂が汝の意にかなふさまにて肉體より解かるゝことをえんため、願はくは汝の賜をわが衷に護れ。 八八―九〇

我かく請へり、また淑女は、かのごとく遠しと見ゆる處にてほゝゑみて我を視、その後永遠の泉にむかへり 九一―九三

聖なる翁曰ふ。汝の羈旅を全うせんため（願ひと聖なる愛とはこのために我を遣はしゝなりき） 九四―九六

目を遍くこの園の上に馳せよ、これを見れば汝の視力は、神の光を分けていよゝ遠く上るをうるべければなり 九七―九九

またわが全く燃えつゝ愛する天の女王、われらに一切の恩恵を與へむ、我は即ち彼に忠なるベルナルドなるによりてなり。 一〇

わがヴェロニカを見んとて例たとへばクロアツィアより人の來ること
あらんに、久しく傳へ聞きゐたるため、その人飽あくことを知らず

一〇三—一〇五

これが示さるゝ間、心の中にていはむ、わが主ゼス・クリスト眞ま
ことのかみ

神よ、さてはかゝる御おんすがた姿にてましましゝかと 一〇六—

一〇八

現世このよにて默想のうちにかの平安を味へる者の生くる愛を見しとき、

我またかゝる人に似たりき 一〇九—一一一

彼曰ふ。恩惠めぐみの子よ、目を低うして底にのみ注ぎなば、汝この法

悦さまの状を知るをえじ 一一二—一一四

されば諸の圈を望みてそのいと遠きものに及べ、この王國の從

ひ事へまつる女王の、坐せるを見るにいたるまで。 一一五—一

一七

われ目を擧げぬ、しかしてたとへば朝には天涯の東の方が、日の
傾く方にまさるごとく 一一八—一二〇

我は目にて（溪より山は行くかとばかり）縁の一部が光において
残るすべての頂に勝ちゐたるを見たり 一二一—一二三

またたとへば、フェトンテのあつかひかねし車の轆の待たるゝ處
はいと強く燃え、そのかなたこなたにては光衰ふるごとく 一二

四—一二六

かの平和の焰章旗は、その中央つよくかゞやき、左右にあ

たりて焰一様に薄らげり 一二七—一二九

しかしてかの中央たぐなかには、光も技わざも各異なれる千餘の天使、翼を

ひらきて歡び舞ひ 一三〇—一三二

凡てすべの聖者達の目の悦びなりし一の美、かれらの舞ふを見歌ふを

聞きてほゝゑめり 一三三—一三五

われたとひ想像におけるごとく言葉に富むとも、その樂しさの萬ま

分んぶいち一をもあえて述ぶることをせじ 一三六—一三八

ベルナルドは、その燃ゆる愛の目的めあてにわが目の切せちに注がるゝを見

て、己が目をもいとなつかしげにこれにむけ 一三九—一四一

わが目をしていよく見るの願ひに燃えしむ 一四二—一四四

第三十二曲

愛の目を己が悦びにとめつゝ、かの默想者もくさうじや、進みて師の役をとつとめり、聖なる言葉にて曰ひけるは 一—三

マリアの塞ふさぎて膏を《あぶら》ぬりし疵——これを開きこれを深くせし者はその足元なるいと美しき女なり 四—六

第三の座より成る列の中、この女の下には、汝の見るごとく、ラケールとベアトリーチエと坐す 七—九

サラ、レベツカ、ユディット、及び己が咎とがをいたみて我を憐みたまへといへるその歌うた人の曾祖母そうそぼたりし女が 一〇—一二

列より列と次第をたてゝ下に坐するを汝見るべし（我その人々の
 名を擧げつゝ、花片はなびらより花片と薔薇を傳ひて下るにつれ） 一三

——一五

また第七の段きだより下には、この段にいたるまでの如く、希伯來人
 の女達相續きて花のすべての髪を分く 一六——一八

そは信仰がクリストを見しさまに従ひ、かれらはこの聖なる階きざはしを

わかつ壁なればなり 一九——二一

此方こなた、即ち花の花片はなびらのみな全まつたきところには、クリストの降り給

ふを信ぜる者坐し 二二——二四

彼方かなた、即ち諸の半圓の、空處に斷たたるゝところには、降り給へ
 るクリストに目をむけし者坐す 二五——二七

またこなたには、天の淑女の榮光の座とその下の諸の座とが
 く大いなる隔へだてとなるごとく 二八―三〇

對むかひが方かたには、常に聖にして、曠野、殉教、尋つひで一ふた年とせの間地獄に
 堪たへしかの大いなるジョヴァンニの座またこれとなり 三一―三
 三

彼の下にフランチュスコ、ベネデット、アウグステイーノ、及び
 その他の人々定さだめによりてかく隔へだてて、圓より圓に下りて遂にこの處
 にいたる 三四―三六

いぎ見よ神の尊たふとき攝理を、そは信仰の二の姿相等しくこの園に滿
 つべければなり 三七―三九

また知るべし、二の區劃ふたつしきりを線すぢの半なかばにて截きる段きだより下にある者は、

己が功德によりてかしこに坐するにあらず 四〇—四二

他人ひとの功德によりて（但し或る約束の下に）しかすと、これらは皆自ら擇まことぶ眞の力のあらざる先に解放たれし靈なればなり 四三

—四五

汝よくかれらを見かれらに耳を傾けなば、顔せまなや稚せまなき聲によりてよくこれをさとるをえむ 四六—四八

今や汝あや異あやしみ、あやしみてしかして物言はず、されど鋭さき思しひに汝の緊しめらるゝ強きづなき紐を我汝の爲に解くべし 四九—五一

抑 《そもく》この王國廣しといへども、その中には、悲しみも渴かわきも饑うえもなきが如く、偶然ひとつの事一だになし 五二—五四

そは汝の視る一切の物、永とこしへ遠への律法おきてによりて定められ、指輪は

こゝにて、まさしく指に適^あへばなり 五五—五七

されば急ぎて眞^{まこと}の生に來れるこの人々のこゝに受くる福^{さいはひ}に多少あるも故なしとせじ 五八—六〇

いかなる願ひも敢てまたさらに望むことなきまで大いなる愛と悦びのうち^{すべ}にこの國をを康^{やす}んじたまふ王は 六一—六三

己が樂しき聖顔^{みかほ}のまへにて凡^{すべ}ての心を造りつゝ、聖旨^{みむね}のまゝに異なる恩惠^{めぐみ}を與へ給ふ、汝今この事あるをもて足れりとすべし 六四—六六

しかしてこは定かに明らかに聖書^{しる}に録さる、即ち母の胎内にて怒りを起し、雙兒^{ふたご}のことにつきてなり 六七—六九

是故にかゝる恩惠^{めぐみ}の髮の色の如何に従ひ、いと高き光は、これに

ふさはしき冠とならざるをえじ 七〇—七二

さればかれらは、己が行爲おこなひの徳によらず、たゞ最初の視力の鋭

さ異なるによりてその置かるゝ段きだを異にす 七三—七五

世の未だ新しき頃には、罪なき事に加へてたゞ兩親ふたおやの信仰あれ

ば、げに救ひをうるに足り 七六—七八

第一の世終れる後には、男子なんしは割禮によりてその罪なき羽に力を

得ざるべからざりしが 七九—八一

恩恵めぐみの時いたれる後には、クリストの全き洗バツテスモ禮を受けざる罪

なき稚をさなげ兒かの低き處とに抑められき 八二—八四

いざいとよくクリストに似たる顔をみよ、その輝のみ汝をしてク

リストを見るをえしむればなり。 八五—八七

我見しに、諸の聖なる心（かの高き處をわけて飛ばんために造られし）の齋もたらす大いなる悦びかの顔に降ふりそ注そぎたり 八八―九

○

げに先にわが見たる物一としてこれの如く驚をもてわが心を奪ひしはなく、かく神に似しものを我に示せるはなし 九一―九三

しかしてさきに彼の上に降れる愛、幸さちあれマリア恩惠めぐみ満つ者よと

歌ひつゝ、その翼をかれの前にひらけば 九四―九六

天の宮みやびと人達四方よりこの聖歌に和し、いづれの姿も是によりて

いよきらびく燦きらびやかになりたりき 九七―九九

あゝ永とこしへ遠さだめの定によりて坐するそのうるはしき處を去りつゝ、わ

がためにこゝに下るをいとほざる聖なる父よ 一〇〇―一〇二

かのいたく喜びてわれらの女王の目に見入り、燃ゆと見ゆるほど
これを慕ふ天使は誰ぞや。 一〇三—一〇五

あたかも朝の星の日におけるごとくマリアによりて美しくなれる
者の教へを、我はかく再び請へり 一〇六—一〇八

彼我に。天使または魂にあるをうるかぎりの剛さと雅びとはみな
彼にあり、われらもまたその然るをねがふ 一〇九—一一一

そは神の子がわれらの荷を負はんと思ひ給ひしとき、棕櫚を持ち
てマリアの許もとに下れるものは彼なればなり 一一二—一一四

されどいざわが語り進むにつれて目を移し、このいと正しき信心
深き帝國の大いなる高官達を見よ 一一五—一一七

かの高き處に坐し、皇妃にいと近きがゆゑにいと福なるふたりの

ものは、この薔薇の二つの根に當る 一一八—一二〇

左の方にて彼と並ぶは、きもかと膽大きく味へるため人類をしてかゝるにが苦さ

を味ふにいたらしめし父 一二一—一二三

右なるは、聖なる寺院の古の父、この愛めづべき花の二のふたつかぎ鑰をクリ

ストよりゆだ委ねられし者なり 一二四—一二六

また槍と釘とによりて得られし美しき新はなよめ婦のその時々さちの幸なさを

ば、己が死なざるさきにすべて見し者 一二七—一二九

これが傍に坐し、左の者の傍には、恩を忘れ心恒つねなくかつ背そむき易

き民マンナに生命いのちを支ささへし頃かれらひきを率ひきゐし導者坐す 一三〇—

一三二

ピエートロと相あひむか對むかひてアンナの坐するを見よ、彼はいたくよろ

こびて己が女を見、オザンナを歌ひつゝなほ目を放たじ 一三三

— 一三五

また最大いとなる家いへをさ長の對むかひには、汝が馳はせ下らんとて目を垂たれし

とき汝の淑女を起たたしめしルーチア坐す 一三六—一三八

されど汝の睡りの時疾く過ぐるがゆゑに、あたかも良よき縫ぬひもの物師

のその有もつ織物きれに適あはせて衣を造る如く、我等こゝに言ことばを止とどめて

一三九—一四一

目を第一の愛にむけむ、さらば汝は、彼の方かたを望みつゝ、汝の及

ぶかぎり深くその輝を見るをうべし 一四二—一四四

しかはあれ、汝己が翼を動かし、進むと思ひつゝ或しりぞひは退なかく莫なら

んため、祈りによりて、恩惠めぐみを受ること肝要なり 一四五—一四

七

汝を助くるをうる淑女の恩恵を、めぐみまた汝は汝の心のわが言葉より

離れざるほど、愛をもて我にともなへ。 一四八―一五〇

かくいひ終りて彼この聖なる祈りをさゝぐ 一五一―一五三

第三十三曲

をとめ
 處女なる母わが子の女、むすめ 被造物つくられしものにまさりて己を低くししかし
 て高くせらるゝ者、とこしへ 永遠の聖旨の確き目的よみむね かつた めあて 一—三
 人たるものを尊たふとくし、これが造主つくりぬしをしてこれに造らるゝをさ
 へ厭はざるにいたらしめしは汝なり 四—六

汝の胎用にて愛はあらたに燃えたりき、その熱あつさによりてこそ永と
こしへ

遠の平和のうちこしへにこの花かくは咲きしなれ 七—九

こゝにては我等にとりて汝は愛の亭午まひるの燈火ともしび、下界人間のなか
 にては望みの活いくるいづみ泉なり 一〇—一二

淑女よ、汝いと大いにしていと強し、是故に恩恵を求めて汝に就かざる者あらば、これが願ひは翼なくして飛ばんと思ふに異ならじ 一三一—一五

汝の厚き志はたゞ請ふ者をのみ助くるならで、自ら進みて求めに先んずること多し 一六一—一八

汝に慈悲あり、汝に哀憐あいれんえいよ恵與あり、被造物つくられしもののうちなる善といふ善みな汝のうちに集まる 一九—二二

今こゝに、宇宙のいと低き沼よりこの處にいたるまで、靈の三界をひとつ／＼見し者 二二—二四

伏して汝に請ひ、恩恵めぐみによりて力をうけつゝ、終極いははての救ひの方にいよく高くその目を擧ぐるをうるを求む 二五—二七

また彼の見んことを己が願ふよりも深くは、己自ら見んと願ひし
事なき我、わが祈りを悉く汝に捧げかつその足らざるなきを祈る

二八—三〇

願はくは汝の祈りによりて浮世^{ふせい}一切の雲を彼より拂ひ、かくして
彼にこよなき悦びを現はしたまへ 三一—三三

我またさらに汝に請ふ、思ひの成らざるなき女王よ、かく見まつ
りて後かれの心を永く健^{すこやか}全^{ぜん}ならしめたまへ 三四—三六

願はくは彼を護りて世の雑念に勝たしめ給へ、見よベアトリーチ
エがすべての聖徒達と共にわが諸^{たす}の祈りを扶け汝に向ひて合掌
するを。 三七—三九

神に愛^めでられ尊まるゝ目は、祈れる者の上に注ぎて、信心深き祈

りのいかばかりかの淑女の心に適かなふやを我等に示し 四〇―四二
 後永とこしへ遠の光にむかへり、げに被つくられしもの造物の目にてその中うちをかく

明らかに見るはなしと思はる 四三―四五

また我は凡ての望みの極はてに近づきゐたるがゆゑに、燃ゆる願ひお
 のづから心の中にて熄やむをおぼえき 四六―四八

ベルナルドは、我をして仰がしめんとて、微笑ほくそみつゝ表示しるしを我に
 與へしかど、我は自らはやその思ふごとくなしゐたり 四九―五

一

そはわが目明らかになり、本まこと來眞なる高き光の輝のうちにいよゝ
 深く入りたればなり 五二―五四

さてこの後わが見しものは人の言葉より大いなりき、言葉はかゝ

る姿に及ばず、記憶はかゝる大いさに及ばじ 五五—五七

我はあたかも夢に物を見てしかして醒むれば、餘情のみさだかに
残りて他は心に浮び來らざる人の如し 五八—六〇

そはわが見しもの殆んどこと／＼く消え、これより生るゝうる
はしさのみ今猶心に滴したればなり 六一—六三

雪、日に溶くるも、シビルラの託宣、輕このはき木葉の上にて風に散り
失するも、またかくやあらむ 六四—六六

あゝ至上の光、いと高く人の思ひを超ゆる者よ、汝の現はれしさ
まをすこしく再びわが心に貸し 六七—六九

わが舌を強くして、汝の榮光きらめきの閃を、一なりとも後のちのよ代の民に遺
すをえしめよ 七〇—七二

そはいさゝかわが記憶にうかび、すこしくこの詩に響くによりて、
 汝の勝利はいよくよく知らるゝにいたるべければなり 七三一

七五

わが堪へし活いくるひかり光するどの鋭さげにいかばかりなりしぞや、さればも
 しこれを離れたらんには、思ふにわが目くるめきしならむ 七六

一七八

想ひ出れば、我はこのためにこそ、いよく心を堅かたうして堪たへ、
 遂にわが目を無かぎりなき限ちから威力と合はずにいたれるなれ 七九―八一

あゝ我をして視る力の盡くるまで、永遠とこしへの光の中に敢て目を注そ
 がしめし恩恵めぐみはいかに裕ゆたかなるかな 八二―八四

我見しに、かの光の奥には、遍あまねく宇宙ひらに枚となりて分れ散るもの

集り合ひ、愛によりて一ひとつの卷まきに綴つゞられるたり 八五―八七

實在、偶在、及びその特性相混まじれども、その混る状さまによりて、か

のものはたゞ單一の光に外ならざるがごとくなりき 八八―九〇

萬物を齊ととのへこれをかく結び合はすものをば我は自ら見たりと信ず、

そはこれをいふ時我わが悦びのいよくさはなるを覺ゆればなり

九一―九三

たゞ一の瞬またゝくま間さへ、我にとりては、かのネツツノをしてア

ルゴの影に驚かしめし企圖くはだてにおける二千五百年よりもなほ深き睡

りなり 九四―九六

さてかくわが心は全く奪はれ、固く熟視みつめて動かず移らず、かつ視

るに従つていよく燃えたり 九七―九九

かの光にむかへば、人甘んじて身をこれにそむけつゝ他の物を見るをえざるにいたる 一〇〇—一〇二

これ意志の目的なる善みなこのうちに集まり、この外にては、こゝにて完まつたき物も完からざるによりてなり 一〇三—一〇五

今やわが言ことばは（わが想おもひ起いづることにつきてさへ）、まだ乳房ちぶさにて舌を濡らす嬰をさなご兒ことばの言よりもなほ足たらじ 一〇六—一〇八

わが見し生くる光の中にさま／＼の姿のありし爲ならず（この光はいつも昔と變らじ） 一〇九—一一一

わが視る力の見るにつれて強まれるため、たゞ一の姿は、わが變るに従ひ、さま／＼に見えたるなりき 一一二—一一四

高き光の奥深くして燦あざやかなるがなかに、現はれし三みつの圓あり、そ

の色三にして大きいき同じ 一一五—一一七

その一はイリのイリにおけるごとく他の一の光をうけて返すと見え、第三なるは彼方かなたこなた此方より等しく吐かるゝ火に似たり 一一八

—一二〇

あゝわが想おもひくらに此ぶれば言の足らず弱きこといかばかりぞや、而してこの想すらわが見しものに此ぶればこれを些すこしといふにも當らじ

一二一—一二三

あゝ永遠とこしへの光よ、己が中にのみいまし、己のみ己を知り、しかして己に知られ己を知りつゝ、愛し微笑ほゝゑみ給ふ者よ 一二四—一

二六

反映てりかへす光のごとく汝の生むとみえし輪は、わが目しばしこれを

まもりゐるとき 一二七—一二九

同じ色にて、その内に、人の像かたちを描き出し、さまなりければ、わ

が視る力をわれすべてこれに注げり 一三〇—一三二

あたかも力を盡して圓を量はからんとつとめつゝなほ己が要もとむる原理

に思ひいたらざる幾何きかがく學者の如く 一三三—一三五

我はかの異象いしやうを見、かの像かたちのいかにして圓と合へるや、いかに

してかしこにその處を得しやを知らんとせしかど 一三六—一三

八

わが翼これにふさはしからざりしに、この時一の光わが心を射て

その願ひを満たしき 一三九—一四一

さてわが高き想像はこゝにいたりて力を缺きたり、されどわが願

ひと思ひとは宛さながら然 一様に動く輪の如く、はや愛にめぐらさる 一

四二—一四四

日やそのほかのすべての星を動かす愛に。 一四五—一四七

註（地、は『神曲（地獄篇）』。淨、は『神曲

（淨火篇）』。天、は『神曲（天堂篇）』の略）

第一曲

ダンテ、ベアトリーチエとともに第一天（月）にむかひて昇り、
みちすがら淑女の教へを聴く

一—三

【動かす者】神（淨、二五・七〇及び『コンヴィヴィオ』三・一
五・一五五以下参照）

【一部に】神の榮光はいたらぬくまなし、されど受くる者の力に従ひその受くる光に多少あり

四―六

【天】エムピレオの天（ダンテがカン・クランデに與ふる書四三八行以下參照）

【知らず】知らざるは忘るればなり、えざるは言葉及ばざればなり（同上、五七三―五行參照）

七―九

【己が願ひ】神。我等の智その終極の目的なる神に近きがゆゑに神を見、神を知らんとて奥深く進み入るなり

一三―一五

【アポルロ】アポロン、ゼウスとレトの間の子（浄、二〇・一三〇—三二註参照）、こゝにては詩の神として

【愛する桂】アポロン、河神ペネウスの女なるニンファ、ダフネを慕ひてこれを追ふ、ダフネその及ばざるを見、救ひを己が父に請ひ遂に化して桂樹となる。アポロン即ちその枝を抱き樹に接^{くちづ}吻^けしていふ「われ汝をわが妻となす能はざれば、せめては汝をわが木となさむ、あゝ桂^{ラウロ}よ、汝は常にわが髪わが琴わが胡籥^{やなぐひ}の飴^{かざり}となるべし」云々（オウイデイウス『メタモルフオセス』一・四五二以下）。桂は詩人の榮冠なり

一六一—一八

地獄、淨火の二篇においてはムーサの助けのみにて足りしかど、

天堂篇においてはこれに加へてさらにアポロンの助けを借らざるべからず、これ詩題のいよく聖にしていよく難きによりてなり

【一の巔】パルナーツ（パルナツソス）（淨、二・六四―六註参照）に二の峯あること神話に見ゆ（『メタモルフオセス』一・三一六以下等）されどダンテがその一をムーサの、他をアポロンのとゞまる所とせしは、やゝ中古の傳説と異なれり

一九―二一

マルシユアスに勝ちし時のごとき美妙の樂をダンテに奏せしめよとの意。「氣息いきを嘘ふく」は靈感を與ふるなり

【マルシーア】フリユギアのサテユロス、マルシユアス。アテナ

の棄てし笛を拾ひてこれを吹き、遂にアポロンと技を競べんことを求む。アポロン琴を弾じ歌をうたひてこれに勝ち、その僭上をにく悪むのあまりこれが身の皮を剥ぐ（『メタモルフオセス』六・三八二以下参照）

二二—二四

【汝我をたすけ】原、「汝己を我に貸し」

二五—二七

【詩題と汝】詩題の崇高と汝の祐助

二八—三〇

【チエーザレ】皇帝。桂はまた凱旋のしるしとして、皇帝武將等の冠となれり

【人の思ひの】人、俗情に役せられ、かゝる榮冠をうるにいたること甚だ罕まれなり

三一—三三

【ペネオの女の葉】桂の葉。ペネオはペネウス。

【デルフォの神】アポロン。デルポイ（デルフォ）はパルナツソスの麓の町にてアポロンの聖地なり。スカルタツツイニ曰く、

「詩は形さま／＼なれどおしなべて人間の慰藉となるものなれば、悦び多しといへるなり」と（？）桂冠を望み求むるものあれば、アポロンの喜び愈 深し

三四—三六

【小さき火花に】ダンテの詩に勵まされてダンテよりもさらに大

いなる詩人いで、アポロンの助けにより、さらによく天堂の歌をうたふことあるべきをいへり

【チルラ】アポロン。但しパルナツソスの二の峯の名一定せざれば、ダンテがキルラ（チルラ）をその一と見做してかく曰へるか、或ひはパルナツソスより程遠からぬキルラの町（同じくアポロンの聖地）を指して曰へるか明らかならず

三七―三九

【世界の燈】太陽。四時の變遷に従つて地平線上多くの異なる點よりあらはる

【四の圈】春分に至れば太陽は四の圈即ち地平線、黄道、赤道、及び二分徑圈相交叉して三の十字を造る一點よりいづ（ムーア

『ダンテ研究』第三卷六〇頁以下参照)

註釋者或ひは曰。四の圈は四大徳(淨、一・二二—四註参照)の象徴にて三の十字は教理の三徳の象徴なりと

四〇—四二

【道まさり】春日は四季を通じて最も楽しく麗はしければ

【星】白羊宮の星。そのま。さ。る。は。地。上。に。及。ぼ。す。影。響。の。善。き。を。い。ふ、
天地の創造せられし時、太陽は白羊宮にありてその運行を始めし
なり(地、一・三七—四五註参照)

【世の蠟】太陽が光熱によりてその力を世に及ぼしこれに活力を
與へこれを幸ならしむることの愈著しきを、
印象かたを蠟の上に現
はすことのあざやかなるにたとへしなり

四三―四五

【かしこ】野火

【こゝ】わが世界

【殆ど】太陽白羊宮にあれども、はや春分（三月二十一日）を過ぎて北に向へるがゆゑにかくいへり（今は四月十三日）

【かの半球】南半球。今は淨火の正午

【その他】北半球。イエルサレムの夜半

ダンテが樂園にエウノエの水を飲みしは正午の事なり（淨、三三・一〇三―五）、しかして水を飲みて後直ちに月天に向へるなり（スカルタツツイニ註参照）、さればこの一聯の前半は單に日出時の太陽の位置をいへるものにて天に昇らんとするの時をいへる

ものにはあらず

ダンテは日暮れて後（絶望を表はす）地獄に入り、夜の明くる頃（希望を表はす）浄火に達し、正午（完全を表はす）に天に向ひて登れり（ムーアの『ダンテ研究』第二卷二六五頁参照）

四六一—四八

【左に】東（浄、二九・一〇—一二、同三二・一六一—八参照）より轉じて北に。南半球正午の太陽は東にむかふ者の左にあり

【驚】その眼よく太陽を直視すと信ぜられたればなり

四九—五一

第一の光線は投射線にて第二の光線は反射線なり。光線光澤ある物體に當り反射して元に還ることあたかも目的地に達し、旅客の

再び郷に歸るに似たり

五二―五四

ベアトリーチェが太陽を見しことダンテの同感に訴へ、ダンテまたこれに做ふにいたりたれば、前者の動作より後者のその生れしこと、なほ反射線の投射線より生るゝ如し

五五―五七

地上の樂園は神が永遠の幸福の契約として人類に與へ給ひし處なれば（淨、二八・九一―三参照）、かの地特殊の神恩により、北半球の世界にては人の爲し能はざる事にて樂園に爲すをうることも多し。ダンテが太陽を直視しえしもその一例なり、こはいふまでもなく人の罪淨まりてよく神恩の光を仰ぐをうるの意を寓す

六一—六三

光の俄に増したるは既に樂園を離れて急速に昇りゐたればなり

【者】神

六四—六六

【永遠の輪】諸天

六七—六九

ダンテ未だ長く太陽を見るをえざれど、ベアトリーチエの姿を通じて神恩彼の上に注ぎ、彼を超人の境に入らしむ

【グラウコ】グラウコス。エウボイアの漁夫、嘗て海濱に置きたる魚が、あたりの草に觸るゝとともに俄に勢を得躍りて海に入るを見て自らまたその草を噛みしに、是時性情忽焉として變じ、續

いて海に入りて海神となれり（『メタモルフオセス』一三・八九
八以下参照）

七〇—七二

【是故に】神恩によりて他日かゝる超人の經驗を自ら有するに
いたる人々今はたゞこのグラウコスの例をもて足れりとすべし

七三—七五

【愛】神

【我は】我はたゞわが靈魂のみにて天に昇れるか、將^はた肉體と共
にありてしかせるか（コリント後、一二・三参照）

【最後に造りし】形體既に成りて後、神の嘘^{ふきい}入れ給ふ新しき靈

（淨、二五・六七以下参照）。但し *Novellamente* を新たに、即

ち自然の作用によらずして神の新たに造り給へる義に解する人あり

【聖火】ベアトリーチエの姿に映じ、神恩の光

七六一七八

【慕はる】諸天の永遠に運行するは神を慕ひ、神と相結ばん爲なり（『コンヴィヴィオ』二・四・一九以下参照）

【調】運行によりて諸天の間に生ずる美妙の音調。ダンテは主としてキケロの説に據れり。頌[。]つは諸天の間に頌[。]つなり、整[。]ふは各天各種の音をよく和合せしむるなり

七九一八一

註釋者曰。ダンテ既に火焰界に達したるが故に光の天に漲れるを

見たりと。されどこの一聯によるも次に見ゆるベアトリーチエの説明によるも、ダンテが果して火焰界を意味せるや或ひはたゞ昇ること早く従つて太陽に近づくこと早きがゆゑにかくいへるや明らかならず、パッセリーニ (G.L. Passerini) 註参照
八五―八七

【我の未だ】原文、「我の問はんとて（わが口を啓かざる）さきに」

九一―九三

【己が處】火焰界

【これに】汝の處に、即ち天に。人の魂天よりいで、天に歸るをいふ

九七―九九

【輕き物體】空氣と火

一〇三―一〇五

宇宙萬物は皆その間に秩序を有す、この秩序ありてこそ萬物調和し、はじめて茲に完全なる神の姿を現はすなれ

一〇六―一〇八

天使や人類の如き被造物は、この秩序において、神の大能及び大智の印跡を認む

【目的と】この秩序の終極の目的は神にあり、即ち萬物を神の如くならしむるにあり

一〇九―一一一

かゝる秩序の中に、凡ての被造物は皆その目的めあてなる神を望めど、天與の位置に高低ありその務つとめまた皆異なれば、火や地球の如く神にいと遠きあり、また諸天使の如く神にいと近きあり

一一二——一四

萬物皆同じ程度において神に近づく能はず、その本能に導かれて各 適歸するところ（湊）を異にす

【存在の大海】空間

一一五——一七

この本能あるによりて火は地球と月との間なる火焰界に向ひて昇り、これあるによりて理智なき動物（滅ぶる心）もその生を營み、これあるによりて地球はその各部相結合して離るゝことなし（

『コンヴィヴィオ』三・三・五——三參照)

【相寄せて】重力によりて中心に向ふをいふ

一一八——二〇

この本能（弓）は理智なきもののみその作用を及ぼすに非ず、
理智あるものにもこれを及ぼす

一一二——一二三

【一の天】エムピレオの天、至高充全の天にして動かず。いと疾くめぐる天はプリーモ・モービレ即ち第九天なり

一二四——一二六

【的】めあて目的。物その處を得て初めて安んず、故に樂しといふ

【弦の力】本能の力

【定れる場所】安住所と定められるところ

一二七—一二九

たとへば彫刻などにて、美術家の意匠すぐるともその用ゐる材がかゝる意匠を現はすに適せざるため、出来ばえ思はしからぬごとく

一三〇—一三五

神を求むる自然の傾向はなほ美術家のすぐれたる意匠の如し、偽りの快樂に誘はれて人その行方ゆくへを誤るは猶材の悪しくして結果の工夫に配そはざるごとし

【かく促さる】本能に促されて人自然に天を望めど

【最初の刺戟】即ち本能の刺戟。自由の意志の濫用によりて人を

地に向はしむ

【火】電光。火本來の性質に背き、上昇せずして降下するなり

一三九―一四一

【障礙】罪の（淨、三三・一四二―五參照）

【火】火焰界以外にありては火の靜なる事なし。以上ベアトリ―チエの言、多くトマス・アクイナスの『神學大全』の所説と一致す、今一々引照せず

第二曲

第一天（月）に達し、ベアトリーチエまづダンテの爲に月面の斑点に關する原理を説く

一—三

天堂篇の充分なる理解は他の二篇に此し科學並びに宗教上さらに大いなる豫備知識を要求するがゆゑにダンテはこの曲最初の六聯において讀者に警戒を與へたり

四—六

汝等の知識の範圍内に汝等の研究の歩をとゞめ、それより先に進むなかれ、恐らくは力足らざるため汝等この天堂の歌をさとするを
えじ

七—九

【わがわたりゆく水】我よりさきに天堂の歌をうたへる人なし

【ミネルヴァ】知慧の女神にて學藝の守護者たり。氣息を嘘くはその徳を風として船を進むるなり

一〇—一二

【天使の糧】この語ウルガータに見ゆ（詩篇七七・二五）。靈の糧即ち眞の智の義なり（『コンヴィヴィオ』一・一・五一以下參照）。靈界の知識は世人の眞の糧なれども、これに飽くをうるはたゞ天上においてのみ

【項を擧げ】心を向け

一六—一八

【イアソン】（地、一八・八五—七並びに註參照）、イアソン、

コルクイスにいたり、金の羊毛を與へんことを王アレイエテスに請ふ、王まづ彼をして焰の息を吐く二匹の牡牛に軛をつけしめかつカドモス（地、二五・九七―九）の殺せる龍の齒をはその耕し、處に播かしむ、イアソン、王女メデイア（地、一八・九四―六）の妖術により自若としてこの難に當る、見る人驚嘆せざるはなし（『メタモルフオセス』七・一以下参照）

【勇士等】アルゴナウタイ遠征隊に加はれる人々
一九―二一

【神隨の】deiforme 神に似たる。中山昌樹氏の譯語に據れり、神隨の王國はエムピレオの天なり

【本然】本能の力によりて慕ふ心

二二—二四

【弦】noce 弩弓の一部にて彎き張れる弦の當るところ

「止まる」目標に中りて止まるをいふ。原文、逆に「止まり、飛び、弦を離る」とあるは、いづれが早きかわけがたき程なるを表はせるなり、天、二二・一〇九—一一に、原文「指を引きて火に入れんや」とあるに同じ

二五—二七

【奇しき物】月球

二八—三〇

【第一の星】宇宙の中心にある地球より數へて第一に當る星、即ち月

三七―四二

ダンテもし肉體のまゝにて月球に入り而して月面に罅隙を生ぜざりしとせばこは全く不思議の現象にほかならず、二個の物體が同時にかつ同處に存在すること能はざるは是物理の通則なればなり、故にダンテはこの通則より推して、キリストの兼備へ給へる神人兩性の事に及び、これを見、これを知るの願ひ愈切なるべしといへり

四三―四五

神人の合一等すべて世上の人のたゞ信仰によりて眞まことと認むる深遠微妙の現象も天においては道理の證明をまたずたゞ直覺によりて人よくさとることをうべし（コリント前、一三・一二參照）

【第一の眞理】人智のおのづから眞と認むるもの、生得の觀念に照して眞と知るもの、自明の眞理

四九―五一

【カイン】月の斑點に關するカイン物語（地、二〇・一二四―六並びに註參照）

五二―五七

【官能の】官能の力によりて知るをえざる事物においては人思ひ誤るともあやしむに足らず、理性もしたゞ官能に信賴せば、超官能の現象に對しその作用を伸ぶること能はざればなり

五八―六〇

月面に見ゆる斑點の原因を物質の粗密に歸し、説。『コンヴィヴ

イオ』に出づ（二、一四・六九以下）

六四—六六

【第八の天球】恒星天。この天にある多くの星（光）は、その光の色も度もさま／＼にして一ならじ

六七—六九

もし物體の粗密以外に光の異なる原因なしとせば、これらの星の地上に及ぼす影響はその程度に於て或ひは不同ならんもその性質において皆同一ならむ

恒星天に光異なる種々の星あるは、月天の光の一樣ならざるに似たり、故にベアトリーチエは後者の事を説かんと例を前者にとれるなり

七〇—七二

しかるに恒星天の諸星は皆その與ふる影響の性質を異にす、知るべし光の異なる原因物體の粗密のみにあらざること

【形式の原理】 *Principii formali* 物の類別性と势能とを構成するもの。複數を用ゐしは、たゞ一のみならざればなり

【一】 同原理の一なる粗密

七三—七八

斑點もし體の粗なるにもとづくとせば、光の暗き處にては、(一) 粗質月球を貫通するか、さらずば (二) 粗と密と相重ならむ

【肉體】 同一の肉體の中に脂肪と筋肉とあるごとく、月の中に、質の粗なる部分と密なる部分と層を成して相接すべし

【書】紙の重なりて書冊となるを、層の重なりて月球となるにたとへしなり

七九―八一

粗質月球を貫通すとせば、日蝕の時、日光その部分を射貫き、世人の目に見ゆるにいたらむ

八五―八七

粗質月球を貫かずは、粗が密の爲に路を遮られて、さらに進む能はざるところ換言すれば粗終りて密始まるところ、即ち粗密相接するところあり

九一―九三

【奥深き】月面より反射せずして月球の内部より反射するがゆゑ

に、反射の光微かにして斑點爲に生ずと

一〇三——一〇五

中央にありて遠き鏡の反射する光は左右の鏡の反射する光よりその量劣れどこれと質を同うす、されば月球の内部より反射すともその光何ぞ斑點となりてあらはるゝにいたらむ

一〇六——一一一

汝の智既に謬見を去りその名残をも止めざるにいたりたれば、我今汝にかの斑點の眞の原因を説示すべし

【下にある物】雪に蔽はれゐたる地、但し原語 *suggetto* を實體

(雪の) と解する人あり

【色と冷さ】雪の。ベアトリーチエの言を日光に、ダンテの智を

土に、謬見を土の假の色なる白色に、その結果を冷さにたとへしなり

【光】 眞理の光

一一二―一一四

【天】 エムピレオの天

【一の物體】 プリーモ・モービレの天。この天に包まるゝ諸天及び地球がその秩序安寧を保つは、この天がエムピレオの天より受けて有する力による（『コンヴァイヴィオ』二・一五・一二二以下参照）

一一五―一一七

恒星天はプリーモ・モービレより受けし力をその中にある（恒星

天の中 あれどもこの天と同一ならずして種々の特性を有する)
 多くの星に傳ふ

【光】 vedute 目に映ずる物。星

【本質】 恒星。各 その特質を有すればなり。但し七の天の意に
 解するを得

一一八——一二〇

【目的と種】 穀物の成長し實を結びて其目的を果し、その實また
 種となりて實を結ぶにいたるごとく、恒星天の下なる七の天はそ
 の上より受けし力によりて己が特性をととのへ己が特殊の存在を
 保ちつゝさらにその力を下に及ぼす、故にその衷に有する力は果くわ
 にして困いんなり

一二一—一二三

【宇宙の機關】 諸天

【上より受け】 その上なる天より力（影響）を受け

【次第を逐ひ】 第八天より第一天まで

一二四—一二六

【我を】 異本、「今」

【汝の求むる】 わがかく論じつゝ月の斑点の眞の原因に到達する
次第に注意すべし、さらばこの後わが助けを借らずして自ら眞理
を認むるをえむ

一二七—一二九

【動者】 天使（『コンヴィヴィオ』二・五・四—八、及び地、七

・七三一五並びに註参照)

一三〇——一三二

かの恒星天を見よ、この天はこれを轉らす奥妙の智即ちこの天を司どる天使よりその力を受け、これをその中なる諸の星に頒ち與ふ

例を恒星天にとれるは類想によること前述のごとし

一三三——一三五

汝等の肉に宿る魂たゞ一なれども、視聽及びその他の官能に應じ肢體の各部に亘りてさま／＼の作用はたらきを現はすごとく

一三六——一三八

第八天を司る天使一なれども、この天の中の星多く、特性異なれ

ば、これらの星に及ぶ天使の力一ならじ

【天を司るもの】 *intelligenza* (了智) 聖智、即ち天使

一三九—一四一

諸天を司る諸天使の力相異なるが故に、これらの異なる力がその轉らす諸天と合して生ずる結果同じからず

【生命の】 人の生命肉體と結ばる如く

一四二—一四四

力かく一様ならざれどもいづれも皆悦び多き神の性さがより出づるがゆゑに、各 その司る星と合して (混れる力) 光り輝くことあたかも燃ゆる瞳の中に喜びのかゞやくごとし

一四五—一四八

斑點の原因はこの混まじれる力の相違にて粗密にあらず

力の相違は一天と他の天（星と星）との間に存するのみならず、同一の天のうちにてもまたこれを見るをうべし、月の斑點は月の各部における力の相違にてこの相違は各部その完全の度を異にし天使の力の及ぶこと従つて異なるに基づく

第三曲

ダンテ月天にあり、誓ひを全うせざりし者の魂にあふ、その一ピツカルダ・ドナーティ、ダンテに己が身の上の事と皇妃コンスタ

ンツエの事とを告ぐ

一―三

【さきに】世にて（淨、三〇・三四以下参照）

【日輪】ベアトリーチエ

一六―一八

【人と泉】泉に映れる己が姿を戀慕へるナルキツソスの傳説を指す（地、三〇―一二七―九註参照）

【誤りの裏】ナルキツソスは影を實物と思ひ誤り、ダンテは實物を影と思ひ誤れり

二二—二四

【光】目の

二五—二七

【汝の足は】汝の思ひは眞理を基礎とせず、たゞ官能に信賴するがゆゑに誤り易し

二八—三〇

【こゝに】聖徒はすべてエムピレオの天にあり、たゞその受くる福の一樣ならざるをダンテに示しかつこれに天上の眞を教ふる便宜上かりに諸天にわかれて詩人の目に現はれしに過ぎず（天、四・二八以下参照）

【長の】影ならぬ

三一―三三

【光】神。眞の光を離るとは眞そのものにまします神を離れて眞にあらざることをいふ義

三四―三六

【最も切に】俗縁の關係上（淨、二三・四六―八註參照）

【魂】フオレーゼ及びコルソ・ドナーテイ（淨、二四・八二―七註參照）の姉妹ピツカルダ

【願ひ】ダンテにおいてはピツカルダと語るの願ひ

三七―三九

【甘さ】天上の悦び

【永遠の生命の光によりて】神の光を仰ぎ見て

四三―四五

【己が宮人達】すべて天堂に福を受くる者

【等しきをねがふ】愛は神の愛なり。神は愛にましまし天堂舉りて己の如く愛に燃えんことを願ひ給ふ

四六―四八

【尼】*vergine sorella* (童貞尼) 聖キアーラ (九七―九註参照) 派の此丘尼

四九―五一

【球】月天。古説によれば最小の天にしてその運行最遅し

五二―五四

我等はたゞ神がその聖旨みむねのまにくわれらに與へ給ふ福をのみ求

むるが故に、神の立て給ふ秩序に従つていかなる程度の福を享くともこれに満足せざることなし

六四—六六

【さらに多く見】さらに多く天上の福を見かつその福をうくる魂のうち^に友をうるを求むること

但し、〔*piu`vedere*〕を近づきて神を見るの意とし、〔*piu`farvi amici*〕をいよく神と親しむの意とする人多し

スカルタツツイニは *amici* を前後に通はしめ、前者を舊友と再會する意に、後者を新らしき友を得る意に解せり

七〇—七二

【愛の徳】愛は嫉まず（コリント前、一三・四）

七六一七八

【性】聖徒を完全に神意と適合せしむるものは愛なり

七九一八一

【一となる】神の聖意みこころと

八二一八四

【諸天】*di soglia in soglia* (*soglia = soglio*) 座より座に、即ち天

た天と

【王】神。われらの意こころを聖意みこころと適合するにいたらせ給ふ

八五―八七

神の直接または間接（即ち自然を通じて）に造り給ふ宇宙萬物は、その終局の目的、福祉の本源（平和）なる神を望み神に合せんと

して進む、ゆゑに神はさながら諸水の四方より注ぎ入る大海に似たり

八八―九〇

いかなる天にある者もみな福を受く、たゞ己が功德に従ひ、そのうくる福に多少あるのみ

九四―九六

【姿、詞に】動作と言葉とにより。ピツカルダに、その教へを垂れしを謝し、かつ新なる教へを請へり

【いかなる機を】その全うせざりし誓ひの何なるやを聞かんとて
九七―九九

【淑女】聖キアール（一一九四―一二五三年）。アツシージの人、

同郷の出、聖フランチェスコの高徳を慕ひて遁世しかつその助言を受けて一二二年童貞院の基を開きその規約を定む

一〇〇—一〇二

【新郎】キリスト（マタイ、九・一五等）。これと起臥を俱にするは、晝夜のわかちなくキリストに奉仕するなり

一〇三—一〇五

【また】またその嚴正なる規約を守りて一生を送らんと誓ひたり

一〇六—一〇八

【人々】ドナーティ家の人々、特にピツカルダの兄弟コルソ

古註によれば、コルソは他の人々と共に尼寺の中に忍び入りてピツカルダを奪ひ、これをフィレンツェの人口ツセルリーニ・デル

ラ・トーザに嫁がしめたりといふ、但し眞偽明らかならず

一〇九―一〇一

【すべての光】月天にて最強き光。月天の諸靈のうち徳最も大い
なればなるべし

一一二―一一四

【聖なる首帕】尼のしるしの面帕

一一五―一一七

【良き習】比丘尼の還俗を許さざる

【心の面帕を】心はいつも尼にてありたり

一一八―一二〇

【ソアーヴェ】シュヴァーベン、ドイツ西南の一州。ホーエンシ

ユタウフェン王家こゝより出づ

【第二の風】ホーエンシュタウフェン王家の第二の君即ちハイ
リヒ六世。第一の風はフリートリヒ一世にて第三の風はフリー
トリヒ二世なり。ブランク (I. G. Blanc) の説によればこれを風と
いへるはシュヴァーベン家の諸帝の権力猛くして而して永く續か
ざることをあたかも一陣の暴風に似たるがゆゑなり、但し異説多し
【最後の威力】威力は皇帝の意なるべし、最後といへるは、その
後皇帝なきにあらざりしも實これにともなはざればなり

【コスタンツア】コンスタンツエ。シケリアの最初の王ロージエ
ーロ (ルツジエーロ) の末女、一一五四年に生れ、同八五年皇帝
ハインリヒ六世の妃となりてフリートリヒ二世を生み、一一九八

年に死す

傳説に曰。コンスタンツエ尼となりて久しく尼寺のうちにあり、皇帝フリートリヒ一世これをわが子ハインリヒ六世の妃とし、この結婚によりてシケリアを己が帝國の領土に加へんため、密かに謀りて強ひて尼寺を去らしむ云々、但しこの説今は虚構と認めらる（ムーア『ダンテ研究』第二卷二七六頁参照）

一一一——一二三

【アーヴェ・マリーア】（マリアよ幸あれ、ルカ、一・二八にいづる天使の詞）、聖母にさゝぐる祈りの歌

一二四——一二六

【願ひの目的】ベアトリーチェ

第四曲

ダンテの二の疑ひに對し、ベアトリーチエは、人の魂星に歸るといふ古説の非を辯じ、かつ意志の自由を説く、ダンテまたさらに一の疑ひを擧げて淑女の教を乞ふ

一—三

トマス・アクイナスの『神學大全』（一、二、一三・六）に據れり。ピツカルダの言は二つの疑問をダンテの心に起し、等しくその解答を求めしがゆゑにダンテ選擇に惑ひて問ふこと能はざりき

となり、次聯の例また同じ、オウイデイウスの『メタモルフオセ
ス』（五・一六四以下）に饑ゑたる虎の譬へあるなど思ひ合はす
べし

【自由の人】自由の意志を有し、いづれをも選ぶをうる人

四一六

【犬】何れを逐ふべきか知らずして

一三一—一五

【ナブコツドノゾル】ネブカドネザル。バビロニアの王なり、嘗
て夢の爲に心をなやまし、所の智者等を召して夢とそのときあかし解釋

とをとともに奏せと命じ、かれらの答ふる能はざるを見、怒りのあ
まり悉くこれを殺さんとす、ダニエル（ダニエルロ）異象により

一切を知りて王に奏し、智者等を救ふ（地、一四・一〇三―五註

参照）

ベアトリーチエがダンテの言を俟たずしてその疑ひを知りかつこれを解きてその心をしづめしこと、猶ダニエルが王に問はずしてその夢を知りかつこれをときあかしてその怒りをなだめしごとし
一九―二一

誓ひを果さんとの意志だに變らずば、たとひ他人の暴虐にあひてその志を全うせずとも、罪その人に歸せざるに似たり

二二―二四

プラトンの言に、人の魂は星より出で、肉體に宿り、死とともに再び星に歸るとあり、汝も現に魂星にあるを見て、この言を或ひ

は正しかるべしと思へり

二五―二七

【毒多き】キリスト教の信仰に反すれば

二八―三〇

【セラフィーン】（複數）セラピム、諸天使中最も高貴なるもの
（イザヤ、六・二參照）

【モイゼ】モーセ。舊約時代の偉人（地、四・五・五―六三參照）
【サムエール】サムエル。ヘブライ民族最後の士師にてヘブライ
王國の建設者たり（サムエル前、一・二〇以下）

【いづれを】キリスト十二弟子の一なるヨハネにてもパブテスマ
のヨハネにても

三一—三六

諸天使諸聖徒皆エムピレオの天にあり、福の度異なれども、存在の永遠なるは一なり

【永遠の聖息】神よりいづる福。福の度異なるはこれを享くる者の力異なるによる

四〇—四二

【かく】具體的に

【後智に】人は靈的事物を直に智に訴へてさとりに難し、その事物まづ具體化して官能に訴へ官能はこれが印象を想像に想像はこれを智に傳へ智はたらきてはじめてさとる

【官能の作用】 *sensatio* 官能的物象即ち官能の捉ふる物象の義

四三―四五

【手と足】或ひは神の手（歴代志略下三〇・一二等）といひ或は神の足（イザヤ、六六・一等）などいへるも、たゞ靈的事物を具體化せるに外ならず

四六―四八

【ガブリエール】ガブリエル。天使の長（ダニエル、八・一六及びルカ、一・一九等）

【ミケール】ミケル。同天使の長（地、七・一〇―一二註参照）

【トビアを癒し、天使】敬虔なるイスラエル人トビアの目を癒し、天使の長ラファエル（トビア、三・二五）

四九―五一

【テイメオが】プラトンがその『テイマエウス』と題する對話篇に

テイマエウス（テイメオ）はピユタゴラス派に屬するギリシアの哲人にてプラトンの友なり

ダンテ時代にカルチディオのラテン譯ありきといふ、恐らくはダンテこれによりて『テイマエウス』を知りゐたるならむ

【似ず】月天に現はるゝものは靈界の眞理の具體的表示にて、テイマイオスの意はその詞の文字通りなりと思はるれば

五八一六〇

もし星に歸るものは魂その者に非ずして、その星の影響の譽や毀なりとの意ならば、換言すればもし諸の星の力、肉に宿れる魂

に及び、これをして或ひは善に或ひは惡に向はしむとの意ならば、その言に幾許の眞理あらむ

【矢】原、【弓】

六一―六三

【この原理】星の影響の

【ジョーヴェ、メルクリオ】神話の神々の名、人々星辰の影響を過重視するの餘り、その信ずる神々の力、星にありとし、その名を星に附するにいたれり。たとへば火星に武徳ありとしてこれに軍神アレス（マルテ）の名を附し金星に戀愛の徳ありとしてこれに戀愛の女神アプロディテの名を附し、がごとし

【名づけしむ】或星をジョーヴェ、或星をメルクリオ、或星をマ

ルテと

六四—六六

【我】神學の象徴としてのベアトリーチエ、即ち眞まことの信仰

六七—六九

神の正義（審判）は奥妙にして量るべからず（ロマ、一一・三三）されば人間の目に不正とみゆとも、こは寧信仰に進むの一階段にて異端に導くの道にあらず、何となれば、不正と見ゆるは奥妙不測のしるしにて、奥妙なりと知るは信仰に入るの本もとなればなり

【われらの】天上の

【過程】 *argumento* 今スカルタツツイニの註解にもとづきて假に

この語を用ゐたり、異説或は「證あかし」の義とし或は「議論」（問題）

の意とす、委しくはスカルタツツイニの註を見よ

七三―七五

まことあらび

眞の暴とは、虐げらるゝ人これがためにいさゝかもその意志を屈せざる場合にのみ生ず、意志は他人の左右し能はざるものなればなり、ピツカルダ、コンスタンツエのごとき、これ眞の暴にあへるにあらず、従つてこれを理由としてその罪をいひひらく能はざるなり

七六―七八

【火が】火はいく度これを下方に向はしむともその本然の力によりて必ずまた上方に向ふごとく

七九―八一

【聖所】尼寺。身は強ひて聖所より引離さるとも、意志だに屈せずは、他人の抑壓を脱するとともに再び聖所に歸るべきなり、歸るをえて而して歸らざるはその意志の屈せるなり、罪茲にあり。但しいつ、いかに歸るをえしやは明ならず

八二―八四

【ロレンツオ】聖ラウレンティウス。皇帝ヴァレリアヌスの迫害の犠牲となりて鐵架の上に焼かれ自若として死せる（二五八年）ローマの殉教者

【ムツイオ】ローマの一青年カイウス・ムキウス・コルドウス・スカエヴォラ。エトルリア王ポルセナを殺してローマの危急を救はんとせしも果さず、その失敗の罪を己が右手に歸し、王の目前

にて自らこれを焼けり（『コンヴィヴィオ』四、五・一一五以下
参照）

八八―九〇

【疑ひは……解け】原、「論は消滅し」

九一―九三

【路】困難

九四―九六

【あきらかに】天、三・三一―三

【第一の眞】眞の源なる神

九七―九九

【聞きたる】天、三・一一五―七

【されば】聖徒は偽らず是故にピツカルダの言すべて眞なり、然るにピツカルダはコンスタンツエが尼寺を離れし後も心に尼となりゐたりといひ、我は今かれらの意志暴あらびの前に屈したりといへり、さればピツカルダの言、わが言と相反すと見ゆべし

一〇三—一〇五

【アルメオネ】アルクマイオン。父アンピアオスの仇を報いんとて母エリピュレを殺せる者（淨、一二・四九—五一註参照）

【父に請はれ】もし戦ひに死せばエリピュレを殺せと豫めその子に命じ置きしなり

アルクマイオンは父の命に背くことを母を殺すことよりもさらに大なる罪と思ひたればなり

一〇六一—一〇八

【暴意志と】人の暴のみならず己の意志あらび（相對の）も加はりて

一〇九—一一一

絶對の意志は暴に屈せず、たゞ相對の意志之に屈す、即ちもし屈せずして飽まで抵抗せばさらに大いなる禍ひに陥るあらんを恐れ
てこれに屈するなり

一一二—一一四

コンスタンツエの意志は絶對に暴に屈せるならねば此丘尼の生涯を慕へるは事實なれども、恐怖の念に左右せられて相對にこれに屈せるなり、ピツカルダは絶對の意志を指して屈せずといひ我は相對の意志を指して屈せりといふ、彼此兩立す

一一五——一七

【泉】神

【流れ】ベアトリーチエ

一一八——一二〇

【愛に】原、「愛する者に」。神に

【潤し……暖め】水の潤や太陽の熱によりて草木の生き出づるぐとく

一二一——一二三

【これに應へ】わが爲に汝の恩恵めぐみにむくい

一二四——一二六

【眞】神

一二七—一二九

智は自然に眞を知るを求む、すべて自然に生ずる願ひは空ならじ、是故に眞を知ること可能なり、しかして智眞に達すれば悦びをその中にうるることあたかも走り疲れし獸がしづかに己が洞窟の中に休むに似たり（コルノルデイ、G.M.Cornoldi）

一三〇—一三二

人かく自然に眞を求むるがゆゑに一知はさらに一疑を生じ、眞より眞に進みて次第に終極の眞（神）にむかふ

一三三—一三五

【この事】以上わがいへる凡ての事

一三六—一三八

【汝等の天秤】天上の天秤はかりに。神の正義が、かゝる善行をもてこの罪を贖ふに足るとなすまで

【汝等に】天に對して

第五曲

ベアトリーチェは誓ひの神聖なることゝこれに易ふるをうる物のことを論じてダンテの疑ひを解き、後相俱に水星天にいたる

一—三

【愛】神の愛。神の光ベアトリーチェに反映するなり

四一六

【全き視力】ベアトリーチエの。視力完全なるがゆゑに神の光に接するも眩暈せずかへつて愈　光の内に進み入るなり（神を視神を知るに従ひ神を愛するの愛いよく深し）

スカルタツツイニの引用せる出エジプト記（三四・二九以下）に、モーゼ神と物言ひて山を下りし時、イスラエルの民その顔光を放つを視、恐れてこれに近づかざりしこと見ゆ

七一九

【永遠の光】神の光。神の光は一たびこれを視る者をして永久に己を愛せしむ（『コンヴィヴィオ』三、一四・五一以下参照）

【その中に】迷はず物の中に。世に屬する空しき幸をも人誤り見て眞の幸となしこれを追ひ求むるなり（淨、一六・八五―九三參照）

一三一―一五

【論争】法廷の論争、即ち神の正義に對し己が爲に論辯すること。これを免るゝは誓ひを果さざりし罪の釋かるゝなり

一六一―一八

【この曲をうたひいで】第五曲の始めにベアトリーチェの言葉を載せしをかくいへり

一九―二一

【造りて】creando 創造の時の義

二二—二四

創造の始めより今に至るまで凡て了知ある被造物即ち諸天使及び人類はこの意志の自由（淨、一六・六七以下参照）を與へらる
二五—二七

【人肯ひて】人約束を立て、神これを嘉し給ひ

二八—三〇

【寶】自由意志。誓ひを立つるは自由意志そのものゝ作用によりて自由意志を神に獻ぐるなり

三一—三三

是故にいかなる善事も、破約の罪を贖ふに足らず、意志の自由を一たび神に獻げつゝ、後その自由を用ゐて他の善を爲さんとす

は、これ※物をもて善を行はんとするに等し

三四—三六

【要點】誓約そのものはいかなる善行によりても贖はるべきにあ
らざること

四三—四五

誓約の要素に二あり、一はその材（誓約の對象なる童貞、斷食等
）、他はその形式（神に約して己が自由意志を獻ぐる事）なり。
以下ベアトリーチェの言を摘記すれば左の如し

（一）誓約は破るべからず、故に果すに非ざれば消えじ、たゞ獻
ぐる物その物は或はこれを變ずるを得（四六—五四行）

（二）物を易ふるに當りては必ずまづ寺院の許諾を受けざるべか

らず、かつ易へて獻ぐる物前に獻げし物よりも尚大ならざるべからず（五五―六三行）

（三）是故に誓ひを立つるにあたりては人これを輕視せず必ず充分の注意をこれに拂ふを要す（六四―八四行）

四九―五一

【希伯來人】モーゼの律法に従ひ誓約の獻物さげものをなすことレビ

記（二七・一以下）に見ゆ

【如何により】獻物の中には易へうべき物あり（レビ、二七・一以下等）易へうべからざる物あり（同二七・九―一〇等）

五五―五七

何人も寺院（即ち聖職にありてかゝる權能を有する者）の許諾を

俟たずたゞ己が意志に従つて誓約の材を變ふるをえず

【黄白二の鑰】僧侶の權能及び技能の象徴なる金銀の鑰（淨、九・一一五以下參照）

五八一六〇

【六の四に】單に大小を表はせるにて數字上の比較にあらず、モ
ーゼの律法にては五分の一を加ふべしとあり（レビ、二七・一三
等）

六一一六三

是故に供物の價值甚大にしてこれに相當すべき物他にあらざると
きはいかなる善行を以てすとも交換を許さず、童貞の誓ひの如き
この種に屬す

六四―六六

【イエプテ】イエフタ。ガラードの勇士にて後イスラエル人の士師となれる者。イスラエル人の爲にアンモン人と戦ふに當り神に誓ひて曰ふ、汝もし敵をわが手にわたし給はゞ、わが歸らん時わが家の戸より出で來りて我を迎ふる者わが燔祭の獻物となるべしと、しかるにその勝ちて歸るや、彼を迎へし者はわが獨子なる女むすめなりき（士師記一一・三〇以下）

【最初の供物】ヴルガータに「最初に出で來る者」とあるによれり

【輕々しく】bieci（目を斜はすにして）、目を斜にして物を視る時はその真相を認め難し、故にこの語轉じて「思慮なく」の意に用ゐ

らる（スカルタツツイニ）

誓ひを守るに忠なるはよし、されどこれを立つるに當りては熟慮を要す

六七―六九

【守りて】即ちその女を殺して。軽々しく誓約を立つれば、守りてかへつて守らざるよりも大いなる惡に陥ることあり

【ギリシア人の大將】アガ멤ノン。トロイア役におけるギリシア軍の主將たり、トロイアに渡らんとすれども順風を得ず空しくアウリスに止まるを憂へ、もしこれを得ばその年生るゝものゝ中最も美しきものをアルテミスに獻ぐべしと誓ひし爲、遂にわが女むすめイピゲネイアを犠牲せざるべからざるにいたれり

七〇―七二

【かゝる神事を】かく酷むごき犠いけに牲への事を

七三―七五

【身を動かし】こゝにては誓約を爲すこと

【いかなる水も】誓約の履行をたやすく免ぜられうべしと思ふ勿
れ

七六―七八

聖書の教へを守り寺院の導きに従はゞ救ひを得む、漫りに誓ふは
これを得るの道にあらず

七九―八一

己の慾のため誓願をなすの念起らば、汝等これに盲従せず、人間

としてこれに逆へ、さらずば汝等の中に住するユダヤ人等（即ち舊約の律法に従つて誓約を神聖視する）汝等キリスト教徒が誓約に對して思慮なきを笑はむ

八二―八四

【母の乳を】聖書の教へや寺院の導きを離るゝ者は乳を離るゝ羔の如し

【自ら己と戦ふ】ただ獨りにて狂へる如くはねまはるをいふ
八五―八七

【處】太陽もしくは赤道。但しいづれにても上方の事

八八―九〇

【變れる】高く登るに従つてベアトリーチエの姿いよく美しく、

いよく強く輝けばなり

九一―九三

【第二の王國】 水星天

九七―九九

【いかなるさま】いかなる印象（喜びや悲しみの）をも受け易き

一〇三―一〇五

【輝】世の榮譽を求めし人々の靈

【ますべきもの】ダンテを指す。われらの愛は、かれの疑ひを解くによりて現はれ、現はるゝによりて愈 増すべし

一〇五―一〇七

あゝ福を享けんが爲に生れ、未だ死せざるさきに神恩によりてエ

ムピレオの天を視るを得る者よ

【戦】地上の生命（ヨブ、七・一参照）

一一八―一二〇

【光】神の恩愛の光

一二一―一二三

【靈の一】ユステイニアヌス（天、六・一〇―一二参照）

【神々】誤らず偽らざる（ヨハネ、一〇・三四―五参照）

一二四―一二六

【巣くひ】包まれ

一二七―一二九

【他の光】日光。ダンテは『コンヴィヴィオ』の中に、水星は最も
 小の星にしてかつ他のいづれの星よりも太陽の光に多く蔽はると
 いへり（二、一四・九一以下）

一三〇—一三二

【前よりはるかに】光の増すは悦の増すなり

一三三—一三五

日の面水氣おもてに隔てらるゝときは光和らぐがゆゑにこれを視ること
 をうれども（浄、三〇・二五—七参照）、水氣熱の爲に飛散すれ
 ば、光直射して仰ぎ見難し（浄、一七・五二—四参照）

【幕】原、「和らぐるごと」

月天にては諸靈の姿そを包む光の爲に微かに見え、水星天にては

この光なほ増して、近づかざれば光のみ見ゆ、（喜び常よりも大
いなる時姿全く見えざることユステイニアヌスの例にて知らる）、
また金星天にては光さらに増して聖徒の姿全く見えず、太陽天火
星天と天の次第に高きに従つてかれらの光いよく強し

第六曲

皇帝ユステイニアヌスの靈水星天にてダンテに己が身の上の事と
「ローマの鷲」の事とを告ぐ

【コスタンティーン】コンスタンティヌス一世（地、一九・一一五―七註参照）。三二四年帝國の首都をローマよりビザンティウム（今のイスタンブール）に移せり

【鷲】ローマ帝國の旗章はたじるし（淨、一〇・七九―八一参照）として帝國の權勢を代表す

【天の運行に逆はしめし】西より東に移らしめし

【ラヴィーナ】ラウイニア王ラテイノスの女にてアエネアスの妻となれる者（地、四・一二四―六参照）

【昔人】アエネアス（地、一・七三―五並びに註参照）。トロイア没落の後アエネアス、イタリアに赴けり、帝業の基を起せる者なるがゆゑに、鷲これにともなひて天の運行と同じく東より西に

行けりといへるなり

四一六

【二百年餘】三二四年より五二七年（ユステイニアヌス即位の年）まで

或ひは曰。ダンテはブルネット・ラテイーニの記録に従ひ、遷都を三三三年、ユステイニアヌスの即位を五三九年の事とせるなりと

【神の鳥】鷲

【エウローパの際涯】ヨーロッパの東端にあるビザンティウム。

トロイアを距ること遠からず

【山々】トロイア地方の山々。鷲さきにあエネアスにともなひて

この山々よりいでたり

七一九

【手より手に】皇帝より皇帝に

一〇一—一二

【ジュステイニアール】ユステイニアヌス一世（四八二—五六五年）。ヴァンダル族及びオストロゴート族と戦ひて武名を揚ぐ、されどその最も世に知らるゝにいたれるはかのローマ法の編成によりてなり

【第一の愛の聖旨により】聖靈にはげまされ

一三—一五

【一の性】神性。キリストにおいて、人性は神性中に没しその存

在を失へりとなすエウチキオ（三七八―四五四年）一派の異端。

但しユステイニアヌスの妻テオドラはこの派の熱心なる信仰者なりしもユステイニアヌスはかゝる信仰を懐きしにあらず、ダンテ或ひはブルネツト・ラティ―ニの言によりてかく録せるにあらざるかと註釋者いふ

一六一―一八

【アガピート】アガペトウス一世（五三五年より翌六年まで法王たり）。オストロゴートの王テオダトウスの爲にユステイニアヌスと和を謀らんとてコンスタンティノポリスに赴き、かしこに死す、その間彼は皇帝に説きて異端者を罰せしめきと傳へらる

一九―二一

【信ずる所】キリストにおける神人の兩性

【一切の矛盾】肯定眞なれば否定偽りに、否定眞なれば肯定偽りなり。明かなる見易き事の一例として擧ぐ

二二—二四

【寺院と歩みを合せ】寺院の教義と説を同じうしてキリストの兩性を信ずるに及び

二五—二七

【ベリサル】ベリサリウス。ユステイニアヌス部下の名將（五六五年死）

【天の右手】天佑によりて彼多くの勝利をえたれば、その武運のめでたきを見て、我は自ら平和の事業（即ち律法の編成）にたづ

さはることの天意に従ふ所以なるを知れり

二八―三〇

【第一の問】我は汝の誰なるやを知らず（天、五・一二七）

【性に】鷲の物語をなしかつ身は昔皇帝なりしを告げたることに

三一―三三

【深き理によりて】反語、理不盡にも

【我有と】これを獨占して一黨の利を圖らんとするギベルリニも、
これに敵抗するグエルファイも

三四―三六

【パルランテ】パルラス。エヴァンドロ（ギリシアのアルカデイ
アの人にて、ラチオに來りその一部の王となれる者）の子なり、

アエネアスを助けてツルヌス（地、一・一〇六一八註参照）と戦ひ、これに死す（『アエネイス』八一—一〇卷）。パルランテはローマ帝國建設の犠牲者なればかくいへり

【徳】ローマの諸英雄の武徳

この一聯の中 [e comincio] 以下を地の文とし、「見よいかなる徳のこれをあがむべき物とせしやを。かくてパルラスがこれに王國を與へんため身を殺し、時の事より語りはじむ」と讀む人あり、ムーアまた然り。今 [comincio] の主格を [virtu] とする説に従ひ、意を汲みてかくは譯しつ

三七—三九

【アルバ】アルバ・ロンガといへるラチオの町（ローマの東南ア

ルバーノ湖附近)。傳説によれば、アエネアスの子アスカヌスの建てしものにて、アエネアスの子孫こゝを治むること三百年餘なりきといふ

【三人の三人と】アルバ・ロンガとローマとの争ひを指す。アルバのクリアティウス (Curiazii) 家の兄弟三人とローマのホラティウス家の兄弟三人と相争ひしが、ローマ方遂に勝ちてアルバの主權を奪ひたり

傳説に曰。ローマはアルバの王女シルウィアの子ロムロスの建てしところにて、アルバと分立し王政を布きゐたるが、その第三の王オスチリオの代にこの争ひありてアルバ倒ると(『デ・モナルキア』二、一一・二二以下参照)

【さらにこれがため】今一度旗のため、これ以前にも争ひたれば
 さらにといへり

四〇—四二

【サビーニの女達の禍ひ】王政の始めといふ如し。ロムロスの代
 に、ローマ人等その近隣の一族サビーニの女子を奪ひて妻とせり
 と傳へらる

【ルクレチアの憂ひ】ルクレチアがセクストゥスに辱められ
 しこと（地、四・一二七—三二註参照）。ローマ最後の王タルク
 イニウスがローマを逐はれしもわが子クストゥスの悪行その一因
 となれるなり、故にルクレチアの憂ひは王政の終りを表はす

【七王】ロムルス、ヌーマ、ツルヌス、アングス・マルキウス、

タルクイニウス・プリスクス、セルウィウス・ツルリウス、タルクイニウス・スペルブス

四三―四五

【ブレンノ】ブレンヌス。ガルリア人の大將、前四世紀の末ローマに押寄せ火を放つてこれを攻む、ローマの人フリーオ・カミルロ不意に起ちて敵を破り、故國をその難より救ふ

【ピルロ】エピロス（ギリシアの）王。ピルロス前三世紀の後半二回に亘りてイタリアを攻めしも成らずして去る（地、一二・一三三―八註參照）

【共和の國々】collegi或は、同盟の君主等

四六―四八

【トルクアート】テイトウス・マンリウスといへるローマ人にてトルクアートはその異名なり、ガルリア人及びラチオ人と戦ひてこれに勝つ（前四世紀）

ラチオ人と戦へる時己が子軍令を犯し、かばこれに死刑を宣せりといふ（『コンヴィヴィオ』四・五・一一八以下参照）

【クインツイオ】ルキウス・クインティウス。ローマの人、鋤を棄て執政となりて敵を破り（前五世紀）任滿ちてまた耕作に従事す（『コンヴィヴィオ』四・五・一三〇以下参照）。キンキナトウス（縮毛）の異名あり

【デーチ】父子三代に亘りて（その名をいづれもプブリウス・デキクス・ムースといへり）祖國の爲敵手に死せる（前四―三世紀）

ローマ人（『デ・モナルキア』二、五・一二八—三〇参照）

【ファービ】ローマの名門。著名のローマ人多くこの一門より出づ、就中最著名なるは第二ポエニ戦争の際（前三世紀）所謂遅延戦略を用ゐてカルタゴの驍將ハンニバルを悩まし、クイントウス・ファビウス・マクシムスなり

【甚く尊む】*mirro*（没薬を塗る）薬品を用ゐて腐敗を防ぐ如く、永く尊びて忘れざるをいふ、天上に妬なければなり

四九—五一

【アンニバルレ】ハンニバル。カルタゴの名將、第二ポエニ戦争の始め（前二一八年）ポー河の水源地なる西方アルピの連峰を越えてイタリアに闖入し連戦連勝優勢なりしが、後利を失ひてアフ

リカに歸れり

【アラビア人等】カルタゴ人等。ダンテ時代には北アフリカの住民をおしなべてアラビア人と呼びなせり、カルタゴ人をアラビア人といへるは、地、一・六八にウエルギリウスの父母をロムバルデイといへるごとく一種の時代錯誤なり（ムーアの『用語批判』三四二頁参照）

五二―五四

【シピオネ】プブリウス・コルネリウス・スキピオ。ローマの名將、未だ丁年ならざるにハンニバルとチチーノ及びカンネに戦ひ二十歳にしてイスパニアを征服し、三十三歳にしてザマ（地、三一・一一五―七註参照）にハンニバルを破れり

【ポムペオ】大ポムペイウス。年少の頃既にシルラを助けてマリウスの徒黨と戦ひ、後各地に轉戦して勝利を得たり、ローマが彼の爲に凱旋式を擧げしはその二十五歳の時（前八一年）の事なり
き

【山】ファイエソレの山、ダンテの生地フィレンツエその下にある（地、一五・六一—三註參照）

【酷し】ローマ人がファイエソレを攻落しゝこと
五五—五七

天上の平和を地上にも及ぼしめんと神の思召し給へる時に、換言すれば、キリストの降臨に近き頃ローマの民及び議會の意に従ひ、ユーリウス・カエサルこの旗を手に取れり

ダンテ思へらく、帝國の建設は世界平和の曙光なり、カエサルはなほヨハネの如く救世主の爲にその道を備へし者なりと（『コンヴィヴィオ』四、五・一六以下参照）

五八一六〇

以下七二行までユーリウス・カエサルの事蹟を擧ぐ

【ヴァーロよりレーノに亘りて】ガルリア・トランサルピーナ

（アルピ外のガルリア）にてといふ如し。ヴァール（ヴァーロ）はフランスの東南端の河にて古、外ガルリアと内ガルリアとの境を劃し、レーノ即ちライン河は古、外ガルリアとゲルマニアとの境を劃せり。鷲の旗がカエサルの手にありてこの地方にあげし功績を、その沿道の諸水見たりといへるなり

【イサーラ】今のイゼール。フランスのローヌ河に注ぐ河の名

【エーラ】同じくローヌに注ぐサオン河

【センナ】パリを貫流するセーヌ河

六一―六三

【ラヴェンナを出で】ガルリア征服の後カエサルがラヴェンナより出で、内亂を平定せること（地、二八・九七―九註参照）。ルビコン河は昔ガルリア・チサルピーナ（アルピ内のガルリア）とイタリアとの境を劃せり

六四―六六

【スパルニアに】内亂鎮靜の後イスパニアに行きてポムпейウス一味の者を攻めし事（淨、一八・一〇〇―一〇二参照）

【ドウラツツオ】アドリアティコの東岸にあるギリシアの町。カエサルこゝにてポムпейウスの軍に圍まる

【ファルサーリア】テツサリアの町。この附近にてカエサル大いにポムпейウスを破る（前四八年）

【ニール】エジプトのナイル河。ファルサーリア役の餘波エジプトに及びてかの地の禍ひとなれるをいふ。ポムпейウス、ファルサーリアに敗れてエジプトに逃れ、身を國王プトレマイオス十二世に寄せ、かへつてその殺す所となれり

六七―六九

ファルサーリアの戦ひの後、イロイア頽廢の跡を見んとてカエサル、小アジアに赴けることルカヌスの『ファルサーリア』（九・九五〇

以下参照)に見ゆ

【アンタンドロ】フリジア海濱の一高地にある町。アエネアスこゝより舟出してイタリアにむかへり（『アエネイス』三・五以下参照）

【シモエンタ】(Lat.Simois) トロイア附近を流るゝ川（『アエネイス』一・一〇〇参照）

【エツトレ】トロイア王プリアモスの長子（地、四・一二二）。エツトレの墓の事『アエネイス』（五・三七一）に見ゆ

【禍ひ】カエサルがエジプト王プトレマイオスを廢して王の姉妹クレオパトラを立てしこと

七〇—七二

【イウバ】マウリターニアの王ポムペイウスに與せる爲カエサル
の攻むる所となりて自殺す

【汝等の西】イタリアの西に當るイスパニア。こゝにポムペイウ
スの二子及びその黨與猶餘勢を保ちてカエサルに抗せしが、ムン
ダの戦ひに敗れ（前四五年）、内亂遂に平定す

七三―七五

【次の旗手】オクタウィアヌス・アウグストウス。フィリッピの
戦ひに敵を敗り、敵將プルート及びカツシオこれに死す（前四二
年）

【地獄に證す】（地、三四・六四以下參照）カエサルを弑せし非
道の報はむくいフィリッピ敗衄の怨みとなり、さらにルチーフエロの永

劫の苛責となれり、かれらの悶え苦しむは即ちその罪その罰の證あかしなり

【モーデナ】（フィレンツエの北六十餘哩）オクタウイアヌスこの町の附近にてマルクス・アントニウスを破れり（前四三年）

【ペルージャ】（ウムブリア州、テーヴェレ右岸の町）アントニウスの兄弟ルーチオこゝにてオクタウイアヌスに虜へらる（前四一年）

七六一七八

【クレオパトラ】地、五・六一—三註参照

【その前より】アクティウムの海戦にマルクス・アントニウスとともに敗れて（前三一年）

七九一八一

【紅の海邊】紅海の岸。オクタウィアヌスのエジプト征服を指す
 【イアーノの神殿】イアーノはローマの神話に見ゆる古イタリア
 の神の名にてその神殿ローマに多し、而してその重なるもの、戸
 はたゞ平和の時にのみとぎさるゝ習なりきといふ。エジプトの征
 服とともに戦亂終局に至りたればかく

八二一八七

テイベリウスの代に起れることの重大なるに比ぶれば、この代の
 以前及び以後に於ける帝國の偉業も物の數ならじ

【これに屬する世の王國】ローマの領土といふごとし

【第三のチェーザレ】皇帝テイベリウス（一四年より三七年まで

皇帝たり)

八八—九〇

正義の神はテイベリウスの代に、キリストの死によりて、アダムの罪に對する神の怒りを和ぐるの譽をばローマ人に與へ給へり

【我をはげます】我を動かしてかく汝と語らしむる

【これに】ローマの權能の下にキリストの磔殺行はれたればなり
九一—九三

【反復語】vendetta (復讐、刑罰) が二重に用ゐられしこと、即ち前者は(邦譯にて)アダムの罪に對する刑罰にてキリストの死を意味し、後者はキリストの死に對する刑罰にてイエルサレムの没落を意味す

但し原語 *replico* を單に「答ふる」、「附加する」等の意に解する人あり

【テイト】イエルサレムを毀てる者（淨、二一・八二並びに註參照）

【昔の罪の】天、七・一九以下に委し。神の正義に従つてこの二重の刑罰を行へるは即ちローマの權能の象徴なる「鷲」の偉業に外ならじ

九四―九六

【ロンゴバルデイ】六世紀の後年イタリアに侵入しその北部に強國を建てしゲルマン族、寺院を嚙むはローマの寺院を迫害するなり

シャルルマーニュ、（地、三一・一七）は法王ハドリアヌス一世の請を容れ、ロンゴバルディを攻めてその最後の王デジデーリオを廢せり、但しこは七七四年の事にて、法王レオ三世（七九五年より八一六年まで法王たり）がシャルルに帝冠を戴かしめしは八〇〇年の事なり、戴冠以前に溯りて鷲の翼の下といふこと可ならざるに非ざれども、『デ・モナルキア』（三、一一・五）にシャルル、ハドリアヌスより帝冠を受くとあるより見れば、ダンテのこの記事を年代錯誤によるとなすの説また理なきにあらじこの一聯及び以下數聯に於ける出來事はユステイニアヌスの治世以後の事なり、皇帝の靈はウエルギリウスの如く、よくその死後の世のありさまを知りゐたり

九七―九九

【さきに】三一―三行

一〇〇―一〇二

グエルファイ黨はフランス（グエルファイの首領なるプーリア王シヤルル二世）の力を藉りて帝國に反抗し、ギベルリニ黨は私黨の利慾の爲にこれを我有となす、二者俱に非なり

【黄の百合】フランス王家の紋章、青地に三の金の百合

【公の旗】全帝國の旗なる「鷲」

一〇三―一〇五

ギベルリニは己が野心を満たすに當りて鷲の旗を用ゐるべからず、この旗は正義を世に布く爲の物なれば、ギベルリニの如く不正不

義の爲にこれを用ゐるは、即ちその神聖を汚すなり

一〇六一—一〇八

シャルルはその率ゐるグエルファイと共にローマの帝業を地に倒さんとするごとき非望を抱かず、彼シャルルよりもさらに強き君主等を征服したる帝國の力を恐るべし

【新しきカルロ】アプリア王シャルル（カルロ）二世（淨、二〇・七九—八一註参照）。新しといへるは九六行のシャルルマーニユ（カルロマーニオ）に對してなり

【爪】鷲の爪即ち帝國の力

一〇九—一一一

【子が】彼その非行を改めずは報むくい或ひは子に及ばむ。シャルルの

多くの子の中、父のために禍ひをうけし者ある意を含む、されど誰を指し何を指し、や明ならず

【紋所】驚の。この紋所は神がその定め給ふところによりて地上平和の使命を帯ぶる帝國の徵號しるしなれば

【變へ】「驚」廢れて「百合」のみ残ること、即ち帝國の大權シヤルル一家に移ること

一一二—一一四

【小さき星】水星（天、五・一二七—九註參照）

一一五—一一七

人その最大の目的を離れて地上の榮耀を望む時は、神の愛必ず減ず。眞の愛とは神に對する愛を指す

一二二—一二三

われらは神の過不足なき應報を知るが故に、情清く、さらに大いなる福をえんと願ひまたはこれを受くる者を嫉むが如きことたえてなし

一二四—一二六

【下界に上】〔giu〕『ダンテ學會版』にこの一語なし (Diverse voci fanno dolci note)

【さま／＼の座】天上の福に種々の階級あり、階級によりて諸靈の音異なれども皆よく相和して一美妙の調を成す

スカルタツツイニは、こは思ふに諸天の和合音【天、一・七六一八参照】を指せるならんといへり、様々の福はさま／＼の天に

現はさるればなり

一二七—一二九

【眞珠】さきには月を指してかくいへり（天、二・三四）。水星
 【ロメオ】註釋者曰。ロミュー・ド・ヴィルヌユーヴ（ロメオ）
 の實説左の如し、ロミューはプロヴァンスの伯爵レーモン・ベラ
 ンジェ四世の執事なり、一二四五年レーモン死せる時その領地を
 司どりて伯の末女ベアトリス即ちシャルル・ダンジュー一世の妻
 となりし（淨、七・一二七—九註參照）者の後見となり、一二五
 ○年プロヴァンスに死す。されどダンテ時代の傳説（特にヴィル
 ラーニの記録）によればロミューは生れ賤しき一巡禮者なり、彼
 レーモン伯の徳を傳聞してこれに事へその擢拔を受けて財政を整

理し他の収入大いに増加す、彼また伯の四人の女をして悉く王妃とならしめ誠心誠意その主の爲を謀れるもプロヴァンスの貴族等の讒にあひて伯の許を去る、而して何人もその行方ゆくへを知らずとロミューが何故に水星天にあるやは明かならず、スカルタツツイニは謙讓による功名家 (umili ambiziosi) の一例なるべしといへり

一三〇——一三二

【笑】ロミューを陥るゝも何等利する所なきをいふ、プロヴァンスは温和なるレーモンの手より苛酷なるシャルル・ダンジュー一家の手に移りたればなり (淨、二〇・六一以下並びに註参照)

【他人の】或は、「他人の善行を己が禍ひに轉ずる (人の善行を

見妬み誹りて自ら罪に陥る）者は」

一三三—一三五

【王妃】長女マルグリットはフランス王ルイ九世に、次女エレオノールはイギリス王ヘンリー三世に、三女サンシヤは同ヘンリーの兄弟にてローマ人の王となれるリチャードに、末女ベアトリスはシャルル・ダンジュー一世に嫁す

【賤しき】或は、「謙讓の」

【放客】註釋者曰。romeo は巡禮者特にローマへの巡禮者の意なれば、このロメオを巡禮者となすの説出でしなりと（岩波文庫版ダンテ『新生』一〇〇頁参照）

一三六—一三八

讒者の言によりてロミューの誠實を疑ひ、收支の決算を求む、し
かるに決算に及びその資産のかへつて膨脹しるたるを知れり

一四二

【ほむべし】衣食の爲に志を屈せず逆境に處して亂れざる。ダン
テが自己の境遇にひきくらべ、ユステイニアヌスの口を藉りてか
くいへることいふまでもなし

第七曲

ユステイニアヌスの靈去りて後、ベアトリーチェはダンテの爲に、

キリストの死、十字架の贖、及び靈魂の不滅を論ず

一—三

【オザンナ】神を讚美する語

【火】諸天使及び諸聖徒

四—六

【二重の光】神の光と己が光（一—三行）。或ひは曰、皇帝と立法者との光を指すと

【聖者】 *sustanza*（主要の本質即ち靈）、ユステイニアヌスの靈を指す

一〇—一二

【甘き雫】眞理の滴

一三—一五

されどたゞ淑女の名の一部を聞きてさへわが心に湧く畏敬の念は
わが頭かうべを壓し、我をしてこれを擧げて敢て彼女に問ふ能はざらし
む

一六—一八

【火の中】（淨、二七・五二以下参照）

一九—二一

【正しき罰】ユステイニアヌスのいへること（天、六・八八—九
三）

二五—二七

【生れしにあらざる】神の直接に造り給へる人即ちアダム

【己が益なる】意志の銜（禁斷の果このみに就いて意志の上に神の加へ給ひし制限）に堪ふれば己が益なるを、しかせずして

二八―三〇

【迷ひ】正路を失ふこと

【幾世の間】淨、三三・六一―三並びに註參照

【神の語】キリスト（ヨハネ、一・一以下）

三一―三三

【その永遠の】たゞ聖靈のはたらきにより（魔女の懐胎に於ける）

【性】人性

三四―三六

【己が造主と】キリストのうちなる人性は、個性としては、創造

時の如く至純至善なりしも

三七—三九

全人性の上より見れば、始祖の禍ひを受けて刑罰に償す

【真理の道と】眞の道眞の生命なる神を離れ

四〇—四五

キリストの中なる人性は罰すべし、神性は犯すべからず

四六—四八

さればキリストの磔殺といふ一の行爲よりこの結果生じたり、

(一) 神は人類の罪の贖はるゝによりてこれを喜び給ひ、ユダヤ人は己が怨みのはれしによりてこれを喜べり、前者は正義にもとづき後者は嫉みにもとづく、而してこの死によりて地は震ひ(マ

タイ、二七・五一）、天は聖者の爲に開けぬ

四九―五一

【正しき法廷】テイト。イエルサレムを毀ちて仇をユダヤ人に報いしがゆゑにかくいへり（淨、二一・八二以下並びに註、及び天、六・九一―三並びに註參照）

五二―五四

【一】疑ひ

五五―五七

【方法】キリストの死

五八―六〇

經驗によりて神の愛を知りよく天上の事物に通ずる者にあらざれ

ば、奥妙なる贖罪の理をさとる能はじ

六一—六三

【目標】贖罪の教理

六四—六六

【嫉み】*livore* 愛に反する凡ての情を指す

【あらはす】その徳を一切の被造物の中にあらはす

六七—六九

直接に神の善より滴るもの即ち神が自然を介せずして直接に造り給へる物は永遠に存在す、これ神の御手の業は不朽不變なればなり

七〇—七二

神の直接に造り給へる物はまた全く自由なり、これ神以外のもの、影響に従屬せざるによる

【新しき物】第二原因（第一原因なる神に對して）、變化するがゆゑに新しといへり

但しこゝに所謂直接の被造物のうちには、天、二九・三四にいつる「純なる勢能」を含まずと見ゆ

七三―七五

神の直接に造り給へる物は神に最も近きがゆゑにまた最も神意に適ふ

【聖なる焰】即ち神の善、神の慈愛の光

七六―七八

【これらの】不死、自由、神に似ること

七九―八一

【自由を奪ひ】悪を行ふ者は罪の奴隷なり、自由なし（ヨハネ、

八・三四）

八二―八四

【空處を】、罪の爲に失へるものを再び得るに非ざれば

八五―八七

【種子】祖先、即ち始祖アダム

九一―九三

【淺瀬】罪より神恩に歸る道。この道二あり、（一）神がたゞその慈愛によりて赦し給ふか、（二）人自らその罪を贖ふか、是な

り

九四―九六

【永遠の】神慮の奥深きところを見よ

九七―一〇二

人が神の如くならんと（創世、三・五）欲して神命に背けるは是無限の僭上なり、無限の僭上は無限の謙遜によりてはじめて贖はる、しかるに人は有限にして不完全なる者なるがゆゑに、いかなる謙遜いかなる従順を以てすとも始祖の僭上始祖の悖逆を償ふに足らず、従つて自らその罪を贖ふの力なし

一〇三―一〇五

【己が道】慈悲と正義の二道

【その一か】慈悲のみによるか

一〇六——一一一

すべて行爲はその源なる心の善を現はせばあらはすほど他の者を悦ばすがゆゑに、宇宙萬物に愛の光を注ぎ給ふ神は、汝等人間をば昔の尊さに歸らせんため、その道を盡すをよしとし給へり

一一二——一一四

世の始め（最始の晝、即ち神が光を造り給へる日）より世の終り即ち最後の審判にいたるまでの間に、贖罪の如く尊き業は、慈悲によりても正義によりても爲されじ。贖罪は空前にして絶後なる神の尊き御業なり

一一五——一一七

【神は】神は人類をその墮落より救はんため人の肉體に宿りて苦しみを受け給ひ

一一八—一二〇

【正義に當るに】神の正義にふさはしき贖ひをなすに

一二一—一二三

以下滅するものと滅せざるものとの別を説く

【溯りて】六七—九行にいへること

一三〇—一三五

諸天及び天使は今現にあるごとき完全なる状態において直接神に造られしものなれば滅びず、されど地水火風の四原素及びその化合より成る一切の物は他の力によりて形成せらるゝものなるがゆ

忽に滅ぶ

【造られし力】 神の直接に造り給へる力、第二原因、星辰の影響
一三六―一三八

地水火風の材となる物質、及びこの四原素の周圍を 轉する星辰
が物を形成する力は、ともに直接の被造物なり

【とゝのふる力】 [virtu`informante] 特殊の存在を保たしむる
力（不滅の物質を材として地水火風及び其他の物を形成しこれに
各 その性質を保たしむる如き）

一三九―一四一

【聖なる光】 星辰

【これとなりうべき原質】 *compleSSION potenziata* 星辰の影響によ

り、集合して禽獸草木の魂と成るの可能性を有する物質

一四二―一四四

汝等人間の魂は神の直接に造り給へる物なれば滅びじ、而して神はこの魂に神を愛するの愛を與へ、これをして常に神と結ばんことを求めしむ（淨、二五・七〇以下及び『コンヴィヴィオ』三、

二・五六―九參照）

一四五―一四八

神の直接に造り給へる物是不滅なりとの原則より推して、人の肉體の甦をも信ずるをえむ、神がアダム、エヴァを造り給へる時はその肉體をも直接に造り給へるなれば（創世、二・七）、たとひ罪の爲死とともに滅ぶとも最後の審判の日至れば再び魂と結ばれ

てその不朽の衣とならむ

第八曲

ダンテ、ベアトリーチエと金星天にいたり、世にて戀の炎に燃えし多くの靈を見る、その一カール・マルテル、ダンテを迎へこれと語りて人の性情の相異なる所以を陳ぶ

一—三

【危ふかりし】異教の神々を奉じ、永遠の刑罰を蒙るの恐れありし昔

【チプリーニア】戀の女神アプロディテ（ウエヌス・ヴェーネレ）、キュプロス島に生立ちしよりこの異名あり。金星

【エピチクロ】大圏の周邊に中心を有する小圏。プトレマイオスの學說によれば諸遊星は東より西にめぐる外、二の固有の運動を有す、その一は即ちその軌道の周邊（その天の赤道）に小圏を畫きつゝ西より東に　るものにて、この小圏をエピチクロといふ（ムーア『ダンテ研究』第三卷三四頁以下參照）、第三のエピチクロは月より數へて第三の星即ち金星（昔の天文による）のそれなりと知るべし（圖解中太陽以外の星の周圍の點線はエピチクロなり）

七―九

【ディオネ】オケアヌとテティス（共に古の神の名）の間の女。

アプロディテはゼウスとディオネの間の女なり

【クローピド】エロス。アプロディテの子にて戀の神なり

【デイドの膝】『アエネイス』一・六五七以下に、ヴェーネレ

（アプロディテ）がアエネアスに對する戀の火をデイド（地、五

・六一—三註參照）の胸に燃さんとて、まづわが兒クローピド（エ

ロス）をアエネアスの子アスカニウスの姿に變へ、デイドの膝に

抱かしめしこと見ゆ

一〇—一二

【或ひは後或ひは前】宵の明星となりて現はるゝ時は日没後なれば後といひ、明の明星あけとなりて現はるゝ時は日出前なれば前とい

へり

【星の名】金星をヴェーネレと名づく

一三一—一五

【いよく美しく】ベアトリーチエは天より天と、神の御座くらゐに近づくに從つていよくその美を増すなり

一六一—一八

【一動かず】一音に變化なく、一音に震動高低の變化あるとき

一九—二一

【かの光】光る星、金星

【多くの光】諸聖徒

【永劫の視力】永遠に神を視ること。

る早さは見神（即ち福の

度)の多少に準ず

二二—二七

【見ゆる風】電光

【冷やかなる雲】アリストテレスの説に曰く。熱くして乾ける氣上昇し、冷やかなる雲に當りて空氣を亂し風を生ずるにいたると、又曰く、電光とは單に風の燃焼によりて見ゆるにいたるものの謂と(ムーアの『ダンテ研究』第一卷一三二—三頁參照)

【セラフィーニ】諸天使中最高貴なるもの(天、四・二八—三〇
註參照)

【舞を棄て】エムピレオの天にてセラフィーニと共に舞ひゐたる諸靈ダンテに現はれんとて降り來れるなり。一九—二一行にいへ

る舞はエムピレオの天にて始まれるものなるがゆゑにまづといふ
三十一—三三

【その一】カール・マルテル（カルロ・マルテルロ）。シャルル・ダンジュー二世の長子、一二七一年に生れ、一二九〇年ハンガリアの王冠を受け（されどその實權は分家なる三世の手にありき）、一二九五年に死す。註釋者曰、カールはフランスより歸り來れるその兩親に會はんため、一二九四年の始めナポリよりフィレンツェに赴き少時かしこに滞在せることあればその際ダンテと相識るにいたりしならんと

三四—三六

【君達】Principi 天、二八・一二五に「づる principati」と同じ天使

諸階級の一にして金星天を司る者

【圓を一にし】共に圓を畫きて轉ること、空間を表はす

【轉を一にし】共にめぐりて永遠に亘ること、時間を表はす

【渴を一にし】神を慕ふ心、衷なる情を表はす

三七—三九

【汝等了知をもて】『コンヴィヴィオ』第二卷の始めに出づる第一カンツオネの起句、この解同書二・六・一五一以下に見ゆ

但し、金星天を司る天使、『コンヴィヴィオ』にては *principati* に非ずして *roni* なり（天、二八・九七—九九註参照）

【少時しづまるとも】神の愛と同胞の愛との相矛盾せざることを表はす（フィラレテス *Philalethes*）

四〇―四二

ダンテはかの靈と語らん爲その許をば目にてベアトリーチエに請へるなり

四三―四五

【約しゝ】三二―三行

四六―四八

【新たなる喜び】問者に答へてこれに満足を與へ己が愛を現はすをうるの喜び（天、五・一三〇以下参照）

四九―五一

【もし】我もし長命なりしならば、今より後に起らんとする多くの禍ひは、未發に防ぐをえたりしものを

カーシーニ曰く。こゝにいふ禍ひは、ラーナの説によれば貪慾なるロベルトの悪政を指し、オツチモの説に従へばアンジュー方とアラゴン方とのシケリア争奪戦を指す、されど恐くはダンテは或る一の確たる事實を指せるにあらで、シャルル二世及びロベルトの下にナポリ王国を苦しめし種々の禍ひを總括していへるならむと（七六行以下参照）

五二―五四

光のわが身を隠すこと、繭の蠶をかくすごとし

五五―五七

【葉のみに】さらに深き根強き愛を表はせるならむ

ダンテはマルテルに對し深き敬愛と大いなる希望とを懷きみたり

と見ゆ、されど兩者の關係については定かなること知り難し、マルテルが金星天にある理由も恐くはたゞダンテのみよくこれを知れるならむ

五八一六〇

【左の岸】プロヴァンス。ローン河の東にある伯爵領地、ソルガはアヴィニオン附近にてローンに合する小川の名

プロヴァンスはカルロ一世の代にナポリ王の所領となれるものなれば（浄、七・一二四―六註及び浄、二〇・六一―三註参照）シヤルル二世の死後は當然マルテルに屬すべきなりき

【時に及びて】シヤルル二世は一三〇九年に死せり、マルテル早世してこの時を見ず

六一—六三

ナポリ王國もまたマルテルの君臨を望みゐたり

【バーリ】アドリアティコ海邊の町

【ガエタ】チルレーノ海邊の町

【カートナ】カーラブリア州の南端の村

【際涯を占め】*simborga* カーシーニの説に、*borghi* は中古、市の境に列なれる家屋の意に用ゐたればこゝにてはこれらの町々がナポリ王國の際端にあるをいへるならんとあるに従ひてかく

【トロント】マルケとナポリとの境を流れてアドリアティコ海に注ぐ河

【ヴェルデ】ガリリアーノ河のこと（淨、三・一三一—三二註參照）

【アウソーニア】イタリアの古名（ウリツセの子アウソネに因みて呼べる）。アウソーニアの角とはイタリア南方の一端なるナポリ王國を指せる也

マルテル一男二女を残し父に先立ちて死す、而してシャルル二世の死後、マルテルの弟（即ちシャルルの第三男）ロベルトはマルテルの子カルロ・ロベルト（一三四二年死）を斥けてナポリ王國の權を握れり（一三〇九年）

六四―六六

マルテルがハンガリア王冠を戴けること

マルテルの母マリアはハンガリア王ラヂスラーオ四世の姉妹なり、一二九〇年ラヂスラーオ死して嗣子なくマルテルその王冠を受く

【ダヌービオ】ダニユーブ。ドイツより起りてハンガリアを貫流する大河

六七―七五

我またシケリアに君たりしならむ、この國惡政に苦しみてその主權に背き、遂にフランス人の羈絆を脱するにいたらざりせば

【灣】カタールニア灣。東風（エウロ）最も多し

【パキーン】シケリア島東南端の岬、今カーポ・パツサーロといふ

【ペロロ】同東北端の岬、（今のカーポ・ファールロ）

【ティフエオ】或ひはティフォ（地、三一・一二四）、ゼウスの電光に撃たれシケリアに葬られし巨人、その頭エトナ山下にあり

て口より火焰を吐出す（オウイデウス、『メタモルフオセス』五・三四六以下参照）

【トリナクリア】Trinacria シケリアの古名（三の岬あるより呼べるギリシア名、三の岬とは前出パキーン、ペロロの二と、島の西方にあるリリベオ即ち今のカーポ・マルサーラの岬とを指す）

【カルロとリドルフォ】父（或は祖父）のカルロと外舅ルドルフの子孫我より生れて

マルテルの妻クレメンツアは皇帝ルドルフ（浄、七・九四―六参照）の女なり

【虐政】アンジュー家の

【パレルモ】シケリアの首都にて、かの有名なるシケリアの虐殺

(一二八二年)の始まれるところ。この虐殺の後シケリアはアンジュー家を離れてアラゴン家に歸せり

【死せよ】フランス人に對する群集の叫び

七六一七八

【わが兄弟】弟ロベルト(ルイ)シャルル二世自由の身となりし時(淨、二〇・七九―八一並びに註參照)、その第三子ロベルト(ルイ)は兄のルドヴィコ(ルイ)と共にアラゴン方がたの人質となりて一二八八年より同九五年までカタローニア(イスパニアの)に止まれり、この幽閉の間ロベルトは多くのカタローニア人と交りを結び、一三〇九年ナポリ王となるに及びて彼等をかしこに招きかつ重くこれを用ゐぬ、しかるに彼等強慾にして民を虐げしか

ば、民心アンジュー家を離るゝにいたれり

【豫めこれを】虐政の臣民に及ぼす結果如何を、王位に即かざる先に知りたらんには

マルテルはロベルト即位後の非政及びその結果を豫知してかくいへるなり

七九―八一

【彼にても】ロベルト自身かまたはその親戚知友等

【荷の重き彼の船】ロベルトの貪欲の爲既に重き負擔に苦しむかの三國

【さらに荷を】廷臣等の貪慾によりてその負擔をさらに重くする莫らん爲

八二—八四

【物惜しみせぬ性】父シャルル二世の。シャルル二世がその女ベアトリスをフェルラーラの君に與へて莫大の金をえしこと淨火篇（二〇・七九—八一）に見ゆ、さればこゝにては單にその子ロベルトと此していへるか、或はシャルルに貪慾と寛仁の相混れる性あるをいへるか明ならず、なほ言者がシャルルの子なるを思ふべし（ムーアの『ダンテ研究』第二卷二九三—四頁参照）

八五—九〇

汝の言の我に與ふる喜びは汝自らの（これを神の鏡に映して）知るところなるを信ずるによりて愈 深し、而して汝のわが喜びをば神を視てさともまたわが悦ぶ所なり。前者は主として明

かに友に知らるゝの事實を指し、後者は主として友の知る所以を指す、但し九〇行のニの意明らかならざるがゆゑに異説あり

【一切の善の】一切の善の本末なる神によりて

九一―九三

【苦き物】良き種より悪しき果の生ずる如く、良き父より悪しき子の生るゝをいふ

九四―九六

【顔を】顔を向くるはその事、前に現はれて知るゝなり、背をむくるは後にかくれて知れざるなり

九七―九九

生るゝ者の性情はたゞ生む者の性情によるのみならず、また諸天

の力を受くるものなる事をいはん爲、以下一一行まで、神の攝理が星辰の力となりて萬物にその影響を及ぼし、神の豫め立て給ふ目的めあてに向つて進むを論ず

【善】神。神は諸天運行の本にてまたその悦びの始なり

【大いなる物體】神の攝理は諸天において一種の力となり、この力諸天を通じて人間及び他の被造物にその影響を及ぼす

一〇〇—一〇二

神はたゞ自然の諸物の存在を定め給ふのみならず、またその安寧をも定め給ひ、諸物皆秩序を保ち健全にかつ永續して神の立て給ふ目的めあてにむかふことをえしむ

【自ら完き意】神意。被造物の完きは自ら完きに非ず、神により

て完きなり

一〇三—一〇五

諸天の影響は神の豫め定め給へる目的に達せんがため諸物に及び、
 あたかも狙ひ放たれし物の、的に向ひて進むごとし

一〇六—一〇八

若し諸天の影響にかゝる目的なくその働き偶然ならば、その結果
 萬物の間に調和なく美なく、自然は渾沌に歸するあるのみ

一〇九—一一一

諸天の働きもしかく盲目的なりとせば、こは諸天を司る諸天使
 (諸ての智)の不完全に歸せざるをえず、諸天使もし不完全なり
 とせば、こは彼等を不完全なる者に造り宇宙の秩序を保つに堪へ

ざらしめし神の不完全に歸せざるをえず、而してこはありうべき事ならじ

一一二——一一四

【自然】 諸天の働き

一一五——一一七

以下一二六行まで、神の攝理が世人の福祉と一致すること。即ち人は皆社會の一員なれば、各その性情傾向及び才能を異にし従つてその職分を異にするを論ず

【一市民たらずは】一社會を形成して互ひに扶助することをせず
孤獨の生を營まば

【問はじ】問はずして明らかなれば

一一八—一二〇

【汝等の師】アリストテレス。『倫理學』及び『政治學』の諸處に（『コンヴィヴィオ』四・四・四四以下參照）

一二一—一二三

【業の根】行爲の本なる性情傾向

一二四—一二六

【ソロネ】ソロン。有名なるアテナイの立法家にしてギリシア七賢の一なり（前七世紀）

【セルゼ】ペルシアの武將（淨、二八・七〇—七二並びに註參照）

【メルキゼデク】舊約時代の祭司長（創世、一四・一八）。サレ

ム王メルキゼデクが祭司の典型として重きをなす所以へブル書

(七・一以下)に見ゆ

【わが子を失へる者】工匠の典型としてダイダロスを擧ぐ(地、
一七・一〇六以下並びに註参照)わが子は即ちイカルスなり

一二七―一二九

以下一三五行まで、諸天の影響はよく人界に及びてさま／＼の
性向を生ずれども種族家系等の區別を立てざるが故に父子同じか
らざることあり、要するに是皆神の攝理にもとづくものなるを論
ず

一三〇―一三二

【エサウはヤコブと】エサウとヤコブ(ジャコツベ)とは共にイ
サクの子にて雙生ふたごの兄弟なりしもその生得の性(種)同じからず、

エサウは獵を好みて野の人となり、ヤコブは平和を愛して天幕に住めり（創世、二五・二一以下参照）

【クイリーノ】（槍を揮ふ者、勇士の義）、神に祭られし後のロムロスの一名。ローマの建設者なるロムロスの父は身分賤しき者なりしゆゑ、人々軍神マルテ（ギリシアにてはアレス）をばその父なりと稱するにいたれり

一三三―一三五

神の攝理諸天星辰の影響となりて世に及ぶにあらずば、子は親と全くその性を同うすべし

一三六―一三八

【汝の後に】九四―六行参照

【表衣となさん】最後に表衣うはぎを着て身の装ひを終ふごとく、この最後の教へを受けて汝の知識を全うすべし

一三九—一四一

人もしその性向に逆ひその本分にあらざる業をなし職を選べは、地の利を得ざる種の如く（『コンヴィヴィオ』三・三・二—以下参照）決して良き結果にいたらし

一四二—一四四

【自然の据うる基】諸天の影響より生ずる性向

第九曲

ダンテなほ金星天にありて暴君エツツエリーノ・ダ・ローマーノ三世の姉妹クニツツア及びマルセイユのフォルコと語る

一—三

【クレメンツア】クレマンヌ。カール・マルテルの女、一二九〇年頃生れ、一三一五年フランス王ルイ十世に嫁す、その死はダンテの後にあり

一説に曰く、こはマルテルの妻クレメンツア（天、八・六七—七五註参照）の事にてその女クレメンツアの事にあらずと。前説後説何れにも難あり、「美しきクレメンツアよ、汝のカルロ」といへる言葉の上より見れば妻たる者に適はしく子たる者に適はしか

らず（スカルタツツイニの『ダンテ事典』参照）、されどマルテルの妻は一二九五年に死したればこれに向ひてかく呼びかくると穩當ならず、今しばらく前説に従ふ

【欺罔】特にマルテルの子ロベルトがナポリの王位を叔父ロベルトに奪はれしこと（天、八・六一—三註参照）

四一六

【汝等の禍】汝等カルロの子孫の受くる禍ひ。カルロ・ロベルトのうくる虐はとりもなほさずその一家その姉妹等の禍ひなればかくいへり

【正しき歎】虐ぐる者その虐の爲に正しき罰を受くること。但し王ロベルトの受くる罰とはたゞ一般にアンジュー王家の衰頹を指

していへるなるべし

七―九

【生命】カール・マルテルの靈

【日輪】神。神は至上の善にましまし、萬物にその力に應じて福を與へ給ふ、かくの如くかの靈もまた神より眞の福を受く

一六―一八

【さきのごとく】カール・マルテルと語るの許を請へる時の如く

(天、八・四〇―四二参照)

一九―二一

【速に】わが問を待たずして我に答へ、汝が神の鏡に映してよく

わが心の中を見るを得との證^{あかし}を與へよ

二二—二四

【さきに歌ひゐたる】天、八・二八—三〇参照。深處とは光の内
部をいふ

二五—二七

邪惡の國イタリアの一部なる

【リアルト】ヴェネツィア市の一部を形成する島の名、ヴェネツ
ィア市を代表す

【ブレンタ】アルピより出で、ヴェネツィア附近に注ぐ河（地、
一五・七—九参照）

【ピア—ヴァ】アルピより出で、ヴェネツィア市の東北に當りて
ヴェネツィア灣に注ぐ河

マルカ・トリヴィジアーナはヴェネツィア（南）とアルピの峰

（北）の間にあり

二八一—三〇

【山】ローマノ山、山上に「エッツエリーニ」家の城ありき

【炬火】エッツエリーノ・ダ・ローマノ三世。傳説に曰く、その母夢にマルカ・トリヴィジアーナの全土を焼盡せる一炬火を生むと見て彼を生めりと。エッツエリーノは第七獄第一圓にあり

（地、一二・一〇九以下参照）

三一—三三

【一の根】同父母。父はエッツエリーノ二世、母はその第三の妻アデライデ・デーリ・アルベルティ

【クニツツア】エツツエリーノ二世の末女、性放縱にして情人多く三たびその夫を更ふ、されど晩年フイレンツエに住して改悔の歲月を送り慈善の行爲多かりきといふ（十三世紀）

【この星の光に】金星の影響を受けて多情なりしたため

三四—三六

我はかの多情の罪の爲に今わが心を悩まさずかへつて喜びをもてこれに對することをう、これ汝等世俗の人の解し難しとするところならむ

戀愛の情は一たび淨まれば即ち神にむかひて燃ゆる愛の火となる、クニツツア改悔によりて濁れる愛を清める愛に變じ、自らその救はるゝにいたれるを喜ぶなり

【命運の原因】 在世の日の罪、即ちクニツツアをしてさらに高き
 天の福を受けざらしめしもの。まづ神に赦され而して後自ら赦す
 なり

三七―三九

【珠】 フオルコの靈（九四行以下参照）

四〇―四二

【第百年は】 定數五百年を不定數多年の意に用ゐたり

【第二の生】 死後世に残る美名

四三―四五

【ターリアメントとアディーチエ】 マルカ・トリヴィジアーナを
 その東（ターリアメント）西（アディーチエ）の境にある二の河

にてあらはせるなり

【これ】善行によりて美名を竹帛に垂るゝこと

【撃たる】エツツエリーノ及びその他の暴君の壓制を受けて苦しめども

四六一—四八

以下六〇行まで、己が郷國に關するクニツツアの豫言

【パードヴァ】註釋者曰く。一三一—四四年カン・グランデが皇帝の代理としてヴェツエンツアのギベルリニを助け、パードヴァのグエルフィを破りて沼（即ちバツキリオネ河がヴェツエンツアの附近にて造る沼）の水を紅に染めしをいふと

カーシーニの引用せるアンドレーア・グローリア（*Andrea Gloria*）

の説に曰く。こは一三一年以降におけるパードヴァ、ヴェツエ
ンツァ兩市の争ひをいへり、ヴェツエンツァ人水の缺乏によりて
パードヴァ人に勝たんと欲しバツキリオネ（即ちヴェツエンツァ
を経てパードヴァに流るゝ河）の河水を他に轉流せしむ、パード
ヴァ人すなはち疏水工事によりてブレンタの河水の一部を導き、
水なきバツキリオネの流域に流れ入らしむ（一三二四年）、ダン
テの所謂水を變ずとは是なり、沼（palude）とはブルセガーナ附
近の名にてブレンテルラの細流バツキリオネに落合ふところなり、
パードヴァ人工事を施してこの細流を延長しかつ廣大ならしめ、
由て以てブレンタの水を引けりと

【落合ふ處】トレヴィイゾ。シーレ、カニアーノの兩河こゝにて
落合ふ

【或者】リツカルド・ダ・カーミノ。淨、一六・一二四に出づる
ゲラルドの子にてニーノ・ヴィスコンティの女ジヨヴァンナ（淨、
八・七〇—七二）の夫なり、一三一二年怨みを受けて不意に殺さ
る

ゲラルドの死は一三〇六年なれど一三〇〇年頃リツカルド既に實
際の政治にたづさはりゐたりと見ゆ

【網】regna（島を捕ふる網）網を造るは殺害を企つるなり、傳
へ曰ふ、リツカルド己が邸内にて將棊を差しゐたる時、相手の客、
リツカルドの家僕と示し合せてこれにその主を殺さしむと

五二―五四

【フェルトロ】（フェルトレ）トレヴィーゾの北にある町

【牧者】アレツサンドロ・ノヴェルロ。一二九八年より一三二〇年までフェルトレの僧正たり、一三一四年七月フェルラーラの君にてグエルファイ黨なるビーノ・デルラ・トーザの請に應じ、己の許に保護を求めし多くのフェルラーラ人（ギベルリニに屬する）をこれに渡し、かれらを死に致らしむ

【マルタ】僧侶を罰する一牢獄の名として最有力なるは、（一）ボルセーナ湖畔の「マルタ」、（二）ヴィテルボの「マルタ」なり。されどダンテがこの中何れを指せるや或はまた他の「マルタ」を指せるや明ならず

近時このマルタをもて一般牢獄の名となすの説あり（一九二〇年一月二日發刊「タイムス」文藝附録トインピー博士寄書參照）、但しダンテがこゝに、重罪を罰する一牢獄の名もしくは一種の牢獄の名としてマルタの語を用ゐたりと見なす方語氣に力を添ふるに似たり、しはらく後日の研究に俟つ

五五―六〇

【黨派】グエルファイ

【かゝる贈物】かく恐ろしき贈物も、背信非道の行の盛なるマルカ・トリヴィジアーナの慣習としてはめづらしからじ

六一―六三

クニツツアは己が豫言の的確なるを記せんとてかく曰へり

【上方】 エムピレオの天

【寶座】 第三位の天使。直接に神の光を受けてこれを諸聖徒に傳ふるがゆゑに鏡といふ

【審判の神】 神の審判は皆この天使を通じて我等に啓示せらるゝがゆゑにわが言眞なり

六四―六六

【さきのどとく】 天、八・一九―二一參照

六七―六九

【知りし】 クニツツアの言によりて（三七行以下參照）

【喜び】 聖徒

七〇―七十二

天上の喜びは聖徒の強き光に現はれ、地上の悦は人間の笑に現はる、たゞ地獄にては魂の内部の悲外部の黒さにあらはるゝのみ

七三―七五

【目神に入る】よく神を見るをいふ、聖徒達は神を見、その鏡に照してまたよく萬物を視るなり

【いかなる願ひも】言葉に現はれざる願ひも

七六―七八

【火】セラファイニ（天、八・二二以下参照）。輝くが故に火といふ、六の翼あり（イザヤ六・二）

七九―八一

【もしわが】わが心の中を汝の知る如く汝の心の中を我知らば、

換言すれば、我もし汝なりせば、問はるゝを待たで答ふべし

八二―八四

【地を卷く海】 大洋

【を除きては】 Fuor di フラティチェルリの説に従ふ。「より出でゝ」と解する人あり

【最大なるもの】 地中海

八五―八七

【相容れざる】 discordanti 南北の反対面にある意の外、ヨーロッパとアフリカとの政教習俗等相異なる意をも含めしならむ（ムーアの『ダンテ研究』第三卷一二六頁脚注参照）

【日に逆ひて】 西より東に

【さきに天涯と】西瑞（ガデス）より見て天涯なる圏は東端（イエルサレム）より見て天心なり。西端の日出は東端の正午に當る、換言すれば、東西の兩端相距ること九十度なり

地中海の延長は四十二度に過ぎざれども、ダンテはその時代の謬見に従つて約九十度と見做しゝなるべし

さきにといへるは單に測定の出發點としての時を指せるにて先後あるにあらず、人もし地中海の一端より忽ち他端に到るをえば、西端にて地平線上看えし太陽は東端にて子午線上看ゆべしとの意なり（トーザー H.F.Tozer）

八八—九〇

【エブロとマークラ】イスパニアのエブロ河とイタリアのマーク

ラ河（ルーニジアーナにあり）。フォルコの郷里マルセイユは即ちこの兩河の間にあり

【短き】マールグラは六四キロメートル程の小河なる上、昔トスカーナとゼーノヴァ兩共和國の堺を劃せるはその一部に過ぎざりき
九一—九三

【己が血をもて】ブルートウスがカエサルの命を受けてマツシリア（マルセイユ）の海戦に勝ち殺戮を行へる時（前四九年）の事を指す

【ブツジェーア】アフリカの北岸アルゼリアにあり、中台の要港（特にマルセイユとの通商上）としてこゝに擧ぐ、マルセイユと略その經度を同うするが故にかく

九四―九六

【フォルコ】（或はフォルケット）、ゼーノヴァよりマルセイユに移住せる商人の子、十二世紀の後半に生れ、トロヴァドル派の詩人となり、情事多し、後無常を觀じて僧となり、一二〇五年トロサ（フランスの南にある町）の僧正に任ぜられ、アルビジョア派（十二世紀に起れる異端派）の人々をいたく迫害し、一二三一年に死す

【象を】フォルコの象を捺すはその光を金星天に輝かすなり、金星天の象を捺せるはその影響によりて戀の火を燃せるなり

九七―一〇二

【ベロの女】デイド（地、五・六一―三註参照）、チユルス（聖

書ツロ）王ベルスの女。アエネアスを慕ひて、亡夫スユカエウス及びアエネアスの先妻クレウザの靈を虐げしなり

【ロドペーア】フュルリス。トラキア王シトネの女、ロドペ山

（トラキアにあり）の附近に住めるよりこの異名あり、傳説に曰、テセウスの子デモポオーン（デモフォーンテ）これを娶らんと約してその郷里アテナイに赴き期に至れども歸らざりしかば、フュルリス欺かると思ひて縊死すと

【アルチーデ】ヘラクレスの異名、ヘラクレス、テツサリア王エウリュトスの女イオレを愛して、その妻ディアネイラの嫉妬を招きネツソスの毒に感じて死す（地、一二・六七―九註参照）

【齡】 pelo（毛）老ゆれば白くなるによりて齡の義あり、齡に適

はしき間とは若き時の續く間をいふ

一〇三——一〇五

【再び心に】レーテの水に洗ひ去られて

【定め、整ふる力】星辰の影響を人に與へつゝ（定め）、遂に救に到らしめ給ふ（整ふる）神の力

一〇六——一〇八

我等は天地萬物を美うつくしうする神の微妙の御みはたらき働を見、諸天の影響を下界に及ぼしこれを導いて向上せしめ給ふ神の善き攝理を認む

【かく大いなる神業】創造の御業

異本、「かく大いなる愛をもて」

【天界に下界を治めしむる】或ひは *tonna* を轉らしむ（下界のま

はりを)の意に解する人あり

異本、「下界を天界に向はしむる」

一一五——一七

【ラアブ】ラハブ。エリコの遊女、ヨシユアの遣はしゝ二人の間者をかまくまひ、その徳によりて己が一家災を免かる(ヨシユア、二、同六・一七、ヘブル、一一・三一、ヤコブ、二・二五)

【やすらふ】永遠の救ひをえ完き平和を樂しむをいふ

【その印を】その光をもて我等を照らす、而してその光は我等の
中の最強き光なり

一一八——二〇

詩人時代の天文学によれば地球の投ぐる圓錐状の影は金星にまで

及ぶ（ムーアの『ダンテ研究』三卷二九—三〇頁参照）

註釋者曰く。是下方の三天においてダンテに現はるゝ諸靈が世に屬する種々の汚點をその生涯にとゞめし意を寓すと

【クリストの凱旋】天、二三・一九—二一参照

一二—一三

【左右の掌にて】合掌して。祈りをもて

【勝利】ヨシエア（ジヨスエ）がエリコにて得たる

或曰く。左右の掌は釘にて打たれし左右の手即ちキリストの十字架にて勝利はキリストの勝利なり、中世ラハブは寺院の典型と見なされ、その家の窓に結びつけし赤き紐（ヨシユア、二・一八）はキリストの血の象徴と見なされたればかくいへりと、委しくは

スカルタツツイニの註を見よ

一二四—一二六

【法王の】法王ボニファキウス八世が聖地をサラセン人の蹂躪に任じて顧みざりしこと（地、二七・八五以下並びに註参照）

【最初の榮光】最初の軍功即ちエリコの奪略

一二七—一二九

聖地と法王との事をいへるに因みて、以下寺院に屬する者の貪欲を責む

【者】惡魔。人類の幸福を嫉み、これを誘ひて罪に陥れ、歎きの本なる禍ひを殘せり（地、一・一〇九——一一参照）

【汝の邑】フィレンツェ。貪慾嫉妬のはびこれる處（地、六・四

九、一五・六七——九參照）なれば惡魔これを建つといへり

一三〇——一三二

【詛ひの花】フイレンツエの金貨即ちフィオリノ。その一面に百合の花形あれば花といひ（地、三〇・八八—九〇註參照）、僧侶等これを貪るあまりに人を正しく導かずしてかへつてこれを迷はしむれば詛ひといへり。羊羔とは老若を問はずすべて牧者の保護の下にある信徒を指す

一三三——一三五

【これがために】この貨幣を貪るによりて

【大いなる師】聖父の教へ

【寺院の法規】Decretali おしなべて寺院の法典を指す。僧侶等聖

書及びこ高僧の著作を棄てゝひとりこの書に熱中するは單にこれによりて名譽地位従つて金錢を得んと欲すればなり

【紙端に】紙端に種々の書入れをなすをいふ

一三六―一三八

【これに】貨殖に

【ナツアレツテ】ナザレ。キリストの郷里にて、天使ガブリエルが處女マリアに神子の降誕を告げ知らしゝところ（ルカ、一・二六以下）。こゝにては聖地パレスティナを代表す

一三九―一四二

【ヴァティカーノ】ローマの名所にて聖ペテロの墓及びその宮殿のあるところ

【選ばれし地】神に選ばれて神聖となれる場所

【軍人等】ペテロの例に倣へる殉教者

【姦淫】キリストの新婦（寺院）の。姦淫より釋放たるとは貪慾の爲に亂れし寺院の政治を離るゝをいふ

但しこの解放の豫言明ならず、註釋者或ひはこれをボニファキウス八世の死（一三〇三年）とし、或は法王廳のアヴィニオンに移れる（一三〇五年）事とし、或ひはハインリヒ七世のイタリアに來れる（一三一一年）こととし、或ひは地、一・一〇〇以下及び淨、二〇・一三以下に出づる獵犬と同じとす

第十曲

ダンテ導かれて太陽天にいたれば、哲人及び神學者の靈集まりてこれをかこむ、その一トマス・アケイナス、ダンテと語り、かつこれにその十一の侶の名を告ぐ

一―六

父なる神はその子キリスト及び聖靈によりて天地萬物を創造し給へり、而してこれらの被造物の間には極めて美妙なる秩序あるがゆゑにこれを觀これを思ふ者必ず神の大能を窺ひ知るにいたる

【第一の力】父なる神

【愛】聖靈。父と子とより出づ

神學上の一論争點なり、ダンテはトマスその他所謂オルソドックス正統派の
人々の説に従へり

【うちまもり】父なる神が子を通じて宇宙を造り給へるをいふ

【心または處】心に現はるゝものは靈に屬する物、空間に存在するものは物質に屬する物

【これを】この秩序を

七—九

【ところ】晝夜平分點。即ち黄道（太陽の年毎の運行）と赤道（太陽の日毎の運行）との截點（一三——五行註參照）

一〇—一二

【師】神

【目を】神はその創造の御業を善とし給ふのみならず、常に萬物の安寧秩序を顧み給ふ

一三一—一五

【圏】獸帶。即ち冬至線を南に、夏至線を北にし、黄道に沿ひて西より東に進み、春分秋分に至りて斜に赤道を截斷する想像の大圏

【呼求むる】せは獸帶の諸星のさま／＼なる影響を要するを指す

【かしこ】かの赤道の一點

一六一—一八

もし獸帶かく傾斜せずして赤道と平行せば、星の影響に變化なく

同一の影響同一の場所にのみ及び、他に及ばざるが故に（多くは空し）、さま／＼の影響によりて活動する下界はその活力の大部分を失ふにいたらむ

一九—二一

獸帯の南北に傾斜する度今より多きか少き時は、温度、季節、晝夜の長短、風雨霜雪の分布等悉く今と異なるにいたり、地上の秩序爲に亂れむ、地上の秩序の亂るゝは天の秩序の亂るゝなり

【上にも下にも】天にも地にも

或は二一行の *mondano* を地球上の意とし「上下」を南北兩半球

と解する人あり、されど一七—八行に *nelciel* と [*qua giu*] とを

對此せるより見れば前説まさると思はる

【疲れざる】 求むるのみにて得ざれば疲る

【椅子に残り】 研究の爲に残りて

【少しく味はしめしこと】 「師の技」につきてわがこゝに少しく
いへること

二五——二七

【食む】 思ひめぐらしてさとること

【わが筆の】 我わが長き詩題に驅られこれに心專なる爲、今茲に
詳かにこの一の事を述べがたし

二八——三〇

【僕】 太陽

【天の力を】その上なる諸天よりうけし力を世界に與へ

【己が光をもて】即ちその 轉によりて人、時を量り知るをいふ

三一——三三

【處】前記の截點にあたる處にて、この處と合すといふはなほ白羊宮の星と列るといふ如し、太陽はこの時既に截點を過ぎて北に進みゐたればなり

太陽春分にいたりて白羊宮に入り、秋分にいたりて天秤宮に入る、神曲示現の時は春なれば、こゝにては前者を指せり

【螺旋】東より西に ると共に赤道を中心として或ひは南或ひは北に傾くが故にその道螺旋状を成す（『コンヴィヴィオ』三・五・一四二以下参照）、こゝにては北に向ひて登る螺旋

【早く】春分以降夏至にいたるまで太陽北に進むに従つて日は次第に夜よりも長し

三四—三六

【我この物と】我は太陽天に入りたり、されどあまりに早くして、登り行けることを知らず

【思ひ始むるまでは】思ひはからずも心に生じて、思ひのあることを知れどもその生じ、次第を知らざる

三七—三九

【善よりこれにまさる】一天より、さらに高き一天に導き

四〇—四二

【色によらで】太陽と色の異なるによりてその天の中に明かに見

ゆるにあらで、光のこれにまさるによりてしか見ゆるとは

【そのもの】太陽天にてダンテに現はるゝ賢哲の諸靈

四三―四五

【信じ】人たゞかく強き光あることを信じ、いつか天堂にて自らこれを成るを願ふべし

三七行より四五行に亘る三聯ムーア本にては「あゝ己が爲す事の、時を占むるにいたらざるほどいと早く、一の善より、まされる善に移りゆく（愈 美しくなる）ベアトリーチエはその自ら輝くこといかばかりなりけむ、わが入りし日の中にさへ色によらで光によりて現はるゝ者にありては、たとひわれ、才と技巧と練達を呼び求むとも」云々とあり

四六一—四八

人は未だ太陽よりも強き光を見しことなければ、かゝる光を想像し能はざるも宜なり

四九—五一

【尊き父の】神の第四の族、即ち第四天（太陽天）の諸靈

【氣息を嘘く】氣息いきは聖靈なり、父と子より出づ（一一—三行参照

）。神は三一の眞理をかれらに示し給ふ、賢哲といへども地上においてはこの至奥至妙の理を極むるあたはず、今天上にて親しく神の啓示をうけ、これに達するを喜ぶなり

五二—五四

【天使の日】見えざる靈の日即ち神

六一——六三

ベアトリーチェは己が忘れしことを怒らずかへつて満足の微笑を見せたれば、その目の輝は、専ら神に向ひゐたるダンテの心を呼戻し、彼をしてその身邊の事物を見るにいたらしむ

六四——六六

【勝るゝ】太陽の光よりも

【われらを】ダンテとベアトリーチェとを取巻き、かれらを中心として一圓形を畫けるなり

六七——六九

月のまはりに暈かきの現はるゝさままたかくの如し

【暈り】水蒸氣を多く含み

【暈となるべき糸】暈となるべき光の糸

【ラートナの女】月。ゼウスとラートナの間の女ヂアーナを月と見なせるなり（浄、二〇・一三〇——三二並びに註参照）

七〇—七二

【王土の外に】王土内ならでは知るに由なき。言葉にては傳へ難き

註釋者曰く。繪畫彫刻等極めて貴重なる美術品類の國外輸出を禁ずることあるより、この此輸出づと

七三—七五

【光】諸靈

【かしこに】自ら天堂に到るべき準備をせずして天上の美を知ら

んとするも何ぞよくその望を達せむ

七六一七八

【日輪】靈

【極に近き星の如く】極に近き星が極を中心とし常に同一の距離を保ちてめぐる如く、諸の靈はベアトリーチエとダンテとを中心としてめぐれり

七九一八一

註釋者曰く。こは譬へを舞の歌 (Ballata) にとれるなり、
おんどとり 號

頭 一つ處にとゞまりつゝまづ最初の一節を歌ひその歌終れば圓形を造りて立てる一群の舞姫皆舞ひめぐりつゝこれを繰返し歌終りて止まる、次に號頭なほも一つ處にありて次の一節をうたひそ

の歌終れば全群また新に舞ひめぐり、かくして次第に舞ひ終るにいたる、この舞方ダンテ時代において特にトスカーナに行はると
 (カーシーニ註参照)

八二―八四

【その一】「燃ゆる日輪」の一

【恩恵の光】神恩の光。まこと眞の愛これより出づ

八五―八七

【また昇らざる】一たび天上の幸福を味へる者はたとひ地上に歸るとも偽りの快樂に迷はず道心堅固なるがゆゑに死後必ずまた天に登る(浄、二・九一——三並びに註参照)

【階】天より天と昇る階

八八―九〇

教へをもて汝の求知の念を満足せしめざる者は、その自然の性を枉ぐる（自由ならざる）こと海に注がざる水の如し

水は皆低きにつきて海に流れ入らんとする自然の性を有する如く、我等は皆汝の願ひを満さんとする性向を有す

九一―九三

【花圈】ベアトリーチェとダンテとをまろく圍める一群の靈。ダ
ンテはこれらの靈の誰なるやを知らんと願へるなり

九四―九六

我は聖ドミニクス派の僧なりき

【迷はずばよく肥ゆ】世の誘惑に従はずは高德に達す（天、一一

・二二以下参照)

九七—九九

【兄弟】宗教上の

【アルベルト】アルベルトウス・マグヌス。中古最も卓越せる哲學者兼神學者の一、一二〇六年シエヴァーベン（天、三・一一八一—二〇註参照）のラウインゲンに生れ、一二八〇年ケルン（レーノ即ちライン河畔の町）に死す、彼がドメニコ派の人となれるは一二二二年の頃にてそれより二十幾年の後ケルンにて教へを授く、著作多し、その學識のいかに博かりしやは百學の師（*Doctor universalis*）の名あるに²よりて知りぬべし

【トマス】トマス・アクイナス。アクイーノ（ローマとナポリの

中間モンテ・カシノの附近にある町)の伯爵家の出、一二二五年の頃父の領地ロツカセツカに生る、初めナポリの大學に學び、一二四三年ドメニコ派の僧となり、後ケルンに赴きてアルベルトウスに師事しまた彼と共にパリに到る、一二四八年以降ケルン、パリ、及びナポリの各地にてその業を授け、一二七四年リオンの宗教會議に連らんだためナポリを出で途にて病をえて死す(淨、二〇・六七——九並びに註參照)

トマスは中古の大知識にて著作多し、就中その『神學大全』(Summa theologiae)は今猶ローマ寺院の寶典たり、ダンテの神學説に甚だ顯著なる影響を與へしもこの書なり

【グラツィアーン】グラテティアヌス。有名なるイタリアの寺院法學者、十二世紀の人、その編纂せる（一一四〇年頃）寺院法即ち所謂「グラツィアーンの寺院法」として世に知らるゝものは、聖書の本文、使徒の信條、宗教會議の法規、法王の令旨並びに諸聖父の拔萃文より成り、僧俗二法の調和をはかれる（二の法廷を助けし）ものなりといふ

一〇六一—一〇八

【ピエートロ】ペトルス・ロムバルドウス。（ロムバルディアなるノヴァーラ地方の生れなればこの名ありといふ）。十二世紀の始めに生れ、一一六〇年に死す、その編成せる教法集四卷（*Sententiarum Libri IV*）はアウグステイヌス及びその他の諸聖父のキリ

スト教理に關する論説を集めしものにて實に寺院の寶と稱すべく、爾後この書の研究者註釋者甚だ多く、ペトルスは爲に教法先生

(Magister sententiarum) の名にて廣く世に知らるゝにいたれりといふ

【貧しき女】二個の小錢を神に獻げし寡婦 (ルカ、二一・一以下)

こは教法集の序詞に「かの貧しき女の如く、我等の貧窮の中より若^{そこばく}干の財を主に獻げんと」云々とあるに因みてなりといふ

一〇九—一一一

【第五の光】ソロモン。ソロモンはダヴィデ王の子にてイスラエルの王なり

【その消息】ソロモンの魂の救はれしや否や (列王上、一一・一

以下参照)は神學者間にとかくの議論ありし點なりければ(ヴァーノン『天堂篇解説』第一卷三五四—五頁参照)その眞の消息を聞かんと切に願ふなり

【戀より】特に「雅歌」の作者として

一一二—一一四

【眞もし眞ならば】眞その物なる聖書にして誤りなくば

【これと並ぶべき者】「我汝に賢き聽き心を與へたり、されば汝の先に汝の如き者なかりき、また汝の後に汝の如き者興らぎるべし」(列王上、三・一二)

一一五—一一七

【光】ディオニュシオス(デオヌシオ)。使徒パウロの教へを聽

きてキリスト教徒となりしアレオパーゴの法官（使徒、一七・三四）。かの有名なる諸天使階級論（*De caelesti Hierarchia*）は「テイオニユシオスの作（實は後代の作）」と見なされたれば天使の性云々といへるなり

一一八—一二〇

【小なき光】オロシウス（但し異説あり委しくはムーアの『批判』四五七頁以下を見よ）。イスパニアの高僧なり（四—五世紀）、聖アウグステイヌス（天、三二・三四——六註参照）の勧めに従ひキリスト教に對する異教徒の非難を論駁せんとて排異教徒史七卷を著はす。小さしといへるはその著作第一位にあらざればなるべし

【用るに供へし】アウグステイヌスの勧め及び助言に従つてかの書を著はし、アウグステイヌスをして自ら筆を執るに及ばざらしめし意

【信仰の】原文、「キリスト教時代の」

一二四—一二六

【聖なる魂】アニキウス・マンリウス・セヴェリヌス・ポエティウス、イタリアの政治家兼哲學者、紀元四八〇年頃ローマに生れ、五一〇年ローマのコンスルとなる、ゴート人の王テオドリクス、ポエティウスがゴート人の手よりローマを救ひ出さんと謀れるを疑ひこれをパヴィアに幽閉し後死刑に處す（五二五年）、その獄中に著はせる『哲學の慰め』（*De consolatione philosophiae*）はダ

ンテの愛讀書の一なり（『コンヴィヴィオ』二、一三・一四——

六参照）

【一切の善】神

一二七——二九

【チエルダウロ】パヴィアなる聖ピエートロの寺院にてボエティ
ウスの墓所

【殉教】異教徒の苛責の下に死せるがゆゑに寺院は彼を殉教者と
なせり

一三〇——一三二

【イシドロ】イシドールス。シヴィリア（イスパニアの）の僧正、
六三六年に死す、博學にして著作多し

【バーダ】イギリスの高僧兼史家（七三五年死）、著作多し、就中『英國寺院史』最もあらはる

【リツカルド】リシャールス。コツトランド人にてパリ附近なる『聖ヴィクトル』僧院の院主なり（一一七三年頃死）、ダンテはカン・グランデに與ふる書の中（五五三——四行）にてその著『瞑想論』を擧げたり。人なる者云々とは彼の所論の神秘的超人的なるをいふ

一三三——一三八

【死の來るを】瞑想によりて世の無常を觀じ、解脱の道を死に求むるなり

【藁の街】（Fr. rue du Fouarre）パリの街の名、哲學の諸學校（）

の街にありきといふ。藁の街にて教ふといふはなほパリ大學の教授となれりといふ如し（カーシーニ）

【嫉まるゝべき】己が説の爲に敵をつくるの謂ならむ、但しその如何なる説なりしやは明ならず、註釋者曰く。

シジエーリ、パリの宗教裁判所にて異端の罪を受け、抗辯の爲イタリアのオルヴィエート（その頃ローマの法廷ありし處）にいたり、かしこにて一僧侶の手に斃ると（スカルタツツイニ註参照）

【シジエーリ】シジエーリ・ド・ブラバンテ。ベルギーの人にてアヴェルロイス系の哲學者なりといふ、傳不詳（十三世紀）

一三九—一四四

【神の新婦】寺院。新郎はキリスト

【朝の歌を】 *matinar* なる語は元來戀人等（男）がわが戀ふる女の家の前にてあさまだき歌をうたふ意なりといふ、かれらがかゝる歌をうたひて戀人の愛を得んとするを、寺院の會集が禮拜し祈祷して神の恩寵を受けんとするに譬へしなり

【時】 早朝

【時辰儀】 めざまし時計の一種なるべし、曳きかつ押すとは齒車の一が小槌を曳きかつ押して鈴りんを鳴らす意か、この時代に用ゐし自鳴鐘の構造明らかならざるがゆゑに定かにいひがたし。その秩序正しき運動と美妙の音とを諸靈の舞と歌とに此せり

【神に心】 敬虔なる信徒の心を、神を愛するの愛にて

一四五—一四八

【輪】十二聖徒の輪

第十一曲

トマス・アクイナス、聖フランチェスコの物語をなす

一一三

【推理】天上の福は人間至上の欲望なるべきに、人の理性完からねば推理を誤り、地上の物をもて人間至上の欲望となす

四一六

【醫】aforismi (箴言) 名醫ヒツポクラテス(地、四・一四三)

の著書『箴言』に因みて醫學の意に用ゐたり

【僧官】 神に事へん爲ならで富に事へんため。

【詭辯】 他を欺きて

一三一—一五

【いづれの】 前曲に出づる十二の靈のいづれも。トマスの語れる
 間舞をやめし十二の靈、再び舞ひつゝベアトリーチエとダンテの
 まはりを一周し、後又再び止まれるなり

一六一—一八

【光】 トマスの

【いよくあざやかに】 天、五・一〇三以下参照

一九—二一

わが輝は神より出づ、かくの如く我は神を視て（即ち神の鏡にうつして）汝の疑ひの本を知る

二二—二七

【さきに】天、一〇・九六

【また】天、一〇・一一四。但し *surse* (興る) と *nacque* の (生る) との差あり (オックスフォード版)

學會本、前後同じ (ムーア『用語批判』四六〇頁以下参照)

三一—三三

【新婦】寺院。新郎はキリストなり

【大聲によばはり】十字架上に (マタイ、二七・四六及び五〇等)

【血をもて】「主の寺院、即ち主が己の血をもて買給ひし寺院を」

云々（使徒、二〇・二八）

【愛む者】新郎キリスト

三四―三六

「左右の」一は智をもて導き、一は愛をもて導く、次聯註参照

三七―三九

【熱情】フランチェスコの愛の強きをいへり、セラフィーノは愛に然ゆる天使なり

【知慧】ドミニクスの智の深きをいへり、ケルビーノは智に富む天使なり

愛は新婦をしていよく、夫に忠實ならしめ、智はこれをして安んじて（異端邪説等の恐れなく）夫の許に往かしむ

四〇―四二

【一人】フランチェスコ

【目的は一】寺院の保護指導

四三―四五

まづフランチェスコの生地アツシージの地勢を陳ぶ

【トウピーノ】アペンニノより出で、アツシージの南を流れ、キ
アーシオと合してテーヴェルに注ぐ小川の名

【ウバルド尊者】ウバルド・バルダツシーニ。一一二九年より一
一六〇年までグツビオの僧正たり、その以前グツビオ諸山の一な
るアンシアーノ山に卜居しゐたりといふ

【選ばれし】ウバルドは後再びかの地に隠遁してその一生を送る

意圖ありしも果さゞりきといふ

【水】キアーシオ河。アンシアーノ山より出でアツシージの西を流れてトウピーノと合する小川

【高山】スパーシオ山（アペンニノの分脈）。アツシージはこの山の西の腰にあり

【肥沃の】葡萄、橄欖の産地なれば

四六―四八

【ペルージャ】アツシージの西の方約十五マイルにある町

【ポルタ・ソレ】アツシージに面するペルージャの門をかく呼べることありといふ。スパーシオの山々は夏期日光を反射し冬期雪に蔽はるゝが故に寒暑の影響をペルージャに及ぼすといへり

【ノチエーラとグアルド】スバーシオ山の後方即ち東（アツシージの東北）にある二邑

【重き軛】grave giogo ペルージアに従屬してその壓制に苦しめるをいふ

或曰く。こは「不毛の山地」の義にて、東方の地の急坂多く耕作の利なきをいひ、四五行の fertile costa と對照せしめしものなりと

四九―五一

【嶮しさの】山坂の急ならざる處より

【日輪】イタリアの高僧聖フランチェスコ（一一八二―一二二六年）

【これ】我等の居る處なるこの太陽

【をりふし】常に同じ地點より出づるにあらねばかくいへり。この太陽が夏期最強の光を放ちて東の方インドのガンジス河口より現はれ出づる如く

五二―五四

【アーシエージ】*Ascesi* アッシージ (*Assisi*) の古名

五五―五七

【地に】彼の例に倣ひて徳に進むの念を世人に起さしめしなり

五八―六〇

【女】貧 (七三―五行)

【父と争ひ】貧を選べる爲父の不興を蒙れること

この頃フランチェスコ衣類と馬とを賣りて得たる價を一寺院に喜捨し、爲に父の譴責を受けしことありといふ

六一—六三

【己が靈の法廷】アツシージの僧正の法廷。フランチェスコはこの僧正と父との前にて父の財産を繼がじと誓ひたり

六四—六六

【最初の夫】キリスト（七〇——七二行註参照）

六七—六九

【アミクラーテ】アミククラス、ダルマーチアの貧しき漁夫、一茅屋と一艘の舟とはその全財産たり、カエサル對ポムпейウス戰亂の餘波を受けて略奪盛に行はれ人心恟々たりし時アミククラス

獨り赤貧と親しみ臥するに戸を閉づることなし、一日カエサル、アドリアティコ海を渡りてイタリアに赴かんためその茅屋に至れるに彼さらに驚かず、客のカエサルなるを知りて猶容易に船を出すを肯はざりき（『コンヴェイヴィオ』四、一三・九七以下参照）

【益なく】かの女の益とならざること。世人はかゝる物語を聞くとも貧を愛するにいたらざればなり

七〇—七二

【マリアを】ヨハネ傳一九・二五参照

【クリストとともに】キリストは貧に生れて貧に死し給へり、

「狐に穴あり、空そらの鳥に巢あり、されど人の子には枕する所なし」

（マタイ傳八・二〇）

七三―七五

【長き言】五八―七二行にいへること

七六―七八

フランチェスコが清貧と親しみ深くこれを愛せることは世の教訓となり、人多くその例に倣ふにいたれり

【愛、驚、及び敬ひ】世人は愛と驚嘆と畏敬とをもてかれらの和合喜悦を見、遂に自ら聖なる思ひを懐くにいたれり

七九―八一

【ベルナルド】ベルナルド・ダ・クワンタヴァルレ。アツシージの富豪、フランチェスコの最初の弟子となりてその産を貧者に分與す

【沓をぬぎ】師の例に倣ひ素足にて歩むこと

【大いなる平安】清貧の生活

八二―八四

【未知の】清貧は世人未知の富、裕に果を結ぶ（眞の福の果を）
寶なり

【エジディオ】アツシージの人（一二七二年死）、その著 Verba

aurea（金言）今に傳はる

【シルヴェストロ】アツシージの僧

【新郎】フランチェスコ。新婦は貧

八五―八七

フランチェスコがその派の規定に對して法王インノケンティウス

三世（一一九八年より一二一六年まで法王たり）の准許をえん爲、貧（戀人）と弟子達（家族）とを伴ひローマに赴けること

【卑しき紐】フランチェスコ派の僧侶が帶となせる節多き細紐

（地、二七・九一一三註參照）

八八―九〇

【ピエートロ・ベルナルドネ】フランチェスコの父にてアツシージの富める商人。フランチェスコはその生れの貴からざるをも、その姿のみすぼらしきをも恥とせず

九一―九三

【嚴しき】フランチェスコ派の規定の峻嚴にして容易に守り難き意を含む

【最初の印】フランチェスコがインノケンティウス三世より假
許を受けしは一二一〇年頃の事なりといふ

九四―九六

【天の榮光の中に】地上の僧達に歌はれん（フランチェスコ派の
人々その師の生涯を合唱にて歌ふ習ひありたれば）よりは天にて
諸天使諸聖徒にうたはれんかた

但しトマス自ら天にてかの聖者の一生を歌へるものなるがゆゑに
異説多し

九七―九九

【永遠の靈】聖靈。神の恩寵ホノリウスを通じて准許をフラン
チェスコに與へ、その聖なる志を遂げしむ

【オノリオ】法王ホノリウス三世（一二一六年より一二二七年まで法王たり）。フランチェスコが彼より正式の准許を受けしは一
二二三年の事なり

【法主】archimandrita 群羊の首かしらの義より轉じて僧官の意に用ゐら
る、こゝにてはミノリ派（地、二三・一——三）の首僧即ちフラ
ンチェスコ

一〇〇—一〇二

年代順よりすれば九三行に續く。一二一九年フランチェスコは十
二の高僧と共に十字軍に従つてエジプトに赴き、この地のサルタ
ンを改宗せしめんためその目前にてキリストの教へを宣べたりと
いふ

【從者等】使徒及びその他の聖者達

一〇三—一〇五

【草の實】宣教の收穫

一〇六—一〇八

【粗き巖】テ—ヴェルの上流とアルノの上流との間即ちカセンテ
イ—ノにあるアヴェエルノ山。傳へ曰ふ、フランチエスコこゝにて
四十日の斷食をなせりと

【最後の印】聖傷みきずの痕あと (Stimate) なり、法王インノケンテイウ

ス及びホノリウスよりうけし准許の印に對して最後といふ、傳に
曰く、一二二四年フランチエスコ、アヴェエルノの岩山にてキリス
トに祈願をさゝげその受難の苦しみをわが身に知らせ給へと念ず、

キリスト、セラファイノの姿にてこれに現はれ、聖者の手足及び脅あばらに己が傷痕を印し給ふと

一〇九—一一一

【かゝる幸に】聖傷の痕を身に受くるほどの恩恵を下し給ひし神
一一二—一一四

【女】貧

一一五—一一七

【他の】貧の懷以外の。傳に曰く、死の近づくを知るやフランチェスコはその愛する寺院なるサンタ・マリア・デーリ・アンジエリに移るを願ひ、かしこにて貧に對する最後の愛を表はさんため衣を脱し地上に臥してその生を終ふと

一一八——二〇

聖フランチェスコの人となりより推して、これとともに寺院指導の任に當れる聖ドメニコの人となりを知るをえむ

【ピエートロの船】寺院。異端邪説迫害殉教等の浪荒き大海を渡りて眞まことの信仰の湊にむかふ

一二一——一二三

【教祖】ドミニクス派の基を起せる聖ドミニクス

【良貨を】ピエートロの船といへるに因みて。高德の人となりて寶を天上に貯ふること

一二四——二六

【群】ドミニクス派の僧侶等

【新しき食物】名譽地位ある僧職

【山路】*salti* 山や林の間の牧地

一二七—一二九

【乳】教への糧

一三〇—一三二

【牧者に近く】教祖の教へに従つてその派の戒律を守るをいふ

一三三—一三五

【微】臙にて解し難きこと

一三六—一三九

【願ひの一部は】疑ひの一は解くべし

【削られし木】わが削り取れる木片（迷はずは云々といへる言葉）

の元木（出處即ちドミニクス派の僧の墮落）。但し異説多し

【革紐を纏ふ者】ドミニクス派の僧（この派の僧は革紐を帶とす）
即ちわれトマス

異本、「非難」。これに従へば「迷はずばよく肥ゆるところといへる言葉の中の非難をさとるべければなり」

第十二曲

トマス語り終れる時、ダンテとその導者とを圍み繞れる他の一群の靈あり、其一ボナヴェントウラ・ダ・バーニオレジオ聖ドミニ

クスの物語をなす

一―三

【焰】トマス・アクイナス

【碾石】ベアトリーチェとダンテとを圍める十二の靈。天、一〇

・九二にこれを花圈はなわといへる如く圓く圍み、かつは水平に 轉す

るがゆゑに碾石ひきうすといへり

七―九

【笛】靈の樂器即ち諸聖徒の聲

【元の輝が】直接に照らす光線が反射する光線よりもつよく輝く

如く

【われらのムーゼ】世の詩人。

【われらのシレーネ】世の謳歌者うたひて（浄、一九・一九―二一註参照）

一〇——一二

【侍女】イリス。タウマスの女（浄、二一・五〇）、虹の女神にて神話の神々特にヘラの使者たり

【二の弓】二重の虹

一三―一五

【外の弓】二重の虹の中、外の大なる虹は内の小さき虹の反映なりと信ぜられたればかく

【流離の女】ニンファ・エーコ（反響）。空氣と地の間の女、の嫉みによりて言語の自由を失ひ、たゞ人の物言ふを聞きてその最後の言葉を繰返すに過ぎず、このニンファ、ナルキツソス（地、

三〇・一二八)を見これを戀ふれども及ばず、形體全く憔悴してたゞ骨と聲のみ残り、後骨は岩に變じ、聲のみ今に生くといふ。(オウイデイウスの『メタモルフオセス』三・三三九以下参照)。
 流離はニンフェの常なり、(淨、二九・四―六参照)

外部の虹の、内部の虹より生るゝを、反響の、聲より生るゝにたとへしなり

一六一―一八

【契約】ノア(ノエ)の洪水の後、神がノアとその全家及びこれと共にありし鳥獸と契約を立て、世に再びかくの如き洪水あらしめじと言ひ給ひしこと(創世、九・八以下)、虹はその契約の徴しるしなり(同九・一三―七)

一九―二一

【薔薇】二重の圓を作れる諸聖徒

【相適ひ】歌をも舞をも合せしをいふ

二二―二四

【祝】諸靈が俱に歌ひ互ひに照らしてその福を表はすこと

二八―三〇

【星を指す針】北極星を指す磁針 磁針は一二一八年既にイタリ
アの航海者に知られたり、一三〇二年に至りフラ―ヴィオ・ジョ
イアこれを完成す（パツセリ―ニ）

三一―三三

【我】ボナヴェントウラ（一二七―九行註参照）

【彼の爲に】聖ドミニクスの偉大なるをあらはさんため（天、一

一・四〇—四二、一一八—二〇参照）

三四—三六

【一のをる處には】ひとりの事のいはるゝ時には他のひとりの事
もいはれ

三七—三九

【軍隊】信徒等。これをアダムの罪より救ひ、これが陣立を新な
らしめんとて救世主血を流し給へり

【旗】十字架

【遅く、怖ぢつゝ、疎に】遅きは熱心の足らざるなり、怖るは異
端の爲に信仰の動搖するなり、疎なるは數少きなり

四〇―四二

神はかく覺束なき信徒の名をはかり給ひ

四三―四五

【さきに】天、一一・二八以下

【己が新婦】寺院。「神の新婦」（天、一〇・一四〇）

四六―四八【西風】即ち春風

【ところ】イスパニア

四九―五一

【浪打際より】グアスコーニア灣（ビスケー灣）より

【時として】夏至の頃。太陽は南に向ふに従つてかの灣に遠ざかるが故にかくいへり、長くは日の長きをいふ

【萬人の】南半球には住む人なければ

五二―五四

【カラログ】カステイルの町（今のカラホルラ）。聖ドミニクス（ドメニコ）の生地なれば幸多きといへり

【従ひ従ふる獅子】城に従ひ城を従ふる獅子。カステイル王家の紋所は二頭の獅子と二個の城より成る、即ちその半には獅子城の下にあり（従ふ）、半には獅子城の上にあり（従ふる）

五五―五七

【クリストの】キリスト教の熱愛者

【敵につれなき】一〇〇―一〇二行参照

【剛者】イスパニアの高僧聖ドミニクス（一一七〇―一二二一年）

五八一六〇

【豫言者】夢によりてわが兒の常人ならざるべきを判ぜるなり。
 傳へ曰ふ、ドミニクス未だ胎内にありし時、その母夢に一匹の小
 犬を生む、これに黒白の斑あり、口には燃ゆる炬たいまつ火をくはへる
 たりと（黒白の斑はドミニクス派の僧服を表はし、炬火は聖者の
 熱情をあらはす）

六一一六三

【聖盤】洗禮の水を容るゝ器うっは。洗禮によりて信仰と縁を結べるな
 り

【相互の救ひ】ドミニクスは信仰の有力なる保護者となり、信仰
 はドミニクスを永遠の福祉に導く

六四―六六

【女】教母。小兒に代りて授洗僧に答へ、儀式を脱おちなく濟せる女

【嗣子等】その派の僧達

【眠れる間に】教母は小兒の額の中央に光明燦かなる一の星あるを夢に見たり、これ彼が世の光となり諸民を導いて永遠の救ひに到らしむべき瑞相なりき

六七―六九

名を實に配そはしめん爲、天の靈感父母にくんだり、彼をドメニコ

(= Dominicus 主のものなる)と名づけしむ

七〇―七二

【その園】寺院

七三一七五

【第一の訓】「汝完からんと思はゞ、往て汝の所有を賣りて貧者に施せ」（マタイ、一九・二一）第一のは主なるの義。トマスも清貧をキリストの訓さとしの第一に擧げたり

聖ドミニクスは未だ若かりし時、書籍やその他の所有物もちものを賣りてその得たる價を貧民に施す等慈善の行爲多かりき

七〇行より七五行に亘る二聯にキリストといふ語三たび出づ、これ押韻の際ダンテは他の韻語を決してこれに配せざればなり、天、一四・一〇三以下、同一九の一〇三以下及び同三二・八二以下にもこの例あり

七六一七八

【目を醒し】ドミニクスはその幼兒屢 臥床をぬけいで、大地に
臥しつゝ神に祈りをさゝげたりといふ

【このために】安逸を棄てゝ神に事^{つか}へん爲に

七九—八一

【フェリーチエ】Felice の（幸運なる）、かゝる子を生みたる彼の父は誠にその名の如く福なり

【ジョヴァンナ】Giovanna（主の恵の義といふ）

【若しこれに】ヘブライの原語の意義明らかならざればかく曰へり

ダンテはこれらの言葉によりて、天上の聖徒の知識のなほ不完全なるを示せるか（天、四・四九以下参照）、或ひはその自ら言は

んと欲する所これらの言葉に現はれしなるか、明らかに知り難し
八二―八四

今の世の人法學または醫學に走りて世の榮達を求むれども、彼は
然らず、たゞ靈の糧を求め

【オステイア人】オステイアのカルディナレ及び僧正なりしエン
リーコ・デイ・スーザ（一二七一年死）。寺院法に精しくその註
疏及びその他の著作あり

【タツデオ】タツデオ・ダルデロット（一二九五年——或曰、一
三〇三年——死）。フィレンツェの人にて名醫の聞え。高かりし
者、醫學に關する著作多し

【世の爲】世に屬する利慾のため

【まことのマンナ】キリストのまことの教へ。マンナについては
浄、一一・一三―五註参照

八五―八七

【葡萄の園】寺院。園をめぐるは寺院を保護するなり

【白まむ】白むは縁の色あせて枯るゝなり、牧者其人をえざれば
寺院の敗類するにたとふ

八八―九〇

【法座】法王を指す。ドミニクスが法王インノケンティウス三世
の許をえんとてローマに赴けるは一二〇五年の事なり

【これに坐する】法王の位その物の罪に非ずして法王其人（特に
神曲示現當時の法王ボニファキウス八世）の罪なり

九一—九三

【六をえて】不正所得を求むること（即ちその三分一または二分一を善用する條件にて）

【最初に】空くべき僧職を求めて己まづこれに就かんとすること
 【什一】什一を私用に供すること。人々所得の十分一を獻じ、これを貧者の用に供する例あり、モーゼの律法にもとづく（申命、一四・二八以下参照）、これを什一といふ

以上は皆當時の僧侶の貪り求めし物なれば特に記して彼等の非を擧げしなり

九四—九六

【二十四本の草木】二個の輪を作りてダンテとベアトリーチェと

を圍める二十四の靈

【種】信仰。聖徒は信仰の善果なりよきみ

【迷へる世】眞の信仰を離れて踏迷へる異端の徒、特にフランスのアルビジョンより起れるアルビジョアの異端

九七—九九

【使徒の任務】法王（インノケンティウス三世）の彼に與へし權ドミニクスは異端者と戦はんため、プレデイカトリ派を起しこれが准許を法王インノケンティウス三世に乞ひ辛うじてその口頭の許を得たり（正式の准許を得たるは一二一六年にて、時の法王ホノリウス三世よりなりき）

一〇〇—一〇二

【處】アルビジヨアの勢力最盛なりしトロサ（フランスの南部にあり）地方

一〇三―一〇五

【さま／＼の流れ】種々の分派（プレディカトリ、ヴェルディ―ニ・モナスチーケ、テルチアーリ）

一〇六―一〇八

【内亂】同宗間の争ひ、即ち異端

【一の輪】聖ドミニクス

一〇九―一一一

【残の輪】聖フランチェスコ

【トムマ】聖トマス

一一二——一四

されどフランチェスコ派の僧侶等その祖師の歩める道を踏み行かず、さきに善ありし所に今惡あり

【良酒】 *gromma* 樽に附着する酒のかたまり。良酒を貯ふればこのかたまり生じ、惡酒を容れおけば黴生ず

一一五——一七

【家族】 フランチェスコ派の僧侶等

【指を踵の】 フランチェスコが踵を踏めるところに彼等指を置く、即ち祖師の歩める道を逆行す

一一八——二〇

【莠は穀倉を】 多くの悖れる僧侶は寺院より逐はるべければなり。

一三〇二年法王ボニファキウス八世が精神派（一二四—六行註參照）を異端視し、彼等をしてフランチェスコ派のみならずまた寺院より分離するにいたらしめしことを指せり

一二一—一二三

フランチェスコ派に屬する者をひとり／＼調べなば、今も昔の如く此派の戒律を正しく守る者あるを見む

一二四—一二六

かく優良なる人々はフランチェスコ派の中の過激派にも緩和派にも屬せじ、この兩派のその宗律に處するや、一（後者）はこれを和げ、他（前者）はこれを嚴くす

【カザール】ピエモンテの町。こゝよりウベルティノー・ダ・カ

サーレ（一三三八年死）出づ、過激派（所謂精神派 *Spirituali*）の首領にて宗規を極度に嚴守せり

【アクアスパルタ】ウムブリアの町。こゝよりマツテオ・ダクアスパルタ（一三〇二年死）出づ、一二八七年フランチェスコ派の長となりて規約の緩和を是認せり

【文書】フランチェスコ派の宗規

一二七—一二九

【ボナヴェントウラ・ダ・バーニオレジオ】名をジョヴァンニ・フィダンツァといふ、ボナヴェントウラ（幸運）はその異名なり、一二二一年ボルセーナ湖附近のバーニオレジオ（今バーニオレア）に生れ、一二五六年フランチェスコ派の長となり、一二七四年り

オンに死す、神學上の著作多し、また聖フランチェスコの傳を著
 はす、前曲に見ゆるフランチェスコの物語多くこの傳に據れり

【世の】原文、「左の」。註釋者の引用せる『神學要論』（トマ
 スの）に曰く、知識及びその他の靈的財寶は右に屬し、一時の營
 養は左に屬すと

一三〇—一三二

【イルルミナートとアウグステイン】ともにフランチェスコの最
 初の弟子なれば最初の素足の貧者といへり

【紐】この派の僧の帶とせる細紐（地、二七・九—三註參照）
 一三三—一三五

【ウーゴ・ダ・サン・ヴィットレ】ユーグ・ド・サン・ヴィクト

ル。名高き神秘派の神學者、パリなる「聖ヴィクトル」僧院に入り、一一四一年に死す、著作多し、十曲に見ゆるリシャル（一三一行）及びペトルス・ロムバルドウス（一〇七行）は彼を師とせりと傳へらる

【ピエートロ・マンジアドレ】ペトルス・コメステル。（マンジアドレ——多食者——は異名なり、書を嗜むによりてこの名ありといふ）フランスの神學者、十二世紀の始めイロワイエに生れ、一一六四年パリ大學に長たり、後、「聖ヴィクトル」僧院に退き一一七九年に死す、著書數卷あり、就中寺院史（*Historiascholasti ca*）最もあらはる

【ピエートロ・イスパーノ】ペドロ・ユリアーニといふ、リスボ

ン（ポルトガルの）の人なり、一二七六年ハドリリアヌス五世の後を承けて法王となりヨハンネス二十一世と稱す、翌七年ヴェイテルポなる法王宮の一部崩潰しペドロ爲に壓死す、その著作に論理綱要十二卷あり

一三六一—一三八

【ナタン】王ダヴィデの罪を責めしヘブライの豫言者（サムエル後、一二一一以下）

【クリソストモ】ヨハンネス・クリソストムスといふ、クリソストモ（黄金の口）はその能辯を表はせる異名なり、三四七年の頃アンテオケアに生れ、三九八年コンスタンティノポリスの大僧正となり、後廢せられて流竄の中に死す（四〇七年）

註釋者曰く。クリソストムスが皇帝アルカデイウスの罪を責めしことナタンがダヴィデを責めしに似たればこゝにこの兩者を配せるなりと

【アンセルモ】聖アンセルムス。一〇三三年の頃ピエモンテのアオスタに生れ、一〇九三年イギリス王の知遇をえてカンターベリーの大僧正となり、一一〇九年に死す、著作多し

【ドナート】アエリウス・ドナートウス。ローマの文法學者、四世紀の人にてテレンチオ及びウエルギリウスの註疏の外ローマの文法書を編纂す、この書長く教科書として世に用ゐられきといふ。第一の學術とは三文四數（地、四・一〇六——八註参照）の中の第一にあるもの即ち文法の義

一三九—一四一

【ラバーノ】ラバヌス・マウルス・マグネンティウス。ドイツの
マインツの人、八四七年この地の大僧正となり、八五六年に死す、
神學特に聖書に關する著作多し

【ジヨヴァツキーノ】カラブリア州チエリコの人、フローラの僧
院（コセンツアの附近にあり）の院主たり、一二〇二年に死す、
豫言の靈云々は當時豫言者として知られたればかく言へるなり
一四二—一四四

【フラア・トムマーゾ】トマス・アクイナスが聖列に入れるはダ
ンテの死後（一三二三年）の事なれば、「サン」といはずして
「フラア」といへり

【武士を競ひ讃め】ドミニクス派のトマスが聖フランチェスコを
激稱せるを聞き、フランチェスコ派の我またこれに劣らず聖ドミ
ニクスを稀讃せんとの念を起し

一四五

【侶を】わが十一の侶を動かしてかつ舞ひかつ歌はしめたり

第十三曲

トマス・アケイナス再び語りいで、ソロモン王の智とアダム及び
キリストの智との關係を論ず

一—三

以下一八行まで、讀者もしかの二十四人の聖徒の靈が二個の圓をつくり光を放ちて舞ひめぐるさまを知らんと欲せば、天の諸處に現はるゝ光強き十五の星と大熊星の七星及び小熊星の二星と、合せて二十四個の星が二の圓形の星座を造り大小二重の圓をゑがきつゝ相共にめぐりゆく状さまを想像せよとの意

四—六

【勝つ】濃厚なる大氣を貫いてその光を放つをいふ

七—九

【われらの天】北半球の天。その懷をもて足れりとするは常に北半球の天にありて没せざるなり

【轆をめぐらし】回轉し

一〇——一二

小熊星における諸星の按排はその状曲れる角の如し、故に角笛といふ。車軸は諸天運行の軸にてその端は即ち天極なり

【第一の輪】諸天運行の本なるプリーモ・モービレの天

【端より起る】角の尖端極めて北極に近きが故にかく

【口】他の一端、即ち角笛にたとふれば聲の出づるところ。小熊星七個の中の二個の星を指す

一三——一五

以上の二十四星相集りて二個の圓形の星宿となり

【ミノスの女】アリアドネ。テセウス（地、一二・一六——八註

参照)に棄てられし後バツカスの憐みをうく、その死するやバツカスこれが冠を天に送り化して星宿(徴號)となす(オウイデイウスの『メタモルフオセス』八・一七四以下参照)。

一六―一八

【一は先に】一導き一従ふ、即ち歩調を合せて同じ方向に

一九―二一

【眞の星宿】二十四の靈

二二―二四

前聯の意を承けて、明かに認むる能はざる理をあぐ

【最疾きもの】プリーモ・モービレ

【キアーナ】アレツツオ地方の河。沼澤多き地を過ぐるが故にダ

ンテの時代にてはその水の流るゝこと甚だ遅かりきといふ（地、
二九・四六―五一註参照）

但し、舞の早さをいへるに非ず、諸靈の光や美が人の想像以上な
るをあらはせるのみ

二五―二七

【バッコに】異教徒がバッカスやアポロンの如き昔の神々を讚美
せるに對して

【ペアーナ】アポロン神を稱たへし歌

【一となれる】キリストにおいて

二八―三〇

【思ひを移す】歌や舞より心を轉じてダンテの願ひをかなへんと

すること

三一—三三

【光】聖フランチェスコの物語をなせるトマス

【聖徒】*quod* 元來神々の義、神の如き二十四の靈

三四—三六

わが言葉によりて汝の疑ひの一（迷はずば云々についての）は解
け、汝よくその理ことわりをさとりたれば、我今こゝに他の疑ひ（これと
並ぶべき者云々についての）を解くべし

三七—三九

アダムの胸にも

【女】エヴァ。禁斷の果みをくらへるため禍ひを全世界に遺せり

(淨、二九・二二以下参照)

【肋骨を】神がアダムより取りたる一本の肋骨をもてエヴァを造り給へるをいふ(創世、二・二一―二)

四〇―四二

キリストの胸にも

【槍に刺され】ヨハネ、一九・三四

【あとさきに】あとは槍に刺されし後、換言すればその死によりて、さきは刺されざりし先、換言すればその苦しみ多き生涯によりて

四三―四五

【威能】神の

【光】知識の

四六―四八

【さきに】天、一〇・一四二―四

【福】福なるソロモンの靈

【異しむ】アダム、キリストを措き、ひとりソロモンの智をもて古今に絶すとなすをあやしむなり

四九―五一

【わが言】即ちさきに言へること

五二―五四

一切の被造物は皆三一の神より出づる觀念（神の語^{ことば}）の顯現なり

五五―五七

【活光】子

【源の光】父

【愛】聖靈

子なるキリストは父なる神及び聖靈とともに萬物を造り給へり

五八一—六〇

【自ら永遠に】子の作用はたらきわかれて諸の物に及べど、子そのもの

は永遠に一なり（天、二・一三六——八参照）

【九の物】原文、「九の實在」。九個の天を司る九級の天使

三一の神のはたらき神の語ことばより諸天を司る者に及び、さらに諸天

を通じて諸種の物質に及び、次第に下るに従つて次第に劣れる物

を生ず

六一—六三

【最も劣れる物】 *ultime potenze* (最後の勢能)、*potenza* は現に在るに非ず、たゞ在りうべき物

【業より業】 子の作用はたらき上なる物にはじまりて次第に下なる物に移ること

【苟且の物】 *contingenze* 在ることをえ在らざることうる物即ち滅び失すべき被造物

六四—六六

【種により】 動植物等。種によらざるものは礦物の類

六七—六九

かゝる産物の原料と、この原料を用ゐて諸物を形成する諸天の力

とはいづれも一定不變ならざるが故に、物として神の光（觀念の光）を受けざるはなけれど、その受けて輝く光に多少あり（天、一・一—三並びに註參照）

七三—七五

材料もし凡ての點において備はり、かつこれに及ぼす天の影響極めて強くば、神の觀念の光皆顯はれむ（その物完全ならむ）

七六—七八

【自然】飼造の機關たる自然（諸天）

【乏しき】神の光を完全に傳ふる能はざるなり

七九—八一

されど三一の神直接にその作用はたらきを及ぼし給ふ時は被造物皆完全

なるべし

【熱愛】聖靈。とゝのふるは印をうくるに適はしからしむるなり

【第一の力】父

【燦かなる視力】（智）即ち子

註釋者曰く。五二―四行にては父を主とし、五五行以下にては子を主とし、こゝにては聖靈を主として創造の働を言現はせり、是三者の働に過不足なきを示せるなりと

八二―八四

かく直接なる神の働により、土（即ちアダムの肉體となれる）は生物（即ち人）を極めて完全ならしむるに適はしき材となり、また同じ働により處女マリアはキリストを身に宿したり

八五―八七

【如くに】如く完全に

八八―九〇

【かの者】ソロモン

九一―九三

【求めよといはれし】神に（列王上、三・五）。神夢にソロモンに現はれ給ひ、その求むる所を問へるに、ソロモンこれに明君たるの資格をえさせ給へと乞ふ、神は彼が自己一身の爲に長壽富貴を求むることをせず、たゞひたすら父ダヴィデの位を辱めざらんと希ふにより、その願ひを嘉し給へり（同三・五——一二）

九四―九六

【わがいへる】我明らかにソロモンの名をいはざりしかど、猶わが言葉と聖書の記事とを照らし合せて

九七―九九

神學や論理に通ぜん爲にあらず

【動者】諸天の運行を司る天使

【必然と偶然】二前提の中、一必然にして一偶然ならばその結論必然なるを得るや否や

一〇〇―一〇二

哲學や數學に達せん爲にもあらず

【第一の動】他の動より生ぜざる動

一〇三―一〇五

【わが謂ふところの】原文、「わが思の矢の中る」

一〇六一—一〇八

【興りし】*Surse* の動詞 (*sorgere*) には、出る、生る、の意の外、立上るの意あれば王者が臣民の上に立つを現はすといへるなり

一〇九—一一一

【別ちて】ソロモンの智は王者の智を指し、その智即ち古今の王者に卓越せるの意なること、またアダムとキリストの智はかゝる制限を有せざること

【信仰】アダム（第一の父）並びにキリスト（われらの愛する者）の智の完全なるを信ずる（三七行以下）

一一二——一四

汝この轍に鑑みてこの後また軽々しく事を斷ずる勿れ

【足の鉛】 [andar co' pie` di piombo] (鉛の足にて行く、即ち警戒して徐かに歩む) 等の句あるを思ふべし

一一八——一〇

【情また】自説にかたよるの情、智を妨げて眞理を見るにいたらざらしむ

一二一——一二三

その備なくして眞理を求むるは寧ろ求めざるの優れるに若かず、そはその人、求むる所の眞理を得ざるのみならず、求めざる所の誤謬を得るにいたればなり

【出立つ時と】魚を捕へんとして而して技わざを有せざれば、その人たゞ手を空うしてわが家に歸るのみならず、出立つ時と異なり、疲勞と失望を感じるにいたる、眞理を求むる者またかくの如し

一二四—一二六

以下一二九行まで、眞を求めて誤を得し人々の例を擧ぐ

【パルメニーデ】パルメニデス。名高きギリシアの哲人、エレア學派に屬す、前五世紀

【メリツソ】メリツソス。同エレア學派の哲人にてパルメニデスの弟子なりといふ、前五世紀

【ブリツソ】ブリユソン。古代ギリシアの哲人

これらはいづれもアリストテレスの難じゝ人々なればこゝにあげ

たり、前二者の事『デ・モナルキア』（三・四・二六以下）にも
見ゆ

一二七—一二九

【サベルリオ】サルベリウス。神の三一を否定せる三世紀の異端者（アフリカのペンタポリスに生る）

【アルリオ】アリウス。三—四世紀の人（リビアに生る）にてキリストの神性を否定せる異端者

【聖書を】聖書を誤解してその眞義（直き顔）を枉ぐることあたかも劔がその刃に映る人の顔を歪みて見えしむる如し

一三〇—一三二

以下人の魂の救ひや滅びに關しても輕々しく判ずまじきよしを述

ぶ、こは前論の一例に屬するのみならず、またソロモンの救ひの事に關すればなり

一三九—一四一

【ドンナ・ベルタも】ベルタ女史もマルチーノ先生も。ダンテ時代にてはこれらの名を賤女しづのめ、賤男しづのをの意に用ゐたりと見ゆ

【神の審判】原文、「神の思量はからひの中にかれらを見る」。即ちかれらを見てその救ひまたは滅に關する神の聖旨みむねを知る

一四二

盗みする者悔いて救ひを得、喜捨する者罪を犯して滅びにいたることあらむ

第十四曲

ベアトリーチェの請に應じ、一靈ダンテの爲に肉體復活後における聖徒の状態を説く、かくてダンテその導者と共に第五天（火星）にいたれば、こゝには教へに殉じ又は信仰の爲に戦へる者の靈あり、十字架の形を作りて神を讃美す

一一九

圓形の器うつはの中なる水の動搖外部（縁）より起れば波動次第に小さくなりて中心に向ひ、内部（中心）より起れば波動次第に大きくなりて縁に向ふ、かくの如く、ダンテとベアトリーチェとを中心

として圓く圍める聖徒の一群よりトマスの聲出で、この二者に達し、次にベアトリーチエの聲中心より出で、かの一群に達したり
一〇——一二

【この者】ダンテ

【思ひによりて】ダンテの疑ひはたゞ起らんとせしのみなれば、よく心の中を視る聖徒と雖も知る能はざりしなり

一六——一八

【再び見ゆるに】最後の審判を経て靈魂再び肉體と合する時。目は即ち肉眼

二二——二四

【急なる】トマスの言につゞきて直ちにいひあらはせる（スカル

タツツイニ)

【新たなる悦び】天、八・四六——八並びに註參照

二五—二七

人地に死するは天に生きん爲なり、地に死あるによりて歎き悲しむ者は天の福のいかに大いなるやを知らざる者なり

【永劫の雨】神恩の雨かぎりなく聖徒の上に降り注ぎてこれを福ならしむること

【かしこに】我の如く天にて

二八—三〇

三一の神を

【一と二と三】一は父、二は父と子、三は父と子と聖靈

【限られず】浄、一一・一一—三参照

三四—三六

【神々しき光】ソロモンを指していへるならむ（天、一〇・一〇九参照）、されどダンテが何故に特に彼を選べるやは明らかならず

【天使】ガブリエル（浄、一〇・三四以下参照）

三七—三九

【衣】光の

四〇—四二

【視力】神を視る力

【是また】神を視る力の多少は神の恩恵の多少に準じ、恩恵の多

少は各人の功德の多少に準ず。いかなる高德の人といへどもその功德以上に受くる神恩あるにあらざれば神を視るをえざるなり

四三―四五

【備はる】靈肉俱に（地、六・一〇六以下並びに註參照）

【いよく／＼めづべき】光も美もまさり、いよく／＼完きにいたるをいふ

四六―四八

【光】神恩の

五二―五七

炭焰を放てども焰の爲にかくれずしてその形を現はす如く、甦れる肉體はその光の爲にかくれず、これを貫いて見ゆるにいたらむ

五八一六〇

以上第一問に答へて、天上の聖徒は永久に光り輝くのみならず肉體の復活とともにいよくその美を増すをいひ、またこゝにては第二問に答へて、復活後の肉體はその諸機關極めて完全なればかゝる光を視るも目を害ふことなきをいへり

六四一六六

【父母その他】彼等は父母及び在世の日に睦び親める親戚知己等もまた靈肉の結合によりて天上の榮えを全うしかれらと相見るにいたらん事を願ふなり

六七一六九

【かしこにありし】即ち二群の聖徒のかなたにて

新しき一の光はさきの諸靈と同じく哲理神學に精しき靈の一群より出づる光にて、一様に燦かなるはその群の中なる諸聖徒の光いづれも同じ様に輝さまくなり

【輝く天涯】日出近き時の地平線

七〇―七二

日の暮初むる頃、多くの星空に現はるれど、名残の日光に妨げられて、あるかなきかに見ゆる如く

七三―七五

【かしこに】かの光の中に

七六―七八

【聖靈の】聖靈の閃き聖徒の光となりて現はる

七九—八一

【記憶の及ぶあたはざるまで】原文、「記憶に伴はざる見物みものの中に残さざるをえざるまで」

八二—八四

【これより】ベアトリーチエの姿より

【いよ／＼尊き救ひ】さらに大いなる福即ち第五天
八五—八七

【星】火星。常よりも赤きは世に見るよりも赤き意

火星の赤き美しき光に接して後はじめて高く昇れるを知る、昇ること極めて早ければなり

八八—九〇

【萬人の】萬人共通の言葉、即ち心の聲

【燔祭】olocausto 犠牲の全部を神に獻ぐること、こゝにては眞心こめし感謝

九一―九三

【供物の火未だ】感謝の未だ終らぬさき

九四―九六

【輝】信仰の戰士等。

【二の光線】十字形の（二〇〇——一〇二行参照）

【エリオス】[Elios] 神。但し出處明らかならず

九七―九九

【賢き者】銀河の何物なるやは古來賢哲の間の一疑問なりしをい

ふ

ダンテは『コンヴィヴィオ』（二、一五・四五―八六）において「かの銀河については哲人間に異説あり」と前提し、ピユタゴラスやアリストテレス等の諸説を挙げ、後者に關しては「その古譯に従へば銀河は肉眼にて判別し能はざるほど小さき無数の恒星に外ならず」云々といへり

一〇〇―一〇二

【星座となり】銀河の如く大小の光を列ね

【深處】表面に對して内部をいふ

【象限相結びて】圓を四等分する二直徑交叉して。

【貴き標識】十字架

一〇三——一〇五

【わが記憶】われ思ひ出づれども才足らざれば記し難し

一〇六——一〇八

キリストの教へに従ひよく信仰の爲に戦ふ者、天に登る時いたりて、かの十字架上に現はれ給ひしキリストの姿を見ば、筆の力の及ばざるを知り、我を責むることなからむ

一〇九——一一一

【柁】*como* 角^{つの}、十字架の横木の、左右に角の如く突出するをい

ふ

【きらめけり】まさる喜びの爲

一一二——一二七

【陰】種々の工夫を施せる物（たとへは窓硝子の蔽物^{おほひ}など）を用ゐて日光を防げる室の中に隙洩^{すき}る光差入るかまたは殊更に少しばかりの光を導き入るゝ場合などには、ゆきわたれる光の中に見え難き極微の物體この光の中にありて左右上下に浮遊するさま明らか^{すき}に目に映ず

一二四——一二六

【起ちて勝て】註釋者曰く。キリストの甦りて死に勝ち給へるをいふと、但し特に指せる聖歌ありや不明なり

一三〇——一三二

【目】ベアトリーチェの

【かろんじ】歌を聞くの喜びがベアトリーチェの目を見るの喜び

にもまさるごとく聞えしめ

一三三—一三五

【生くる印】諸天。諸物はこれが力によりてその秩序を保つが故に一切の美を捺すといふ。生くといへるはその運行及びその與ふる影響によりてなり

【高きに従つて】天は高きに従つて愈　その力を増し愈　その美を顯はす、故に火星天の顯はす美は其下なる諸天の顯はす美にまさる

一三六—一三九

【辯解かんため】輕率とみゆる言葉に對し

【自ら責むるその事】ベアトリーチェの目を未だ火星天にて見ざ

りしこと。これを見ずといふはかの言葉に對する辯解にして同時にまた新たなる自白なり

【我を責めず】下方の諸天にまさりて火星天の顯はす美がまづダ
ンテの心を奪ひ、爲に淑女の目を見ざらしめたりとて彼を責めず

【眞を】歌について、即ち一二七—九行にいへる事

【聖なる樂しみ】ベアトリーチェの目を見る樂しみ

【除きて】火星天の美をあぐるは即ちベアトリーチェの美のまさ
れるを間接に言ふにほかならじ

第十五曲

ダンテの祖カッチアグイーダ、火星天にて詩人を迎へ、これにフイレンツエの昔を語り、また己が事を告ぐ

一―六

【あらはす】或は、溶くる。即ち慾の溶けて悪意となる如く、正しき愛溶けて善意となる義

【まつたき】原文、「正しく吹出づる」

【善意】ダンテにその願ひを言現はさしめんと

【琴】第五天にて歌ふ聖徒の群

【弛べて締むる】天の右手即ち神が音を調へ給ふなり。絃は諸聖徒。しづまるは運動をやむるなり

一〇——二

【この愛】聖徒の現はすまつたき愛

【歎く】地獄にて

一三——一五

【火】晴れし夕空に見ゆる流星（浄、五・三七——九参照）

【目を】人の。人驚きてこれを見るをいふ

一九——二一

【星座】十字架の中に輝く聖徒の群

二二——二四

【珠】二〇行の「星」即ち馳下れる聖徒。紐は十字架

【雪花石の】輝く十字架を傳ひ下る聖徒の光の見ゆることさなが

ら雪花石（光りて透明なる）の後に動く火の見ゆる如しうしろ

二五―二七

【アンキーゼ】アンキセス。『アエネイス』（六・六八四以下）にアンキセスがわが子アエネアスの歩み來るを見直ちに手を伸べ涙を流してこれを歡び迎へしこといづ

【エリジオ】異教徒の説に、善人の魂のとゞまる處

【ムーザ】（詩神）『アエネイス』の作者ウエルギリウス（淨、七・一六―八に見ゆるソルデルロの言參照）

二八―三〇

カッチアグイーダの詞、この一聯すべてラテン語より成る

【二度】今と死後と

註釋者或はかの使徒パウロ（地、二・二八―三〇参照）が生前と死後と二たび天堂に入りたる例を引きて種々の議論をなせども、思ふにカツチアグイーダはたゞ大體の上よりかく曰ひしまでにて一二の例外に重きを置かざりしならむ、パウロの場合とダンテの場合とはもとより同一に非ざれども（カーシーニ註参照）、その差別によりてこの一聯を判ずること自然ならじ

三一―三三

【二重】一方にては一靈がダンテを己が血族と呼べるに驚き、他方にてはベアトリーチェの美の著しく増しむるに驚けるなり

三四―三六

【天堂の底】天上の幸福の極きはみ（天、一八・二一参照）

四〇—四二

【我より隠れ】わが悟る能はざることをいひ

四九—五一

われ未來の出來事を神の鏡に映しみて汝のこゝに來るを知り、長くその日を待侘びるたり

【大いなる書】神の全智の書。ふみこの書の文字變ることなし。白の黒に變るは附加せらるゝなり、黒の白にかはるは刪除せらるゝなり

五二—五四

【この光のなかにて】即ちわが衷うちにて

【淑女】ベアトリーチエ

五五―五七

【第一の思ひ】一切の思ひの本源なる神

【一なる】一なる數、發して他の凡ての數となり、他の凡ての數皆一に歸す、ゆゑに一を知るは他の凡ての數を知るなり。かくの如くわれら聖徒は絶対の一にして一切の思ひの源なる神を視るにより、よく人の思ふ所を知るをうるなり

【五と六】一以外の數をいふ、定數をもて不定數を表はせるなり
六一―六三

【大いなるも】天上の聖徒達はその享くる福に多少あれども、いづれも神（鏡）によりて、人の思ふ所を知る

六四―六六

わが聖なる愛は我をしてたえず神を視しめ、また常に善き願ひを起さしむ、汝問はざるも我既に汝の疑ひを知り、汝謂はざるも、愛我をして答へしむ、されど汝口づから汝の願ひを言現はさばわが愛是によりていよく満足するにいたらむ

七〇―七十二

【一の徴を與へ】オックスフォード版によれり、異本「ほゝゑみて肯ひ」

七三―七五

以下八四行まで、天上にては智よく情に伴ひ思ひを言現はすこと自由なれども、人間にありては然らず、ゆゑにカツチアグライダーに對し言葉の感謝をさゝぐる能はざるよしをいへり

【第一の平等者】神。その力、知慧、愛皆無限なり

【汝等に現はるゝや】汝等天堂にて神を見るに及び

七六一七八

【日輪】神。愛の熱にて暖め智の光にて照らしたまふ

七九一八一

【理由】人間にかゝる制限ある理由は地上の我等の知らざるところ

八五―八七

【寶】十字架

九一―九三

【家族の名】アリギエーリ

【第一の臺】淨火の第一圈、即ち傲慢の罪を淨むるところ

【百年餘】ダンテの曾祖父アリギエーロ（アルデイギエーロ）の死より一三〇〇年までの間

されどアリギエーロが一二〇一年の八月に猶生存しゐたるてと記録に存すといへば、ダンテ自ら彼の死せる年を知らざりしなるべし

【者】前記アリギエーロ

九四―九六

【業】祈り。汝彼の爲に祈りてはやく天に昇るの福をえしめよ

（淨、一一・二四―六參照）

九七―九九

以下昔のフィレンツェの平安にして幸福なりし有様を告ぐ

【昔の城壁】ローマ時代の城壁。これが改築は一一七二年頃の事なりといふ

【鐘】城壁に接して「バディーア」と稱するベネデクト派の僧院あり、その鐘時を報じたるなり、ダンテの時代にては城壁は改まられたれども僧院はなほ舊の處にありきといふ

第三時（午前六時より九時まで）の鐘はその終り即ち午前九時に鳴り、第九時（正午より午後三時まで）の鐘はその始め即ち正午に鳴りしなり、ゆゑに淨、二七・四にはnonaを正午の意に用ゐたり。但しこの二つの時に限れるにはあらず

【索】 *catenella* 金銀等の鎖にて頸飾りに用ゐるしもの

【冠】 *corona* 金銀眞珠の類を用ゐて作れる頭飾

【飾れる沓を穿く】 *contigiare* 或ひは、「はなやかに飾れる」

一〇三—一〇五

【その婚期その聘禮】 ダンテ時代にては女甚だ若くして嫁しかつ莫大なる持參金を要せりといふ

一〇六—一〇八

【人の住まざる家】 家族小なるに關はらず、虚榮の爲、みつばよつばに殿づくりすること

【サルダナパロ】 サルダナパロス。前七世紀のアッシリア王、奢侈柔弱を以て名高し。彼の來らざるはかゝる惡風未だフィレンツ

エに入らざるなり。「室の内にて爲らるゝこと」とは室内に金銀珠玉を列ね綺羅を飾ること

一〇九——一一

當時フィレンツエはその華美なるにおいてローマに若かざりしが後これを凌ぐにいたれり、されど今華美においてローマにまさる如く、この後廢頽の度においてもまたこれにまさるべし

【ウツチエルラトイオ】フィレンツエ附近の山。ボローニアより來る旅客こゝに到りてまづフィレンツエを望む

【モンテマーロ】今、モンテ・マリーオ。ローマ附近の山。ヴェテルボより來る旅客こゝに到りてまづローマを望む

一一二——一一四

【ベルリンチオーン・ベルテイ】フィレンツエの貴族ラヴィニア
 ーニ家の人にてかの「善きグアルドラード」(地、一六・三七)
 の父なり(十二世紀)

【骨】縮金用の骨

一一五——一七

【ネルリ、ヴェツキオ】俱にフィレンツエの貴族

【皮のみの衣】*pelle scoperta* (蔽はぬ皮)、表や裏を附けずして
 皮そのまゝを衣とせるもの

【麻】*pennecchio* 麻、羊毛等すべて竿にかけて紡ぐもの

一一八——二〇

【その墓に】黨派の争ひ等により追放せられて異郷の土に葬らるゝ

の恐なきをいふ

【フランスの】通商貿易のため夫異國に旅して妻獨り空閨を守る
こと

特にフランスを擧げたるは、十三・四世紀の頃フィレンツエの人々おもにかの國に行きて交易したればなり（カーシーニ）

一二一—一二三

【言】小兒の言語。親は子供の片かたこと言を聞きてまづ喜び、後これを眞似て子供をあやし眠らしむ

乳母なく侍女なく、名門の主婦自ら搖籃の傍にありてその幼兒を愛撫する質素の美風を擧げしなり

一二四—一二九

【トロイア人、ファイエソレ、ローマ】いづれもファイレンツエ市の起原に密接の關係あれば、特によるこびてこれらの物語を聞きたるならむ。ファイエソレについては地、一五・六一——三註参照

【チアングェラ】ダンテと時代を同うせるファイレンツエの女。悪女の典型としてこゝに

【ラーポ・サルテレルロ】不徳なるファイレンツエの狀師、ダンテと同時代の人にてかつ彼と同時にファイレンツエより追放されし者
 【チンチンナート】クインティウス（天、六・四六——八註参照）、質樸誠實の典型

【コルニーリア】グラツクス兄弟の母（地、四・一二七——三二

註参照）

【いと異しと】その頃悪人の極めて少かりしこと今善人の極めてまれ稀なるに似たり

一三三三—一三五

【マリア】わが母産の苦しみに臨み聖母の名を唱へてその助けを求め（浄、二〇・一九—二一参照）、我を生みたり

【昔の授洗所】聖ジョヴァンニの洗禮所（地、一九・一六—二一参照）。その起原は七八世紀の昔に遡るといふ

【カッチアグイーダとなり】洗禮を受けてキリスト教徒となると同時にカッチアグイーダと名づけられしなり

『神曲』以外カッチアグイーダの事蹟を傳ふるものなし

一三六—一三八

【モロントとエリゼオ】傳不詳

【ポーの溪】フェルラーラ（ポー河附近の町）のアルデイギエーリ家のことなりといふ、されど異説ありて明らかならず

一三九—一四一

【クルラード】ホーエンシュタウフェン家のコンラッド三世（一一五二年死）。一一四七年フランス王ルイ七世とともに第二十字軍を率ゐて聖地に入りしが軍利あらずして國に歸れり

一四二—一四四

【牧者達の過のため】法王等意を用ゐざるため（天、九・一二四—六参照）

【汝等の領地】當然キリスト教徒に屬すべき聖地

【人々】サラセン人

【律法】宗教

第十六曲

カツチアグイーダ、ダンテの請ひに應じてさらにフィレンツエの昔譚をなす

一―九

ダンテはカツチアグイーダの物語を聞きその祖先にかくの如き人あるを知りて自ら誇りを感じたれば、即ちこゝにこれを自白しか

つ氏素姓その物の價值甚だ少きことをいへり

【情の衰ふ】世人の情は健全ならず弱くして迷ひ易し、ゆゑに眞に愛すべきものを愛せず、その誇りを氏素姓の如きに求む。

【逸れざる】虚偽の幸に向はず、常に眞の幸を求むる

迷ひなき天たありてさへ、われこの小かなる尊さきに誇りを感じたれば、迷ひ多き世の人のこれに誇るも異しむ足らず

【衣】ちすぢ血統の尊さは美しき衣の如し、されど時なるもの銚をもてたえずこの衣を斷ちこれを短うするが故に日に日に補ふにあらざれば身の飾りとなし難し（祖先の誇りも子孫の徳に補はれざれば永く保たじ）

【ヴォイ】複數代名詞の *voi* (汝等) を單數代名詞 *io* (汝) の代りに用ゐて敬意をあらはす。ローマ人がかく一人に對して複數代名詞を用ゐしことはまことは三世紀に始まれるなれど、かれらがカエサルに對してかゝる敬語を用ゐしをその濫觴とすとの說中古一般に信ぜられきといふ

前曲にてはダンテ、カツチアグイーダにむかひて *io* の變化なる *io* (八五行) を用ゐたり。また『神曲』中ダンテがこの敬語 (即ちヴォイ) を用ゐし例はブルネット・ラティーニ及びベアトリーチエに對せる場合に見ゆるのみ、但しこの語の變化を用ゐし例はその他にもあり

【その族の中にて】註釋者曰。他のイタリアの市民間にはこの複

數の敬語今猶多く用ゐられるれどもローマの市民最も多くEを用ふと

一三一—一五

【ジネーヴラ】ギニヴァー（地、五・一二七以下参照）

【女】王妃ギニヴァーの侍女。ランスロットと王妃の戀を知り、咳しはぶきしてこの咎とがを知れるを示せり。猶ダンテがその語ことばを改むるほど祖先に誇りを感じるを見、世人共通の弱點に對してベアトリーチエの微笑せるに似たり

但し「最初の咎」の意明らかならず、ダンテが讀みたりと信ぜらるゝ、『ランスロット物語』Lancelot du Lacによれば侍女の咳せしは王妃とランスロットとの睦言に對してなり（トインビー博士の

『ダンテ考』 Dante Studies and Researches にフランスの原文とそ

の英譯と出づ)、されどダンテの記憶に誤りありきとも將はたまた又技

巧の上より特に多少の變改を施せりとも解せられざるにあらざれ

は、從來の説に従つてかのふたりの間の接吻と見なすを妨げじ、

パッセリーニ伯(一九一八年版註)は後記を採れり

一六一一八

【汝】原文には voi の語三たび出づ

一九一二一

【多くの流れにより】汝の言を聞き、さま／＼の原因により

【壊れず】人間の受くるをうる悦びには限りありて、その度を超ゆればかへつて心亂るゝ習なるに、今かゝる嬉しさに堪へて敢て

壊れざるは即ち心其物の強き證左なれば心自らこれをよろこぶ

二二―二四

【汝童なりし時、年は】汝は何年に生れたりや

二五―二七

【聖ジョヴァンニの羊の圈】フィレンツエ、バプテスマのヨハネの守護の下にありたればかく（地、一三―一四二―四並びに註参照）。圈の大きさを問ふはその人口を聞くなり

二八―三〇

【輝く】問に答ふる喜びのため

三一―三三

【近代の】カッチアグイーダはその時代のフィレンツエの言葉を

用ゐしと見ゆ

三四―三六

以下三九行まで第二問の答

【アーヴェのいはれし日】天使が聖子の降誕を聖母に告知し、日、換言すればキリストの降誕、よりわが生れし日までに。アヴェ

(幸あれ)は天使ガブリエルの會釋の詞(淨、一〇・三四以下參照)

三七―三九

千九十年餘の歲月を経たり

【この火】火星。プトレマイオスの説に従へば火星は六百八十七日弱にてその一周を終ふ、故にその五百八十周を年數に換算すれ

ば千九十一年餘となり、カッチアグイーダの生れし年千九十一年を得（ムーアの、『ダンテ研究』第三卷五九—六〇頁参照）

【己が獅子の】獅子宮に入ること。特にこの天宮を指せるは火星即ち軍神マルテに猛獸を配せんためなり、兩者の性向相通ずるがゆゑに己がといへり

四〇—四二

以下四五行まで第一問の答

【年毎の競技】バプテスマのヨハネの祭日（六月二十四日）に行はれし競馬

【區劃】 *sesto* 昔フィレンツェ市を六區に分てるが故に各區を *sesti* o (*sestiere*) とす。最後の區劃は競馬の決勝點に最も近き處に

てこの區をポルタ・サン・ピエーロといへり

註釋者曰く。競技者は西方より町を横切りてその東端ポルタ・サン・ピエーロにいたる、さればこの區の中競技者の最初に見る處は即ちその西境なり、こゝはエリゼイ家の邸宅ありしところなればアリギエーリ家とエリゼイ家（天、一五・一三六）と親戚なりしこと知らると

四三―四五

【これを】エリゼイ家の邸宅ありしあたりはフィレンツェの舊家の多かりし處なれば、かしこに住めることを聞きて

【言はざるを】言ふは誇る所良なれば

四六―四八

第三問の答。常時フィレンツェの人口は一三〇〇年における同市の人口の五分一なりしを告ぐ

【マルテと洗禮者との間】マルテ（ギリシアにてはアレス）の像あるポンテ・ヴェツキオ（地、一三・一四五―七並びに註参照）と聖ヨハネ（ジヨヴァンニ）の洗禮所との間。當時のフィレンツェ市をその南北の城壁によりて表はせり

【今住む者】現住者にして武器を執るを得る者

註釋者曰く。一三〇〇年にはフィレンツェの人口約七萬（この中武器を執るを得る者三萬）なりき、故にカッチアグイーダの頃は約一萬四千（兵たりうべき者六千）なりきと

四九―五一

以下未まで第四問の答

【カムピ、チエルタルド、及びフェギーネ】フィレンツエの附近にありてこの市に屬し、小さき町の名。カムピはビセンチオの溪に、チエルタルドはエルザの溪に、フェギーネはアルノの溪にあり

【純なり】これらの町より人々出で、市に移住するにいたれるまでに市民の血全く純なりき

五二―五七

これらの民各 其處に止まり、市その領域を漫りに大ならしめざりせば、諸民の混亂より生ずる禍は避けられしならむ

【ガールツツオとトレスピアノ】前者はフィレンツエの南二哩

にある村、後者は同市の北三マイルにある村。昔の市領の境

【汝等の境】ファイレンツエ領の境

【アグリオン】ペーザの溪の城

註釋者曰く。アグリオンの賤男とはメツセル・バルド・ダグリオネ即ちダンテと同時代の人にてファイレンツエ市に權勢を振ひ、かつ市の記録に關し淨、一二・一〇三―五（註參照）に見ゆる不正行爲ありし者を指すと

【シーニア】ファイレンツエの西七マイルにある町

註釋者曰く。シーエアの賤男とはメツセル・ファーチオ・デーイ・モルバルチニとて同じく市に權勢をふるひし汚吏の事なりと

五八一六〇

【最も劣れる人々】法王僧侶等寺院に屬する人々

【チエーザレと繼ましからず】皇帝と争はず

寺院が皇帝を敵視せるより政道その宜しきを失ひて争亂止まず、市外の民難を避けて市内に入來り、市に秩序なく安寧なきに至れるをいふ、以下その例を擧ぐ

六一—六三

【ひとりの人】不明

【物乞へる】 *andava*……… *a la cerca* おもに僧侶の托鉢するをいふ
 【シミフオンテ】エルザの溪にありし城。この城一二〇二年フィレンツェ人に毀たる

六四—六六

【モンテムルロ】ピストイアとプラートの間の城。この城もとグイード伯爵家の所有なりしがピストイア人の難に堪へずしてこれをフィレンツェ人に賣りたり（一二四五年）

【チエルキ】この一家はもとアーコネ（シエーヴェの溪にあり）の寺領なるモンテ・デイ・クローチエ城に住みしがこの城フィレンツェ人に奪はれし時（十二世紀の年頃）市に移住せり

【ボンデルモンテイ】ブオンデルモンテイ。グレーヴェの溪なるモンテブオーニの城主。一一三五年フィレンツェ人この域を奪ふ
七〇―七二

【盲の牡牛】體大にして智伴はざるを市の膨脹して而して治まらざるに譬ふ

【五】數多くして用ゐ難きを人口多くしてかへつて活動を缺くにたとふ。五はさきに五分一といへるに應ず

七三―七五

【ルーニ】昔の町の名【地、二〇・四六―八註参照】

【ウルビサーリア】マルカ・ダンコナの昔の町の名

【キウーシ】トスカーナ州の南端にてヴァルデイキアーナ（地、

二九・四六―五一註参照）にある町の名

【シニガーリア】マルカ・ダンコナの町の名

八二―八四

【渚をば】潮の満干みちひによりて

八八―九〇

【ウーギ、カテルリニ】その他こゝに出づるものは皆カッチアグ
 イーダの時代におけるフィレンツェ屈指の舊家なりしかど既にそ
 の頃より衰運に向ひゐたるなり

九一―九三

【ラ・サンネルラ及びラルカ】その他こゝに出づるものはみな名
 立たる舊家にてカッチアグイーダの時代においてはなほ盛なりし
 かどその後衰ふるにいたりたり

九四―九六

【門】ボルタ・サン・ピエーロ（聖ピエートロの門）。一三〇〇
 年の頃チエルキ家（六四―六行）この門のあたりに住みゐたり、
 「チエルキ」は白黨の首領となりて「ドナーテイ」と争ひ、フィ

レンツエ全市を争亂の渦中に投じ、ものなれば新なる罪を積むといへり

船はフィレンツエなり、チエルキ一家を容れてこれに權勢を得しめしため、フィレンツエの受くる禍ひ甚大なるをいふ

九七—九九

【ラヴィニア—ニ】フィレンツエの名門。ボルタ・サン・ピエーロの邊ほとりにありしその邸宅グイード家に移り、後チエルキ家の所有となれり

【伯爵グイード】ラヴィニア—ニの家長なるベルリンチオーネ・ベルテイ（天、一五・一一—四参照）の女グアルドラータと老グイードとの結婚（地、一六・三七—九註参照）によりて多くの

グイード「ラデイニアーニ」より出づ、故に伯爵グイードとは老グイードの子孫なるグイデーの一門を指せるなるべし、地、一六・三八にいつるグイード・グエルラはその一人なり

【名を襲げる者】グアルドラダの姉妹二人の中一はドナーテイ家に嫁し、一はアーデイマリ家に嫁したれば、その子孫にしてベルリンチオーネの名を襲げる者多かりき

一〇〇——一〇二

【ラ・プレツサ】フィレンツエの名門。「治むる道を知り」たるは大官となりゐたるなり

【ガリガイーオ】「ガリガイー」家は同じくフィレンツエの名門にてギベルリニ黨に屬し勢甚だ盛なりしが後零落して見る影なき

に至れりといふ

【黄金装の】劔の柄に黄金を用ゐることは騎士にのみ許されしなり、故にかゝる劔を持てりとは騎士となりゐたる意

一〇三—一〇五

【ヴァイオの柱】フィレンツエの名門ピーリ家の事。vaioは栗鼠族の動物の名、紋章の語にてはその皮模様を紋所に現はすをいふ、ピーリ家の家紋はヴァイオの一縦線（即ち柱）を赤地にあらはし、ものなれはかく言へり

【サツケツテイ、ジュオキ】等フィレンツエの舊家名族を擧ぐ

【赤らむ家族】「キアラモンテージ」家。その一人鹽を市民に賣るに當りて不正の利益を貪れることあり（淨、一二・一〇三—五

並びに註参照)

一〇六一—一〇八

【木の根】「ドナーテイ」家。この一門分れてドナーテイ、カルフツチ、ウツチエルリーニ等の諸家となれり、特にカルフツチを擧げしはその早く頽廢したるによりてなるべし

【シツイイとアルリグツチ】いづれもその頃高官を得て時めきゐたるフィレンツェの家族

【貴き座】*curule* 美しく裝飾せる椅子にて昔ローマの高官の座に用ゐしもの

一〇九—一一一

【家族】フィレンツェ屈指の名族なりしウベルテイ家。この一家

の浮沈については、その出にて、「地獄を嘲けるに似た」るファ
リナータの條參照（地、一〇・三一以下並びに註）

【黄金の丸】フィレンツェの名族ラムベルティ家。その紋章青地
に黄金の丸を現はせるによりてかくいへり、かのブオンデルモン
テ殺害の事に與りしモスカ（地、二八・一〇六參照）は即ちこの
家の出なり

一一二——一四

【人々】ヴィストミニ、トシングの兩家の人々。フィレンツェ僧
正領地の監督者たり、僧正の倚子あ空くことあればその後繼者定ま
るまで寺院の収入を司り、以て私腹を肥しきといふ

【相集ひて】 *stando a consistoro* コンシストロとは法王とカルデイ

ナレ等高位の僧との會議もしくは會議の場所をいふ。こゝにては彼等の如く相會して、寺領の收入を處理する意

【父】祖先

一一五——一七

【族】アーディマリ家。その分家に「アルゼンテイ」（地、八・

三一——三註參照）あり

一一八——二〇

【ウベルティーン・ドナート】ベルリンチオーネ・ベルティの婿のウベルティーンは、舅ベルリンチオーネがその第三女をアーディマリ家の者に與へて（九七——九行註參照）彼（ウベルティーン）をば彼等（アーディマリ家）の縁者たらしめしを喜ばざりき

一一一——一二三

【カーボンサツコ】カーボンサツキ家はフィエソレよりフィレンツェ舊市場 (Mercato Vecchio) のあたりに移りしものにて十二世紀の頃市の高官この家族より出でたり

【ジウダとインファンガート】ジウデイ、インファンガートの兩家。いづれも十二世紀の頃に榮えしフィレンツェの家族

一二四——二六

フィレンツェの昔の城壁の門の一なるペルツツア門 (Porta Peruzza) が「ラ・ペーラ」即ちペルツツイ (Peruzzi) 一家の名に因みて名づけられしものなりとは (今は亡びて知る人もなき「ペーラ」の一家が城壁の門に名を與ふるほど昔盛なりしとは) 誰か信ぜむ

一二七—一二九

【領主】 皇帝オットー三世の代理者としてフィレンツェに任せる
フーゴ侯爵

フーゴは一〇〇六年聖（使徒）トマスの祭日（十二月二十一日）
に死せり、人々これをバデイーア僧院に葬り、かつ年々この日に
おいて記念の祭典を行へり

【紋所】 紅白七條の縦線。但しこの紋を用ゐし騎士の家族により
て多少の變更あり、故に「分け用ゐる」といへり

一三〇—一三二

【騎士の】 フーゴはプルツイ、デルラ・ベルラ、ジャンドナーテ
イ等フィレンツェの諸家族に騎士の位と貴族の殊遇とを與へたり

【巻くもの】ジャーン・デルラ・ベルラ。十三世紀の末、庶民の味方となりて權門勢家に反抗し、遂に郷國を棄て、フランスに走れり。デルラ・ベルラ家の紋はフーゴの紋の周圍を細き金線にて巻けるもの

一三三—一三五

【グアルテロツテイ、イムポルトウーニ】ともに一時盛なりしフイレンツエの家族

【隣人等】モンテブオーニ城よりフイレンツエに移住せるブオンデルモンテイ家（六四—六行註參照）

【ボルゴ】ボルゴ・サンチ・アポストリ。グアルテロツチとイムポルトウーニの住みしところ、後ブオンデルモンテイこの兩家の隣

に住めり

一三六―一三八

【家】アーミデイ家。アーミデイ、ブオンデルモンテイ兩家の争ひについては地、二八・一〇六―八註参照。争ひの始めは破約者に對するアーミデイ家の怒りなれば義憤といへり、この怒りのためブオンデルモンテ殺害せられ、兩家の争ひはひいて全市民の争ひとなり、多くの人々血を流し、市その平安を失へり

一三九―一四一

【人の勸】ドナーテイ家の一婦人己が娘をブオンデルモンテに嫁がせんとて破約をこれに勧めしをいふ

一四二―一四四

【神汝を】汝もしエーマ川に溺死してフィレンツェに入來らざりせば

【エーマ】ヴァル・デイ・グレーヴェなる小川の名。モンテブオーニよりフィレンツェに來るものこの川を過ぐ但しモンテブオーニの没落は一三五年にて、ブオンデルモンテの殺害は一二一五年の事なれば、一四〇行のブオンデルモンテは破約者を指せるに非ずしてその家族を指せるもの、また「汝はじめて」といへるはこの家族（即ち被害者の父祖）がはじめてフィレンツェに移り來れるをいへるならむ

一四五—一四七

【缺石】破損したるマルチの像にてポンテ・ヴェツキオの一端に

ありしもの（地、一三・一四五―七註参照）。ブオンデルモンテの殺されし處は即ちこの像の下なりき、故に被害者を指してマルテの牲いけにへといへり

一五一―一五三

【百合】フイレンツエの旗（一五四行註参照）

【倒に】中古敵の旗を奪ふ時は竿を倒さにして戰場を引　し侮蔑の意を示す例ありきといふ。フイレンツエ軍が常に戦ひに勝ち、旗を敵手に委ねしことなき意

一五四

【紅に】市の昔の紋章は赤地に白の百合なりしが一二五一年グエルフイこれを變へて白地に赤の百合となせり

第十七曲

カッチアグイーダさらにダンテの問いに答へてその行末の事を豫言し、これに流刑の憂さつらさを告げ、かつその冥界の見聞を忌憚なく世に傳へんことを勧む

一—三

【者】パエトン（フェトン）。父アポロン（日）に請ひその許をえて火車を轉らせるため惨死す（地、一七・一〇六—一四註参照）、これ世の父たる者をして子の請ふ所に戒心せしむる一教訓な

り

【クリメーネ】クリユメネー。パエトンの母。エパポス（ゼウスとイノの間の子）なる者。パエトンを罵り汝は母のたゞ言を信じて父ならぬ父に誇るといふ、パエトン即ち母の許に行き己が父の果して日の神なるや否やを質せり（オウイデイウスの『メタモルフオセス』一・七四八以下参照）

四一六

【彼の如く】パエトンがエパポスの言を聞きて眞を知らんと欲するの情切なりし如く、ダンテは己が未來に關しフアリナータ（地、一〇・七九以下）、ブルネット（地、一・六一以下）、クルラード（淨、八・一三三以下）、オデリジ（淨、一一・一三九以下）

等の豫言を聞きて眞を知るを求むるの情切なりしなり

【燈】カッチアグイーダ。ダンテを迎へん爲火星の十字架の右の桁より柱脚に馳せ下れること前に出づ（天、一五・一九―二二）

一〇―一二

【増さん爲ならず】神によりて汝の願ひを知るがゆゑに

【渴】願ひ

【飲ます】mesca（注ぐ。杯に酒を注ぐ類、ヴァーノン『天堂篇解説』第二卷三八頁参照）、願ひを叶はす

一三―一五

【板】piota 芝士の義より轉じて根即ち祖先

【知るごとく】知る如く精確に

一六―一八

【點】神。神は現在の如く過去と未來とを現給ふ

一九―二一

【山】淨火の

【死の世界】地獄

二八―三〇

【光】カッチアグイーダ

三一―三三

【神の羔】キリスト（ヨハネ、一・二九）

【昔】キリスト以前即ち異教時代に

【臚】異教の神々の託宣の如く曖昧ならず

三四—三六

【父の愛】慈愛深きわが祖先

【己が微笑の】光に包まれて見えざれどもその先によりて己が喜びを表はしつゝ

三七—三九

神は汝等の世に起る凡ての事を知り給ふ

【物質の書より外に】事の偶然に生ずるは（即ち人間自由の行動に歸着する種々の出來事あるは）たゞ物質界においてのみ、靈界においては事皆必然の理より生ず（天、三二・五二—四参照）

四〇—四二

【船流れを】船流れを下るが故に人見てこれが下るを知る、され

ど人目に映ずるが故に船動くに非ず、かくの如く神は全智によりて世の出来事を豫知し給へど、豫知し給ふこと原因となりてその事必ず起るにあらず

四六一—四六六

【イツポリート】ヒツポリュトス。テセウスの子。その繼母パエドラの讒にあひ、父の怒りに觸れてアテナイを逐はる（『メタモルフオセス』一五・四九三以下参照）

四九一—五一

【處】ローマ。僧官、及びその他靈界に屬する物の日々賣買せらるゝところ

【思ひめぐらす者】ダンテを虐げんと思ひ　　らす者、即ち法王ボ

ニファキウス八世とその一味の者

ダンテの追放されしは一三〇二年なれど、一三〇〇年即ちダンテがフィレンツェのプリオレたりし頃、彼は法王の處置畫策に反抗し既にその怨みを買ひゐたるなり

五二―五四

罪の汚名は敗者に被おはされむ、是世俗の常なればなり、されど神罰眞に罪ある者に下るに及びて敗者も汚名を雪ぐを得べし

【刑罰】 白黨追放（一三〇二年）の後フィレンツェに起れる種々の災害、法王及びその一味の者の不運等を總括していへり

【眞の爲の】 正よろしきしき刑罰は眞にもとづき、眞に罪ある者に下る、故に「眞」はその宜よろしきに従つて刑罰を課する者といふをう。罪がか

へつて時めく者にあることは刑罰これに臨むによりて明らかなるべし

五五―五七

【愛する物】郷土、家族、親戚、知己等

五八―六〇

郷土を逐はれて他家に寄寓し他人の憐によりてその食卓に就くのつらさを汝経験して知るにいたらむ

六一―六三

最も大いなる苦痛を汝に感ぜしむる者は汝と俱に追放の憂目を見る白黨の人々なるべし

六四―六六

【汝に背かむ】追放されし白黨はフィレンツエの黒黨に對して屢再擧を謀れり、而して一三〇四年ラストラの役ありし以前ダントは白黨の首領等と交りを絶てりと見ゆ、おもふに彼等ダンテの好意的畫策を惡意に解して彼を怨めるによるならむ（カーシーニ註參照）、されどその時その事情いづれも定かに知り難し

【顔】原語、「顛顛」。一三〇四年ラストラ（フィレンツエの北ニマイルの村）の戦ひ敗れて血に塗れしをいへるならむ、或ひは曰く、事成らずして恥づる意と

七〇―七二

【第一の】一人一黨となりて後最初の

【ロムバルディア人】バルトロムメオ・デルラ・スカーラ（一三

○四年三月死)。アルベルト・デルラ・スカーラ(淨、一八・一二一—三註参照)の長子にて父の死後ヴェロナ(ロムバルディア)に君たり、その家紋は金の梯子の上に黒鷲のとまれるもの
七三—七五

【いと遅きもの】爲すこと即ち與ふること。他の人々は乞はれて後に與ふれども、彼は然らず、汝の乞はざるさきに自ら進んで衣食を給せむ
七六—七八

【強き星】火星。この星の影響の下に生るゝ者武勇を好む

【者】カン・グランデ・デルラ・スカーラ。アルベルトの第三子。
一二九一年三月に生れ、一三一一年兄アルポイノとともにヴェロ

ナを治めかつ相ともに皇帝ハインリヒ七世の代理者となり、アルポイノの死（翌十二年）後ひとりヴェロナに君たり、一三二九年七月トレヴィーゾに死す。ダンテ及びその當時の人々、皇帝とギベルリニとの權勢の復興者としていたくこれに望みを囑せり

八二—八四

【グアスコニア人】法王クレメンヌ五世（地、一九・八二—四註参照）。ハインリヒ七世を、友としてイタリアに迎へ、その來るに及びて敵となれり。「欺かざるさき」とは一三一二（即ちハインリヒがローマに帝冠を戴ける年）以前といふ如し

【銀をも疲れをも】富を求めず戦ひの疲れを厭はざること

九一—九三

【信ずまじき】己が目前に起るを見ん人もなほ信ずまじき異常のことども

九四―九六

【聞きたる事】地獄淨火にて聞きたる豫言（四―六行註参照）

【年】原、「回轉」（太陽の）

九七―九九

【隣人】同郷人。その勝誇るを妬むなり

【汝の生命は】かれらは罪の報を受けて亡び、汝は永く美名に生くべし

一〇〇―一〇二

【織物】物語。これがたていと經を張るは問ふなり、よこいと緯を入るゝは答ふる

なり

一〇六一—一〇八

【思慮なき人に】備へず慮らずして命運の打撃を受けなばその、
痛いよく甚だしからむ

一〇九—一一一

【最愛の地】ファイレンツエ

【その他の地】流寓の地（複数）

【わが歌の爲に】我もし忌憚なく歌はゞ、その詩、人の怨みを招
きて寄寓すべき處さへなきにいたるの恐れあり

一一二—一一四

【淑女の目】天、一・六四以下参照

一一五——一七

【光より光】星より星

【辛かるべし】agrumne は昔葱、にんにく大蒜等の如く舌を刺すに似たる味あるものをいへり

一一八——一二〇

されどまたもし實を語らずば、名を後の世に残すをえざらむ

一二一——一二三

【寶】カッチアグイーダ

一二四——一二六

【己が罪または】罪己にあるかさらずば己が親戚知友等にありて心その爲にやましき者は

一二七—一二九

【瘡ある處は】汝の言を聞きて苦痛を感じるだけの弱みある人は苦痛を感じしむるがよし

一三三—一三五

山高ければこれを撃つ風いと強し、かくの如く、汝の歌の中なる人はいづれもその名世に聞えまたは現に時めき榮ゆる者のみなればそれを叱咤する汝の聲は強かるべし、而してかゝる者をもたゞ眞理に従つて恐れず憚らず攻める事は即ち攻める人の價值をば遺憾なく表はす所以なり

一三九—一四二

【その根知られず】例の出處なる（即ち例として擧げらるゝ）人

物が世に知られず

【明らかならざれば】適切なる例を缺く爲、具體的に證明し難きなり

【安まらず】満足せず

第十八曲

カッチアグイーダの告ぐる所によりてダンテは火星の十字架の中なる多くの靈の名を知りて後、ベアトリーチエと共に第六天（木星）にいたり、正義を地上に行へる者の眞の相連りて種々なる形

をその光に現はすを見る

一—三

【鏡】カッチアグイーダ。聖徒は神の光を受けてこれをてりかへ反映らしむる鏡なれはかく

【思ひ】verbo (語)ことば、こゝにては無聲の語即ち思ひの義

カッチアグイーダ語り終りて黙しつゝ天上の祝福を思ふ樂しき思ひに歸ればダンテはまた己が思ひに耽りつゝその美名に關する豫言の喜びをもて追放その他行末の非運に關する豫言の悲しみを和げゐたるなり

四—六

【一切の虐を】正義に従つて賞罰を行ひ給ふ神（ロマ、一二—一

九參照)

七―九

【慰藉】ベアトリーチエ

一〇―一二

【導く者なくば】神恩特に下るにあらざれば

一三―一五

【わが情は】天上の愛ベアトリーチエの目に輝きてダンテの心の中なる一切の雜念を逐ひ拂へるなり

一六―一八

【永遠の喜び】聖徒の永遠の喜びなる神の光

【第二の姿】反映せる光。ダンテは神の光を直接に見しに爲らず、

ベアトリーチエの目によりて見しなれば

一九—二一

【身を轉して】カツチアグイーダを見てその言を聽け

二八—三〇

【木】天堂。世にある木は根によりて生き、期とぎいたりて初めて實を結び年毎にその葉を失へどもこの木は然らず、頂によりて生き（至高の天にいます神よりその生を安くるが故に）、たえず實を結び（新なる聖徒をえ）、永久に葉を失はじ（その美その福祉永遠に亘る）

【第五座】第五天

三一—三三

【ムーザ】詩人。いかなる大詩人にも良き材料を供給するほど

三四―三六

【今】異本、今の字なし

【その疾き火】雲の火即ち電光

三七―三九

【ヨスエ】ヨシユア。モーゼに次いでイスラエル民族を導ける舊約の偉人、その事蹟ヨシエア記に委し

【言と爲と】名のいはるゝと動く

四〇―四二

【マツカベオ】ユダス・マツカベウス。ヘブライ人の自由の爲にシリアの暴君と争へるもの（『マカベ』前第三章以下）

【獨樂】 *paleo* 棒の先に糸をつけ、それにて打ちてまはず獨樂。

糸の爲に獨樂の　　る如く、喜びの爲にかの光めぐるなり

四三―四五

【カルロ・マーニョとオルランド】キリスト教の信仰の爲、異教徒と戦へる勇者として（地、三一・一六―八註参照）

【目】鷹匠の

四六―四八

【グリエルモ、レノアルド】フランス中古の物語に名高きオレ
ンジ伯ウイリアム及びこれに従ひてサラセン人と戦へりといふリ
ノアルド（ルヌアール）

【ゴッティフレーディ】ゴットフレード・ド・ブイヨン（一一〇

○年死)。第一十字軍の指揮者として名高し

【ルベルト・グイスカールド】（一〇八五年死）、プーリア及び
カーラブリアの君となりてサラセン人を逐へる者（地、二八・一
三―八註参照）

四九―五一

【我に示せり】カツチアグイーダはこの時他の諸靈に加はりて歌
ひいでたればなり

五二―五四

【言または】ベアトリーチエがその言葉または身振によりて、わ
が爲すべき事を我に示すならむと思ひて

五五―五七

【最終の時】七行以下にいへる

六一—六三

ベアトリーチエの美を増すを見て我等がさらに高き天に達せることを知り得たり

昇れるを昇ることによりて知るならずその結果として淑女の美の増すによりて知る、なほ徳の進むを進むことによりて知るならずその結果として喜びの増すによりて知るごとし

【天とともに】諸天は皆たえず 轉す、故にダンテはその一にとゞまる間、これとともにめぐるなり

【弧】天は高きに従つて大なり、故に木星天は火星天よりもその急がく弧大なり

六四―六六

羞恥の爲赤くなりたる女の顔が、その念消ゆるとともに元の白色に返るごとく

六七―六九

【わが見るもの】火星の赤色より木星の白色に移りたれば

【温和なる】火星の熱さと土星の寒さとを、この二星の間において和らぐるが故にかく言へり（『コンヴィヴィオ』二・一四・一九四以下参照）

七〇―七二

【ジョーヴェの燈火】木星

【愛の煌】愛の光を放つ諸聖徒

【われらの言語】我等の用ゐる文字

七三―七五

【己が食物を】岸より立てる群鳥が、食物あるを見て、互に祝しあふごとく歌ひつゝ、相連りて

七六―七八

【忽ちD】九一―三行参照

八二―八四

【ペギーゼア】ムーサ。但し一をもて凡ての詩神を代表せしめしものなるか或ひは特にその一（多くの註釋者はカルリオペを指せりとす）を指していへるか明ならず

ペガソスといへる馬ムーサイに屬し、かつヒツポクレネの泉（ム

ーサの山エリコナにあり）はこの馬の蹄の跡なりとの傳説に因みてムーサをペガーゼーと呼ぶにいたれり

【その生命を長うす】これに不朽の名をえしむ

【才が】才は汝の助けにより諸國諸邑の事を歌ひてかれらの名を永く後の世に傳ふ

八五―八七

【彼等の象】諸の聖徒の相連りて造れる象かたち

【短き】句數に限りあれば

八八―九〇

【一部一部を】象の變化するにつれ、文字重なりて音となり音加はりて語ことばとなるを

九一—九三

【Diligite iustitiam, etc.】地を審判さばく者等よ、正義を愛せよ（『經

外典』智慧一・一）

九四—九六

【M】この文字に特殊の寓意あるか、或ひは單に最後の文字にてかつ鷲の形を顯はすに便なればとてこれを選べるか明らかならず寓意説にてはこれを mondo（世界）の第一字なりとも、または monarchia（帝國）のそれなりともいふ

【金にて】諸靈は金の如く輝き、木星は銀の如く光れり

九七—九九

【頂】ダンテ時代に用ゐしM字即ちゴシック形の首字は、一縦線

の頂より二線彎曲して左右に垂れしものなりき

【降り】エムピレオの天より

【善】神。かの光（諸靈）をしてその心を神に向はしむ

一〇〇—一〇二

【占をなす】古註曰く。人爐邊にて薪の燃えさしを打ち、火花の出づるを見て、これぞわが羔わが仔豚わが金貨の數なるなどいひて樂しむ習ありきと

一〇三—一〇五

【かしこより】かの頂より

【日輪】神

一〇六—一〇八

【鷲】淨、三二・一一二にジョーヴエ（ゼウス）（ジョーヴエ及び木星の兩意に通ず）の鳥といへるもの。鷲はローマ帝國の旗章にて、ダンテの治國説に従ひ、地上に行はるべき正義を代表す

一〇九—一一一

かの鷲の象^{かたち}を畫けるものは神なり、神は畫き給ふに當りて何を模範とし給はじ、模範となる物あらざればなり、否自然は皆神に導かれその模範に従つて諸物を整ふ、されば自然の有する形成の力はすべて神に歸せざるをえじ帝國の制度の神意にもとづくものなる事を示さんとて特にかく言へるなるべし

【巢を作る】自然の中なる創造の力を、鳥が巢を造る例にて言現はせるならむ。鳥は自然にその巢を造る智を有す、而してこの智

また神より出づ。特に巢を擧げしは鷺に因みてなり

一一二——一四

さきに^{エムメ}Mの文字を顯はしむたる聖徒等は少しく位置を變へしのみにて鷺の形を造り終れり

【百合となり】Mは中古の紋章に用ゐし百合の花形に似たればかく言ふ。「エムメにて百合となる」とはエムメの文字を忽がきて百合の形を成しむる意

【印象を】鷺全體の形を。エムメの中央の縦線は身、左右の屈線は翼なり、これに一〇三——八行の首と頸とを加ふれば紋章状の一羽の鷺となる

一一五——一七

【星】木星

【汝の飾る天】汝木星を飾の寶石とする第六天

【明らかならしめ】靈の表はしゝ文字と形とによりて、地上の正義が木星天の影響の結果なることを知れり

【珠】光り輝く諸聖徒

一一八—一二〇

【力】地上に及ぼす影響

【汝の光を害ふ烟】木星の光即ち正義を塞ぐ罪特に貪慾

【處】ローマ（天、一七・四九—五一参照）

一二一—一二三

【血】異本、「休徴」（即ち奇蹟）

【神殿】寺院を指す

【いまたび】キリストかつてイエルサレムの神殿より、その中にて賣買する者共を逐出し給へること聖書に見ゆ（マタイ、二一・一二以下等）

一二四—一二六

【視る】今地上より心の眼にて仰ぎ見る

【天の軍人等】木星天の諸靈

【惡例】法王僧侶等の

一二七—一二九

【麵麴】靈の糧即ち神恩。これを奪ひて戦ふは破門、懲戒を武器とし、その職權を悪用して不正の利得を貪るなり

一三〇—一三二

【汝】ダンテが『神曲』のこの部分を記し、時法王たりしヨハネス二十二世（一三一六年より一三三四年まで法王たり）

【消さんとして録す】後取消して報酬を得ん爲に懲戒破門の令旨を發する

【葡萄園】寺院（天、一二・八六）・身を殺して寺院の建設につとめし聖ペテロと聖パウロ（共にローマにおいて教へに殉ぜり）とは今も天堂に在りて汝の爲す所を見るを思へ

一三三—一三六

かく日はゞ汝は答へむ、「我は洗禮者ジョヴァンニかた（の像あるフイレンツエの金貨）を渴仰するのあまり、ピエートロをもパオロ

をも知らず」と

【獨りにて】荒野に（ルカ、一・八〇）

【一踊のため】ヘロディアス（ヘロデ）の娘の（マタイ、一四・
一以下）

【漁犬】聖ペテロ

この語淨、二二・六三にも見ゆ、されどウエルギリウスは「人を
漁すなどる者」（マルコ、一・一七）の意に用ゐ、こゝにてはペテロの
繼承者たる法王の口よりいで、侮蔑の意を含む

【ポロ】Polo パオロ（Paolo）の俗用體にて、こゝにては「漁夫」
と同じく特に敬意を缺くを表はす。（パオロはパウロ）

第十九曲

木星天の諸靈ダンテの爲に神の正義を論じかつ當時の王達の例を引きて名實相伴はざるキリスト教徒の罪を責む

一—三

【象】鷲の（天、一八・九七以下）

一〇—一二

【その聲の】嘴より出づる聲は鷲を象どれる凡ての靈の聲なれどもわれらといはずしてわれといふ、これ數多けれどもその言ふ所一なればなり

一三—一五

【願ひに負けざる】一切の願ひにまさる（天、三二・六一—三參照）

但し「願ひによりて獲得し難き」（天上の榮光はたゞ願ひ求むるのみにて得べからず、この願ひに適はしき善行によりて初めて得べし）と解する人あり

一六—一八

【鑑】 *storia* 物語に残る諸靈の善行

一九—二一

【愛】靈。神を愛するの愛に燃ゆ

二二—二四

【薰】聲。聖徒を花に譬へしがゆゑに斯く

二五―二七

【斷食】求知の念。この疑ひの何なるやはダンテ自ら言はず、諸聖徒の答の中に現はる（七〇行以下）

二八―三〇

【他の王國】寶座フロニーの名ある天使達（天、九・六一―三並びに註參

照）。かの天使達は直接に神の光を受けてこれを他の天に傳ふるが故に金星の諸靈もよく神の正義を知ると聞く、されば正義の爲にこの天にある汝等にして神の正義を臆に見るの理あらんや

三四―三六

【被物】狩場への途中鷹が光を見て騒がざるためその首にかむら

す革製の頭巾

【翼を搏ち】はたゝきして喜ぶこと

【願】飛立たんとする

三七―三九

【讚美】聖徒達。かれらは神恩の、生くる讚美即ちその尊さを表はすものなり（地、二・一〇三参照）

四〇―四二

【宇宙の極に】あたかもコムパスをもて圓を劃く如く宇宙の範圍を定め、われらの知る物知らざる物を遍くその内に分布し給へる神

四三―四五

神の力は全宇宙に及ぶ、されどいかなる被造物も完全無缺ならざるがゆゑにその受くる神の力に限度あり、かゝれば聖智（己が言）ははるかに一切の被造智に超越す

四六―四八

前聯の意を證明せん爲魔王ルチーフエロのことを擧ぐ

【長】淨、一二・二五―六參照

【光を待たざる】神恩の光に浴するの日を待たざる（天、二九・五五―六三參照）

【熟まざる先に】彼もし謙りて光を待ちゐたらんには、その智増し、その意志備はりてよく神意と合するに至りしならむ、しかるに彼慢心の爲神に背き、意志の備はらざる先に天より墜ちたり、

一切被造物の長たるルチーフエロにして猶その視力足らずとせば
 況んや他の被造物においてをや

四九―五一

【己をもて己を量る】神は至上の善にして他に類たぐひなし、故に神を
 量るものはたゞ神のみ（よく神を知る者神の外になし）、何物も
 神に此し神を量る標準となる能はざればなり

【器あまりに小さき】ルチーフエロにして猶かつ充分に神の善神
 の力を受けざりし事を思はゞその他の被造物がさらに少き善を受
 くるに過ぎざる事また明らかならむ

五二―五四

【我等の視力】われらの智。異本、「汝等の視力」（人智）

五五―五七

我等の智いかに力むともその自然の性としてこれが源なる神意を知るをえず、否知るに近しとさへいふをえず

【己に見ゆるもの】われらの智に映ずるところ。眞の聖意はわれらの智に映ずる聖意よりなほ遙に先にあり

五八―六〇

【汝等の世の享くる視力】人智

六四―六六

まこと

眞の光眞の智はたゞ神より來る、その他の光は光と見ゆれど闇なり、即ち官能智を暗まし（肉の陰）または罪に走らしむ（その毒）

六七―六九

【隠所】 人智の充全ならずして、奥妙なる神の定を窺ひ知る能はざること

七〇―七二

【インド】 インドの西北を流るゝ河。インドの岸は異教のアジアを代表す

七九―八一

【スペインナ】 「パルモ」 (地、三一・六五) に同じ、約九吋

【席】 法廷の

八二―八四

聖書なくば人神の正義を疑ふも宜なり、故に聖書あるにその教を信ぜずして疑ふは愚なり

【聖書汝等の】聖書嚴として汝等の上であり、神の正義の疑ふべからざるを教ふ（黙示録一六・七等）、もしこれなくば

【我とともに事を】 *meco s'assottiglia* 我と（語り）勉めてその才を用ゐ（て神の正義を解せんとす）る

八五―八七

【おのづから】他の善を受けて善なるにあらざる

【第一の意志】神意

【離れ】神意は常に至善にして變ることなし

八八―九〇

【凡て物の】物の正しきと然らざるとはそが神意に適ふと適はざるとによりて知らる、神意に適ふこと正義の唯一の標準ならば神

意の正しきは言ふまでもなし（『デ・モナルキア』二、二・五〇
—六一参照）

【造られし善の】被造物の善まづ神意を動かすに非ず、謝意の放
つ至善の光元となりて他の善生ず。たとへばキリストを知る民は
知らざる民より福なれどもはその民の徳にもとづきて知るに至れ
るならざる如し、その民にいかなる徳ありともこはすべて神より
出でしものなればなり

以上、神の正義に關することは極めて深遠微妙にて人智のよく悟
り得べき所にあらず、たゞ信仰により聖書の教へを信ぜよといひ、
ダンテの疑ひを解かずして疑ひを起すの非なるを述べしなり（口
マ、九・二〇以下参照）

九四―九六

【いと多き議に】鷲を象れる諸靈の意志に。與へし者も受けし者も共に喜ぶ^{さま}状を表はせり

一〇〇―一〇二

【徴號】鷲の象

【聖靈の光る火】愛に燃ゆる聖徒等

一〇三―一〇五

人信仰によらざれば救はれざるをいへり

【前にも後にも】キリスト以前にてはキリストの降臨すべきを信じ、その以後にては降臨せるキリストを信じ

一〇六―一〇八

以下一一四行まで、名ありて實なきキリスト教徒が異教能よりもかへつて罪深きを述ぶ

【クリスト、クリストと】マタイ傳七・二一以下參照

一〇九―一一一

【エチオピア人】異教徒を代表す

【罪に定めむ】マタイ傳二一・四一―二參照

【二の群】マタイ傳二五・三一以下參照

【富み】富むは神恩の裕かなるをいひ、貧しきはこれを缺くをい

ふ

一一二―一一四

【汝等の王達】キリスト教國の諸王

【書】審判の日に開かるゝ生命いのちの書ふみ（黙示録二〇・一二）

【ペルシア人】異教徒を代表す

【何をか】いかなる非難の言葉をか

一一五—一一七

以下廣く例をキリスト教國の君主にとりて、かれらが専ら正義を施すべき地位にありながらかへつて憎むべき罪惡を行ふことを難ず

【そこには】かの書の中には

【アルベルト】皇帝アルブレヒト一世（淨、六・九七一九註參照）。

一三〇四年軍をボヘミアに進め、その同土を蹂躪す

【筆】神の筆（生命の書に書き入るゝ）

【プラーガの王國】プラーグ。プラーガを首都とする王國即ちボヘミア

一一八一—一二〇

【者】フランス王フィリップ四世（淨、七・一〇九—一一註參照）。嘗て獵場にあり、一匹の野猪その馬を突く、王地に倒れ、日ならずして死す（一三—一四年）

【貨幣】フィアンドラとの戦ひの頃（淨、二〇・四六—八註參照）軍費に窮して粗惡なる貨幣を鑄造す

【センナの邊】セーナ（センナ）河の流るゝ都即ちパリ。王こゝにかの貨幣を發し、民その禍ひを被れり

一二一—一二三

【スコツランド人】一三〇六年より同二九年までスコツトランド王たりしロバート・ブルースの事ならむ

【イギリス人】イギリス王エドワード二世（一三〇七年より一三二七年まで王たり）の事ならむ。但しエドワードとロバート・ブルースとの争ひは一三〇〇年より後の事なれば異説あり

【渴】領土の慾

一二四—一二六

【スパニアの王】カステイル王フェルナンド四世（一二九五年より一三一二年まで王たり）

【ボエムメの王】ヴェンチエスラウス四世（淨、七・一〇〇—一〇二並びに註参照）やボエムメはボヘミア。

一二七—一二九

【跛者】アプリア王シャルル二世（淨、二〇・七九—八一並びに註参照）。生來の不具者にてかつは名のみながらイエルサレムの王なりければ、嘲りてイエルサレムの跛者といへり

【一のI】かの生命の書に善をI（即ち一）と記し惡をM（即ち千）と記す、惡ありて善なきを表はせるなり

但しこの一の善をシャルルの物惜みせぬこと（天、八・八二—四並びに註参照）と解する人あり、疑はし

一三〇—一三二

【火の島】シケリア。名高きエートナの火山あるによりてかく。

『アエネイス』によればアエネアスの父アンキセスはこの島の西

海岸の町なるトラパーニ（古名 Drepanum）にて死せり（三・七

〇七以下）

【治むる者】シケリア王フエデリコ二世（淨、七・一一八―二〇
参照）シャルル・ダンシュエーと長くシケリアの主權を争ひゐたり
しが一三〇二年賤むべき契約の下にこれと和してその女を娶れり
皇帝ハインリヒ七世の死後フエデリコは勤王派の望みを負ひてピ
サの主權を希、ギベルリニの首領たらんとせしも、かしこに到る
に及び、かの徒黨をば共に事を爲すに足らずとして棄てたり、ダ
ンテも彼に望みを囑せる一人なればかゝる卑しき行爲を見てこれ
を憎むの念愈 甚だしかりしならむ（ムーアの『ダンテ研究』第
二卷二九八頁以下参照）

一三三—一三五

かゝる小人の罪業を一々生命の書に録して、徒に場所を塞ぐことなからむ

一三六—一三八

【叔父】フリートリヒの叔父にてバレアロス諸島イスパニアの王なるハイメ（一二四三—一三一一年）

【兄弟】アラゴン王ハイメ（ヤルコモ）（淨、七・一一八—二〇並びに註参照）。二の冠はバレアロスとアラゴンの王冠

一三九—一四一

【ポルトガル口の王】ディオニシオ（一二七九年より一三二五年まで王たり）。貪婪の風評ありし者。ポルトガル口はポルトガル。

【ノルヴェジアの王】ハーコン七世（一二九九年より一三一九年まで王たり）。ノルヴェジアはノルウェー。

【ロシアの王】ロシア（近代のセルヴィアの一部なる中古の王國）王ステファーン・ウーロス二世（一三〇七年死）

【貨幣を見】ヴェネツィア（ヴェネージア）の貨幣を見てこれを模造し、汚名を残すにいたれる意

一四二—一四四

【ウングリア】一二九〇年カール・マルテル、ハンガリアの王冠を受けしも實際に政治を行へる者はアンドレア三世（一三〇一年死）なりき（天、八・三一—三註参照）、一三〇一年にいたりマルテルの子ロベルト（一三四二年死）王位を繼げり、アンドレア

は良王なればこゝに重ねてといひてその以前の諸王の悪しかりしを示せるなり。ウングリアはハンガリア。

【ナヴァール】ナヴァールもしその北方を圍むピレネイ諸山を固めとしてフランスの軛を防がば福ならむ

ナヴァール王アンリ一世の女ジョヴァンナ父について王國を治め、一二八四年フィリップ四世に嫁して後も猶自らこれを治めしが、一三〇四年その死するやその子ルイこれを繼ぎルイ、フランス王（ルイ十世）となるに及びてこの國フランス王家に歸せり

一四五—一四八

【この事の】ナヴァールについていへる事（即ち自國を固めてフランス王の侵入を防ぐべきこと）の眞なるを豫め知らしむる例と

して

〔ニコシアとファマゴスタ〕キュプロス島の二都。一三〇〇年の頃フランスのアンリー二世ルニジャーノ家のキュプロス王としてこゝに虐政を布く。獸とは即ちこの王の事なり

〔他の〕こゝに掲げし如き他のキリスト教國の諸王とその歩調を俱にして同じく惡を行ふ

第二十曲

第六天の鷲その目に輝く六の靈の誰なりしやをダンテに告げ、か

つその中なるトラヤヌス及びリフェオの救ひに關してダンテの懐ける疑ひを解き、永遠變らざる神の定のはるかに人智に超ゆるを述ぶ

四―六

【一の光】日光。諸星はいづれも太陽の光を受けて輝くといふ昔の學說に従へるなり（『コンヴィヴィオ』二・一四・一二四―六参照）

七―九

【導者達】帝王等

【徴號】即ち鷲

【わが心に】太陽没して諸星輝くを驚默して諸靈歌ふにたとへた

り

一三—一五

【微笑の衣を纏ふ】法悦の光に包まるゝ

【愛】神を愛するの愛 この愛諸靈を悦の光に包むなり

【笛】歌ふ諸靈。吹入るゝ息いきによりて笛が美音を發する如く、神

の愛聖なる思ひを動かして諸靈に歌をうたはしむ

異本、【火衣】

一六—一八

【第六の光】木星。これを飾る珠は即ち諸靈

一九—二一

【源】原、「頂」（即ち山の高處たかみにある源）

二二—二四

絃いとを壓おす左手の指頭の變化によりて琵琶の音に曲節生じ、歌口より吹入るゝ風が孔の開閉によりて箏篋の音に曲節を與ふる如く

二八—三〇

【わがこれを】こはわが聞かんと願ひるたりし言葉なれば我よくこれを心に記して忘れじとの意

三一—三三

【一部】即ち目

【地上の】原、「死すべき」（天上の鷲の不死なるに對して）

【日輪に堪ふる】天、一・四八並びに註參照

三四—三六

【形】鷲の

【火】輝く諸聖徒

【凡ての位】同じく鷲を象どる諸靈の中にててもその尊さに差別あるを示す

三七—三九

【聖靈の歌人】イスラエル王ダヴィデ（淨、一〇・五五以下参照）。

神の靈感によりて歌ひたれば「聖靈の」といへり

【匱】神の匱。ダヴィデこれをアビナダブの家よりオベド・エドムの家に移し後又これをイエルサレムに移せり（サムエル後、六・一以下）

四〇—四二

【己が思ひより】ダヴィデの詩は王自身の思ひ（自由意志）と靈感とより成る、前者の徳は王に歸し後者の徳は聖靈に歸す

四三―四五

【嘴にいと近き】皇帝トラヤヌス

一寡婦の請を容れてその子の爲に復讐を約し、事前に出づ（淨、

一〇・七三―九三）

四六―四八

【この麗しき】天堂の幸福と地獄の苦痛とをともに經驗し、キリストを信ぜざる者がいかなる憂目を地獄に見るに至るやを知る
トラヤヌスがグレゴリウスの祈りの功德によりて地獄の苦を脱し、事に就ては一〇六行以下及び淨、一〇・七三以下並びに註參

照

四九—五一

【圓】四三行の「輪」

【彼に續くは】ユダ王ヒゼキヤ。病みてまさに死せんとせし時神に祈り求めしかば神即ちこれに十五年の齡を加へ給ひたり（列王下、二〇・一—七等）

【眞の悔】註釋者の曰へる如く、恐らくはダンテの記憶の誤りならむ、歴代下（三二・二六）に王その心の高たかぶり慢を改めて身を卑ひくくしたりとあれど、こは死を延べし後の事なればなり

五二—五四

【永遠の審判に】神眞實の祈を嘉納し、けふと定めしことをあす

に延べ給ふともその審判その正義は依然として變らじ（淨、六・二八―三九參照）

五五―五七

【次なる者】皇帝コンスタンティヌス一世（地、一九・一一五―七並びに註參照）

【牧者に譲らんとて】ローマの領地を法王シルヴェステル一世にさゝげんとて

【律法及び我】律法と驚（武）とをギリシア化するは、ローマ帝國の首都をビザンティウム（ギリシア人の建設せる）に移し文武の諸權を彼地より出づるにいたらしむるなり（天、六・一一―三並びに註參照）

【己を】皇帝自らビザンティウムに赴けること

五八一—六〇

【世を亡ぼす】ダンテ思へらく、遷都と寺院の富とはローマ帝國の衰頹を來し、ひいて全人類の不幸を招くにいたれりと

六一—六三

【グリエルモ】シケリア及びアプリアの王グリエルモ二世（一一五四—一一八九年）。一一六六年王位に即きて善政を布く

【カルロ】アプリア王シャルル二世（天、一九・一二七—九參照）

【フェデリーゴ】シケリア王フェデリコ二世（天、一九・一三〇

—三五參照）

六七—六九

【リフエオ】リペウス。トロイア陥落の際ギリシア軍と戦ひて死せる勇士の名

リペウスの事たゞ『アエネイス』（二・三三九、三九四、四二六―七）に見ゆるのみ、アエネアスがトロイアの軍いくさばなし話をデイドになし、言葉の中に「リペウスもまた倒る、彼はトロイア人の中びとにていと正しくいと直き者なりき」（二・四二六―七）とあり

【誰か信ぜむ】異教時代のリペウスが救ひを得て天にあらんとは七六―七八

【永遠の悦び】神

【これが願ふところに】神意に従つて萬物は皆そのある如くなる（即ち神がかゝる物たらしめんと思ひ給ふ如くなる）にいたる

【像】驚。驚は神意にもとづく帝國の象徴なれば特に神の御手の印影をとゞむ（天、七・六七―九参照）といへり。かの驚の默せるは、雲雀の己が歌に満足して黙す如く、これらの詞に満足したるよりならむとの意

七九―八一

【かしこにては】ダンテの言葉を俟たずして、諸聖徒よくその疑ひの何なるやを知りしかど

八二―八四

【これらの事】わが見かつ聞きし事、即ち異教徒なるべきトラヤヌスとりペウスとが救はれて天にある事

九四―九六

【熱き愛及び】燃ゆる愛と強き希望とは（これなくば永遠の罰を受くべき者にありても）聖旨を動かし、これを有する者をして天堂の福を奪取することをえしむ

【侵さる】 *violenza pate* マタイ傳 一一・一二（ヴルガータの）に *vim patitur* とあるによれり

九七―九九

愛と望み聖旨に勝つは人が人に勝つ如く、強をもて弱を制するに非ず、聖旨自らその仁いつくしみ慈によりて勝たれんと願ひ給ふが故なり、さればこれが負くるはとりもなほさずその愛の勝つなり

一〇〇―一〇二

【生命】靈

【天使の國】天堂

一〇三—一〇五

【彼は】リペウスはキリストの降誕以前にありて救世主の贖ひあるべき事を信じ、トラヤヌスはその以後にありてかの贖ひありしことを信ぜり

【痛むべき足】釘にて十字架に打付けらるべき足。キリストの受難

一〇六—一〇八

【一者】トラヤヌスの靈

【善意に戻る者なき】地獄には改悔なし

【生くる望】グレゴリオスの。神は必ずその祈りを聽き給ふと固

く信じて疑はざりしこと

一〇九——一一一

【移るを】改悔と信仰とに（地獄にては移る能はじ）

一一二——一二四

【助くるをうるもの】キリスト

一一八——一二〇

【一者】リペウス

【泉】神

一二一——一二三

【神彼の目を開き】リペウスの救ひに關することは皆ダンテの創意より出づ、但し野蠻の民と雖もその理性の聲に聽從する時、神

恩これを救ひの道に導くことは當時の寺院の教へにあり

一二七—一二九

【みたりの淑女】凱旋車の右の輪の邊ほとりに立てるみたりの淑女、即ち教理の三徳なる信、望、愛（淨、二九・一二一以下）

【一千年餘】中古の記録に従へばトロイアの陥落は紀元前一一八四年の事なりといふ

【彼の洗禮】トマス・アクイナスの所謂改悔の洗禮 *Baptismus penitentiae*. リペウスは洗禮を受けざりしもこれに代るべき信仰と希望と愛とを有せり

一三〇—一三二

【永遠の定】 *predestinazion* 人の救ひについて神の豫め定め給へ

ること

【第一の原因】神

【目】人智

【汝の根】即ち神の定の原因もと

一三三—一三五

【凡ての選ばれし者】救はれて天上の福を享くる者の數。神の永

遠の定の秘義

一三六—一三八

神の聖旨みむねとわれらの思ひと一致するはわれらの福を増しこれを全

うする所以なり、故にわれら神の定の奥義を知らざれどもこは知らしめじとの聖旨より出づることなればわれらは知らざるに満足

して知らんと願ふことあらじ

一三九—一四一

【神の象】神のゑがき給へる鷲（天、一八・一〇九参照）

一四五—一四八

【光】トラヤヌスとりペウスの。焰を動かすは鷲の言葉がかれらの意と合するを表はすなり

【瞬く】二の光を二の目にたとへその運動の全く同じきを表はせり

第二十一曲

ダンテ導かれて第七天（土星天）にいたればこゝには一の金色の梯子を降る多くの靈（默想者）あり、その一聖ピエートロ・ダミアーノ詩人に近づきてこれが問に答ふ

四一六

【セーメレ】テバイ王カドモスの女。ジュノネの怨みを受け、これに欺かれてゼウスの榮光を見んと願ひ、見るに及びてその身燃ゆ（『メタモルフオセス』三・二五三以下及び地、三〇・一一三 註参照）

七一九

【宮殿の階】諸天。これを傳ひてエムピレオの天（宮殿）にいた

る

【汝の見し】天、五・九四以下、八・一三以下等

一〇——一二

【力】視力、即ち智力（比喩的に）

一三——一五

【燃ゆる獅子の】一三〇〇年四月の頃土星は獅子宮にありしなり

【その力とまじり】土星の影響は獅子宮の星の影響と混りてわが

下界に及ぶ

註釋者曰く。獅子宮は猛獸に因みて熱さを表はし、土星は寒さをあらはす（淨、一九・一——三註参照）、冷熱相混じ相調節してその影響温和なりと

又曰く。土星は冷かなり、ゆゑに人を冷靜ならしめ、沈鬱ならしめ、これを瞑想に導くにいたると

一六一—一八

【かれら】即ち汝の雙の目

【この鏡】土星、日光を受けて輝くがゆゑにかくいふ

一九—二一

ベアトリーチエの命に従ひわれ目を淑女より樹梯はしだてに移さんとせしその刹那、わが目がいかなる悦びを淑女のたふとき姿によりてえたりしや、これを知る者は

二二—二四

【彼方と此方とを】命に従ふの悦びと淑女を見るの喜びとを。ベ

アトリーチエを見るの悦びたとへん方なく大なるに、この大なる悦びをも棄て、目を他に移し、ことを思はず、命に従ふの悦びのいかに大なりしやを知らむ

二五―二七

【その名立る導者】世界の名立たる君主、即ち黄金時代のサトルノ王（地、一四・九四―六並びに註参照）

【水晶】土^{サトウル}星。星の名かの王の名より來るがゆゑに「名を負

ふ」といへり、金星の名の事これに類す（天、八・一〇―一二）

二八―三〇

【樹梯】諸靈が梯子を昇降するは心默想によりて神のみもとに達するを示す、創世記の古事によれり（天、二二・七〇以下並びに

註参照)

三一—三三

【光】默想によりて徳より徳に進める魂

【一切の光】すべての星

四〇—四二

梯子を降る聖徒等とはある段に達すれば、別れくになりて或ひは昇り或ひは降り或ひはそこに止まるなり

四三—四五

【我よく】我は汝の光の増すにより、汝が愛をもて我と語りわが疑ひを解かんとするを知る

四六—四八

【身を動かす】言葉身振等にて示す但しこの一聯の主なる動詞原文にてはすべて現在なれば、これを他の文にあらざしてダンテの心の中の言葉の續と見る人あり

四九―五一

【者】神

五五―五七

【己が悦びの】己が悦びの先に包まるゝ尊き靈よ

五八―六〇

【響く】天、三・一二―二、七・一一―五、八・二八―三〇等

六七―六九

【愛の優る】わが侶等に

【優るか】この梯子にあらはるゝ聖徒達はいづれもその愛の我にまさるかさらずも我と等しき者のみにて、劣る者あらざればなり

七〇—七二

聖徒の爲す事はみな神の聖旨みむねによりて定まるを述べ

【疾き僕】喜びて（聖旨に）従ふ者

【尊き愛】神を愛するの愛

【鬮を頒つ】各自にその爲すべき役つとめを割當つ。神を愛するによりてその定むる役を知り、喜びてこれを行ふなり

七三—七五

【自由の愛】神の命じ給ふを待たず、己が衷なる神の愛に動かされて各 その役を知りかつこれを行ふこと

七九―八一

【礮石】の如くめぐりて喜びを現はすなり、
ひきうす礮石の譬へ前にも

いづ（天、一二・三）

八二―八四

【愛】神の愛に燃ゆる魂

八五―八七

【わが視力】人は己が智力のみによりて光の源なる神を知るをえ
 ざるなり

八八―九〇

われ神を見ること明らかかなればわが焰もまたこれた準じて燦かな
 り（天、一四・四〇―四二参照）、知るべし、わが光となる悦び

は神を成るにもとづくを

九一―九三

われらかく神を成れどもわれらの中の、否天使の中のいとすぐる者さへ聖意の奥を知り難し

【セラファイノ】天、四・二八―三〇並びに註参照

九七―九九

【かゝる目的に】かく奥深き事を敢てまた究めんと力むることなからしむべし

一〇〇―一〇二

【こゝにては】天にては被造物の智神の光を受けて光れど地にては迷ひまた誤りの爲に暗む

【天に容れられてさへ】被造物の智は天に入りて後にさへかの秘義を悟りえざるに未だ地にある時に當りて何ぞこれをさとりえむ、換言すれば、天上の聖徒すらかゝる事を解しえざるに地上のいかでこれを解しえんや

一〇六一—一〇八

【二の岸】アドリアティコとティルレーノとの兩海岸

【岩】山、即ち中部アペンニノ連山を指す

一〇九—一一一

【カートリア】アペンニノに連なる一山にてグツビオとラ・ベルゴラの間にあり山腹に「カマルドリ」派に屬する一僧院（庵）ありき、「サンタ・クローチエ・デイ・フォンテ・アヴェルラーナ」

即ち是なり、傳へ曰ふ、ダンテは一三二四年の頃足をこの僧院に止めしことありと

一一五——一七

【橄欖の液の】橄欖の油のみにて味をつけし食物、即ち精進物

一一八——二〇

道心堅固の者のみるたるかの僧院は多くの魂をこれらの天に送たりしに今や腐敗してこの事なし、しかしてその腐敗せる状態ありさまは神必ず刑罰によりて顯はし給はむ。但し神罰の何なりしやは明らかならず

一二一——二三

【ピエートロ・ダミアーノ】ペトルス・ダミアーニ。名高き神學

者、一〇〇七年頃ラヴェンナの貧家に生れ、その兄ダミアーノの厚意によりて學を終ふ（彼が自らピエートロ・ダミアーノと呼べるはこの恩を思ひてなり）、年三十にしてフォンテ・アヴェルラーナ僧院に遁れ、やがて選ばれて院主となる、一〇五八年オステアの僧正兼カルディナレに任ぜられしも幾何もなく辭して再び僧院に歸り、一〇七二年ファーエンツアに死す、高德大智の名僧にて神學に關する著作多し、ピエートロ・ペツカトレ（罪人ピエートロ）とはその自ら謙りて呼べる名なりといふ

【われらの淑女の家】僧院。註釋者曰く、こはコマツキオ（ラヴェンナの北）附近なる聖マリア・ポムポーザの僧院を指せるものにて、ピエートロ未だ一僧侶なりし時アヴェルラーナの院主の請

ひによりかしこに行きて二年とせばかり止まりゐたることありと

但しピエートロはその後年にいたりてもなほペツカトレの名を用ゐしこと明らかなればこの一聯に就て異説甚だ多し、いづれも難あり。スカルタツツイニは一二二行の前半を後半と別ちて「かしこにて我はピエートロ・ダミアーノまたピエートロ・ペツカトレといひき、我またアドリアテイコの岸なるわれらの淑女の家にありしことあり」と讀めり、この解最も難なし、されど聲調の自然をそこなふ

一二四—一二六

【帽】カルデイナレの帽

【傳へらるゝ】高位の僧となる人物が次第に劣りゆくをいふ

一二七—一二九

以下一三五行まで前聯の末行に因みて僧官の奢侈を難す

【チエフアス】（ケパ）、使徒ペテロ（ヨハネ、一・四二）

【聖靈の大いなる器】使徒パウロ、地、二・二八に「選えらびうつはの器」といへるもの

【いかなる宿の】ルカ、一〇・七参照

一三〇—一三二

【己を】今の僧官等は美食安佚によりてその身肥え、人の助けを借らざれば歩を運ぶ能はず、かつまた人に誇らん爲その裳裾を長くし特にこれをかゝぐる人を用ゐるにいたる

一三三—一三五

【表衣にて】またその表衣は長く廣くして己が乗馬を蔽ふ、これ一枚の表衣（皮）をもて二匹の獸（僧と馬）を包むなり

【何の忍耐ぞ】神の忍耐はいかに大いなる哉

一三六―一三八

【いよく美しく】ペトルス・ダミア―ニの義憤の言を聞きてこれに同感を表するなり

一四二

【雷】強き響き

第二十二曲

聖ベネデクトウスがその開山の昔を語りかつ今の僧侶の腐敗を歎くを聞いて後、ダンテはベアトリーチェと共に第八天（恒星天）にいたり、七遊星と地球とを俯瞰す

一—三

【恃處】母（淨、三〇・四三—五參照）

一〇—一二

【歌】天、二一・五八以下參照

【笑】天、二一・四以下參照

一三—一五

【刑罰】牧者等の腐敗に對する神罰。恐らくはダンテの信仰にもとづく豫言にて、ボニファキウス八世の受難（淨、二〇・八五以下參照）。もしくはアヴィニオンに移れる（淨、三二・一五七以下參照）後の法王廳の屈辱等を特に指せるにはあらず
一六―一八

【望みつゝ】天罰の他人に下らんことを願ふ者はその下るを遅しとし、己に下らんことを恐るゝ者はこれを速しとす

二二―二四

【球】光の球、即ち光に包まるゝ諸聖徒

二五―二七

【過ぐるを】問ふことの多きに過ぐるを

二八—三〇

【眞珠】輝く聖徒等

【わが願ひ】かの聖徒等の誤なるやを知らんと欲する願ひ

三一—三三

【汝の思ひを】汝の問がわれらの累とならざるを知り安んじて心の願ひを言現はさむ

三四—三六

【たふとき目的】神の御許みもとにいたる事

【我】聖ベネデクトウス。四八〇年ウムブリア州のノルチアに生る、若年にして遁世し、スピアーコ（ローマの東）附近の岩窟に隠れ僅に一僧の布施を受けつゝ修すること年あり、その徳世に知

られ弟子多くその許に集るに及びて十二の僧院を建つ、五二八年
カーシーノ山（或ひはカツシーノ、ローマとナポリの中間にあり）
に赴きアポロン（アポロ）の宮殿を毀ちてベネデクトウス派の
僧院を起し、五四三年に死す

三七―三九

【カツシーノ】同じ名の山の側面にある小さき町

【迷へる曲める人】異教徒。アポロンを拜せんとて登山せり

四〇―四二

【者】キリスト、即ち福音の眞理を世人に齎し示せるもの

四六―四八

【花と實】思ひと行ひ

【熱】神を愛するの愛

四九―五一

【マツカリオ】聖マカリウス（四〇五年死）。アレクサンドレイアの人にて聖アントニウスの弟子なり、東方僧院の法規を定め、多くの隠者を統管す

カーシーニその他の説に據れり、異説或ひは同じくアントニウスの弟子なるエジプト人マカリウス（三九一年死）を指すとし、或ひはダンテこれとアレクサンドレイアのマカリクスとを區別せざりしならんともいふ

【ロモアルド】聖ロムアルドウス（一〇二七年死）。ラヴェンナの貴族オネステイ家の出、トスカーナなるカマルドリ僧院（淨、

五・九四―六並びに註参照)の建設者にてカマルドリ派(ベネデクトウス派の分派)の開祖なり

【わが兄弟達】ベネデクトウス派の僧侶等

五二―五四

【好き】光によりて愛を現はす

五八―六〇

【顯に】隠す光なくして

六一―六三

【最後の球】エムピレオの天。ダンテがかの天にて聖ベネデクトウスの姿を見しこと後に出づ(天、三二・三五)

【わが願ひ】ありのまゝの姿を示してダンテの望みを遂げしめん

との願ひをも含む

【他の】他の聖徒達の

六四—六六

【備はり】註釋者曰く。備はるは神を目的めあてとすればなり、熟するは諸聖徒各自の善根によりて善果を得る時至ればなり、圓なるは願ひ悉く神に容れられ缺くる處なければなりと

【かの球に】エムピレオの天は他の諸天と異りて不動なれば、その各部決して位置を變ふることなし

六七—六九

【場所】かの天は他の諸天と異りて空間に超越す、またかれらの如く軸ありて轉るにあらず

エムピレオの天については『コンヴィヴィオ』二、四・一三以下
 参照

七〇—七二

【ヤコブ】ヤコブがベテルにて夢に一の梯子を見しこと創世記に出づ、「見よ地に立てる一の梯子あり、その頂天に達し神の使者つかひのぼりくだり」云々（創世、二八

・一二—一三）

七三—七五

【これに登らんとて】世の雑念を棄て、思ひを天に寄する者なし
 【わが制は】ベネデクトウス派の法規はたゞ徒に紙を費して寫し
 傳へらるゝのみ、守る者なし

異本、「紙を損はんがために世に残るのみ」

七六一七八

善人の住む習ひなりし僧院は悪人の巢となり、不徳の輩ともがら身に法衣を纏ふ

七九一八一

【高利】高利を貪ることの神意に背くは既にいへり（地、一一・九一以下参照）

【果】寺の收入。これを貪りこれを私する僧侶の罪は高利を貪る罪にもまさる

八二一八四

【民】神の愛に訴へて施を求むる者即ち貧民

【親戚または】僧侶の親戚またはその妾婦等

八五―八七

【善く始め】たとへば僧院の如く、その建設の始めに於ては人よく法を守れども久しからずして破るにいたる

八八―九〇

【ピエル】使徒ペテロ（ピエートロ）は貧に安んじて福音宣傳の基を開き

【金銀なきに】ペテロが一跛者にむかひて「金銀は我になし」といへる（使徒、三・六）によれり

【集】convento その派の僧侶のみならず凡てこれに従ひその教の果を摘みて善に向ふ者の一團を指す（パッセリーニ）

九一―九三

汝先づ三者の事業をその始めに溯りて見、後この事業が彼等の末流の腐敗墮落によりていかなる状態となれるやを見ば善の惡に變れるを知らむ

九四―九六

僧侶等かく墮落して昔の面影を止めざれども、神の救ひの御手によりて再び徳に歸るの望みなきにあらず、またたとひこの事ありとも舊史に残る奇蹟の如く不思議とすべきにあらざるなり

【ヨルダン】イスラエルの民をして渉らしめんため、この河の水逆流す（ヨシユア、三・一四以下）

【海の】紅海の水の分れしこと（淨、一八・一三三―五並びに註

参照)

九七―九九

【旋風の如く】めぐりつゝ

一〇〇―一〇二

【自然】即ち肉體の重さ

一〇三―一〇五

【自然に従ふ】物質の力にのみよる

一〇六―一〇八

【願はくは】事の眞なるを表はす爲に用ゐらる。かの凱旋にわが
歸るをえんと願ふその願ひの眞なるまことごとく、かの雙兒宮を見ると

その内に入ると同時なりしは眞なり

【聖なる凱旋】 天上永遠の福

一〇九——一一一

【天宮】 雙兒宮。ダンテは第八天即ち恒星天に達しその十二宮の一なる雙兒宮に入りしなり

一一二——一一四

以下一二三行まで、ダンテは己と雙兒宮の星と因縁淺からざる次第を述べてこれが助けを求む

【大いなる力】 雙兒宮の星はその下界に及ぼす影響によりて詩才や學才を啓發すとの古説あり、ダンテはこれらの星の影響の下に生れしがゆゑにその才をかの星の光に歸すといへるなり

一一五——一一七

わが生れし時太陽は雙兒宮にありき

注釋者曰く。一二六五年には五月十八日より六月十七日まで太陽雙兒宮にありき、故にダンテの生れし日はこの二つの時の間にありと（スカルタツツイニ註參照）

なほその日を五月の末となす説についてはスカルタツツイニ註第四卷（プロレゴマーニ）二四頁及びムーアの『ダンテ研究』第三卷五五―六頁參照

【父なる者】太陽。不滅の生命（人の魂）は神の直接に造り給ふものなれば滅ぶる生命の父といふ

一一八―一二〇

【貴き天】恒星天

一二一—一二三

【己が許に引く】難所が魂を引くとはダンテをしてその心を悉くこゝに集めしむるをいふ

【難所】天堂の旗の残の部分即ち特に崇高にして敍し難きところ
一二四—一二六

【救ひ】或ひは福。終極の救ひは神なり（詩篇二七・一）
一二七—一二九

【これに入らざる】神の御許にいたらざる
一三〇—一三二

【凱旋の群集】キリストの凱旋に列る群集（天、二三・一九以下）

【天】 *aeterna*（精氣、轉じて天）

【樂しみ極まる】天上高き處にありて親しくその靈光に接し、さらに俯瞰して下界の真相を識別す、故に心眼いよく瞭かに（雜念を離れ）いよく鋭し（徹底す）、人茲に到りて初めてよく至上の光を仰ぐを得む、樂しみ豈大いならずや

一三三—一三五

【わが球】原、「この球」。地球

一三六—一三八

【他の物に】天界の事物に

一三九—一四一

【ラートナの女】月（淨、二〇・一三〇—三二並びに註參照）

【影】ダンテは月の地球に面せざる部分を見たるなり、月面の明

暗は月天の天使の力と月本來の力との結合によりて定まるが故にこの天使がその力を及ぼす部分即ち月の地球に面する部分にのみ斑點ありて、その力を受くる部分即ち面せざる部分にはなし

【粗あり】天、二・五八―六〇参照

一四二―一四四

【イペリオネ】太陽の父。ウラヌスと地^{ゲー}の間の子

ダンテはオウイデイウスがその『メタモルフォセス』第四卷（一九二、二四一）に太陽を指してイペリオネの子といへるに據れり
 【マイアとディオネ】水星と金星。いづれも母によりて子を表はせり

マイアはアトランテ神の女にてメルクリウス（水星）の母（『メ

タモルフオセス』一・六六九―七〇等)、デイオネはヴェーネレ
 (金星)の母(天、八・七―九並びに参照)

一四五―一四七

【父】ジヨーヴェ(木星)の父サトゥルノ(土星)

【子】ジヨーヴェの子マルテ(火星)

【和ぐる】火星の暑さと土星の寒さとを(天、一八・六七―九並
 びに註参照)

【處をば變ふる次第】この三つの星が或る時は太陽に近よりて見
 え或る時はこれより遠ざかりて見ゆる理由。運行の工合

一四八―一五一

【住處の隔たるさま】星と星との間の距離

一五一—一五三

【めぐれる間に】即ちダンテが雙兒宮にありし間に

【小き麥場】人の世界。狭きによりてかく言へり、人この小き
うちば麥場に住みつゝ利慾の爲に相争ふ

【山より河口】複數、おしなべていへるなり

【悉く】はて果より果にいたるまで。但しダンテが俯瞰したるその刹那にかく悉く現はれしならず、太陽イエルサレムの子午線にありてダンテまた太陽とともに白羊宮にあるに非ざれば全地を視るをえざればなり（天、二七・八五—七註參照）

この一聯かく解するも猶多少の困難あり、故に或人はこれを理想の眺望即ちダンテが全地を一望の下に視たる意に解し、またト―

ザー氏は *Zeit* を全部の意に非ずして巨細にの意なりとす

一五四

【美しき目】ベアトリーチエの

第二十三曲

ダンテ第八天にてキリストの凱旋を見る

一〇——一二

【ところ】正午の太陽のある處に當る天。太陽子午線を過ぐる時

はその運行特に遅しと見ゆ（淨、三三・一〇三—五並びに註參照）

一三一—一五

【願ひに物を求め】一切に或物を得んと願ひ、未だ得ざれど、得るの望み充分なればその望みにて満足する人の如く

一九—二一

【凱旋の軍】キリストの血によりて救はれし聖徒等

【一切の實】キリストの凱旋に列る諸聖徒は、諸天の善き影響をうけ（「これらの球の　　轉によりて」）て徳に進み救ひを得るにいたれる者なればこの影響の果みに當る

二五—二七

【トリヴィア】月。ディアナ（月）の異名

【ニンフェ】諸　の星（淨、三一・一〇六參照）

二八―三〇

【燈火】諸聖徒

【日輪】キリスト

【わが日輪の】星は皆太陽の光をうけて輝く（天、二〇・四―六
並びに註参照）

【星】 *viste superne* （上方に見ゆる物）

三一―三三

【光る者】キリスト

【その生くる光】己の射放つ強き光

三四―三六

【防ぐに術なき】いかなる目もよくこれに堪ふるをえざる力なり。

神の力は萬物に勝つ

三七―三九

【天地の間の路】人が天に登るの路

【いと久しく】淨、一〇・三四―六並びに註參照

【知者と力】神の力神の知恵なるキリスト（コリント前、一・二

四參照）

四〇―四二

【火】電光

【性】火炎界に向つて昇るべき本來の性質（天、一・一三〇―三

五參照）

四三―四五

わが心は天上の歡樂の爲にひろがりて己（心）を離れ（法悦の爲に意識を失ひ）たればその當時の心の状態を心自ら記憶せず

四六―四八

ベアトリーチェの笑顔を見るをえざりしダンテも（天、二一・四以下参照）、キリストの凱旋を見るに及びて視力増し、これを視るをうるにいたれり

四九―五四

【書】記憶の書くみ

【忘れし夢】四七行の「諸の物」に當る。心に残る印象（喜びや悲しみの）によりて夢の何なりしやを思ひ浮べんとすれども能はざる（天、三三・五八―六〇参照）人の如く、ダンテは心の悦

びを辿りてかの凱旋軍の偉觀を思ひ浮べんとせしかど能はざりき
五五―五七

【ポリンニア】ムーサイの一にて聖詩を司る神

（姉妹達）他の八柱の神々

【乳】淨、二二・一〇一―二にホメロスを指して「ムーゼより最も多く乳を吸ひしギリシア人」といへり

【諸の舌今】詩人等悉くその歌をもて今我を助くとも

五八―六〇

【聖なる姿】ベアトリーチエ自身の

この項異本に「そをいかばかり聖なる姿（即ちキリストの）の燦かにせしやを」とあり

六一―六三

天堂を敘するにあたり、言葉の及ぶ能はざる事物を省略して筆を進むることあたかも行人が小川や溝のその道を横切るを見これを跳越えて進み行く如し

【聖なる詩】材を聖なる事物に取れる詩

六七―六九

船は才なり、海路は詩材なり、これをわけゆくは歌ふなり（天、二・一―七参照）

七〇―七二

【園】聖徒の群

七三―七五

【薔薇】聖母マリア。寺院の祈祷文に聖母を指して *Rosa mystica*

(奇くしき薔薇)といへり

【神の言】キリスト(ヨハネ、一・一四)

【百合】使徒達。即ち自ら例を示し福音を宣傳して人を正道に導ける者

七六一七八

【弱き眼の戦】弱き視力をもて強き光を視ること

七九一八一

【陰】雲の投ぐる。身陰にあるがゆゑに日は見えねどその光に照さるゝ處見ゆ

八二一八四

【本】キリスト

八五―八七

【印影を捺す】光を注ぐ

【慈愛の力】キリスト

【力足らざる目に】ダンテの視力猶足らずして未だキリストを見るをえざれば、キリスト自ら高く昇りてたゞその光の聖徒を照らすさまを見しむ

八八―九〇

【花】薔薇（七三行）

【生くる星】強く輝く星即ちマリヤ

【質と量】光の燦かさと大きさ

九四―九六

【燈火】天使ガブリエル。神子の降臨を告げ知らせんとてマリアの許に來れる天使なれば（淨、一〇・三四以下參照）。今また聖母の周圍まはりをめぐりて歌ふなり

九七―一〇二

【琴】ガブリエル

【天】エムピレオの天

【碧玉】マリア

【裂けて】電光の爲に

一〇三―一〇五

以下一〇八行までガブリエルの歌

【天使の愛】愛に燃ゆる天使

【われらの願ひ】われらの願ひの目的なるキリスト めあて

【胎よりいづる】たふとき悦びの出づるところなる胎のまはりをめぐる

一〇六一—一〇八

【至高球】エムピレオ

一一二—一一四

以下、マリアはキリストのあとよりエムピレオに歸りてダンテの目にかくれ、残れる聖徒達は聖母に對する愛を顯はしかつ調妙しらたへに聖母頌を歌へるを敘す

【諸天】volumi (圓または回轉)、月天より恒星天までの八個の

天。これらの天を蔽ふ衣は第九天（プリーモ・モービレ）なり、この天はエムピレオに最近いときがゆるゑに直接に神の靈感とその性さがとをうけて熱いと強く生氣いと盛なり

【熱】至高の天を慕ひてこれに近づかんとするの愛（『コンヴェイオ』二・四・一九以下参照）

【生氣いと】その 轉の速度他の諸天にまさるをいふ
一一五——一七

【内面】圓の内面。第八天にありて第九天を望むがゆるゑにかく言へり

一一八——一二〇

【霜を戴き】ガブリエルの冠（九四——六行参照）を指す

【焰】聖母

一二七—一二九

【レーギーナ・コイリー】 Regina coeli (天の女王)、更生祭の
 頃寺院に歌ふ頌詠にてその全文左の如し (但し各行アレルヤに終
 る、略して記さず)

天の女王よ、歡べ

適はしくも汝の生みたる者は

聖言みことばの如く甦りたればなり

われらの爲に神に祈れ

歡び樂しめ、處女をとめマリアよ

主はまことに甦りたればなり

一三〇—一三二

これらの聖徒達が下界に積みし功德によりて、今天上に享くる福はいかに大なる哉

【櫃】聖徒達

【地】bobolce 一區域の地（畠）をいふ。但し農婦又は種蒔く女の意に解する人あり

一三三—一三五

【バビローニアの流刑】地上の生活。昔ヘブライ人が虜となりてバビローニア（バビローニア）に移されし（列王下、二四—五章）ごとく、人は天の郷土を離れて地上に移り住めばなり（浄、二二

・九四—六参照）

【黄金を】富貴を地上に求めず、悩み苦しみの中にて寶を天上に貯へしなり

一三六―一三九

【鑰を保つ者】使徒ペテロ（地、一九・九一―二參照）

【舊新二つの集會】舊新兩約の諸聖徒

第二十四曲

聖ペテロ、ダンテに信仰の事を問ふ

一―三

【羔】キリスト

【食を與へて】神恩限なきが故に聖徒の願ひ常に滿つ

【晚餐】羔の晚餐の事、聖書に出づ（黙示、一九・九）。キリストの備へ給ふ晚餐は即ち天上の福なり、ルカ傳一四・一五に曰く、神の國にてパンを食ふ者は福なりと

【侶等】聖徒達

四―六

【落つる物】食物の遺屑くづ。これを集めて食するは、未だ聖徒と伍せざるさきに、あり餘る天上の福の一部を味ふなり（『コンヴェイオ』一、一・六七―七七参照）

七―九

【願ひ】求知の念

【露】知識の

【思ふ事】知らんと欲する事。その源は知識の泉なる神

一〇―一二

【球】（複數）、軸を中心として　　る球の如くかの聖徒等はベア

トリーチエ及びダンテを中心とし多くの輪を造りてめぐれり（天、

一〇・七六―八参照）

一三―一五

【初めの輪】最も内部にありて最も小なるもの、その　　る事最も遅し。而して終りの輪は最も外部にありて最も大に、その　　ること最も速し

一六一—一八

【球】carole 圓形に舞ふ舞のこと、こゝにては舞ひめぐる諸靈の群

【富を量る】舞の遲速によりてその群の幸福の大小を判ず（天、八・一九—二一參照）

一九—二一

【一の火】使徒ペテロ

【福なる】福の大なるは光の強きによりて知らる

【かしこ】かの球

二二—二四

【三度】三は完全數

二五―二七

【劈】 註釋者曰く。衣裳を畫くに當り、劈ひだにぢみなる色を用ゐて他の部分と區別す、はでなる色を用ゐる時は劈なることを知り難し、さればひだに適ふはしき色を所持せぬ畫家の己が技わざをこゝに施しえざる如く、われらの不完全なる想像はかくまで尊くけだかき歌を思ひ浮ぶる能はざるなりと

二八―三〇

ペテロの詞

三四―三六

【われらの主が】地、一九・九一―二參照

【奇しき悦び】天堂。鑰は即ち前曲の末に「榮光の鑰」といへる

もの

三七—三九

【海の上を】ペテロがキリストにならひて海上を歩めること（マタイ、四・二二以下）

四〇—四二

【ところ】神（天、一五・六一—三参照）

四三—四五

汝問はざるもよく彼の心を知る、されど信仰は人の救の要素なれば、彼をしてこれが事を語りてその尊さを顯はさしむべし

四六—四八

【學士】Baccelliar 大學の業を終へ、さらに高き學位の候補者た

るを得る者。かゝる學位を得るに當り、中古の例に従ひ、まづ教師の提出する若干の問題を論證す

【決るためならず】提案に對する論證の主意をとりまとめて決論を下すは教師の爲す事なればなり

五二―五四

以下、ペテロ問ひダンテ答ふ

五五―五七

答ふるに當りてまづベアトリーチエの許を得

五八―六〇

【長】 *primpilo* ローマ軍隊の話にて、第一隊の百夫長、戰に臨み

最先に槍を揮ふ者。ピエートロは寺院屈指の勇士ますらをなればかく

【恩恵】神の

六一―六三

【ローマを正しき】ローマ人をキリストの教へに歸せしめし

【汝の愛する兄爲】パウロ（ペテロ後、三・一五参照）

【録す】ヘブル書（パウロの筆と信ぜられし）に

六四―六六

【信仰とは】ヘブル書一・一。但しダンテはヴルガータにもとづきかつこれが解釋をトマス・アクイナスの『神學大全』に採れり

七〇―七五

天上にありて今わが明に認むるを得る靈界の事物は、官能により

て知らるゝものにあらざるが故に、地上の人目にてこれを視るをえず、たゞ信仰によりてこれが存在を許容するのみ、人はこの信仰を基礎とし、その在りと信ずるものを親しく視るに至るの望み、換言すれば福祉を得るにいたるの望みをその上に築くがゆゑに信仰は即ち基に當る

七六一七八

また人は靈界の事物をば他の證あかしを用ゐず（他の物を見ず）たゞ信仰の證によりて（即ち信仰にもとづく推理によりて）まこと眞とすべきものなるがゆゑに信仰は即ち證にあたる

七九一八一

【凡そ教へに】凡そ教訓によりて世人の學ぶ所のもの、汝が信仰

を解する如く明確に解せられなば、詭辯者世にその才を施すの餘地なからむ

八二―八四

【この貨幣】信仰

【混合物とその重さ】合金の割合及び重さの如何によりて貨幣の眞偽を判ずる如く手落なく信仰の何たるを検せりとの意

八五―八七

【己が財布の】己が心の

【それを鑄し様に】贋造の疑ひなきまで（その眞なるを疑はざるほど）この貨幣（わがいだく信仰）は光りて（純にして）圓し（完し）

八八—九〇

【珠】信仰

九一—九三

【舊新二種の】舊新兩約書に注ぐ聖靈の恵めぐみ。即ち聖書に滿つる生産の示現

【皮】書ふみ。昔は文字を羊皮に録せり

九七—九九

【命題】 Proposition 三段論法における大小二の前提、こゝにては舊新兩約書、この兩書はダンテの信仰の眞なるを證するものなるが故にその決論に對する前提に等し

一〇〇—一〇二

聖書が神の言なることを證するものはこの言にともなふ奇蹟なり

(マタイ、一六・二〇参照)

【自然が】自然の鍛へ上げ作りあげしにあらざる業わざ、即ち超自然の美

一〇三—一〇五

【自ら證を求むる者】聖書。聖書にのみ録しるさるゝ奇蹟によりて聖書の教への天啓なるを證せんとするは論理の原則に反すればなり

一〇六—一〇八

【奇蹟なきに】キリスト教の世に弘まれるは、とりもなほさず奇蹟の實際に行はれし證左なり、奇蹟なくしてかく弘まれりとせば、そは聖書中のすべての奇蹟を集むとも猶遙に及ばざるほど大いな

る一の奇蹟なればなり。但しこの論法は昔より寺院の人の用ゐるもの

一〇九―一一一

最初キリスト教を世に宣傳へし人々が奇蹟の助けによらざればこれを弘めえざる境遇にありしをいへり

【良木の】良木の種を蒔くはキリスト教の信仰を植うるなり

【葡萄】寺院は園の如し（天、一二・八六参照）、その樹昔葡萄にて有徳の實を結びたれど今荆棘に變じて實なし

一一二―一一四

【われら神を】テー・デウム・ラウダームスの歌（浄、九・一三

九―四一参照）

【諸の球】多くの輪を造れる聖徒達（二一行）

一一五——一七

【枝より枝】問より問。梢はその最後の個條

【長】baron 對建時代における領主の稱號より轉じて君主、偉人の義に用ゐるまた聖者達の尊稱として用ゐしことあり

一一八——二〇

【契る】domes（婦人と睦びかたらふ義）、神恩と心との緊密なる關係を表はす。汝を愛し汝の心に宿りて汝を助くる神の恵み

一二一——一二三

【出でしもの】汝の答

一二四——二六

【墓の】キリストの屍その墓に在らずと聞き、ペテロ（ピエートロ）とヨハネ共に馳せて墓に向ふ、ヨハネまづかしこに至る、されど第一にその内に入れる者はペテロなり（ヨハネ、二〇・一以下）

ヨハネ傳に「見て信ぜり」（同上八）とあるによりダンテはペテロの信仰ヨハネにまさりゐたりと解せり

【もの】榮光のキリスト

一三〇—一三二

【愛と願ひと】神を愛するの愛と、神を慕ひ神に近づかんとするの願ひとを與へて。この愛この願ひあるが故に諸天運行す（天、

一・七六—七參照）

一三三—一三八

古より行はれし類別に従ひて舊新兩約書を擧ぐ、即ちモーゼの五書、豫言者の諸書及び詩篇は舊約書にて、四福音書及び使徒達の諸書は新約書なり

【燃ゆる靈に】聖靈の助により心に光明をえて後諸書を録せる使徒達

【こゝより】天より地に

一三九—一四一

【ソノといひ】ソノ (sono) は在りの複數形にてエステ (este*) はその單數形なり、三として複數動詞を用ゐるとも一として單數動詞を用ゐるともいづれにてもよしとの意

* *esta* はラテン語の *est* をイタリア化したるものにて當時の散文にもその用例ありといふ（フラティチエルリ及びパツセリーニ註参照）

一四二―一四四

【福音の教へ】マタイ傳二八・一九、ヨハネ傳一四・一六、コリント後書一三・一三等

一四五―一四七

【是ぞ源】神の三一を信ずることは即ち信仰の第一義にて、その他の信條皆これより出づ

第二十五曲

聖ヤコブ、ダンテに望みの事を問ふ、その後また聖ヨハネ現はれ己が内體に關するダンテの疑ひを解く

一—六

以下一二行まで、信仰の試問を敘し終れる時ダンテはその信仰の始めを思ひて「聖ジヨヴァンニの洗禮所」に及び郷土フィレンツエをしのぶあまり、たゞ一個の詩人としてかしこに歸るの望みあるを陳ぶ

【手を下し、】材を供せる。『神曲』は天上の事と地上の事とともに歌へるものなればなり

【圈】ファイレンツエ（天、一六・二五―七参照）

【狼】悪くして強き者（ファイレンツエ市民の）

【羔】善くして柔和なる者

【閉め出す】残忍なる敵の怨みを受けてファイレンツエを逐はれしこと（『コンヴィヴィオ』一、三・二〇以下参照）

【勝つ】この詩によりてかの市民等わが詩才を認め、詩人の譽の爲我を郷土に歸らしむることあらば

七―九

【變れる聲】地上の戀愛を歌はずして壯嚴なる天上の事物を歌ふ聲

【變れる毛】（毛は原語羊毛とあり、五行の羔に因みてなり）老

いて白髪となること

【わが洗禮の盤のほとりに】「聖ジョヴァンニの洗禮所」にて

(地、一九・一六―二一註参照)

一〇―一二

【かしこにて】かの洗禮所に洗禮を受けてキリスト教の信仰に入り

【魂を神に】人信仰に由て神に近づく事を表はす

【これが爲に】この信仰の爲に

一三―一五

【初果】聖ペテロはキリストがその最初の代理者として世に残し給へる者

【球】輪を造れる聖徒の一群（天、二四・一九―二〇）

【一の光】使徒ヤコブ（使徒ヨハネの兄弟）

一六一―一八

【長】barone（天、二四・一一五―七註参照）

【ガーリツィア】聖ヤコブはイスパニア、ガーリツィア州なるサンティアゴ・デ・コムポステラに葬らるとの傳説により、中古かの地に行きてその宮に詣づるもの甚だ多かりきといふ

二二―一四

【ひとりの】聖ヤコブ

【他の】聖ペテロ

【糧】神恩の糧（天、二四・一以下参照）

二八一—三〇

【録しゝ】ヤコブ書（一・五、一七参照）に。ダンテはその頃行はれし説に従ひヤコブ書を聖ヨハネの兄弟なるヤコブの書（ふみ）と思へるなり

三一—三三

【響き渡らす】ダンテと語りて

【己をいとよく】その神人の兩性を最もよく三人に顯はし給ひしヤイロの女の蘇生（マルコ、五・二二以下等）、キリストの變容（マタイ、一七・一以下等）、ゲツセマネの園の祈祷（マタイ、二六・三六以下等）の時主と共にありし者はたゞペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人のみなりき、ダンテはかゝる場合に主がかれらを教

理の三徳即ち信仰（ペテロ）と望み（ヤコブ）と愛（ヨハネ）との象徴たらしめ給へりとの神學説に従へるなり

三四—三六

ヤコブの詞

【人の世界より】人間界より天上に登り來る者の諸官能はわれらの光に慣るゝによりて前よりも強く全きにいたる（熟す）がゆゑに後よくこれに堪ふるを得。

三七—三九

【山】ペテロとヤコブ。即ちさきにその強き光をもてダンテの目を垂れしめし者。山はその位の高きを表はす

四〇—四二

神はその恩寵により、汝の生きながら登り來りて諸の聖徒達と御座近き天堂にて會ふことを許し給ひ

四三―四五

【正しき愛】神を愛するの愛。神に近づくをうるの望みこの愛を促すなり

四六―四八

【汝の心に咲くや】汝いかばかりの望みを心にいだくや

四九―五一

【我より先に】ベアトリーチエ、ダンテに代りて第二問に答ふ、ダンテ自ら己が望みのすぐれて大いなるをいはんは適はしき事ならざればなり

五二―五四

【日輪】凡ての聖徒を照らし給ふ神

【戦闘に參る寺院】 Chiesa militante (戦闘の寺院)、地上の信徒。
 天上の聖徒を Chiesa trion-fante (凱旋の寺院) といふに對す

五五―五七

是故に彼はその未だ死なざるさきに、人の世より天に來ることを許さる

【エジプト】昔ヘブライ人がエジプトに奴隸たりし事あるに因みて人の世をエジプトといへり(淨、二・四六―八註參照)

【イエルサレムメ】天堂。活いくるかみ神の都なる天のイエルサレム

(ヘブル、一二・二二)

五八一六〇

【知らんとてならず】神によりて既に知ればなり（天、一七・一〇——一二参照）

【傳へ】世に

六七—六九

第一問の答

【望みとは】ダンテはこゝにペトロス・ロムバルドウスの教法集（天、一〇・一〇六—八註参照）第三卷に見ゆる望みの定義を譯出せり

【先立つ功德】人の善まづよく神恩と合するに非ざればその望みは空にして眞の望みにあらず

七〇―七二

以下七八行まで第三問の答

【光】即ち望み

【星】聖經諸書の作者

【最大いなる導者】神

【最大いなる歌人】王ダヴィデ

七三―七五

【爾名を】詩篇九・一〇。但しヴルガータに據れり。神を信じ聖^み名^なの尊さを知る者は天の榮光を待望むべし

七六―七八

【かれの雫と】ダヴィデの言とともに汝の言は我に望みを起さし

め

【書のうち】ヤコブ書には望みの事を明に言へる處なし、されど望みを起さしむべき言葉はこれあり（一・一二、二・五等参照）

七九—八一

【かの火の生くる懷】聖ヤコブの放つ強き光の正たゞなか中に

【とある閃】ダンテの答に満足してその喜びの増すを表はす

八二—八四

【棕櫚をうるまで】教へに殉ずる時まで（使徒、一二・二）。棕櫚は勝利のしるし

【戦場を出づる時】死する時（戦場なる世を去る意）

【徳】望み。人天上の榮を享くればその望みすべて遂げ、またさ

らに望む所なし、たゞこの望みを徳としてなほこれを愛するのみ
八八―九〇

【新舊二つの】聖書は我に望みの目的めあてを指示せば、我はその示す
所によりて望みの約するものを知る

【神が友と】神の選び給へる魂（天、一二・一三〇―三二参照）
或はこの一行を次の一聯と連ねずして「新舊二つの聖經みこみは、神が
友となしたまへる魂の目的を表はす、この目的こそ我にこれを指
示すなれ」と讀む人あり

九一―九三

【イザヤは】イザヤ六一・七に。但しダンテはヴルガータの dup
licia（二倍）を十節の衣の意を承けて二重の衣（靈と肉との受く

る福)の義とし、*terra sua* (己が郷土)を人間の眞の郷土なる天堂の義とせり。靈肉相合して人はじめて全し、故に人の至上の幸福は死後肉體復活して靈體と合し共に天上永遠の福祉を享くるにあり、人に望みの約するものまたこの幸福に外ならず

九四—九六

【汝の兄弟】聖ヨハネ。黙示録(七・九以下)にて

九七—九九

【スペーレント・イン・テー】*Sperant in te* (望みを汝におかむ)、詩篇九・一〇(七三—五行註參照)

一〇〇—一〇二

【一の光】聖ヨハネ

【巨蟹宮に】磨羯宮の反対面にある巨蟹宮の星は初冬の頃日出と共に入り日没とともに出づ、故にもし巨蟹宮に聖ヨハネの如く輝く一の星（水晶）あらば冬の一個月（即ち太陽磨羯宮にある間）は夜なきにいたらむ

一〇三——一〇五

【短處】虚榮

一〇六——一〇八

【愛に應じて】愛の多少に應じて　　る早さに差別あるなり。二の光はペテロとヤコブ

一一二——一一四

【われらの伽藍鳥】キリスト。伽藍鳥は己が血を注ぎて、死せる

雛を蘇生せしむとの傳説（くはしくはスカルタツツイニの引用せるブルネット・ラティ―ニ著『テゾーロ』の一節參照）により、キリスト即ち十字架の血にて人類を生きかへらしむる救世主の象徴として中古弘く用ゐられきといふ

【胸に倚りし者】聖ヨハネ。最後の晚餐の時主の胸に倚りたり（ヨハネ、一三・二三）

【大いなる務】主に代り、子としてマリアに事ふること（ヨハネ、一九・二六―七）

一一五―一一七

【その言の】かく言ふ間も日を移さずしてかの使徒達を見つめたり

一一八——一二〇

太陽の分蝕を見んと力むる人は見んとするが爲に目くらみて何物をも見る能はざるにいたる

一二一——一二三

【最後の火】最後に現はれし光即ちヨハネ

【汝何ぞ】ヨハネの詞。ダンテはヨハネが肉體を有するや否やを見んとて特にこれを凝視みつめたり、これキリストがヨハネについていへる言葉に「我もし彼のわが来るまで残るを欲すとも」云々（ヨハネ、二一・二二）とあるにもとづきヨハネは肉體のまゝにて天に登れりとの傳説行はれたるによる

一二四——一二六

【われらの數】われら選ばれし者の數。神の豫め定め給へる聖徒の數の滿つるまで（黙示、六・一一參照）、換言すれば最後の審判の時まで

一二七—一二九

今天在りて靈と肉とを具備する者は、たゞキリストとマリアのみ、汝これを世人に告げてその誤りを正すべし

【二襲の衣】靈と肉、

【僧院】天堂（淨、一五・五五—七參照）

【昇りし】今より少しくさきにエムピレオに昇りし（天、二三・八五—七、及び一一二以下）

一三〇—一三二

【三の】三使徒の。聖ヨハネのさらに語りいづるに先立ち舞と歌
とともにやみしこと

一三三—一三五

【笛】掛りの者の相圖の笛

一三六—一三九

【福の世に】天に在りて世の常ならぬ視力を有しつゝ

【見るをえざりければ】聖ヨハネを見つめし爲その先に目くらみ
て淑女を見るをえざりしなり

第二十六曲

聖ヨハネ（ジヨヴァンニ）、ダンテに愛の事を問ふ、ダンテ答へ
終れる時始祖アダムの靈現はれ、詩人の望みに應じて己が昔の物
語をなす

一—三

【危ぶみ】視力の滅びしにあらざるかと

【焰】聖ヨハネの光

七—九

【汝の魂】愛の向ふところを問へり

一〇—一二

【アナーニア】ダマスコの人、主の命に従ひサウロ（使徒パウロ）

を訪ひて手をその上におき、彼をして再び物を見るをえしむ（使徒、九・一〇以下参照）

一三一—一五

【絶えず我を】ベアトリーチエは愛の火をもてダンテの目より入來れり、即ちダンテはベアトリーチエのけだかき美しき姿を見て愛の火に燃えしなり

一六一—一八

天堂の諸聖徒を凡て満足せしむる善即ち神こそ、愛の我に與ふる強弱一切の刺戟の始めまた終りなれ。換言すれば、わが愛といふ愛ことごとく神にむかふ

【わが爲に讀むかぎりの文字の】 *di quanta scrittura Mi legge* 異説

多し。スカルタツツイニ曰く、淨、二・一一二にては愛、心の中に物言ひ、同二四・五二以下にては愛、衷に口授し、こゝにては愛、衷なる文字を読む、こは衷なる書ふみに既に録しるされし文字即ちダントのいだく愛の事なり、されば「愛のわが爲に讀むかぎりの文字」とは愛に關してわが内にある凡てのもの即ちわがすべての愛をいひ、この愛を記録の一部心の書ふみの一筆の如く見なせるなり、ダンテの言は歸する所、わがすべての愛の目的めあては神なりといふに同じ、またこれに加へて「或ひは低く或ひは高く」（原、或ひは軽く或ひは強く）といへるはそのいだく愛といふ愛ことごとく神に獻げらるるとの義なり云々

【アルファ、オメガ】始め、終り。ギリシア字母の最初の文字と

最後の文字（黙示、一・八参照）

一九―二一

【我をして】次の如く我に問ひ我をして

二二―二四

さらに明細に汝の思ふ所を述べ、誰が汝をして神を愛するに至らしめしやを我に告ぐべし

二五―二七

【こゝより降る】天より降る權威ある言、即ち聖書に現はるゝ天の啓示。ダンテの愛の動機は人と天との二つの教へなり

二八―三〇

以下三六行までの大意左のごとし

愛の向ふ所善にあり、善いよく全ければ愛またいよく大なり、神は至上の善にまします、故にこれを愛するの愛従つて最も大いならざるべからず

【その善なるかぎり】即ち善と認めらるゝかぎり

【知らるゝとともに】智によりてその何たること悟らるゝと同時に

三一—三三

神以外の善はたゞ至上の善なる神の一顯現、その榮光の一光輝に過ぎず

三四—三六

【この證】萬物にまさりて神を愛すべき理由

【眞理】神は至上の善なること

三七―三九

【永遠の物】諸天、天使、及び人の魂等。これらの被造物は皆神を慕ひ神を望む

【示すもの】物皆その第一原因と結ばんとするの願あることを教へし哲人として註釋者多くはアリストテレスを擧ぐ。但し異説多し

四〇―四二

【眞の作者】その言に偽りなき者即ち神。神自らモーゼに告げて「我汝に一切の善を見すべし」（ヴルガータ、出エジプト、三三・一九）といひ自らその善の完全なるを明し給へりあか

四三—五五

【尊き公布】黙示録。特にその一の八に「我はアルファなりオメガなり始めなり終りなり」と言給へる全能者の言を傳へて神は一切の善の源なる意を寓し示せること

【こゝの秘密を】天上の秘密を聖書の他の部分にまさりて強く下界に響かしむること

四九—五一

【幾個の齒にて】齒にて噛むは刺戟を與ふるなり、汝の愛を神に向はしむる者理性と天啓の外に猶幾いくばく許ありやいへとの意

五二—五四

【クリストの鷲】聖ヨハネ。黙示録四・七に出づる鷲を望ヨハネ

の象徴と見なす説にもとづき、キリスト教藝術にてはヨハネを往々驚にて表はす

【隠れ】我に隠れ。ダンテはヨハネの思ひのある所を直ちにさとれるなり

五五―五七

【齒をもて】心を神に向はしむる一切の刺戟は皆我愛と結び合ひ、我をしてわが凡ての愛を神にさゝぐるにいたらしむ

五八―六〇

天地人類の存在によりて造物主の至善を知り、人類を救はん爲キリストの死し給ひし事を思ひて神の至愛を知り、天上永遠の幸福

(望むもの)を思ひて神の至恩をしのび

六一—六三

【認識】神は至上の善なりとの。「生くる」は確たる

【悖れる愛】地に屬する物の愛（淨、三一・三四—六參照）

六四—六六

【葉】被造物、即ち神（園丁）のしろしめす宇宙（園）に遍く満つるもの。「隣」を愛する（マタイ、一九・一九等）の愛を指す

六七—六九

【聖なり】黙示録四・八に出づる頌詠によりて全衆神を讚美せるなり

七〇—七二

【物見る靈】*spirito visivo* 視神經を往來して、物を見るをえしむ

る力、即ち視力（『コンヴィヴィオ』二・一〇・三二以下参照）

【膜より膜に】光は眠れる者の目の膜より膜に進み入り、目の視力はこれに向ひて進むがゆゑにその人覺む

七三―七五

【判ずる力】 *estimativa* 思ひめぐらす力。この力によりて己が覺めし次第を知り、あやしまずして己が前にあるものを見るを得

七九―八一

【第四の光】始祖アダムの靈

八二―八四

【第一の力】神

【第一の魂】最初の人間即ちアダム

九一—九三

【熟して結べる】アダムは造られし時既に大人なりければかく

【唯一の】スカルタツツイニ曰く。エヴァはアダムの一部なれば特にいはず、アダムがアダムとエヴァの意に用ゐられし例聖書に多し（創世、三・二二—四、ロマ、五・一二以下等）と

【新婦と】いかなる新婦もアダムの裔なればその女に當り、アダムの裔なる男子に嫁すればその子婦よめに當る

九七—九九

【包まれ】衣などに

【願ひ】包みし物より脱るゝ願ひ。但し包みし物の動くによりてその内なる獸の願ひの表はるゝを、蔽はるゝ光の一きは輝き渡る

によりてその内なるアダムの願ひ（ダンテの望みをかなへんとするの）の現はるゝに比べしのみ

一〇六一—一〇八

【鏡】神（天、一五・六一—三参照）

【萬物を】萬物は皆完全に神の鏡に映ず、故に神を視る者よく萬物を視る、されど一物として完全に神を映すはなし

【己に映せど】 [fa di se` pareglio] 註釋者曰く。pareglio (=parelio) とは太陽の光線の屈折によりて空中に現はるゝ他の太陽の如きものをいふ、反映の義これより生ず、即ちこの句は己を（萬物の）反映者たらしむ換言すれば（萬物を）己に映らしむる意なりと

但しこの項異本あり、また異説多し

一〇九——一一一

以下一一四行まで、ダンテの間四あり、(一)アダムの造られし時より今に至るまで幾年経たるや、(二)アダムは樂園に幾許の間住みしや、(三)その犯せる罪の性質、(四)その用ゐし言語

【長き階】 諸天

【高き園】 淨火山上の園即ち地上の樂園

一一二——一一四

【大いなる憤】 人類に對する神の怒り

一一五——一一七

第三問の答。但し當時の神學説に據れり

【流刑】樂園を逐はれし事。その眞の原因は木の實を食へるその事に非ずしてこれに伴ふ不従順と傲慢となり、即ち食ひて神命に背けるのみならず、その食へるは己を神の如くにせんとそむの僭上心より出でしなり

トマス・アクイナスの『神學大全』（二、二、一六三・一）に曰く。人間の最初の罪は己が度を超えて靈の福を望めるにあり、これ傲慢に屬す、知るべし始祖の最初の罪は傲慢なりしを

一一八一—一二〇

以下一三三行まで第一問の答。アダムは地に住めること九百三十年（創世、五・五）、リムボに在ること四千三百二年なり、而してキリストの死即ちアダムがリムボを出でし時より神曲示現の年

までは千二百六十六年（地、二一・一一二—四並びに註参照）なればアダムの造られし時よりこの時に至るまでの間はすべて六千四百九十八年なり

ダンテは古の史家の説に従ひ、人類の創造よりキリストの死にいたるまでの間を五千二百三十二年となせるなり

【處】地獄のリムボ。ベアトリーチエこゝに降りウエルギリウスに請ひてダンテの急を救はしむ（地、二・五二以下参照）

【この】天上の諸聖徒の

一一二—一一三

【すべての光】太陽が一年間に通過する十二宮の星

一一四—一一六

以下一三八行まで第四問の答

【ネムブロット】バベルの高塔（成し終へ難き業）の建築者として（地、三一・七六―八並びに註及び淨、一二・三四―六並びに註参照）

【悉く絶え】ダンテは『デ・ウルガーリ・エーロクエンチアー』（一・六・四九以下）に、アダムの用ゐし言葉がバベルの高塔建築の時まで用ゐられその後もヘブライ人によりて用ゐられしこと即ちアダムの言葉はヘブライ語なりしことをいへり、こゝにてはこの説を正してかく

一二七―一二九

【天にともなひて】星辰の影響に従つて

【理性より生じ】言語もまた理性の一産物なり

一三〇—一三二

思想感情を表白するは自然の作用なれども、その方法にいたりては人間自由の選擇に屬す

一三三—一三五

われ在世の頃神はIイと呼ばれたり

Iの由來知り難し、恐らくはダンテの創意ならむ、アダムの用ゐし言語はすべて絶えたりといへば、ダンテの示さゞるかぎり、その意推し量はからんやうなし

この語と一三六行のEイについては異本多し（委しくはムーアの『神曲用語批判』四八六頁以下及びスカルタツイニ註参照）

一三六一—一三八

【四】ヘブライの古語にて強き者の義なりといふ。この語『デ
・ウルガリー・エーロクエンチアー』一、四・二九にも見ゆ、但
しアダムの用ゐし語として

一三九—一四二

第二問の答

【山】淨火の山、こゝにてはその巔にある樂園を指す

【第一時より】第一時は日出時に始まる、今傳説に従ひ天地の創造を春とすれば日出は午前六時頃なり、故にアダムが樂園に在りし間は午前六時頃より正午乃至午後一時（第七時）までの間即ち六時間乃至七時間なり

【日の象限を】太陽が象限、即ち圓の四分の一（六時間の行程、晝夜平分時には日出より正午まで）を轉り終りて他の四分の一にさしかゝるとき、第六時終りて第七時これに次ぐ

アダムの樂園に在りし間の時については古より種々の想像説あり、短きは數時間長きは三十四年なりき、ダンテは前説に従へり

第二十七曲

聖ピエートロ（ペテロ）その繼承者の腐敗を嘆ず、かくて全衆みなエムピレオの天に歸れば、ダンテは俯きてわが世界を見、後ベ

アトリーチエと共に第九天（プリーモ・モービレ）にいたる

四一六

【耳よりも目よりも】天堂の歌の妙なるに酔ひ、また全衆がさながら宇宙の一微笑の如くその悦びを表はしつゝ、美しき光を放つ光景に酔ひ

七一九

【富】天上の聖徒達はその富即ち福を失ふの恐れなく、またその福にてすべて足るがゆゑに他に求むる物あらず

一〇一一二

【四の燈火】三使徒とアダム。この中最初に来れるものはピエートロなり（天、二四・一九以下）

一三—一五

義憤の爲聖ピエートロの光赤色に變ず

【木星もし】木星もし火星と光を交換し、その白色變じて赤色とならば

一六—一八

【次序と任務とを】天上にては言ふにも黙すにも動くにも止まるにも各 その時（次序）あり、聖徒達は各 この次第に従つて或は言ひ或は動く（任務）、しかしてこれを定むる者は即ち神なり
一九—二一

【是等の者】共通の情は諸聖徒をしてペテロと同じく義憤を起さしむ

二二—二四

【わが地位】法王の位（ペテロは地上最初の法王なればなり）。これを奪ふ者とは主として神曲示現當時の法王ボニアキウス八世を指す

【神の子の】その器に非ずしてその位に坐す、是即ち篡奪者也、たとひ世に法王と認めらるるともキリスト、法王と認め給はじ、特にボニアアキウスは墮地獄の罪人かつは不正行爲によりて法王となれる者なれば（地、三・五八—六〇註及び地、一九・五二以下参照）位に在りとも無きに等し

二五—二七

【わが墓所】ローマ。傳説によれば使徒ピエートロかの地に葬ら

る

【血と穢との溝】無辜むこの血の流され（地、二七・八五以下参照）
種々の罪惡の行はるゝところ

【悖れる者】ルチーフエロ。神に背きて天より逐はれし魔王は聖なるローマが罪惡の府となれるを見、地獄にありてその心を慰むるなり

二八一—三〇

【色】赤色。オウイデイウスの『メタモルフオセス』（三・一八三以下）に、衣を脱ぎしディアナの姿を紋して「對へる日の光に染みし叢むらくも雲の色、または紅の朝の色」云々とあるに據れり

三一—三三

【淑女】身に恥づることなけれど、他人の罪を聞くに恥ぢてその顔を赤くす

三四―三六

【此類なき威能】キリスト。十字架上に死し給ひし時天暗くなりしこと聖書に見ゆ（マタイ、二七・四五等）。白色の光赤色に變じ、歡樂喜悅の光景悲憤のそれに變じたるを形容してかく

四〇―四二

【クリストの新婦】寺院。天、一〇・一三九―四一に「神の新婦」といへるもの

【わが血及び】われピエートロ及び初代の法王達が教へに殉じて寺院の基を起しかつこれを固めしは

【リーン、クレート】リーヌス、クレートウス。いづれも一世紀にローマの僧正たりし殉教者

四三―四五

【樂しき生】天上無窮の幸福

【シスト、ピオ、カーリスト、ウルバーノ】いづれも二三世紀頃ローマの僧正たりし殉教者

四六―四八

同じ教へを奉ずる民相分れ、一は法王の右に坐してその愛顧を得、一は法王の左に坐してその憎惡を受くることはわれらの志にあらざりき

ダンテの時代における朋黨を指していへり、即ちグエルファイが法

王の寵を得ギベルリニがこれに敵視せられしこと。但し左右の語は聖者より出づ（マタイ、二五・三三）

四九―五一

キリストの我に委ね給ひし天國の鑰をはたじるし旗標として同じキリスト教徒と戦ふこともわれらの志にあらざりき

十三世紀の頃法王の軍は寺院の鑰の標をその軍旗に用ゐるきといふ【受洗者と戦ふ】主としてボニアキウス八世がコロンナ一家と戦へるを指す、地、二七・八八に「その敵はいづれもキリスト教徒にて」といへるもの即ち是

五二―五四

法王等がわれペテロの像を表はせる印をその文書に捺してシモニ

アを行ひ人を偽ることもわれらの志にあらざりき

五五―五七

【暴き狼】強慾非道の僧侶等。この語聖書より出づ（マタイ、七

・一五）

五八―六〇

聖ペテロの豫言

【カオルサ人等】カオルサ（南フランス）の人にて一三一六年法王となりしヨハネス二十二世（天、一八・一三〇以下並びに註参照）及びその一味の者

【グアスコニア人等】フランスのガスコエアの人にて一三〇五年法王となりしクレメンヌ五世（地、一九・八二―四並びに註参照）

及びその一味の者

【我等の血を】われらの血にて築き固めし寺院を横領し、その産を私せんとす

【善き始め】創立當時の寺院を指す

六一―六三

【シピオ】スキピオ。ローマの大將スキピオ、ハンニバルの軍を敗りローマをして世界の覇權を保たしむ（天、六・五二―四註參照）

六七―六九

冬の日雪花片々として地上の空より舞下る如く

【日輪天の】十二月より一月にかけて太陽が天の十二宮の一なる

磨羯宮にある間

七〇—七二

【飾れる精氣】 聖徒の光にて飾られし第八天

【凱旋の水氣】 勝利の光に輝く聖徒

七九—八一

【はじめわが見し】 天、二二・一二七以下。ダンテはかの時よりこの方東より西に九十度をめぐりゐたり（即ち六時間を経過して）

【第一帯】 *primo clima* 古の地理學者は北半球を七帯に分てり、

即ち日の最長限を標準として定めしものにてその幅同じからず、いづれも赤道と平行して東より西に亘る長百八十度なり、その第一帯は赤道以北十二度六分の五より二十度二分の一までの間を幅

とす、ダンテの今居る處なる雙兒宮はかく地球の第一帶に當るべき天の一部にあり

【半よりその端に】帶の半即ちイエルサレムの子午線よりその端即ちイスパニアの子午線までの弧線（即ち九十度）。但しこはダンテが　　り終へし間の距離を示せるものにてダンテの位置をいへるにあらず

八二―八四

西の方にてはイスパニアのかなたに大西洋見え、東の方にてはフエニキアの岸見えたり

【ガーデ】ガデス。ジブラルタル海峽の附近にありと想像せられし島の名

【狂しき船路】大西洋、即ちオデユセウスが「權を翼として狂ひ飛び」（地、二六・一二五）しところ

【近く】西の方遠く大海を望むに對して

【エウローパ】エウロペ。フェニキア王アゲノルの女。ゼウス牡牛に化してこれを誘ひ背に載せて去る（『メタモルフオセス』二・八三二成下參照）。地、五・四に出づるミノスは即ちゼウスとエウロペの間の子なり

フェニキアの岸はイエルサレムと殆んどその子午線を同うす、故にフェニキアの岸を見たりといふは猶イエルサレムを見たりといふ如し

八五―八七

【一天宮餘】ダンテは雙兒宮に太陽は白羊宮にあり、而してこの二宮の間に金牛宮あれば一天宮餘といへり、即ち太陽は三十度餘さらに西に進みたるなり

【小なき麥場】人の世界（天、二二・一五一）

【なほ廣く】フェニキアの岸よりもなほ東の方を

イエルサレムの先の見えざるは眼界の限られたるに非ずして日の光の及はざるなり、即ちこの時はガーデの正午イエルサレムの日没と知るべし、ダンテは太陽より後るゝこと一天宮餘なれば註釋者或ひはその位置をイタリア（ガデスより四十五度。但しダンテの計算に従ふ）の直上とすまうへ

天、二二における俯瞰當時の太陽は即ちイエルサレムの子午線に

あり、故にダンテは東の方ガンゼを見るをえ、その後二時間餘にして西の方ガデスを見るを得、さればダンテが雙兒宮にありて全地を視るに要する時間は即ちこの二時間餘なり

この項の解説概ねムーアに従ふ、委しくはその『ダンテ研究』第三卷六二頁以下を見よ（*cima*の解説については同書一三二頁以下参照）

八八―九〇

【常よりも】卑しき地球を見しによりてへ天、二二・一三六―八参照）

九一―九三

【自然や技】淨、三一・四九―五一参照

【餌】 *pasture* (鳥を誘ふ爲の食物) 美。自然は肉體に技は繪姿にその美を示す

九七—九九

【レーダの美しき巢】 雙兒宮。レダ(レーダ)の二子カストルとポリュデウケースが雙兒宮の星となれりとの傳説に據る(淨、四・六一—三註參照)

【いと疾き天】 プリーモ・モービレ(原動)。また全く透明なるによりて *cielo Cristallino* (水晶天)ともいふ(『コンヴィヴィオ』二、四・九以下參照)

一〇〇—一〇二

【孰れを選びて】 この天のいづれの部分に我を着かしめしやを

一〇六一—一〇八

宇宙の中心にある地球は静止し諸天及びその内なる一切の被造物は運行す、これ宇宙自然の作用にてこの作用の始まる場所は第九天なり

一〇九—一一一

【處なし】その存在する處なし。他の諸天は各 その上なる一の天に包まれその内に處を占むれど、第九天は然らず、たゞ神の聖み意こころのうちに包まる

第九天はエムピレオの天に蔽はるれどエムピレオは神の御座みくらゐにて他の諸天の如く物質より成るにあらねばかく言へり

【愛】第九天はかのエムピレオの天を慕ひその各部かの天の各部

と結び合はんとして　　る（『コンヴィヴィオ』二・四・一九以下

参照）

【降す力】その下なる他の諸天に及ぼす力（天、二・一一二—四
参照）

一一二—一一四

光と愛との満ち充つるエムピレオの天は第九天を蔽ひ、その状あ
たかも第九天が他の諸天を蔽ふに似たり、而してエムピレオの天
を司る者はこれを包む者即ち神のみ

一一五—一一七

【測られじ】第九天は他の諸天の運行の源にて諸天にそれ／＼
その運動の力を頒つものなれば、諸天運行の測定の本は第九天に

あり、されど他の諸天の運行は各 異なるがゆゑに其一によりてその源なる第九天の運行を測定し難し

【十の】五を二倍し二を五倍して十なる數をうる如し。但しこは單に完全なる測定の可能性を示せるに過ぎざるならむ

一一八一—一二〇

時なるものは諸天體日毎の運行にもとづきて定めらる、第九天は運行の本なり、故にまた時の本（根）なり

【鉢】第九天。その運行目に見えず知り難し、根のかくれて知れざる如し

【他の諸 の鉢】他の諸天。人その運行によりて時を測るを得、葉の顯れて知らるゝ如し

一二一—一二三

以下一四一行まで、ベアトリーチエはダンテの地球遠望に因み一
轉して人間の私慾を難ず

一二四—一二六

人に善心の花は咲けども、惡の誘ひに惑はされて、善行の實は結
はじ

【惡しき實】 *bozzacchioni* 李が花より實に變る頃長雨の爲發育宜
しきを失ひ蟲に冒されて食ふべからざるに至るをいふ

一三〇—一三二

人生長すれば幼時の順良を失ひ、寺院の法をも守らざるにいたる
【いかなる月の頃】いかなる時、即ち斷食を守るべき時にも然ら

ざる時にも。特に月といへるは満月より數へて斷食の日を定むるの例あればなり

一三六―一三八

人間の性情が前記の如く善より惡に變ずるさまはあたかもその肌が年とともに幼時の美しき色を失ふに似たり。但しこの一聯異説多し

【殘しゆくもの】太陽

【美しき女】人間。天、二二・一一六に太陽を「一切の滅ぶる生命の父」といひ、また『デ・モナルキア』（一・九・六一七）にはアリストテレスの言を引用して「人は人と太陽とより生る」といへり

一三九—一四一

【治むる者なき】法王ありてその座空しく（二二—四行参照）、
皇帝ありてその實なし（淨、六・七六以下参照）

一四二—一四四

以下偉人出現の豫言

【百分一の】ユーリウス・カエサルの改正曆に従へば一年は三百六十五日と六時間にて、これを實際の年に比すれば一年に約十二分即ち一日の約百分一の差あり、この差積りて百餘年に一日となる、されは幾千年の後には曆日實際の日を超えて遠く離れ第一月は冬ならずして春なるに至らむ（ムーアの『ダンテ研究』第三卷九五頁以下参照）

ユーリウス暦は一五八二年法王グレゴリウス十三世によりて改められき、ダンテの時代に暦日と實際の日との間に、八九日の差ありしもこの誤りによりてなり

但しこゝの文意は單に「久しからずして」といふごとし
一四五―一四七

【艫を】嵐が船の方向を變ずる如く偉人は人を惡より善にむかはしめ

【千船】人類

一四八

【眞の實】一二四―六行參照

第二十八曲

ダンテ第九天にて、九級の天使より成る九個の輪を見、ベアトリーチエの教へを受く

一—三

【天堂に置かしむる】 *imparadisa* (わが心を高めて) 天堂の事を思はしむる

但し、(わが心に) 天堂の悦を與ふる意に解する人あり

四—六

以下二一行まで、ダンテがベアトリーチエの目に光鋭き一點の映

ずるを見、その物の何なるやを知らんとて身を轉らし、さまを敍す

【燈火】 *doppiero* 大蠟燭の一種

【鏡】 己が前なる

七―一二

【此と彼と】 眞と玻璃と（實物と映れる影と）

一三―一五

【めぐるを視る】 わが今視る如く。ダンテは既に超人の視力を有す。「かの天」は第九天

【現はるゝもの】 次聯に出づ

一六―一八

【一點】神。分つ可からず量るべからざる「點」をもて、形體の觀念を容れざる神性を表はす

一九―二一

【並ぶごとく】並びて天に現はるゝ如く

二二―二四

【水氣のいと濃き】かゝる時は暈^{かき}特に日月に近し

【これを彩る光】暈に色彩を與ふる日月

二五―二七

【一の火の輪】輪形を成せるセラファイニ（天、四・二八―三〇

並びに註参照）の一團

【運行】第九天の

二八一—三〇

【第二の】第二の輪はケルビーニの一團。以下第九まですべて九個の輪によりて九級の天使を表はせり（九七行以下参照）

三一—三三

【今や】第七の輪にいたればもはや虹もその圓内にこれを容るゝ能はじと見ゆる程大なり

【ユーノの使者】虹の女神イリーデ（天、一二・一〇—一二並びに註参照）

【完全】虹がたとひ完全なる圓を盈がきて現はるとも

三四—三六

【然り】次第に大きさを増して前の輪を卷くをいふ。

【その數が】第二第三と數のますに従つての義にて、一は「一點」を指すにあらず

三七―三九

【清き火衣】 「一點」

【これが眞に與かる】 *di lei sinvera* (その眞の中に入る) 神性の何たるやを會得すること

四〇―四二

【天も】諸天及びそが下方に及ぼす影響は皆神に歸す。萬物は皆神の定め給ふ法(のり)に従つてはたらく。アリストテレスの「第一原因」を「一點」にあてはめしもの

四三―四五

【愛】神を慕ひ神に近づかんとてめぐるなり

四六一—五一

諸天は宇宙の中心なる地球より遠ざかるに従つて 早く、これらの輪はかの一點より遠ざかるに従つてめぐること愈 おそし、故にダンテは物質界の法則とこれらの輪の法則と相異なるをあやしめり

【わが前に】我は汝の言葉を聞きて満足せるならむ。前。に。置。く。は。食を調へて人に進むるに譬へしなり

【諸 の回轉】諸天

【聖なる】完全なる。神の力を安くること多きがゆゑに 安ること
また早し

五二―五四

【神殿】第九天

【愛と光とを】天、二七・一一二参照

【我願】第九天に生じゝ

五五―五七

【模寫と様式】官能界と天使の輪（四六―五一参照）

五八―六〇

【試みられざるによりて】何人も解かんとせしことなきによりて

六四―六六

物質界にありては力と大小と比例するをいへり

【諸の球體】九個の天

【力】上より受けて下に與ふる力

六七—六九

力大なればその與ふる福（善き影響）もまた大に、體大なればその受けて有する福もまた大なり

七〇—七二

是故にこの最大の球、即ち他の八天を　　轉せしむる第九天は、その力また最大なるにより、かの最小の輪、即ち神に最近いとくして愛も智も最勝るゝセラフイーニの群に相當す

七三—七五

是故に諸天使の輪を量るはかに當りその標準を形の大小に（官能界の時の如く）置かずして力の大小に置かんには

七六一七八

諸天にありては體の最大なるもの最も勝れ、天使の諸群にありては神に最も近きもの最もすぐる、而して勝るゝが故に疾く、これを司りこれに　　轉を與ふる天使に相應す

【大いなるは優れると】大なる天はまされる天使と

七九一八一

【ボーレア】北風

【頬】註釋者曰く。人の顔をもて風位を示す事より來れり、ボーレア口を直くして吹けば北風となり、歪ゆがめて右の頬より吹けば北西の風となり左の頬より吹けば北東の風となると

又曰く。北東の風は北西の風よりも温和にて、よく空の霧を拂ふ

と（ヴァーノン 『天堂篇解説』 第二卷三八一—二頁参照）

【半球の空】即ち見渡すかぎりの室

八二—八四

【霧】*lotta* 空を曇らす雲霧の類

【その隨處】*ogni sua parrotta* 最後の語については異説ありてそ

の義定かならず、今一古註により *Parte*（部分）の意とせり

九一—九三

【火花は】火花即ち諸天使はその悦を表はさん爲こゝかしこより舞ひ立ちしかど、なほ各己が屬する輪に附隨してめぐり、輪形をも 轉をも損ひ亂すことなかりき

【將某を倍する】數の多きを形容していへり。傳説に曰く、將某

の發明者ペルシア王に謁す、王、將棊を見て喜び何にても望むものを與へんといふ、發明者即ち麥の一粒を將棊盤の目の數に従ひ順次に倍して（第一目に一粒、二目に二粒、次に四粒次に八粒、十六粒、三十二粒と次々に倍して最後の第六十四目にいたる）與へよと請ふ、王その望みの小なるを笑ふ、されど侍臣をしてこれを計らしむるに及び數の莫大（二十桁）にして、約を果す能はざるを知れりと

九四―九六

【處に】即ち天使注が各 神の定め給ひたる地位を保ちて永遠にその恩寵を受くるをいふ

【オザンナ】天、七・一參照

九七―九九

【疑ひ】天使の階級に關する疑ひ、諸聖父の説一ならざれはなり
(一) セラフィーニ以下の名稱は皆聖書より出づ(各條註參照)、
寺院の聖父等この名稱により天使を種々の階級に別てり、即ちす
べて三の組とし組毎に三級の天使を配す、但しその排列の法聖父
によりて異同あり

(二) こゝに掲ぐる分類はすべて「諸天使階級論」に據る、こは
ディオニュシオスの作として(天、一〇・一一五―七註參照)中
古世に行はれし書なり

(三) 『コンヴィヴィオ』(二・六・四三以下)に出づる分類は
この分類と同一ならず、思ふにこれダンテがかの書以後その説を

改めたるによるならむ

【セラファイニ】セラファイニ。イザヤ書六・二等。プリーモ・モ
ービレを司る天使

【ケルビ】ケルビーニ、ケルビム詩篇八〇・一等。恒星天を司る
天使

一〇〇—一〇二

【絆】かれらを神と結び合はす愛の絆。これに従ふは愛に動かさ
れてめぐるなり

【視る】高き近き處より神を視るがゆゑにその高さ近さに應じて
神に似るの度他にまさるなり

一〇三—一〇五

【愛】 天使

【神の聖前の】直接に神の光を受けて之を諸聖徒に傳ふるがゆゑに（天、九・六一—三参照）かく

【寶座】コロサイ書一・一六等。土星天を司る天使

【第一の三の】されど何故にこれが爲「資産」と呼ばるゝや明かならず、恐らくは一〇五行の〔Perche〕をPercheと讀み「是故に第一の三の組かれらに終る」と譯す方正しからむ（スカルタツツイニ一冊本註参照）

一〇六一—一〇八

【眞】神。一切の智に休安を與ふ（天、四・一二四以下参照）

一〇九—一一一

まづ神を見、神を知りて而して後神を愛す、故に見ることは愛すること、先んず（天、一四・四〇—四二参照）トマス・アクイナスの神學説によれり

一一二—一一四

神を見るの如何は功德即ち善行の多少に準じ、功德は神恩とこれを迎ふる善心とより生ず

【次序を】神恩善心相結ばりて功德に進み、功德知に進み、知愛に進む

一一五—一一七

【永劫の春】天堂の

【夜の白羊宮も】秋期の凋落を知らざる。秋分にいたれば日は天

秤宮に入るがゆゑに夜はその反対面の天宮即ち白羊宮にあり

一一八—一二〇

【歌ひ】 *sverna* (冬を出づ) 冬去り春來る時、鳥の喜びて歌ふことよりこの義生る

【喜悦の位】即ち天使の位

一二一—一二三

【神】地、七・八七參照

【統治】コロサイ書一・一六等。木星天を司る天使

【懿徳】エペソ書一・二一(能力)、火星天を司る天使

【威能】エペソ書一・二二等。太陽天を司る天使

一二四—一二六

【主權】コロサイ書一・一六等。金星天を司る天使

【首天使】テサロニケ前書四・一六等。水星天を司る天使

【天使】月天を司る天使

一二七―一二九

【上方を】かの一點即ち神を

【引かれしかして】自ら神の方に引かれつゝ、その下なるものを神の方に引く。たとへばセラフィーニが神に引かれつゝケルビーニを引き、ケルビーニがセラフィーニに引かれつゝツローニを引くごとし

一三三―一三五

【グレゴリーオ】法王グレゴリウス一世（淨、一〇・七三―五參

照)

【彼を離れ】天使の分類においてディオニュシオスと異なる所あるをいふ

一三六—一三九

【人たる者】ディオニユシオスの如く

【見し者】使徒パウロ（地、二・二八—三〇並びに註参照）。パウロは天上にて得し知識をばディオニユシオスに傳へたりと信ぜられしによりてかく

【輪】天使の輪

第二十九曲

ベアトリーチェ天使を論ず

一―六

ベアトリーチェの黙し、間の極めて短きを譬へにて表はせり。白羊宮は天秤宮と正反對面であり、晝夜平分の頃日月の一白羊宮に一天秤宮にありて同時に地平線に懸ればそが天心を距ること共に相等しきが故にあたかも天心の秤はかりその平準を保つ如し、されど忽ちにして一は地平線上に昇り一は地平線下に降り、二者半球を異にするにいたる

【ラートナの子】日月（淨、二〇・一三〇―三二註參照）

【權衡を保つ】この項異本多し、委しくはムーアの『神曲用語批
判』四九五頁以下參照

七一九

【一點】神（天、二八・一六）

一〇一一二

【處と時】一切の處一切の時皆神に集まる。神の知り給はざる處
なく時なし

一三一一五

以下四八行まで、天使創造の理由、時、及び處等を論ず。この一
聯にては萬物の創造がたゞ神の愛より出づるこれとをいへり、神
は至上の幸にいませば己が幸を増すの要なし、たゞその榮光の顯

現なる被造物をして各 悦びても存在を保つをえしめんため

【その光】神の榮光の反映なる被造物

【我在りといふ】萬物各 その存在を自覺して喜ぶこと

一六―一八

【他の一切の限】處。萬物創造の後始めて時間空間あり

【新しき愛】被造物。「永遠の愛」即ち神に對して

一九―二一

創造の御業は時間を超みわざ越する永遠のうちに行はれしものにて、これに先後なるものなし、創造の後には時間あれどもその前には時間なきがゆゑに創造の常に神休らひる給へりとはいひ難し

【これらの水の上に】創世記一の二に「神の靈諸 の水の面おもてに動

けり」とあるによる、この一句なほ「創造の御業は」といふ如し

二二―二四

純なる形式（三一―三行註参照）、純なる物質、及び形式と物質との相混ぜるもの同時に神の聖旨みむねより出で、聖旨に適ふものとなりたり

二五―二七

光線が透明體を照らすとその中に入終るとは殆んど同時の作用なるごとく

二八―三〇

形式、物質及びこの二者の結合せるもの皆直ちにその存在を全うし、いづれも成り始むると成り終るとの間に時の區別なし

以上の三聯にてベアトリーチエは創造が凡て同時にかつ瞬時に行はれしことをいへり。註釋者曰く、ダンテはこの説においてアウグステイヌス、ペトルス・ロムバルドウス及びトマス・アクイナスに従へりと

三一—三三

【時を同じうして】以上三つの物の造らるゝと同時に

【純なる作用を】作用の純なる者即ち純なる形式（諸天使）

「物その形式を有するにいたれば直ちにこれに従つて作用をあらはすが故に」トマス・アクイナスはその『神學大全』において

「形式は即ち作用なり」といへり（ノルトン註参照）

【宇宙の頂となり】エムピレオの天に置かれ

三四—三六

【純なる勢能】他の作用を受くるに過ぎざる者即ち純なる物質

【最低處】月天の下

【中央には】天使と地球の間には形式と物質との固く相結ばれる者即ち他の作用を受けつゝ他に作用を及ぼす諸天（天、二・一二—三参照）置かる

三七—三九

【イエロニモ】ヒエロニムス。ラテン寺院の聖父にて、その譯にかゝるヴルガータ最も著はる（四二〇年死）

【録せる】テモテ書一・二の註に。トマスはその『神學大全』においてヒエロニムスの説を駁せり

四〇—四二

【眞】天使達が残りの宇宙と同時に造られしこと

【作者達】聖經諸事の作者等。但し出處明らかならず、註釋者は「エクレジヤスチクス」十八の一なる「永生者時を同うして萬物を造り給へり」及び創世記一の一（トマス曰く。太初に神天地を造り給へりと創世記一の一に見ゆ、もしこれらより先に造られし物あらばこの事眞ならず、是故に天使は形體的自然より先に造られたるにあらずと）を擧ぐ

四三—四五

【諸の動者】諸天を司る天使達

【全からざりし】運行すべき諸天なくば運行を司る諸天使何ぞそ

の務を果すをえむ、務を果す能はざるはその存在の意義なきなり、
全からざること知るべし

四六―四八

【これらの愛】即ち天使

【いづこに】「宇宙の頂となり」（三二―三行）といひ、かれら
がエムピレオの天にて造られし意を表はせばなり

【いつ】その餘の宇宙と同時に（一三行以下）

【いかに】「純なる作用」（三三行）として

四九―五一

以下六六行まで、背ける天使と忠なる天使とについて

【二十まで】當時の神學説に従ひ、天使の創造とその一部の墮落

とが殆ど同時なりしをいへり

【汝等の原素】地水火風の四原素、その中最下方に在る物は地

【亂し】地、三四・一二一以下参照

五二―五四

【技】神（一點）のまはりを舞ひめぐること

五五―五七

【墮落】天使の一部の

【宇宙一切の重さに】即ち地球の中心にありて（地、三四・一二一並びに註参照）

【者】魔王ルチーフエロ

五八―六〇

【善】神の

【悟る】神を

六一―六三

【功德】謙りて神恩を受くること（次聯参照）

【視る】神を

【意志備りて】罪を犯す能はざるまで

六四―六六

【恩恵を】神恩を受くるはその事既に功德なり、而して喜びて神恩を迎へ入るゝ情愈 切なればこの功德またいよく大なり

六七―六九

【集會】天使達

七〇―七二

以下八四行まで、天使の能力について。ベアトリーチエは天使に
了知及び意志あることを否定せず、されど記憶あることを絶對に
否定す、即ちこの點においてやゝトマスの説と違へり

七三―七五

【言葉の明らかならざる】特に記憶について言ふ、即ちこの語を
普通に用ゐらるゝ意義に従つて一觀念または一事實を再び心に呼
起す力とする場合の如し、天使はかゝる力を有せず、有するの要
なければなり

七六―八一

神は一切の事物を視給ふ、故に一切の事物皆現在なり、諸天使ま

た絶えず神の鏡に照してよく一切の事物を視る、故に新しき物入
 來りてその視る力を阻むことなし、視る力阻はばまれず忘るゝことあ
 らずば何ぞまた憶ひ出づべきことあらむ

【新しき物】新しき物入來りて過去の事物の印象を亂す時、始め
 てこゝに忘るゝことあり思ひ起すの要生ず

【想の分れたる爲】 *per concetto diviso* 印象心を離れ（新しき物の
 ため）現に心に在らざるため、但し異説あり

八二―八四

【夢を見】眞理の基礎なき事物を想像し（天使に記憶ありといふ
 如き）

【罪も恥も】前者は夢を眞まことと信ず、咎とが無智にあり、後者は自ら眞

と信ぜずして虚榮の爲に眞なりといふ、咎惡意にあり

八五―八七

以下一二六行まで、ベアトリーチエは當時の説教者等を難ず

【同一の路】眞理に達するの路

八八―九〇

【曲げらる】曲解せらる

九一―九三

【血】殉教者の

九四―九六

【福音ものいはじ】説教者等福音を宣べ傳へずしてかゝる雑説にのみ空しく時を費すをいふ

九七―九九

福音の眞義に關係なき雜説の例を擧ぐ

【クリストの】キリスト磔殺の時地上遍く晦冥となりしを（マタイ、二七・四五等）日蝕の作用に歸せんとてこの説を爲す

【月退りて】當時月は太陽と反對の天にあり、故に地球と太陽との中間を隔てん爲には後退すること六天宮ならざるべからず

一〇〇―一〇二

また或人は曰ふ、こは月の爲ならず太陽自らその光を隠せる爲なれば、地上の闇は西の際涯はてより東の際涯に及びたりと

一〇三―一〇五

【ラーポとビンド】中古フイレンツエに最も多く用ゐられし名に

てラーボはヤーコポの略、ビンドはヒルデブランドの略なりといふ

一〇六―一〇八

【羊】信徒

【己が禍ひを】益なき雑説を聞きて寺より歸るは無智の爲なれど、極めて肝要なる靈の糧につきてかく無智に、いかなる牧者にも信賴するは信徒自身その罪なきにあらざるなり

一〇九―一一一

【眞の礎】福音の眞理

一一五―一一七

【僧帽脹る】説教僧に自得の色あり

一一八——二〇

【鳥】鬼（地、二二・九六參照）。聖靈の導によらず惡魔の靈感によりて言を發す、人もしその真相を知らば罪の赦を得んとてかゝる僧に就くことの無益有害なるを覺らむ

一二一——一二三

【是においてか】教へを説く者かくの如くなるがゆゑに

【證】法王より赦罪の權を委ねられたりとの證。約束は即ち赦罪の約束

一二四——一二六

【聖アントニオ】聖アントニウス。エジプトの隱者にて僧院生活の基を起せる者（二五一——三五六年）。こゝにてはこの派に屬す

る僧侶等を指す、かれら施物をもて豚を飼ふ、フィレンツエ市にてもこれらの豚或ひは街路にさまよひ或ひは人家に闖入して市民の累となりしかど市民あへてその自由を妨げざりきといふ

【贗造の貨幣を拂ひ】無効なる赦罪を賣物として

【これにより】人々の愚にして信じ易きこと（一二一—三行）に
より

【豚より穢れし者】妾や墮落せる僧等

一二七—一二九

以下天使の數と天使における神の榮光の顯現とを論ず

【正路】天使論

【時とともに】この天に止まるべき時少くなりぬ、さればその少

きに應じて疾くかの論を進むるをよしとす

一三三—一三五

【ダニエール】ダニエル書七・一〇

一三六—一三八

【第一の光】神の光

【諸の輝】諸天使。かれら皆神の光を受くれど受くる度各異なるが故にその異なる度の數は天使の數と相等し

一三九—一四一

神より受くる光多ければ神を見神を知ること（會得の作用）従つて多く、神を知ること多ければ神を愛することまた深し（天、二八・一〇九以下参照）、是故に神に對する諸天使の愛各その強

さを異にす

一四二—一四五

【鏡】天使。神はその光をかく多くの天使に分ち與へ給へどその完全なること故の如し

第三十曲

ダンテ、ベアトリーチエとともにエムピレオの天にいたりて天上の薔薇を見る

一—三

以下の數聯にて、諸天使の輪の次第に見えずなれるを、曙の光のため空の星の次第に消ゆるに譬へたり

【第六時】正午

【六千マイル】ダンテは地球の周圍を二萬四百マイルとなせり

(『コンヴィヴィオ』三・五・八〇以下参照)、ゆゑに太陽六千マイルの東にある時はその地日出前約一時なり(ムーア『ダンテ研究』第三卷五八・一九頁参照)

【この世界の】地球はその圓錐狀の陰を殆んど水平に西に投ず

七—九

【侍女】曙

一〇——二

【己が包むものに】神（一點の光明）はかの天使の諸群に包み圍まると見ゆれども、實際はかれらを他の一切の被造物と同じく包容し給ふ

一六一—一八

【務】 vice 彼の事を敘すべき務。但し異説あり

二二——二四

【喜曲、悲曲】註釋者曰く。こは廣義の喜曲悲曲にて今の所謂喜劇悲劇の意に非ず、すべて詩風詩體の甚だ崇高醇雅なる作品を悲曲といひ、そのさまでならざるものを喜曲といへる中古の例に據よりしなりと

二五—二七

【わが心より】わが心の作用を弱めて、憶ひ出づること能はざらしむ

三四—三六

ベアトリーチェの美は我にまさる詩人ならでは絛し難しとの意

【ほどに】ほどいと美しく

三七—三九

【最大いとなる體】第九天

【光の天】エムピレオの天

四〇—四二

註釋者曰く。幸福の三段この中にあり、（一）智の光によりて神

を見、(二) 見て愛し、(三) 愛して法悦に入る

四三―四五

【二隊の軍】 天使と聖徒

【一隊を】 聖徒達は光の中にかくれず、肉體そのまゝの姿にて汝に現はれむ

【最後の審判】 この時至れば人間の靈再び肉の衣を着ること前に出づ(地、六・九八参照)

四六―五一

天堂の強き光にあたりてダンテの視力亂れ何物をも見る能はざりしをいふ

【物見る諸の靈】 天、二六・七〇―七二並びに註参照

【いと強き物】極めて強く輝く物。強き光の爲視力一たび亂るれば、いかに燦かなる物といへどもその印象を目に與へざるにいたる

五二―五四

ベアトリーチエの詞

【愛】神、即ちエムピレオの天に平安を與へ給ふ者

【かゝる會釋】かく強き光

【蠟燭を】天堂に入來る聖徒をして神を見るを得しめん爲まづ強き光に慣れしむ。但し蠟燭の譬明らかならず、或ひは單に求むる光の強弱に従つて蠟燭を整ふる如く聖徒をして神の光に堪へうるやう豫め備へしむる意か

五八―六〇

【防ぎ】堪へ

六一―六三

【春】春の花（浄、二八・四九―五一参照）

六四―六六

河は神恩の光、火（原、火花）は天使、花は聖徒なり。ブーチ曰く、生くる火花流れより出で、花にとゞまる、これ神恩満ちみつる天使（たえず神の愛に燃ゆるがゆゑに火花といふ）かの神の恵みによりて常に徳を行ふ（草は善行なり）聖徒達の魂を勵ますなりと

七三―七五

汝己が求知の願ひをかなへんと欲せば、まづこの光の流れを見、これによりていかなる物をもそのあるがまゝに見るをうるまで汝の視力を強くせよ

【日輪】ベアトリーチェ、即ちわが智を照らすもの（天、三・一参照）

七六一七八

【珠】topazii（黄玉）、「生くる火」のこと

【草の微笑】草を飾る花

【豫め示す象】原、「象徴的序論」ブランクの言に従へば、序が作物の内容を示す如く、河や火はその實際のものを（即ちやがてダンテの目に明らかに見ゆべきものを）前以て示す象かたちに外ならず

との義

七九―八一

【難き】acerbe (未熟なる) 解し難き。但し不完全なるの意に解する人あり

八五―八七

【目を】わが視力をなほも強からしめんとて

【優れる】視る者の能力を増さん爲神より出づる光なれば
八八―九〇

【わが瞼の】わが目の光に觸れたる刹那に
九四―九六

【悦び】feste 樂しき光景。花は聖徒に、火は天使に變れるなり

九七―九九

【凱旋】 天上に凱歌を奏する天使と聖徒

一〇〇―一〇二

【光】 さきに河と見えし光

一〇三―一〇五

【日輪の帯】 當時信ぜられし太陽の大きさについては『コンヴェイ
ヴィオ』四・八・五一以下参照

【圓形】 註釋者曰く。圓は始めなく終りなし、是故に昔あり今あり後ある永遠の象徴なりと

一〇六―一〇八

かく大いなる圓形の光も神よりいづるひとすぢ一線ひとすぢの光に過ぎず、プリ

ーモ・モービレの天はこの光を受けてその生命（運行）と力（下方に及ぼす影響）とを得

一一二——一四

聖徒等かの光の周圍に無数の列を造りて己をこれに映^{うつ}す、而してその列外部に向ふに従つて次第に高く、あたかも圓形の劇場の如し、今全光景を薔薇の花と見なせば、中央の光は花の中心の黄なるところに當り周圍の列は花瓣にあたる

一一五——一七

【いと低き】かの光に接する最小の列さへ太陽よりも大いなるに
一一八——二〇

【かの悦びの】全光景を一目に視てそこに滿つる悦びの大いさ深

さをすべて知りたり

一二一—一二三

【近きも遠きも】エムピレオの天にては距離の遠近も視力に影響を及ぼさず、遠き物近き物皆等しく明かに見ゆ

一二四—一二六

【日輪】神。「とこしへに春ならしむ」とはその榮光をもて永遠に天の萬軍を福ならしむること

一二七—一二九

【白衣の群】聖徒等白衣を着ること黙示録の諸處に見ゆ（三・五、四・四等）

一三〇—一三二

【われらの都】所謂天上のイエルサレム（黙示、二一・一〇以下参照）

一三三—一三五

【汝の未だ】汝の死せざるさきに。ハインリヒ七世はダンテに先立つこと八年にして死せり

【婚筵に】これに列りて食するは天上の福を享くるなり（天、二四・一一三並びに註参照）

一三六—一三八

【アルリーゴ】ルクセンブルクのハインリヒ七世。一三〇八年十一月選ばれて皇帝となり、一三一三年八月死す、ダンテはイタリアの統一事業の完成につきて彼に多くの望みを囑したりしなり

【その備への】ハインリヒの企業を妨ぐべき種々の障礙の取除かれざるさきに

一三九—一四一

皇帝（乳母）に反抗せるグエルフイ黨及び寺院の一派を主としてこゝに責めしなり

一四二—一四四

【者】クレメンヌ五世、陰に陽にハインリヒの敵となれる者（天、一七・八二—四並びに註参照）

【その時】ハインリヒがイタリアにいたれるは一三一一年にてその頃法王たりし者は即ちクレメンヌ五世なり

【神の廳】寺院

一四五―一四七

【後】ハインリヒの敵となりてその企圖を妨げし後、換言すればハインリヒの死後。クレメンスは一三一四年四月即ち皇帝の死後八ヶ月にして死せり

【シモン・マーゴ】地、一九・一並びに註参照

【處】第八獄第三囊

【投げ入れられ】地、一九・八二―四参照

一四八

【アラニア人】ボニファキウス八世（淨、二〇・八五―七註参照）

【愈 深く】孔の中に（地、一九・七九―八四並びに註参照）

第三十一曲

ベアトリーチェその榮光の座に歸り、聖ベルナルドウスをして己に代りてダンテの最後の導者たらしむ、ダンテ即ちこの導者の言に従ひ遍く天上の薔薇を見かつ特に聖母の光明を仰望す

一―三

【血をもて】死によりて贖あがなひえたる聖徒達

四―六

【殘の一軍】天使達

【ものゝ】神の榮光と威徳とを

七―九

【ところ】巢。即ち働きてえたるものを甘き蜜となすところ

一〇―一二

【愛】神

一三―一五

註釋者或ひは曰く。この三の色は愛、智、純の表象なりと

一六―一八

諸天使花の中に降り、神より得たる平和と愛とを聖徒達に傳ふ

【脇を扇ぎて】翼を動かして、即ち神の御許みもとに飛行きて

一九―二一

【上なる物】神の寶座みくらゐ

【目も輝も】目（薔薇の中にある者の）が輝（神の）を見ることも輝が目到達すること

二二—二四

【神の光】神の光はいたらぬくまなし、たゞ多く受くるに足るもの多くこれを受け、然らざるもの少しくこれを受くるのみ（天、一・一以下参照）

【何物も】是故に天使達も

二五—二七

【舊き民新しき民】舊約新約兩時代の民

【一の目標】神

二八一—三〇

【星】光。航海者の目標なる星に因みて（パッセリーニ）

【三重の光】一にして三なる神の光

【嵐を】天上の平安より思を地上の不安に致して神の祐助を祈るなり

三一—三三

【エリーチエ】カリスト。アルテミスに事^{つか}へしニムフ（淨、二五・一三一並びに註参照）、化して宿星となる。こゝにては大熊星を指す

【愛兒】カリストの子アルカス、同じく化して宿星となる。こゝにては小熊星を指す

【方】逢か北の方、即ち大熊星の下に當る地方

三四―三六

【いかめしき業】宏大なる建築物等

【ラテラーノ】ローマの昔の皇居、但し一般にローマを代表す。

皇居の莊麗他に類たぐひなき頃といふはなほローマの全盛時代といふ如し

四三―四五

【誓願】その神殿に詣でんとの

四六―四八

【生くる光】天上の薔薇の

四九―五一

【微笑】喜びの光

【愛の勧むる】愛の現はるゝ（カーシーニ）。この句を「愛に誘ふ」即ち他の者を愛に導く意となす人あり

五八一六〇

【一人の翁】聖ベルナルドウス（一〇九一—一一五三年）。フランス、ブルグンティイなるフォンティイヌに生れ、パリに學び、シトリーの僧院に入り（一一一三年）、後多くの僧院をクレールヴォーに建設してこれが首僧たり、聖母を愛すること極めて深し、その著作に『デ・コンシデラチオネ』あり

聖ベルナルドウスは黙想を表示す、人黙想によりて神恩を受け最もよく神を視るにいたるが故にベルナルドウス淑女に代りてダン

テに三一の微妙をうかゞふをえしむ、その聖母を深く愛すること
 もまた詩人の最後の導者となれる一理由なり（ムーア『ダンテ研
 究』第二卷六二頁参照）

【榮光の民の如く】白し（天、三〇・一二九参照）

六四―六六

【彼何處に】名をいはず、情迫ればなり

六七―六九

【第三】第一列に聖母、第二列にエヴァ、第三列にラケルとベア
 トリーチェ（天、三二・四以下参照）

七〇―七二

【永遠の光】神の光ベアトリーチェに注ぎ、
 反映してその冠と

てりかへ

なりゐたり。聖書に見ゆる輪わ後光は即ち受福者の福祉の象徴

七三―七八

人間の眼千尋の海の底深く沈みてその處より仰ぎ見ることありとも、その眼と地上の大氣の最高いとき處との間の距離は、わが目とベアトリーチェとの間の距離に及ばじ、されど我善く彼の姿を見たり、これかしこにては人が地上にて物を見る時の如く空氣や水などの物體を透して見るにあらですべて直觀によるが故に視力一切の距離に超越すればなり

【沈む】 s'abbandona 沈むまかに任す意

七九―八一

以下九〇行まで、ダンテがベアトリーチェに語れる最後の詞にて、

彼のこの淑女に對する愛と感謝と願ひとを言現はせるもの

【地獄に】地獄のリムボに（地、二・五二以下）

八二―八四

【見し】三界の歷程において

【思恵と強さ】我をしてかく視ることをえしめし神恩と力。これらの物はわが功德より生るゝならで汝の力汝の徳よりいづ

八五―八七

【奴僕の役】罪の束縛

【自由】靈の

八八―九〇

【賜】即ち眞の自由

九一―九三

【永遠の泉】生命の泉、福の源なる神

九四―九六

【願ひと聖なる愛】ベアトリーチエのベルナルドウスに請ひしこ
と、淑女のダンテに對する愛

九七―九九

【園】聖徒の群（天、二三・七一参照）

【神の光を】神恩の光を傳ひて遂に神を見るをうべし

一〇〇―一〇二

【天の女王】聖母マリア

一〇三―一〇五

【わが】わがイタリアなる

【ヴェロニカ】Veronica (眞の像の義)。キリストの容貌を寫し

とゞめし汗巾あせふき

傳説に曰く。キリスト十字架につけられんとてカルヴァーリにいたり給ふ、途に一婦人（或ひは曰く、ヴェロニカはこの婦人の名と）あり、主にその汗を拭はん爲汗巾を捧ぐ、主拭ひ終りて返し給へば聖顔まさしくその汗巾に寫りゐたりと。この汗巾はローマなる聖ピエートロの寺院に保存せられ（今も然り）たれば人々これを見んとて四方よりかの寺院に詣できといふ

【クロアツィア】今、ユーゴスラヴィアの南部の地方の名。但し一般に遠國を指す

一〇六一—一〇八

【示さるゝ間】日を定めて人に見する例なりければ

一〇九—一一一

【現世にて】天上無窮の福を地上にて既に黙想の中に味へる者、
即ちベルナルドウスの、聖なる愛に燃ゆる姿を見

一一八—一二〇

【まさる】光において

一二一—一二三

【溪より山に】薔薇のいと低き處よりそのいと高き列に日移す
をたとへて

【頂】山にちな因みて薔薇の上部を指す

一二四—一二六

また譬へば太陽の將に現はれんとする處にては最強いとき光あり、其他の處にては距離（日出點よりの）の大なるに従つて光次第に衰ふる如く。

【フェトンテ】地、一七・一〇六以下並びに註参照。轅は日の車の轅

一二七—一二九

【平和の焰章旗】マリアの座を中心とせる天の一部

オリアヒアムマ（黄金の焰の義）は古のフランス諸王の旗なり、こは天使ガブリエルがかの王達に與へしものにてその下に戦ふ者勝たずといふことなしと傳ふ

この旗は黄金地に焰をあらはし出せるものなればダンテは光に因みてかの天の一部を焰章旗といひ、地上戦鬪の旗に對して平和の文字を冠せるなり

一三〇—一三二

【技】 飛びめぐるさまをいふ、その異なるは遲速あるなり。カーシーニ曰く、輝の異なるは愛の同じからざるを表はし、技の異なるは悦びの同じからざるを表はすと

一三三—一三五

【美】 マリア

一三六—一三八

【その楽しさ】 マリアの美のたのしき

第三十二曲

聖ベルナルドウス天上の薔薇における諸聖徒着座のさまをダンテに示教し、かつ彼をして聖母の温容を仰ぎ視しむ

一一三

【己が悦び】聖母マリア

四一六

【庇】罪の。マリア、キリストによりてこの庇を癒せり

【美しき女】エヴァ。神の直接に造り給へる者なれはいと美し。

かれは禁斷の木の實をくらひて罪を犯し、かつこれをアダムに與へて子々孫々の禍ひを醸せり

七―九

【ラケール】ラケル。默想の生を表示す（淨、二七・一〇四並びに註參照）。またラケルのベアトリーチエと共に坐すること地、

二・一〇一―二に見ゆ

一〇―一二

【サラ】アブラハム（地、四・五八）の妻（創世、一一・二九及び一七・一五等）

【レベツカ】イサク（地、四・五九）の妻（創世、二四・二以下）

【ユディット】ヘブライ族の勇婦（淨、一二・五八―六〇註參照）

【歌人】王ダヴィデ。詩篇五一（この歌 *Miserere mei* 「我を憐みたまへ」に始まる）はダヴィデがウリアとその妻とに對する行爲を悔いて作れるものと信ぜられたればなり

【曾祖母たりし女】ルツ（ルツ、一・四以下）。王ダヴィデの曾祖父なるボアズ（ルツ、四・二一—二）の妻なり

一六—一八

【花のすべての髪】天上の薔薇のすべての花片

【分く】分岐線となるをいふ

天上の薔薇の花片（天、三〇・一一二—四註参照）すべて縦に二等分せらる、その一方の分岐線は最高の花片即ち最大の圓形の列より起りて最低の花片即ち光に接する最小の圓形の列に終り、他

方の分岐線はこれと相對す、この二大部の中その一の上半即ち既に空席なきところにはキリスト以前の諸聖徒坐し他の一の上半即ち未だ空席あるところにはキリスト以後の諸聖徒坐す、而して下半は二大部に通じて小兒の席と定めらる、また二の分岐線の中その一即ち聖母より起るものは凡てヘブライ人の女達の席より成り、他の一即ち洗禮者ヨハネより起るものは凡て彼の事業を完うせんとつとめし聖者達の席より成る

一九―二一

【キリストを見し】キリストの出現を豫め信じゐたりし人々と、出現の後これを信ぜる人々とその信ずるさまの異なるに従つて聖徒の列をわかつなり

二二—二四

【全き】原、「成熟せる」。座席のすべて塞がれるをいふ

二五—二七

【諸の半圓】半圓をゑがく諸の列

【目を】信仰の

三一—三三

【ジョヴァンニ】バプテスマのヨハネ

【曠野】、淨、二二・一五二参照。「殉教」、天、一八・一三五

参照。「二年」、ヨハネの死よりキリストの死まで約二年の間地

獄のリムボにあり

三四—三六

【フランチェスコ】アツシージの聖者（天、一一・四三以下）

【ベネデット】ノルチアの聖者（天、二二・二八以下並びに註參照）聖ベネデクトウス。

【アウグステイーノ】聖アウグステイヌス。三五四年タガステ

（昔のヌミディア）に生れる。ヒツポの僧正となりて四三〇年に死す、ラテン寺院の教父中最大なる者の一、ダンテよくその著作に通じ屢これを引用せり（『コンヴィヴィオ』四・九・八三以下『デ・モナルキア』三・四・五一以下等）

三七―三九

【園】即ち天上の薔薇。註釋者曰く、キリスト以前は準備の時代なればその以後の如く多くの受福者を生むべきやうなし、ダンテ

がかく諸聖徒を均等に二分せる理由は重きをその詩的調和に置くにありと

四〇―四五

最高の列と最低の列との中間に當りて二の分岐線を横斷する列より下はすべて稚兒の座席なり

〔他人の〕兩親の（七六―八行）

〔或る約束〕七六行以下參照

〔これらは皆〕皆理性の作用はたらきを有せざるさきに肉體を離れし靈なれば

四九―五一

〔異しみ〕己が功德によらずして福を受くとせば何故にその座席

(即ち福の度)に差別ありや、是ダンテの疑ひなり、ベルナルドウス、ダンテの意中にこの疑ひあるを知り、こは奥妙深遠にして測るべからざる神意にいづと答ふ

【鋭き思ひに】理智より生ずる疑ひを信仰によりて解くなり

五五―五七

【指輪は】凡ての事皆神意と一致す

六四―六六

【樂しき聖顔の】淨、一六・八五―九三並びに註參照

【この事】人の魂には、既にその造らるゝ時に當りて、神より受くる恩恵に多少ある事。この事を知りて足れりとし、何故に神かく爲し給ふやと問ふ勿れ

六七―六九

例をエサウとヤコブの事に取れり（天、八・一三〇―三一参照）、
かれらは母の胎内にて争へる者（創世、二五・二二）

【聖書に】未だ胎内にある時既に神意によりて兄が弟に事ふべき
こと定まれるなり（創世、二五・二三、マラキ、一・二―三、ロ
マ、九・一〇―一三参照）

七〇―七二

小兒等はその生時に安くる神恩の多少によりて福の度を異にす

【髪の色】はじめより神の與へ給ふ恩恵の度。生時に毛色の異なる如く、受くる恩恵の度異なればなり、エサウとヤコブとその色
を異にせる（創世、二五・二五）に因みてかく言へり

【いと高き光は】神の聖みひかり光は各自の恩恵に適はしき冠となる、即ち生時の恩恵の多少に従つて各自の天上に受くる福異なるにいたる

七三―七五

【最初の】神を視る最初の力の鋭さ。この生得の力は神恩によりて得らるゝものなるが故にその鋭さの異なるは即ち生時に與へらるゝ神恩の異なるなり

七六―七八

【新しき頃】創造以後久しからざる頃、即ちアダムよりアブラハムまでの間。割禮はアブラハムにはじまる（創世、一七・一〇以下

参照）

【信仰】救世主の出現に對する信仰

七九―八一

【力】天に登るの

八二―八四

【恩惠の】キリスト降世の後には

【全き洗禮】割禮が不完全なる洗禮なるに對して

【低き處に】地獄のリムボに

以上稚兒の救ひに關する三聯はすべてダンテ時代の教理特にトマス・アクイナスの『神學大全』の所説に據れり

八五―八七

【顔】聖母の。その美その輝きにおいて最もよく聖子に似たり

【その輝のみ】天、三一・九七―九參照

八八―九〇

【聖なる心】天使

【齋らす】神の御許より（天、三一・一六―八參照）

九四―九六

【さきに】第八天にて（天、二三・九四以下）

【愛】首天使ガブリエル

一〇〇―一〇二

【父】ベルナルドウス。「こゝに下る」は薔薇の最低いとき處に下るなり

一〇六―一〇八

【朝の星】明の明星。^{あけ}明星が日光を受けて美しくなる如く、ベルナルドウスは聖母の光を受けて美しくなれるなり

一〇九—一一一

【剛さ】 Baldezza 自信ありて物に動ぜぬこと

【われらもまた】聖徒の願ひすべて神意と一致するを表はす

一一二—一一四

【われらの荷】肉體の荷

【棕櫚】聖靈に見ゆ、神が凡ての女の中にて特にマリアを選び給へることを表はす、即ち他の女に對する勝利のしるしなり

一一五—一一七

【高官達】 patrici (ローマの高官達) 諸聖徒の中の特に勝る者^{すぐ}

を指す、天堂を帝國といひマリアを皇妃といへるも同じくローマに因みてなり

一一八—一二〇

【ふたり】アダムとペテロ

【二つの根】アダムは降臨すべきキリストを信じ、第一の人として、ペテロは降臨せるキリストを信じ、第一の人として

一二一—一二三

【左】スカルタツツイニ曰く。舊約の教への新約に比して劣るを表はすと

【味へる】禁斷の木の實を

一二四—一二六

【花の二の鑰】薔薇（即ち天堂）の二の鑰（地、一九・九一一—
二参照）

一二七—一二九

【新婦】寺院。十字架の死によりて主の建て給へるもの

【見し者】使徒ヨハネ（黙示録の著者として）。禍ひ多き寺院の
歴史を黙示によりて豫め見し者

一三〇—一三二

【民】イスラエルの民。神恩を忘れ恒心なく神及び導者に背ける
ため屢 神怒りに觸れしこと聖書に見ゆ（申命、三二・一八等）

【マンナ】アラビアの曠野にて食へる（出エジプト、一六・一三
以下）

【導者】モーゼ

一三三―一三五

【アンナ】聖母マリアの母堂アンナ。祭司マツタンの女にてヨアキムに嫁しマリアを生めりと傳へらる

一三六―一三八

【家長】全人類の家長アダム

【馳せ下らんとて】低地に（地、一・六一参照）。日を垂るゝは恐れと失望とな表はすなり

【ルーチア】聖ルーチア（地、二・九七並びに註参照）

一三九―一四一

【睡の時】我を忘れて物を見る如くなる時、即ち天堂の事物を知

る爲神の與へ給ひし時間

一四二——一四四

【第一の愛】神。ダンテはさきに聖靈を指してかく言へり（地、

三・六及び天、六・一一）

一四五——一四七

【己が翼を動かし】己が力のみ信頼して

一四八——一五〇

【淑女】聖母

第三十三曲

聖ベルナルドウス、ダンテの爲聖母マリアに祈りをさゝぐ、ダンテこの祈りにより至上の光を仰ぎ望みて三一及び神人兩性の秘奥をさとり、至幸至福の境に達す

一一三

【處女】淨、二五・一二八參照

【わが子】キリスト。神としてはマリアの父、人としてはその子なり

【己を低くし】ルカ傳一・四八參照

【永遠の聖旨の】永遠變らざる神意により豫め選ばれて救世主の母たるべしと定まれるもの

七一九

【愛】神と人との間の愛。この愛の障礙となるものは罪なり、救世主世に降りて罪を贖ひ、愛あらたに燃ゆ

【この花】天上の薔薇

一〇一一二

【亭午の】正午の太陽に因みて光の強きをいふ。聖母は諸聖徒の愛を燃す焰なり

【活泉】盡きせぬ泉

一六一一八

【求めに先んず】淨、一七・五八―六〇註参照

二二―二四

【宇宙のいと低き沼】地獄

二五―二七

【終極の救ひ】神（天、二二・一二四参照）

二八―三〇

【彼の】彼をして終極の救ひを見るをえしめんとのが願ひはその切なるにおいて、我自らこれを見んと思ふの願ひにかはらじ

三一―三三

【汝の祈りによりて】汝彼の爲神に祈りて

【こよなき悦び】神

三四―三六

【かく見】神を

四〇―四二

【目】マリアの目。父に愛めでられ子に尊たまる（スカルタツツイニ）

【祈れる者】ベルナルドウス

【示し】微笑によりて

四三―四五

【光】神。光にむかふは神の許をえんが爲なり

四六―四八

【望みの極】神

【熄む】願ひの必ず成るを信じて 靜しづこころ 心にかへれるをいふ

五二―五四

【高き光】神の光。たゞ神の光のみ本來眞なり、萬物の眞はこの

光を頒つによりてはじめて存す

五八一六〇

天、二三・四九―五四参照

【他は】夢その物は

六一―六三

【消え】記憶より

六四―六六

事物の記憶より冷えゆくさまをさらに二の譬にて示せり

【シビルラ】キュマエ（ナポリの西の町）の巫女にてアエネアスを冥府に導ける者。その豫言を木の葉に録し秩序を立て、これを己が巖窟の内に藏す、風吹來りてこれを散らせば、散るに任せて

再び顧ることなしといふ（『アエネイス』三・四四一以下参照）

七三―七五

【勝利】萬物に卓越して大なること

七六―七八

世の強き光は人強ひてこれを視んと力むればその目眩くらみて堪へ難し、神の光はこれと異なり、力めてこれに堪へこれを視る時は視力増し、一たび目を他に轉ずればまたこれを視るをえず

八二―八四

【視る力の盡くる】わが視力の許すかぎり見るを得るまで

八五―八七

宇宙に散在する諸物諸象は一糸亂れず皆その本源なる神に合す、

而してかく合せしむるものは即ち愛なり、この合一ありて諸物諸象存在の意義はじめて全し、これなくは宇宙はたゞ一渾沌のみ
八八―九〇

【實在】 *Sustanzia* 自ら己が存在を保つ物

【偶在】 *accidenti* 實在に附して存在する物

【特性】 *costume* 特殊の作用

【かのものは】原、「わがいふ所のものは」

【單一の光】混るさまの安全なるを表はす

或ひは曰く、これ「微光」なり、即ちその混るさま極めて奥妙にして言語に盡し難ければ、わが言ふ所はわが見し物のたゞ微かなる幻影に過ぎじとの意と

九四―九六

世人が二千五百年の間にかのアルゴナウタイ遠征の事を忘れしにもまさりて我は示現の後僅か一瞬の間にかの光の事を忘れたり

【ネツツ―ノ】ポセイドン、海の神

【アルゴ】イアソン（地、一八・八五―七並びに註参照）の率ゐし遠征隊の乗れる船。海を渡れる最初の船なれば海神これに驚けるなり

【二千五百年】中古信ぜられし年代に従へばアルゴナウタイ遠征の事ありしはキリスト以前一二二三年なり

【睡】*letargo* 忘却。但し異説あり

九七―九九

意は九〇行に續く

【熟視】心眼をもて

一〇三—一〇五

【この外にては】萬物の善萬物の福は皆神より出づ、故に善の完
きものたゞ神の光の中にあり

一〇六—一〇八

【想起】想ひいづることにつきてさへかくの如し、況んや見し物
につきてをや

一〇九—一一一

以下一二六行まで三一の示現を絞す

一一二—一一四

神の姿の一樣ならざる如く見ゆるは姿その者の變るによるにあら
ずして見る者の目の力のかはるによるをいふ

一一五——一七

【三の圓】父、子、聖靈の象徴。色異なるは顯現の異なるなり、
大ききの同じきはいづれも等しく完きなり

一一八——一二〇

【その一】子。父より出づるがゆゑにその光の反映なりといへり
【イリ】イリス、虹。二重の虹のうち、一が他の反映なるごとく
(天、一二・一〇——一五並びに註参照)

【火】聖靈(愛の火)は父と子よりいづ(天、一〇・一一——三参照)

一二四——一二六

「永遠の光」より「己のみ己を知り」までは三一の神を指す、

「己に知ら」るゝは子として父にさとらるゝなり、「己を知」る

は父として子をさとるなり、「愛し微笑」むは聖靈のはたらき

一二七―一二九

以下一四一行まで神人兩性の示現を敘す

【輪】子の象徴なる輪

一三〇―一三二

【同じ色】原、「己が色」、即ちその輪と同じ色。この色にて人の像を畫けるは神と人と完全に結び合へることを表はす

一三三―一三五

【圓を量らんと】一定の圓を容積等しき方形に準じ、かくして圓

を量らんと

ダンテは『デ・モナルキア』（三、三・九—一〇）にて、幾何學者がかゝる換算を知らざるをいひ、さらに『コンヴィヴィオ』

（二・一四・二一七以下）にてその不可能なるをいへり

一三六—一三八

【かの像】人の像かたちいかにして神の圓とかくよく結び合へるや、い

かにしてその中にあるをうるや。換言すれば神人合一の秘義

一三九—一四一

【わが翼】わが智力

【一の光】神恩の光

一四二—一四五

【力を缺きたり】心眼既に窮極の度に達し、さらに進みて天上の機微をうかゞふ能はざるをいふ

【されど】ダンテの思ふ所欲する所ことごとく神意と合するにいたれるをいふ

【輪】輪の各部相調和し、整然たる運動を保ちてめぐり進むごとく

【愛】神

【動かす】天堂の一篇「萬物を動かす者の榮光」にほじまり、「日やそのほかのすべての星を動かす愛」に終る

□天界は凡て十天より成る、即ち中古の天文學による七遊星

(月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星)の諸天及び恒星、プーリーモ・モービレ、エムピレオの三天是なり。エムピレオは眞の天堂にて神こゝにいまし諸天使諸聖徒また皆こゝに在り。されど諸聖徒はその享くる福の一樣ならざるを明かにし、各その類に従ひてダンテと語り、諸天の地上に及ぼす影響を示すをえん爲その性に應じ七遊星の間に別れて詩人に現はる。しかして第八天にては諸聖徒皆キリストの凱旋軍となりて再びこれに現はれ、第九天にては諸天使その階級の數に従ひ九個の環となりてこれに現はる(圓にてはその定住の天なるエムピレオに置けり)。

□ダンテは地上の樂園を離れ、ベアトリーチエに導かれつゝ昇りゆき、地球に最も近き天より次第に遠き天にいたり、遂に至高の天に達し、ベアトリーチエの己が座席に歸るに及び、聖ベルナルドゥスの教へを受けまたその助けによりて至上の光明を仰ぎ、こゝに最後の天啓を受く。

□ダンテが天堂に費せる時間は明らかならず。

青空文庫情報

底本：「神曲（下）」岩波文庫、岩波書店

1958（昭和33）年8月25日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5・86）を、大振りにつくっています。

※「神曲」の原文は、三行一組の句を連ねる形式を踏んでいます。底本は訳文の下に、「一」「四」「七」と数字を置いて、原文の句との対応を示していますが、このファイルでは、行末に「一」「三」「四」「七」を置く形をとりました。

※底本が用いている「一」と「二」は、「アクセント分解された

欧文をかこむ」記号と重なるため、「【】と「」」に置き換えました。

入力・tatsuki

校正：浅原庸子

2005年11月26日作成

2006年5月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

神曲

LA DIVINA COMMEDIA

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 天堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>